宮古島市文化財調査報告書第23集

宮古島市内戦争遺跡分布調査報告書（2）

－下地地区・伊良部地区－

令和元 (2019) 年12月
宮古島市教育委員会

巻頭写真１．　下地地区上地　宮星山の陣地壕群　壕１　ステップの掘り込まれた竪穴

巻頭写真２．　下地地区洲鎌　棚根の壕群　壕１　壕口２

巻頭写真３．　下地地区嘉手苅　嘉手苅一地の壕　壕内のカマドと排煙装置

巻頭写真４．　伊良部地区仲地　根原御嶽の壕群　壕１

巻頭写真５．　伊良部地区伊良部　伊良部島南海岸の壕群　壕２

巻頭写真６．　伊良部地区下地島　下地島西海岸の壕群　壕４壕口２

例　言

1．本書は、平成 30 ～ 31 年度国庫補助事業「市内遺跡発掘調査等」で行った、戦争遺跡分布調査の成果をまとめたものである。平成 30 ～ 31 年度は、宮古島市内の下地地区、伊良部地区を対象とした。
2．本書における戦争遺跡の名称については、『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅴ）- 宮古諸島編 -』（沖縄県立埋蔵文化財センター 2005）に従い、新たに発見された戦争遺跡については、原則として小字名もしくはその場所を示す地形等の固有名詞を用いるとともに、戦争遺跡の性格を示す種類を組み合わせて名称の決定を行った。
3．本分布調査は、宮古島市教育委員会が直営して行った。
4．本報告書内における ref. は、国立公文書館アジア歴史資料センターのレファレンス番号を示すものである。
5．本報告書内における壕の測量図については、方位と距離の計測を用いて行った簡易測量図である。また、壕の位置については、地形図をデジタルカメラ内臓の GPS 機能をあわせて確認を行った。
6．消滅している戦争遺跡については、跡を附した。
7．各戦争遺跡の概要については、①所在地、②立地・現況、③歴史状況、④遺構の特徴を記したが、③歴史状況の詳細が不明な遺跡については省略した。
8．本書の原稿執筆は、久貝弥嗣、山口直美、森谷大介が共同で行い、森谷大介が中心となり編集を行った。なお、本報告書における文責は久貝弥嗣がもつものとする。
9．本書の作成にあたり、聞き取り調査を行ったテープデータ及び、戦争遺跡の測量図面やデータなどについては、宮古島市教育委員会で保管している。

目次

巻頭写真
例言

第１章　調査経緯
　第１節　調査経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第２節　調査体制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第２章　下地地区の戦争遺跡（※)は新規または追加された戦争遺跡を示す
　第１節　下地地区の概況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
　　１．下地地区の地理、歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
　　２．下地地区の沖縄戦時の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　　　（１）陸軍飛行場・・・・・・・・・・・・ 3　（２）学童疎開 ・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　　　（３）その他・・・・・・・・・・・・・・ 6
　第２節　与那覇
　　１．与那覇の地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
　　２．与那覇の沖縄戦時の概況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
　　３．与那覇の調査成果一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
　　４．与那覇の戦争遺跡
　　　（１）与那覇大道原の住民避難壕(※)・・ 18　（２）皆愛海岸の壕群（※）・・・・・・・・ 19
　第３節　上地
　　１．上地の地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
　　２．上地の沖縄戦時の概況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
　　３．上地の調査成果一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
　　４．上地の戦争遺跡
　　　（１）宮星山の陣地壕群(※) ・・・・・・ 28
　第４節　洲鎌
　　１．洲鎌の地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
　　２．洲鎌の沖縄戦時の概況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
　　３．洲鎌の調査成果一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
　　４．洲鎌の戦争遺跡
　　　（１）ツヌジ御嶽の忠魂碑・・・・・・・・ 41　（２）棚根の壕群(※)・・・・・・・・・・・ 42
　　　（３）外崎（フカザキ）御嶽の壕(※)・・・・・・・・・ 46
　第５節　嘉手苅
　　１．嘉手苅の地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
　　２．嘉手苅の沖縄戦時の概況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
　　３．嘉手苅の調査成果一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50

４．嘉手苅の戦争遺跡
（１）イリノソコの陣地壕群跡(※)・・・ 57　（２）ウイヌンミ御嶽の壕(※)・・・・・・ 76
（３）嘉手苅ウプ御嶽の壕群(※)・・・・ 78　（４）嘉手苅一地の壕(※)・・・・・・・・ 82
（５）嘉手苅スガ子の壕(※)・・・・・・ 87　（６）山根海岸の壕群(※)・・・・・・・・ 88
第６節　川満
１．川満の地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
２．川満の沖縄戦時の概況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
３．川満の調査成果一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
４．川満の戦争遺跡
（１）ヌーズマー御嶽の壕(※)・・・・・ 97　（２）川満与那原の壕(※)・・・・・・・・ 99
第７節　来間
１．来間の地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
２．来間の沖縄戦時の概況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
３．来間の調査成果一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104
４．来間の戦争遺跡
（１）来間の山砲陣地壕群 ・・・・・・109　（２）東の御嶽の蛸壺とヤマトゥガンの銃座 ・114
（３）チフサアブの住民避難壕・・・・・116　（４）来間里の壕群(※)・・・・・・・・・118
第8節　下地地区の戦争遺跡のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122

第３章　伊良部地区の戦争遺跡（※)は新規または追加された戦争遺跡を示す
第１節　伊良部地区の概況
１．伊良部地区の地理、歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・123
２．伊良部地区の沖縄戦時の概況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・124
３．国民学校沿革誌について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・125
（１）伊良部国民学校沿革誌 ・・・・・125　（２）佐良浜国民学校沿革誌・・・・・・・127
第２節　佐和田・長浜
１．佐和田・長浜の地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128
２．佐和田・長浜の沖縄戦時の概況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128
３．佐和田・長浜の調査成果一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・131
４．佐和田・長浜の戦争遺跡
（１）佐和田白鳥浜の壕(※)・・・・・・137　（２）嵩原御嶽の壕群(※)・・・・・・・・140
（３）伊良部南区の住民避難壕(※)・・・145
第３節　国仲
１．国仲の地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・148
２．国仲の沖縄戦時の概況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・148
３．国仲の調査成果一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・150
４．国仲の戦争遺跡
（１）伊良部の忠魂碑・・・・・・・・・154　（２）国仲砂川の壕群跡(※)・・・・・・・155
（３）国仲美里の壕群跡(※)・・・・・・157　（４）国仲上原の壕跡(※)・・・・・・・・159
（５）国仲大崎の壕(※)・・・・・・・・160　（６）国仲砂川の住民避難壕群(※)・・・・163

（７）国仲伊端の住民避難壕群(※)・・・166
第４節　伊良部・仲地
１．伊良部・仲地の地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・168
２．伊良部・仲地の沖縄戦時の概況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・168
３．伊良部・仲地の調査成果一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・171
４．伊良部・仲地の戦争遺跡
（１）根原御嶽の壕群(※)・・・・・・・・177
（２）伊良部島南海岸の壕群(※)・・・・・181
（３）伊良部倒底原の壕群(※)・・・・・191
（４）仲地共同墓の住民避難壕(※)・・・・195
（５）伊良部大長原の壕(※)　・・・・・197
第５節　池間添・前里添
１．池間添・前里添の地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・201
２．池間添・前里添の沖縄戦時の概況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・201
３．池間添・前里添の調査成果一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・204
４．池間添・前里添の戦争遺跡
（１）牧山陣地壕　・・・・・・・・・・・208
（２）佐良浜の避難壕・・・・・・・・・・・210
（３）前里添佐那浜の住民避難壕群(※)・212
（４）池間添佐那浜の住民避難壕群(※)・・215
（５）池間添下桃山の壕群(※)・・・・・218
第６節　下地島
１．下地島の地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・220
２．下地島の沖縄戦時の概況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・220
３．下地島の調査成果一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・223
４．下地島の戦争遺跡
（１）下地島西海岸の壕群(※)　・・・・225
（２）下地島南海岸の壕群(※)・・・・・・233
（３）カンギダツ壕・カヤッファ壕　・・242
第７節　伊良部地区の戦争遺跡のまとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・244

※おことわり
第３章第５節嘉手苅の(５)山根海岸の壕群は、上野字宮国の小字、山根とフカエに所在していますが、いずれも嘉手苅の入江地域との境界に近く、地域的にもつながりが強いことから便宜上、より関係性の深い嘉手苅地区へ分類しています。

第１章　調査経緯

第1節　調査経過

平成30（2018）年
- ４月　下地、伊良部地区行政連絡員への情報提供依頼
  与那覇・上地集落聞き取り調査（～５月）
- ６月　米軍機墜落により捕虜となった米軍少尉のその後の聞き取り調査
  洲鎌・嘉手苅・川満・来間集落聞き取り調査及び現地調査（山砲等）
- ７月　下地地区中間報告会〈7 月 28 日　下地公民館〉
- ８月　伊良部・仲地・佐良浜・佐和田・長浜・国仲集落聞き取り調査
  住民避難壕としての井戸調査及び壕確認調査
  既存確認壕の簡易測量調査（来間島）（～ 10 月）
- 11月　伊良部地区新規発見壕調査（白鳥浜）
- 12月　伊良部地区中間報告会〈12 月 1 日　伊良部公民館〉
  県立博物館・美術館山本正昭氏による現地調査指導

平成31（2019）年
- １月　伊良部海岸・伊良部地区戦跡確認調査と補充調査 (～３月)

令和元（2019）年
- ５月　資料整理と確認作業
- ６月　伊良部地区新規戦跡調査
- ７月　戦跡現状確認作業
- ８月　戦跡調査成果のまとめ（～ 10 月）

第 2 節　調査体制

本書の作成にあたっては、宮古島市教育委員会生涯学習振興課が担当し、以下の体制で実施した。

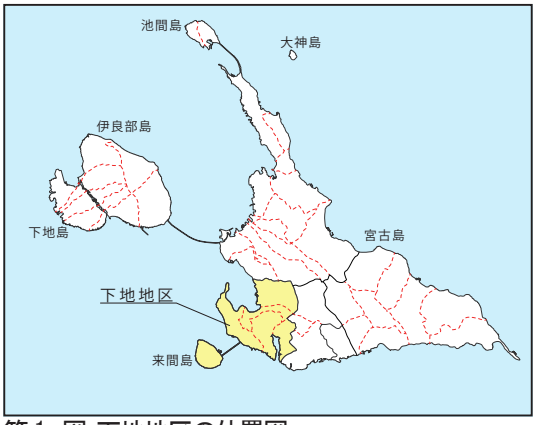
事業主体　宮古島市教育委員会　教育長　宮國 博
事業所管　生涯学習部　部　長　下地 明
事業総括　生涯学習部次長兼生涯学習振興課長　久貝 喜一
課長補佐兼文化財係長　砂辺 和正
事業事務　生涯学習振興課　文化財係　主　事　久貝 春陽
調査担当　生涯学習振興課　文化財係　主任主事　久貝 弥嗣
調査補助　生涯学習振興課　文化財係　嘱 託 員　川満 広紀
臨時職員　山口 直美、森谷 大介
文化財資料室整理員　西里 咲子、草浦 昌子、平安山 恵利香
調査協力　山本 正昭（沖縄県立博物館・美術館）、山川 セツ子（那覇市在住）、山川 悦史（エフエム沖縄）、下地 和宏（宮古島市文化財保護審議委員）、新垣 則子、佐藤 宣子（宮古島市教育委員会市史編さん室）、粟国 マチ子、川上 良絵、川満 勝彦、前里 武男

第２章　下地地区の戦争遺跡

第1節　下地地区の概要

１．下地地区の地理、歴史的環境

下地地区は宮古島の南西部に位置し、太平洋戦争時は旧宮古郡下地村(町制は1949年)として、与那覇、上地、洲鎌、嘉手苅、川満、来間、新里、宮国、野原の９字を村域としていた。戦後の1948（昭和23)年に、東部の新里、宮国、野原、上野の４字(字上野は、この時、嘉手苅の東部を分割して、新しい字を設置した)が、宮古郡上野村として分村する。

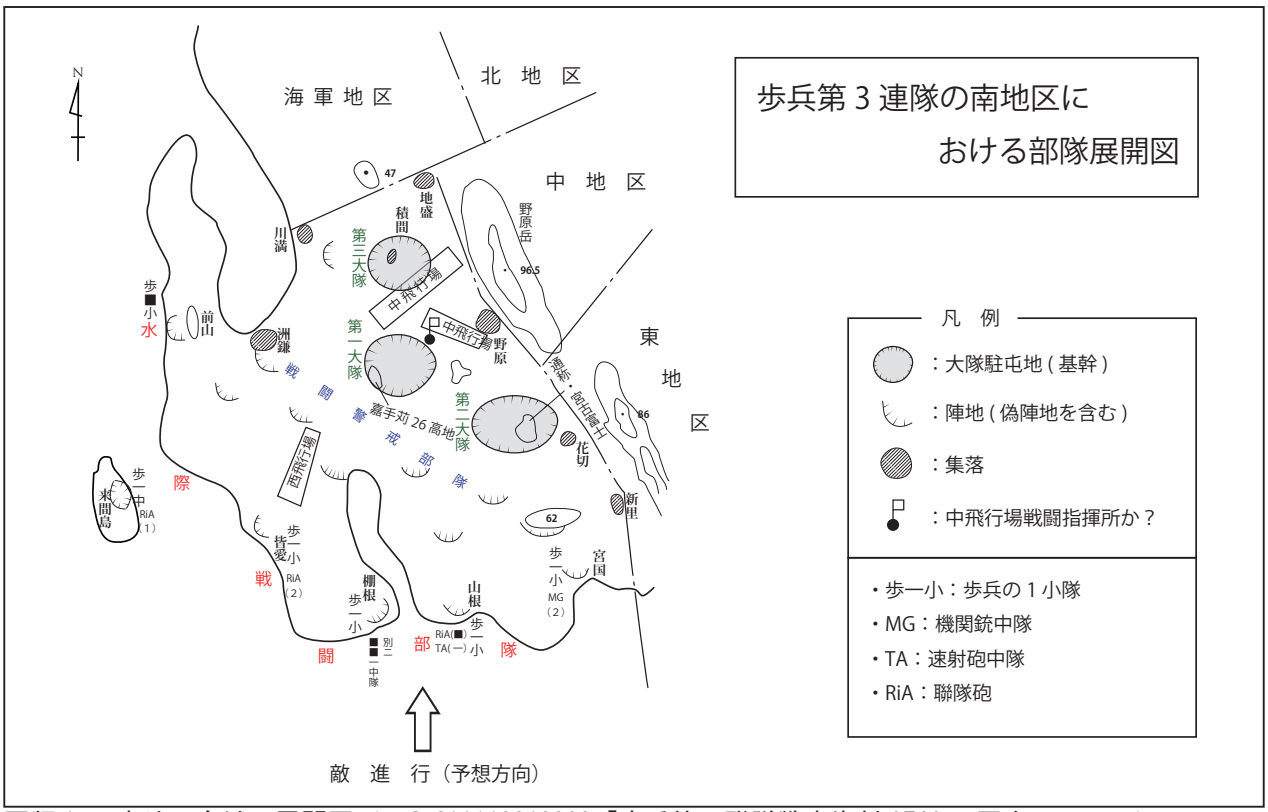


第 1. 図 下地地区の位置図

現在の下地地区の人口は3,009人(宮古島市全域55,350人 /2019年10月31日現在)で、前述した、与那覇、上地、洲鎌、嘉手苅、川満、来間の６つの大字で構成される。離島である来間島へは1995年に全長1,690メートルの来間大橋が開通しているが、開通以前は主に現在の与那覇前浜と来間港が渡船で結ばれていた。

沖縄県立埋蔵文化財センターの実施した分布調査では、チフサアブの住民避難壕、東御嶽のタコ壺と銃座、来間の山砲陣地壕群、ツヌジ御嶽の忠魂碑の４つの戦争遺跡が報告されている(沖埋文2005)。

尚、旧上野村については、平成29年度「宮古島市内戦争遺跡分布調査報告書(１)」において、上野地区として調査・報告をおこなっている。



図版 1.　南地区全域の展開図（ref. C11110010900「歩兵第３聯隊戦史資料 0760 の図をトレース）

２．下地地区の沖縄戦時の概況

宮古島地区防禦配備図によると旧下地村は、南地区に区分され、歩兵第３聯隊を主体に守備されている。歩兵第３聯隊(通称豊5620部隊)は、怡土(いど)軍大佐を連隊長とし、昭和19年７月に旧満州の納金を出帆し、８月12日に宮古島に上陸している。歩兵第３聯隊は、総数3,500名からなり、第１大隊が嘉手苅一帯、第２大隊が現在のタカヤマ(宮古富士)一帯に、第３大隊が積間(ツンマー)一帯に展開している。

太平洋戦時下においては、上野字宮国周辺の海岸部が敵の上陸予想地点と想定されている。そのため、上野字新里から下地字嘉手苅の入江にかけては、水際作戦として多くの銃眼などが構築されている。これらの施設についても歩兵第３聯隊が主に関与していると考えられる。

その他、下地地区は、城辺・上野地区に比べて土地が平坦であるという地理的環境にあり、陸軍中飛行場、陸軍西飛行場が建設されている。また、下地国民学校は、宮崎県西諸県(もろかた)郡小林町(現小林市)へ学童疎開をおこなっている。本節では、これらの太平洋戦時下における下地地区の状況について概略する。

(1) 陸軍飛行場

陸軍飛行場は、昭和19年５月から昭和19年10月の間に、旧下地村字野原と字川満にまたがる地域(中飛行場と呼称)と、旧下地村字与那覇と字洲鎌、字上地の一部にまたがる地域(西飛行場と呼称)の２か所で用地を接収し建設することになった。

用地の接収規模としては、中飛行場が344,055坪、筆数502筆、地主数117人で、西飛行場が155,677坪、筆数326筆、地主数68人におよぶ(沖縄県総務部総務課　1978年３月「旧日本軍接収用地調査報告書」[※1])。

２つの飛行場の建設にあたっては、昭和19年５月８日に第205飛行場大隊が宮古島に到着。一部は下地国民学校の校舎に駐屯して、飛行場建設に着手している。飛行場建設のために接収された土地は、村民の生活源をなす、平坦な肥沃な農業地帯であったことから、村民の受けた打撃は大きいものがあった。

中飛行場には、長さ1,700メートル(南北滑走路)と1,400メートル(東西滑走路)の2本の滑走路、６キロの誘導路、25基の掩体。西飛行場には、長さ1,250メートルの滑走路、５キロの誘導路、28基の掩体が建設された。小さな村に２つも飛行場が建設され、農耕地を失った下地村の185人の地主たちは、飛行場の建設作業にも駆り出され、戦況の緊迫する中で自活の道を失い、その生活はいよいよ苦しさを増していった。

※１　「先島群島作戦＜宮古篇＞」(1975) の中では用地の接収規模を、中飛行場が 346,821 坪（地主数 117 人、西飛行場が 155,004 坪（地主数 68 人）と記されている。

強制接収にあった西飛行場周辺の住民の証言では、

『当時25戸程度であった皆愛部落は、大部分が隣の棚根(洲鎌)、カネッチャ（カ子ッチャ原)に、一部は縁故を頼って、与那覇、上地または他町村へ、それぞれわずかな立ち退き料を受け取り、追われるように、住み慣れた土地を離れ離れに散って行った。私たちは、畑を接収され、その上、土地代は強制貯金をさせられ、明日の生活にも困るようになった。また、若い者は郷土防衛隊に招集され、小学生は飛行場設営工事にかり出され、すべてを犠牲に、戦争に協力しなければならなかった。日夜を分かたぬ突貫工事により、一応発着に必要な滑走路は完成したが、泣く泣く、見事に育った農作物を切り倒し、自分の畑を、自分の手で埋めなければならないあのときの心境は語るに語れないほどつらいものであった。

しかし、この西飛行場の滑走路は、南側に来間島が、北側に宮星山が控え、離着陸の障害となることから、飛行場としての要件を充分に満たすことが出来ず、急遽、陸軍によって皆愛(与那覇)の東側から、字

上地の南側一帯に第２滑走路が計画された。用地の測量設計を終え、軍命令により山林を伐りはらい、作物を撤去するうちに、戦局はいよいよ悪化するばかりとなり、やがて第２滑走路の建設計画は中止のやむなきに至った。

また、飛行場建設に伴なって土地を強制接収され、移転を余儀なくされた25軒の皆愛の住人は、混乱と動揺の中で離散していたが、現在は15軒が元の屋敷地に住居を構えている。しかし、残りの人たちは皆愛に戻ることなく、他所に移り住んでいる。

現在の皆愛の集落を貫き、来間大橋に続く直線的な市道は、西飛行場滑走路の中心地に、自然発生的にできた道で、後に皆愛学道と呼ばれ、往時の名残りを残している。』(下地町誌1989)

中飛行場については、「宮古島市内戦争遺跡分布調査報告書(１)」(宮古島市教育委員会2018)第４章第３節を参考いただきたい。

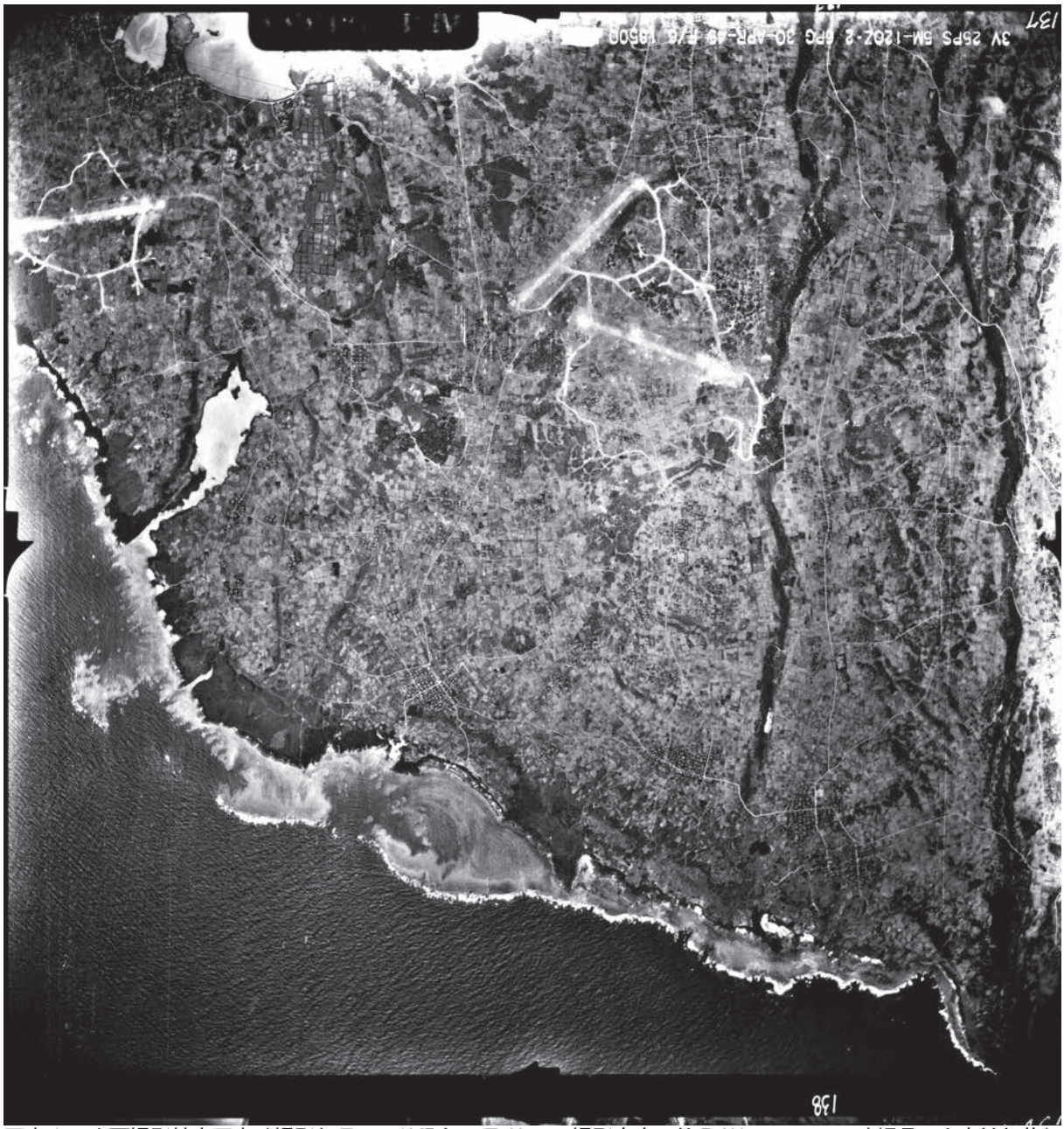


写真 1.　米軍撮影航空写真（撮影年月日：1945 年 4 月 30 日　撮影高度：約 5,600 メートル　沖縄県公文書館収蔵）
写真の上方が、おおむね北方向。写真中央、やや上方の滑走路が２本ある飛行場が、陸軍中飛行場。写真左端に位置する滑走路が、陸軍西飛行場。滑走路周辺の白っぽい道状のものは、マカダム舗装された誘導路とみられる。

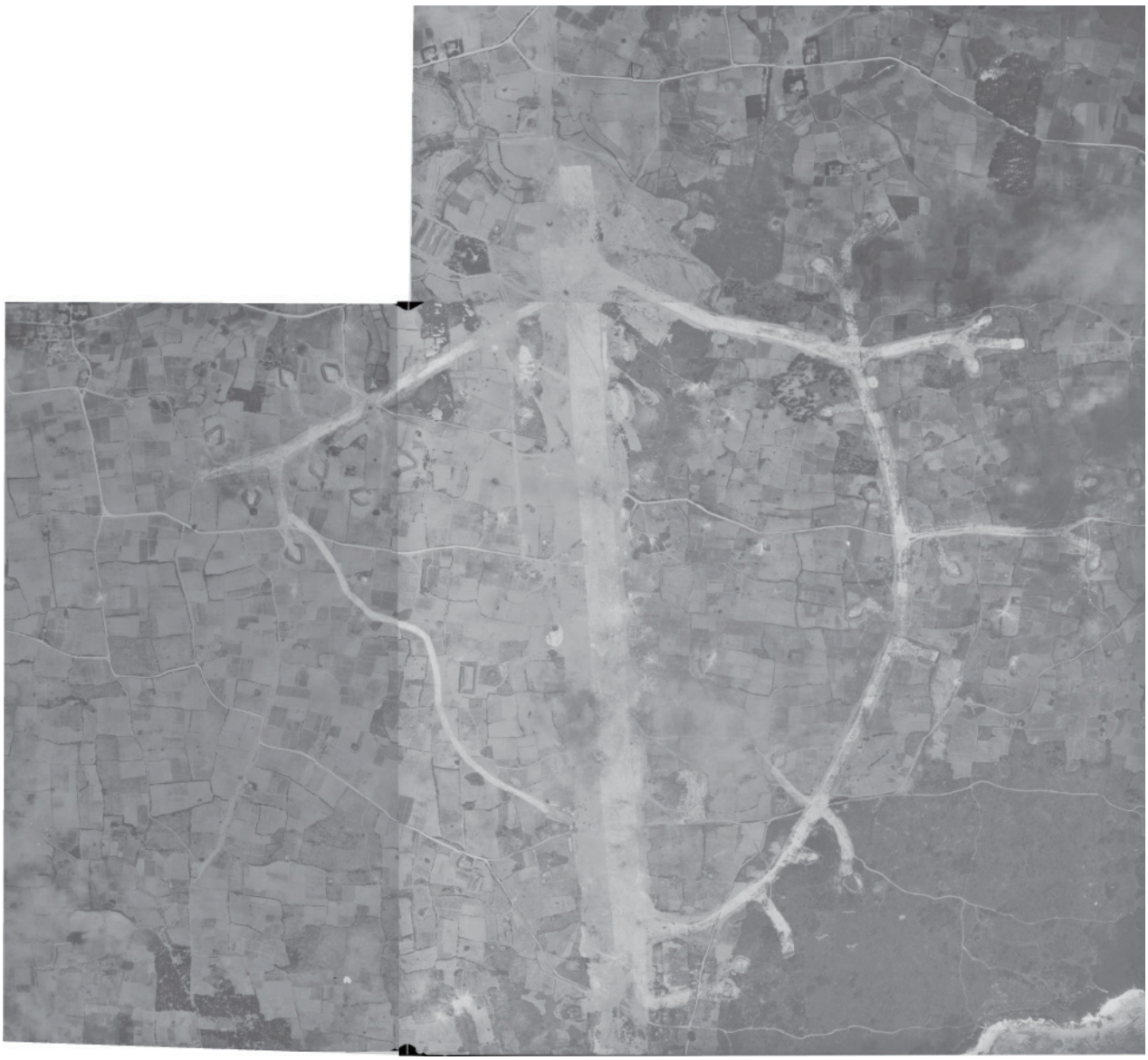


写真 2.　米軍撮影 1945 年５月１日（撮影高度約 3000 メートル　沖縄県公文書館収蔵）　※３枚の空中写真を合成

(2) 学童疎開

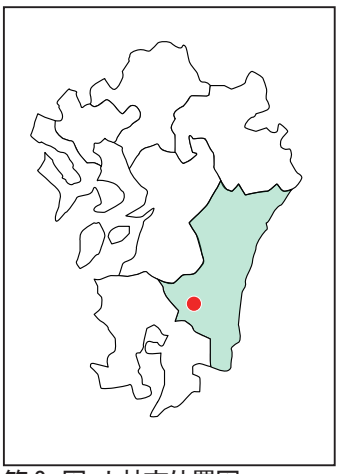
昭和19年７月19日、沖縄県は「沖縄県学童集団疎開準備要領(学童集団疎開準備に関する件)」を決定し、各学校に送付した。それによると、対象者は初等科３年から６年までの男子を原則とし、児童40人に教員１人が付くことになっていた。いわゆる学童疎開である。

沖縄県は内政部長名で、1944年７月19日付「学童集団疎開準備ニ関スル件」を宮古・八重山両支庁長、那覇・首里両市長、国頭・中頭・島尻三郡国民学校あてに通知した。「教育運営」「食糧事情」への配慮とうたわれているが、老幼婦女子の一般疎開と同様、戦闘に役に立たないゆえの強制疎開とみなされている。

各学校では教職員を総動員して部落常会に出席し、保護者会を開き、家庭を訪問して奨励した。引率教師も責任の重大さから積極的には希望しない。再三にわたる説得で、宮古はようやく三校のみ参加することになった。

学童疎開の内訳は、平良第一国民学校 15 人（引率・高里好之介訓導)、平良第二国民学校 20 人（引率・下地明増訓導)、下地国民学校 44 人（引率・川満一訓導)、合計 79 人である。一行は 8 月 18 日に大徳丸で漲水港を発ち、那覇で一泊して県の学童疎開第三陣と合流した。本部の瀬底島の沖合で仮泊して

航路の安全を確認したのち、23 日に鹿児島港に入った。数日、旅館に宿泊し、29 日疎開地の宮崎県西諸県(もろかた)郡小林町（現小林市）に着いている。小林青年学校を宿舎に小林国民学校に通学したが、郷愁と飢えと寒さに耐えての暮らしであった。生徒たちが宮古に帰郷したのは、太平洋戦争が終結して、１年５か月後の昭和 46 年２月となった（みやこの歴史より）。以下に学童疎開に関する体験談を紹介する。


第 2. 図 小林市位置図

学童疎開先の小林町での生活は、青年学校の校舎を借りて共同生活をおくっていた。寝る時は全員ごろ寝していた。宮古島と違い、宮崎県は氷がはるほど寒く、着るものもなくて辛かったことを覚えている。（上地幸栄さん　国民学校５年生　広報みやこじま№ 153 より）

小林町では生活は食べ物が少なくひもじかった。１年くらいたつと、配給される食糧では間に合わなくなり、農家の畑を借りて芋を植えたり、農業の手伝いをした。一番苦労したのは、はじめの頃は言葉が通じなかったこと。薩摩弁を話すので、お互いの言葉が全然違ってとても苦労した（湧川弘一さん　国民学校６年生　広報みやこじま№ 153 より）。

小林町には宮古の３校のほか、沖縄本島の仲西校（浦添市）などの２校がいた。初めのうちは宮古の平一校、平二校、下地校の３校ともに小林青年会場にそれぞれ１教室ずつ割り当てられたが、のちに平一校と下地校は小林国民学校に移り、さらに下地校は民家を借りて移って行った（平良芳雄さん　国民学校６年生　平良市史第四巻資料編２近代資料編より）。

小林青年学校での集団生活は、戦況が激しくなるにつれて、食糧事情は厳しくなり、空腹をかかえて、食べ物ばかりあさっていたような気がする。学童疎開の子どもたちを苦しめたのは、“空腹”ばかりではなく、習慣や言葉の違いからくる違和感や、着たきり雀で不衛生なため発生するシラミとの闘いなどもあった。特に厳しかったのは、宮古では体験したことのない冬の寒さだった。冬の朝、宿舎の前を流れる小川に薄く張った氷を割って、洗面や冷水摩擦をした。霜焼けや垢ぎれで痛みが酷く、歩行もやっとだった（平良健栄さん　下地町誌 1989 年より）。

尚、下地町の住人の一般疎開者は、下地町誌(1989)によると、日本本土へ120人、台湾へ352人であった。

(3) その他

ａ．犠牲になった徴用大工

昭和20年２月６日朝、陣地構築用の木材伐採作業のため、漲水港から西表島に向かう途中、午前10時、石垣島北方18哩(マイル)の海上で米機の奇襲攻撃を受け、輸送船は沈没、暁部隊に軍属として徴用された大工36人全員が戦死した。

船は２隻で、前方の船は兵隊と荷物、後方の船は大工が分乗していたが、大工の乗った後方の船だけが、撃沈された。亡くなった36人の出身地は現在の下地地区で、字来間３人、字与那覇５人、字上地13人、字洲鎌３人、字嘉手苅１人、字川満１人の26人で、残りの10人は現在の上野地区の出身である(下地町誌　1989　戦時記録 p687-p737)。

下地村の大工連中は、私達(建八)が最初西飛行場を作った時、一緒に兵舎や人夫長屋を建てた、いうなれば民編建築隊(民間編成建築隊)で中飛行場設定にも引っ張りだされ、兵舎や掩体作りのベテランで、その技倆(ぎりょう)は、郷に入れば郷に従えのたとえ通り、小丸太を使っての屋根葺きなどは、わが中隊でも、その教えを乞う状態だった(宮古島建築兵始末記　野口退蔵1972)。

b．対空戦闘

前述したように下地地区には、陸軍の２つの飛行場が建設されているほか、海軍飛行場も隣接している。これらの飛行場は、敵の攻撃対象となり、多くの空爆による被害を受けている。その一方で、これらの飛行場の一帯には、高射砲などの防空施設も建設されていたことが、米軍撮影の空中写真などからもみてとれる。

これらの防空施設によって被弾する敵の航空機もあり、下地地区には、これらの航空機が不時着もしくは墜落した記録が比較的多く見られる。ここでは、これらの航空機に関して整理を行っていきたい。

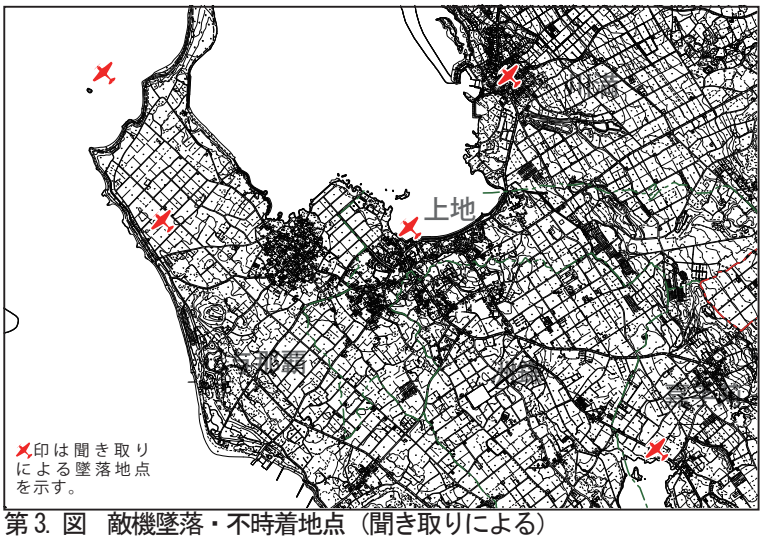
写真 3. 参考例：海軍飛行場周辺(西里西屋原)に設置された対空銃座群(沖縄県公文書館収蔵)

今回の下地地区の分布調査で確認された不時着もしくは墜落機の地点は、総数５地点である(**第３図**)。聞き取りでは与那覇湾内、西浜崎西方沖合い、与那覇前山の近傍の畑、与那覇湾東部の川満集落内などで墜落に関する情報が多く得られ、与那覇湾周辺に集中している。

また､｢みやこの歴史｣(2012年)によると、1944年10月13日午後３時40分から４時10分にかけて、15機の敵機が来襲し、島内の主要施設を銃撃するも、対空砲火によりグラマン１機を撃墜。久松海岸に落下傘で降下した搭乗員は、憲兵隊に捕えられ取り調べののち、台湾へ移送されたとある。

一方､｢下地町誌｣(1989)では、友軍の地上砲火によりグラマン１機が与那覇湾に墜落、搭乗員捕虜となると記されている。

こうした中、第70回文化庁芸術祭ラジオ部門ドキュメンタリーの部(2017年)で優秀賞を受賞した、エフエム沖縄制作のドキュメンタリー番組、戦後70年企画特別番組ラジオドキュメンタリー「一枚の写真～ 1944年10月13日宮古島～」という番組で、捕虜になったアメリカ兵の写真があることを知った。



第 3. 図　敵機墜落・不時着地点（聞き取りによる）

番組を作成したエフエム沖縄に協力を依頼し、番組を聞くとともに、写真を保有していたご本人・山川セツ子さん(那覇市在住)と、セツ子さんの息子さんであり、番組を制作したエフエム沖縄のディレクター山川悦史さんから聞き取りを行った。

セツ子さんによると、この1944年10月13日に敵機が墜落した場所は、上地の海岸近くであると判明した。また、番組の内容を含む周辺資料から、捕虜となった搭乗員についての情報を得る

ことができ、写真をアメリカの親族に届けている。以下に、エフエム沖縄制作のドキュメタリー番組の情報をもとに墜落機の経過について整理を行う。

1944年10月13日に宮古島に墜落した搭乗員は、フリン・ケネス・アストン(FLINN.kenneth.Ashton 22歳)海軍少尉といい、空母エセックス(Essex ／アメリカ海軍のエセックス級航空母艦)を、F6F ヘルキャット(アメリカ海軍の艦上戦闘機)で発艦。宮古島の地上設備破壊のために出撃するも、日本軍の対空砲火を受けて機体を損傷し、与那覇湾の上地付近に墜落。

この様子をモリス大尉が次のように報告している。フリン・ケネス・アッシュトン海軍少尉は1944年10月13日宮古島にて対空砲によって撃墜され海岸付近に着水したが、浅瀬だったため機体は沈まず、翼の上で上空の友軍機に手を振っていた。救助方法なし。

同日、在宮古島の陸軍部隊(詳細は不明。憲兵隊？)に身柄を捕えられる。
10月16日　航空機にて那覇へ。首里の第32軍司令部へ移送される。
10月21日　那覇から、台湾高雄へ移送される。
11月24日　台湾から、福岡県博多へ移送される。
11月26日　鉄道で博多から、東京の東京憲兵隊司令本部に移送、収容される。
12月８日　神奈川県の横須賀海軍警備隊にて受領。
同日、通称・大船海軍捕虜収容所に収容される。

通称の大船海軍捕虜収容所は、実際には横須賀海軍警備隊植木分遣所であった。日本軍では通常、捕虜は陸軍が管轄するが、国際法により収容所での捕虜からの情報収集は禁じられているため、大船海軍捕虜収容所は、海軍が独自に捕虜から情報を引き出すために設けた尋問収容施設であり、国際法に定められた捕虜収容所ではなかったため、収容環境は日常的に劣悪で、食料も少なく、医師も常駐してなかった。

1945（昭和20)年３月頃、フリン少尉は赤痢に罹り、10日間の絶食治療を施される。
６月８日　顔面及び足のむくみ、身体の倦怠感で受診。徐々に体力が衰えていった。
７月22日　顔面蒼白。意識が無くなる。
７月23日　午後11時30分　死亡。享年22歳。
７月24日　隣接する龍寶寺に十字架を建てて埋葬された。
死因は「横須賀警備隊機密第57號ノ55」の俘虜死亡の件の報告によると、「環境不適応による肉体疲労」とされているが、「Case No. 33 - Imaizuma, Atsuto （V.O. No. GHQ-71）」では、「異常体質による喘息」が原因とされている。また、軍医が到着したのは、フリン少尉が亡くなった後だという。
※ GHQ-71　連合国最高司令官総司令部憲兵司令部文書

戦後、遺体は連合軍墓地捜索班によって掘り起こされ持ち帰った(計６名が埋葬された)。毎年８月、龍寶寺では収容施設で亡くなった兵たちのために、読経して慰霊を行っている。
番組では、ようやく判明したフリン少尉の親族で、オークランドに在住している従兄弟のエドウィン・フリン(88歳)に、セツ子さんの持っていた写真を届けている。

また、番組を通して知った、ＰＯＷ研究会(Prisoner of War ＝戦争捕虜。連合軍捕虜、抑留者や戦犯裁判の調査、元捕虜や遺族との交流活動などに取り組む研究組織)の資料､「本土空襲の墜落米軍機と捕虜飛行士」によると、宮古島に関する記述はフリン少尉を含め、４件ほどあった。

1944年10月13日　沖縄県宮古島
空母エセックスから飛来したF6F ヘルキャットが不時着。
フリン・ケネス・アストン(FLINN.kenneth.Ashton　22歳)海軍少尉

1945年４月23日　沖縄県宮古島
空母サンティー（Santee ／アメリカ海軍のサンガモン級航護衛空母)から飛来したTMB アベンジャー(アメリカ海軍主力雷撃機)が墜落(機体番号68688)。宮古島の飛行場を攻撃中に対空砲火を受け、煙を吐きながら墜落して爆発した。
フローレンス(Joseph.F.FLORENCE)海軍少尉が捕虜となったが、７月11日に宮古島に駐屯していた第28師団の兵士によって処刑された。戦後の戦犯裁判で、第28師団情報参謀の陸路富士雄中佐ら４人が有罪となった。

1945年４月25日　沖縄県宮古島
空母スワニー（Suwannee ／アメリカ海軍のサンガモン級航護衛空母)から飛来したたTMB アベンジャーが墜落(機体番号68451 or 68561)。
フランク　コローラ(Frank COLLURA)海軍中尉が死亡。

1945年６月８日　沖縄県宮古島付近
空母スワニーから飛来した艦載機が墜落。
マックスウェル Ｆ デーマン(Maxwell F.DENMAN)飛行兵曹(海軍中尉)が捕虜となり、大船海軍捕虜収容所へ送られた。戦後、米国へ帰還し1999年2月10日に永眠。
※その他参考資料　アジア歴史資料センター　ref.C11110403100

この他、歩兵第３聯隊第３大隊の機関銃中隊の一員として、映画監督の小林正樹(1916-1996)が宮古島に従軍しており、評伝「映画監督　小林正樹」(小笠原清・梶山 弘子　岩波書店　2016年)の中で､『宮古島戦場日記』と題して取り上げられている。内容は本人が日々徒然に書き残した日記であることから、当時のリアルな兵士の生活風景が語られているほか、島での戦況や撃墜された敵機についても綴られており、その内容はＰＯＷ研究会の資料ともほぼ合致している。

ｃ．住民被害
下地町誌（1989）には「宮古島戦時日誌」として、戦争時の島内の主な出来事が、時系列にまとめられている。特に当時の下地村については、空襲の様子や敵機の撃墜の様子など、熾烈な連合軍の攻撃の様子とともに、家屋の焼失や住民が爆死した状況が記さている。
各字で聞き取り調査を実施した際にも、下地町誌に記録されている情報と合致する事象を聞き取ることができ、村内各字の住民被害の様子が刻銘に浮かび上がって来た。

昭和19年10月10日　朝、米軍機動部隊がはじめて宮古近海に迫り、空襲。
字嘉手苅・平良吉雄宅、全焼。
字洲鎌・東風平玄令宅、全焼。妻・ガナガマ、爆死。
昭和19年10月13日　15：40 ～ 16：10 にかけて、15 機来襲。
友軍の地上砲火により、グラマン機 1 機、与那覇湾に墜落。搭乗員を捕虜とする。
昭和19年10月15日　友軍 140 機宮古上空を飛び台湾に向う。敵機と見誤り島民騒動す。
現地召集初年兵。当村より約100名、島内各地の部隊に入営す。
昭和19年12月 3日　艦上機 10 数機来襲し、海軍飛行場を集中爆撃す。
昭和20年 2月 6日　木材伐採隊として八重山に向かう途中、米機の攻撃により輸送船沈没。26 名戦死。
昭和20年 3月23日　朝から連続空襲。米軍いよいよ上陸の感あり。川満に米機墜落炎上､家屋 6 軒焼失。
昭和20年 4月 3日　米機、延 140 機来襲。平良市街中央部及び南部方面、爆弾を浴びる。
字川満1010番地、石嶺源助他家族 3 名、爆死。
昭和20年 4月 4日　終日空襲あり。字与那覇で上地良辰家屋他 9 軒、焼失。
昭和20年 4月 6日　字上地、字与那覇で 20 数軒が灰となる。
字与那覇、垣花恵方(当時10歳)爆死す。平良町では市街地が炎上。
昭和20年 4月22日　中飛行場上空で、初空中戦展開。友軍機に被害続出、全滅寸前となる。
昭和20年 5月 4日　午前 11 時より、およそ 30 分間にわたり、来間島南方海上の英国東洋艦隊の戦艦 2 隻、巡洋艦 5 隻、駆逐艦 11 隻から、385 発の巨弾が、中・西飛行場中心に撃ち込まれ、軍民とも敵上陸の前ぶれと感じ、動揺の色濃くなる。
昭和20年 5月12日　米軍機、与那覇島仲原附近に墜落。遺体は与那覇警防団により丁重に埋葬する。
与字那覇、幸地メガ、友利カナ、爆死。
昭和20年 6月 7日　大空襲。字与那覇、砂川惠公家屋他 10 軒、炎上。
字上地、上地昌寛家屋他 1 軒、全焼す。
昭和20年 6月15日　大空襲。字与那覇、上地金次郎妻キミ他子供 4 人、爆死
昭和20年 6月21日　大空襲。字与那覇、与那覇武信爆死。字上地、洲鎌真吉家屋他 1 軒、全焼。

※下地町誌（1989）「第十三編　戦時記録　4．宮古島戦時日誌」より、昭和 18 年 10 月 10 日から昭和 20 年 6 月 23 日までの下地地区に関係する項目を抜粋。

大字		1944 年	1945 年								
		10月10日	3月23日	4月3日	4月4日	4月6日	5月12日	6月7日	6月15日	6月21日	計
与那覇	焼失家屋	1			9	20		10			40
	死 亡 者	1				1	2		4	1	9
上地	焼失家屋							1		1	2
	死 亡 者										
洲鎌	焼失家屋										
	死 亡 者										
嘉手苅	焼失家屋										
	死 亡 者										
川満	焼失家屋		6								6
	死 亡 者			3							3
来間	焼失家屋										
	死 亡 者										

表 1.　下地町誌 (1989)　町民戦禍一覧

第2節　与那覇

１．与那覇の地理的環境

下地地区の宮古島内で最も西に位置する与那覇の字域は広く、与那覇湾の湾奥には番所などが置かれた古くからの中心集落（子方里、寅方里、午方里、申方里、西野原など、慣習的に与那覇集落と呼ばれているエリア）が位置する。そして西浜崎を北端とした与那覇湾の西部を形成する半島部（西原山、内浜、西原、友利原、島仲原、宮野原）は平坦な農地が広がり、東シナ海に面したリゾートホテルの建つ与那覇前浜（前原、大代原、仲子ク原、カーシ原、子クラ原など）を経て、来間大橋の橋詰となる皆愛地域（ミナアイ原、ウバ道原、ヤージ原など。慣習的に皆愛集落と呼ばれている）、南部に位置するゴルフ場（東原、カ子チャ原など）まで字域は広範囲に渡っている。

２．与那覇の沖縄戦時の概況

霧生藤吉郎氏の資料（防衛区分）によると、与那覇地区には歩兵第３聯隊第３大隊第 11 中隊（中隊長：池田幸三郎大尉）が、皆愛正（原文のママ）面地区には歩兵第３聯隊第１大隊第４中隊（中隊長：北山悟大尉）が配備されている。（霧生藤吉郎 1996）

与那覇皆愛、洲鎌、上地にまたがる地域に建設された、陸軍西飛行場は、長さ 1.250 メートルの滑走路と５キロの誘導路、28 基の掩体が作られた。

当時 25 戸程度であった皆愛集落の大部分は、飛行場建設に伴う接収が行われ、それぞれわずかな立ち退き料を受け取って、追われるように住み慣れた土地を離れた。土地の代金は強制的に貯金させられ、明日の生活にも困るような状態のまま、皆愛の住民たちは東隣りのタナ子、カ子ッサなどへ。一部は親類縁者を頼って、与那覇、上地などへ移住した。

終戦後、皆愛の住民は陸軍西飛行場の元集落に戻って家を再建したが、一部の住民は屋敷跡が滑走路となり消失したため、元集落北側の自分の畑地だった場所に移り住んだ。（下地町誌より抜粋）

※霧生藤吉郎氏の資料とは、宮古島市史編纂室が所蔵する岡本氏より寄贈された霧生藤吉郎の手書き資料。

この他、「歩兵第三聯隊　聯隊歴史第五巻」によると、以下の部隊の展開が記されている。

昭和 20 年４月 18 日。第 28 師団の命令に基づき、敵潜水艦及び、撃墜した搭乗員の救助に飛来する飛行艇などへの攻撃を目的として部隊を展開させた。

歩兵砲大隊は、西浜崎北部松林附近に、速射砲１門を配置。西飛行場海岸、神社高地附近、カネチヤ南方に陣地を構築し、連隊砲各１門を置いた。

独立速射砲中隊は、前山北方 1,200 メートル松林附近、アラステ西南海岸に陣地を構築し、速射砲各１門を置いた。

山砲中隊は、宮国西南方 600 メートル製糖工場附近、素原東南方 200 メートルに陣地を築き、山砲を各一門置いた。

昭和 20 年７月 22 日。08：00 から 12：00 まで、工兵隊尾崎大尉指導のもと、前山において爆弾地雷敷設要領教育を実施。

昭和 20 年７月 23 日。払暁（明け方）及び夕刻に於ける対空戦闘準備に遺憾なきを期すると共に、水際爆弾地雷原の設置及び、西飛行場障碍化を急速に促進す。

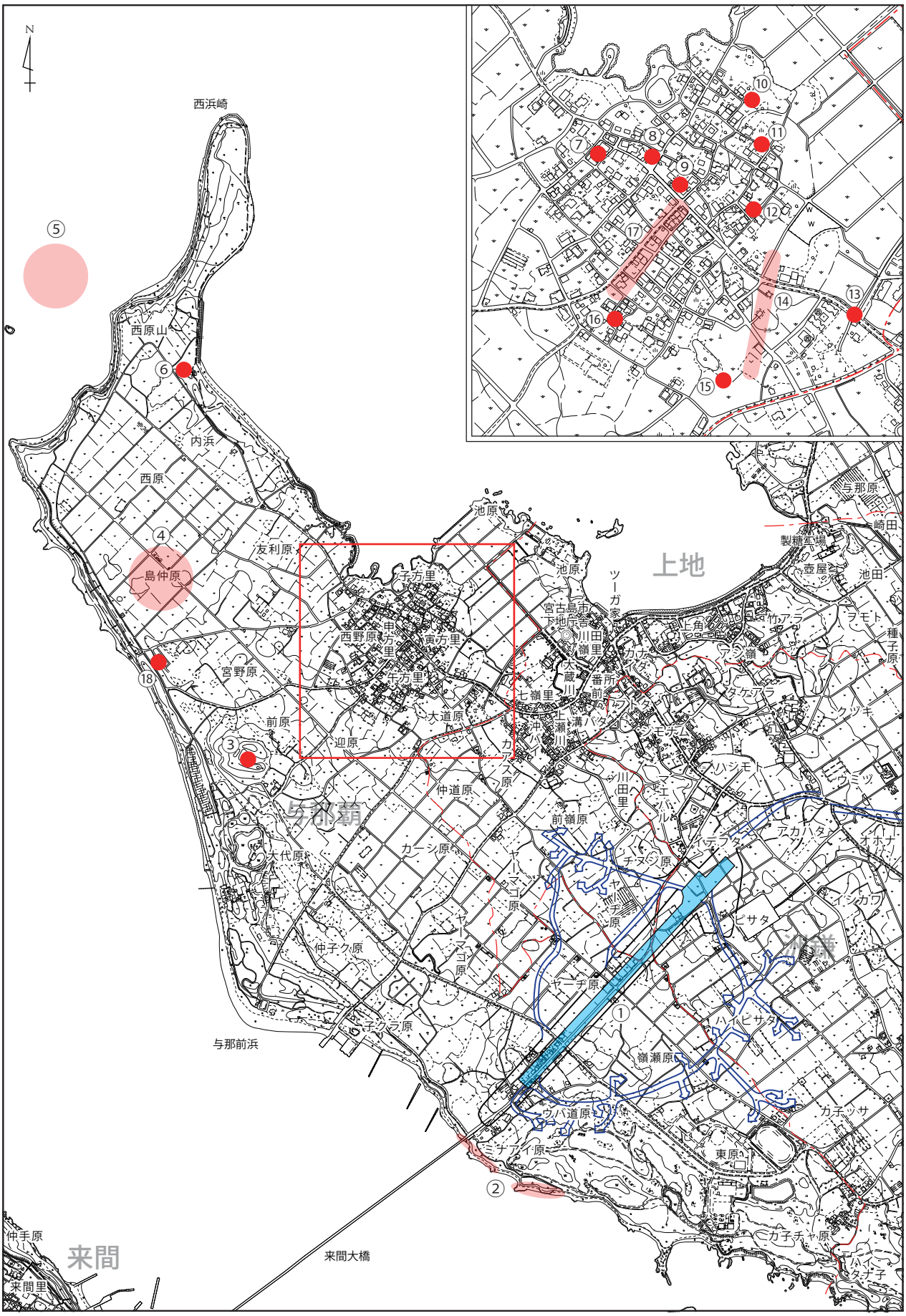
これらの記録から、西浜崎北部や、前山あたりには、連隊砲（四一式山砲）や速射砲（陸軍における対戦車砲のこと）が設置されていた事が読み取れるが、構築された陣地など詳細な位置については確認でき

ていない。

また、与那覇集落では部隊の将校が寄宿する住居が、数軒あることが聞き取りなどによって確認された。しかしながら、部隊名を確認できたのは 714 部隊（第 205 飛行場大隊　大隊長：吉岡軍一郎少佐）のみで、滞在の時期や期間などについても定かではない。また、与那覇公民館には兵隊が駐留していたことが、聞き取りで判明しているが詳細は判っていない。

下地町誌（下地町誌 1989）の戦時記録には、下地地区の各集落の被害が詳細に記されている。その中でも海軍飛行場への進入ルートにあたる与那覇集落は、爆弾の投下での爆死や、家屋焼失など、他の集落には類を見ないほどの多くの被害があったことが判る。（第一章　表 1 「町民戦禍一覧」参照）

※「歩兵第三聯隊　聯隊歴史第五巻」は佐渡山安公氏より資料提供。


N
西浜崎
西原山
内浜
西原
友利原
島仲原
宮野原
前原
迎原
大道原
子方里
西野原
申方里
寅方里
午方里
池原
ツーガ家
宮古島市
下地
川田
嶺里
大蔵川
七嶺里
上瀬川
溝ハタ
カアス原
仲道原
前嶺原
カーシ原
大代原
ヤーマゴ原
仲子ク原
子クラ原
与那前浜
ヤーチ原
チヌジ原
ヤチ原
ヤーマゴ原
ウバ道原
ミナブイ原
嶺瀬原
ハイビサタ
ビサタ
イシカワ
オホナ
アカハタ
ウミツ
クツキ
タケアラ
ヲモト
種子原
壺屋
池田
崎田
製糖工場
与那原
上地
与那覇
来間
来間大橋
仲手原
来間里
カ子チャ原
カ子ッサ
東原
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
⑭
⑮
⑯
⑰
⑱

第 4. 図 与那覇の成果図

３．与那覇の調査成果一覧

①陸軍西飛行場跡

西飛行場は、長さ 1,250 メートルの滑走路と、５キロの誘導路。28 基の掩体が与那覇、洲鎌、上地にまたがる地域に建設された。

②皆愛海岸の壕群

来間大橋の橋詰付近から赤崎御嶽にかけての海岸線に、水際作戦の銃座や蛸壺が複数確認できた。

③櫓跡（監視所）跡

聞き取りによると、前山あたりには、櫓を立てた監視所があった（昭和７年生）。

④敵機墜落場所（１）

下地町誌（1989）の戦時記録によると、島仲原付近に米軍機が墜落。遺体は与那覇警防団により、サニツ浜近くに丁重に埋葬された。同様の話が聞き取りでも確認できた。

⑤敵機墜落場所（２）

下地町誌の戦災の記録によると、米軍機が西浜崎の沖合いに墜落したとある。

⑥塩田跡

聞き取りによると、戦時中は軍の主導で製塩がおこなわれ、朝鮮人の軍属が塩作りに駆り出されていた。戦後は地元の個人や小組合組織で塩を作っていた（昭和８年生）。

⑦将校の寄宿した民家（１）

聞き取りによると、将校が寄宿していたが、部隊名は覚えていない（昭和８年生）。

⑧民間人爆死の場所（１）

下地町誌（1989）によると、昭和 20（1945）年４月６日に垣花恵方（当時 10 歳）が爆死したとあったが、聞き取りにおいて、機銃掃射によって死亡したことが判明した（昭和 10 年生）。

⑨兵隊駐屯地跡

聞き取りによると、与那覇の公民館には兵隊がいたが、部隊名までは判らない（昭和９年生）。

⑩民間人爆死の場所（２）

下地町誌の戦災の記録によると、昭和 20（1945）年６月 21 日の大空襲で、與那覇武信爆死とあり、聞き取りでも確認することができた（昭和 10 年生）。

⑪将校の寄宿した民家跡（２）

聞き取りによると、字与那覇 128 番地の隣には、714 部隊の部隊長がこの民家に住んでいた（昭和８年生）。

⑫住民被害の場所

聞き取りによると、字与那覇 170 番地近くに爆弾が落ち、近所の家族が爆死した（昭和 12 年生）。

⑬住民避難地

聞き取りによると、集落東方にある橋の下に集落の人は集まって、機銃掃射の弾を避けていた（昭和９年生）。

⑭爆弾投下場所

下地町誌によると、昭和 20（1945）年５月 12 日、幸地メガ、友利カナ爆死とあり、聞き取りからも、この附近にはおよそ 100 メートルおきに、３発の爆弾が投下され、被害があったことを確認することが出来た（昭和８年生）。

⑮与那覇大道原の住民避難壕

聞き取りによると、畑のきわにある墓の骨を片隅に寄せ、近隣の住民が避難壕として使っていた（昭和

３年生)。

⑯兵隊寄宿地

聞き取りによると、兵隊は民間の大きな家を接収して使用していた。他にも寄宿していた家屋が、何軒かあった（昭和 10 年生)。

⑰戦災火災

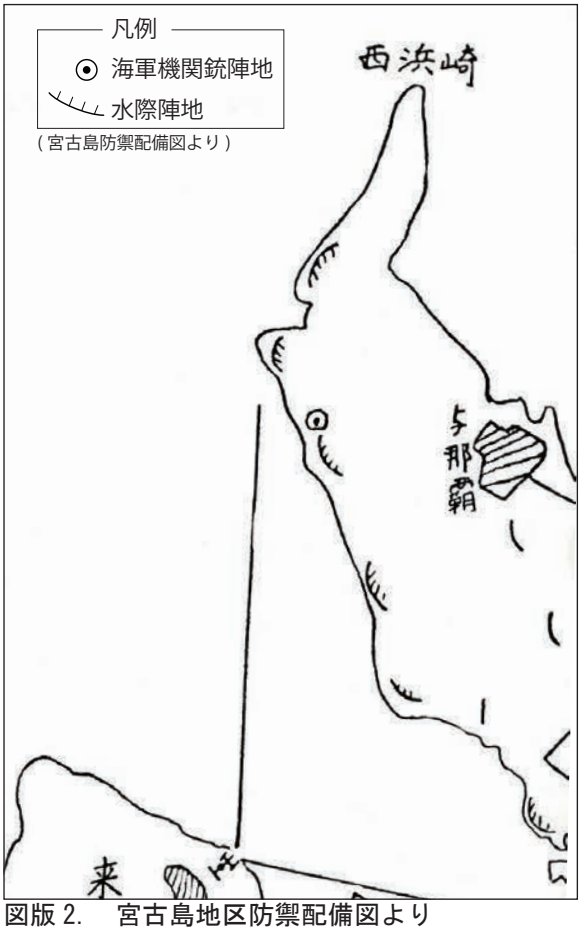
下地町誌（1989）によると、1945（昭和 20）年６月７日、砂川恵公家屋他 10 数軒炎上とあり、聞き取りでも、確認することが出来た（昭和 10 年生)。

⑱宮野原の水際陣地跡

宮野原の耕地の際に、大きな石を使った石積みと、土盛りのような丘が残っている（図版２)。

写真 4.　①陸軍西飛行場跡（南向き）

写真 5.　①陸軍西飛行場跡（北向き）



図版 2.　宮古島地区防禦配備図より

写真 6.　②皆愛海岸の壕群（遠景）

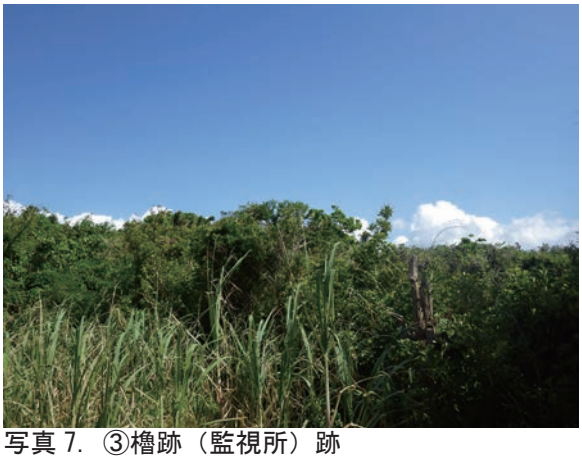


写真 7.　③櫓跡（監視所）跡

写真 8. ④敵機墜落場所（１）

写真 9. ⑤敵機墜落場所（２）

写真 10. ⑥塩田跡

写真 11. ⑦将校の寄宿した民家（１）

写真 12. ⑧民間人爆死の場所（１）

写真 13. ⑨兵隊駐屯地跡

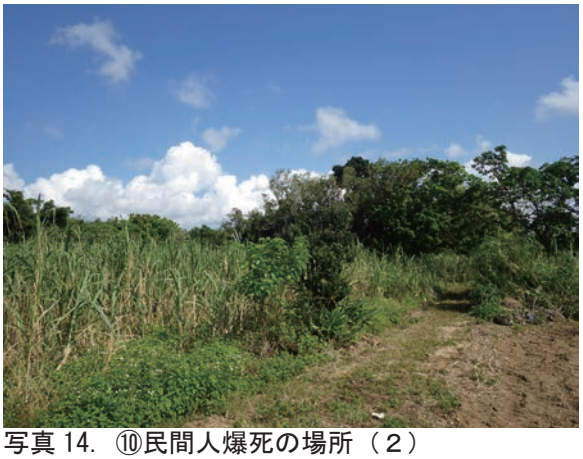


写真 14. ⑩民間人爆死の場所（２）

写真 15. ⑪将校の寄宿した民家跡（２）

写真 16. ⑫住民被害の場所

写真 17. ⑬住民避難地（橋の下）

写真 18. ⑭爆弾投下場所

写真 19. ⑮住民避難地（古墓）

写真 20. ⑯兵隊寄宿地

写真 21. ⑰戦災火災

写真 22. ⑱宮野原の水際陣地跡

写真 23. ⑱宮野原の水際陣地跡

4. 与那覇の戦争遺跡

（1）与那覇大道原の住民避難壕（よなはおおみちばるのじゅうみんひなんごう）

①所在地

宮古島市下地字与那覇大道原

②立地・現況

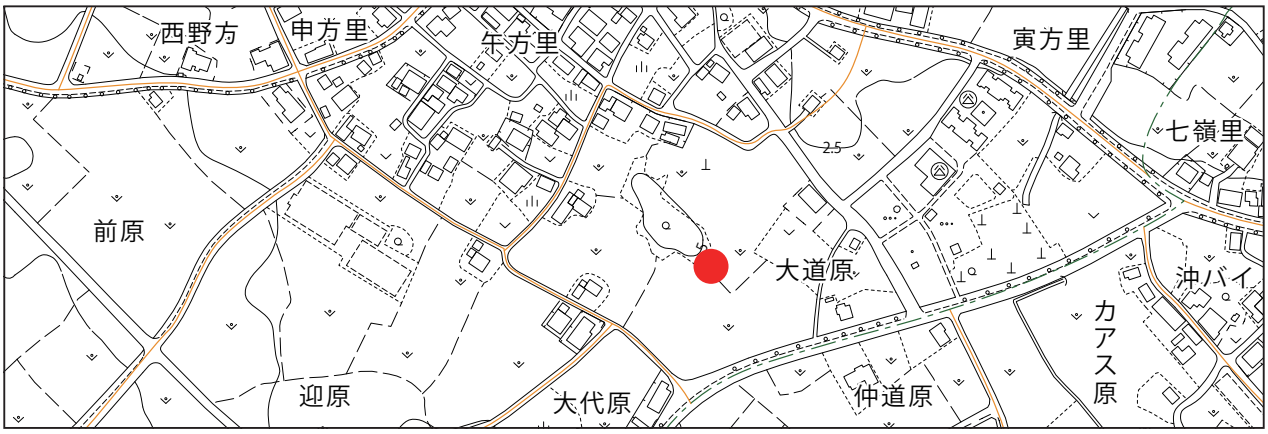
与那覇集落の南方に広がる畑地に雑木が茂った一角がある。雑木林の中は琉球石灰岩も露頭する荒地で、横穴式の古墓などが点在しており、集落の埋葬地と見られる。その南端で畑地との境界付近に、半地下式のコンクリート造りの大きな墓がある。この墓が住民避難壕であったと聞き取りより得られた。

③歴史状況

与那覇集落は海軍飛行場を攻撃する連合軍機の進入ルートにあたり、標的となる飛行場に乗じた敵機の爆撃も他の地域よりも多かった（連合軍機は宮古島への攻撃後、撤収する際は南を目指すよう厳命されている。これは宮古島の南方海上に空母群が待機しているため）。下地町誌（1980）の戦時記録からもその状況がわかる。地域の住民からは、橋の下に逃げた、墓に避難したなどの聞き取りが得られた。この墓は集落の南側にあって集落から近いこともあり、住民避難場所であったことがわかる。

写真 24. 与那覇大道原の住民避難壕（正面）

写真 25. 与那覇大道原の住民避難壕（墓入口）



第 5. 図 与那覇大道原の住民避難壕　位置図

（２）皆愛海岸の壕群（みなあいかいがんのごうぐん）

①所在地

宮古島市下地字与那覇ミナアイ原・ウバ道原

②立地・現況

本遺跡群は来間大橋橋詰の前浜農村公園から、赤崎御嶽の海岸線沿いに至る、小規模な岬状地形の先端近くに構築されている。海岸の岩盤上面から掘り込んで構築された壕（銃眼や蛸壺）は、その場所を確認することがやや困難であり、蛸壺の現状は、内部に砂礫が堆積している状況にある。また、壕の一部は、自然の地形を活用して構築された銃眼を備えている。

③歴史状況

皆愛地域（ミナアイ原・子クラ原）は来間島へ渡る宮古島側の港であり、陸軍西飛行場滑走路の西端にあたる。

当該の海岸線は敵の上陸に備えた水際作戦の防禦地点としての水際陣地が構築され、南区を守備する歩兵第３聯隊の部隊が駐屯したと考えられる。

宮古島地区防禦配備図によると、上野字宮国深江付近から与那覇前山に至る海岸線は、敵の上陸が予想されるエリアにあたり、海岸線に水際戦闘部隊、内陸に戦闘警戒部隊を配置し、厚い防禦陣形を整えていることが見てとれる。

また、南区を守備する歩兵第３聯隊の戦史資料（ref.C11110010900）によると、皆愛付近には歩兵砲小隊（連隊砲）が２隊配備されている。

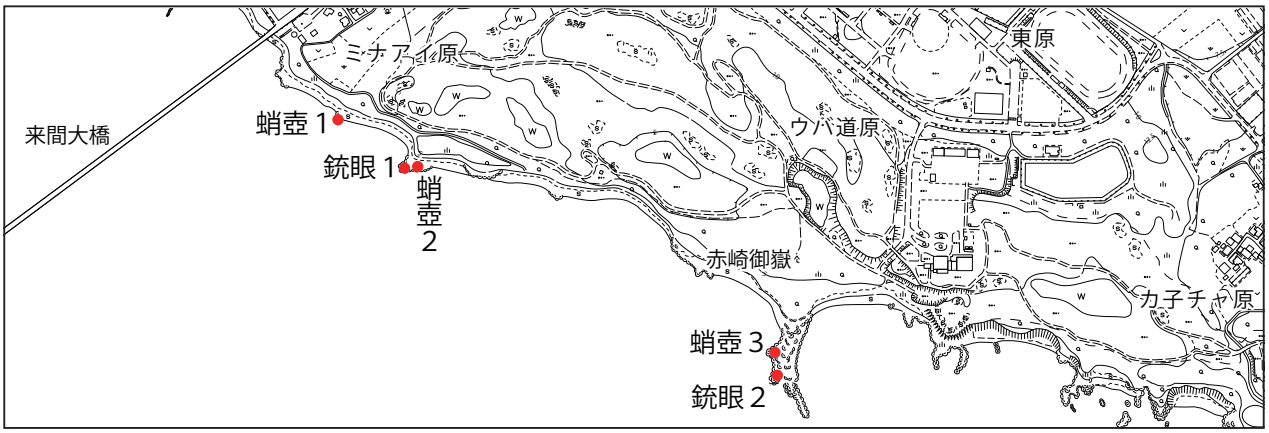
④遺構の特徴

本遺跡は海岸線沿いに、２基の銃眼と３基の蛸壺から構成されている。

最も来間大橋寄りにある蛸壺１は、海岸部の露岩に構築されている。直径が約 0.65 メートルの円形を呈しており、内部には砂が堆積している。現状の深度は約 0.9 メートルである。

海側に小さく突き出した岩塊の先端近くに、幅約 0.8 メートル、深さ約１メートル、長さ約２メートルほどの溝状に掘り込まれた短通路があり、ここから奥へ進むと海岸部に開いた、およそ２メートル四方空間を有する海蝕洞に達する。この海蝕洞は海水面に接しているが、南東方向を見渡すことが可能で、監視や銃眼の役目をなすと見られることから、便宜上銃眼１とした。

蛸壺２は銃眼１の東側に位置し、直径約 0.9 メートルの円形で、内部には砂が堆積するものの深さは 0.8 メートルほどある。半ば砂に埋もれた底部付近に、東南東側の海岸部を向いた開口部がある。銃眼として利用するには構造的な形状に無理があることから、用途については不明である。



第 6. 図 皆愛海岸の壕群　位置図

銃眼２は赤崎御嶽の海岸部の小岬に位置する。自然の地形を元に直径約 1.6 メートルほどの円形に開口する竪穴で、穴の縁にコンクリートを使った加工痕が残っており、大きな開口部を秘匿しようとしていたものとみられる。深度は底部に砂礫堆積しているものの１メートル以上あるが、開口部の周囲の岩盤が山型に盛り上がっており、海側に対して充分な隠匿性がある。

竪穴の底部には南西に向かって横穴が開いている。横穴の内部は礫がやや堆積しているが、来間島の南端が見通すことが可能な銃眼が構築されている。

銃眼２の北側には、岩盤の上端に出入り口を有する、人ひとりが身を隠すことが可能な小さな洞穴がある。内部は石灰岩の岩盤が融解して開口した小さな横穴の洞穴で、自然に開いた不定形の洞口からは、来間大橋の宮古島側のたもと付近を望むことが出来る。また、時代と用途は不明ながら、この小さな洞穴の岩盤上面がコンクリートで補強されており、なんらかの意図を持って加工されたとみられることから、これを蛸壺３とした。

写真 26.　皆愛海岸（来間大橋より遠望）

写真 27.　皆愛海岸　蛸壺１

写真 28.　皆愛海岸　蛸壺２

写真 29.　皆愛海岸　蛸壺２（下方の開口部）

写真 30.　銃眼１･蛸壺２のある岩場（西側の浜より）

写真 31.　銃眼１　掘り込まれた口

写真 32.　銃眼１　開口部（海蝕洞内より）

写真 33.　銃眼１　開口部（海側より内部）

写真 34.　銃眼２　開口部（縁にコンクリ痕）

写真 35.　蛸壺２　（来間島南端部が見える）

写真 36.　蛸壺３　入口（上側）

写真 37.　蛸壺３　洞穴からの遠望

第3節　上地

１．上地の地理的環境

上地は下地地区のほぼ中心に位置しており、東西に細長い“⌐”字型をしている。西は与那覇湾に接し、東は旧上野村（上野ソバミネ）との境界に達している。北は製糖工場の崎田川で川満と境をなしている。南はツヌジ御嶽（チヌジ御嶽　下地神社）付近をも字域とし、与那覇皆愛の集落近くにまで達している。

また、西部を国道 390 号線（通称:下地線。古くから平良～与那覇を結ぶ道として開かれた）が縦貫し、池原の埋立地へ移転するまでは下地町役場（現・下地保健福祉センター。かつての上地村番所跡）が置かれ、周辺には交番や郵便局なども所在し、隣接する洲鎌（ＪＡの関連施設多数）とともに行政と経済の中心地である。

２．上地の沖縄戦時の概況

霧生藤吉郎氏の資料（防衛区分）によれば、上地地区には歩兵第３聯隊第３大隊第 10 中隊（中隊長：定本二一大尉）が配備されている（霧生藤吉郎 1996）。

また、宮古島地区防禦配置図（1944）によると、上地の東方に位置するミヤホシ（宮星）山は、“37 高地”と記されており、山砲が配備されている。このミヤホシ山の北側に連なる、現在の最終処分場（川満与那原）の嶺あたりには、部隊が駐屯していたとの聞き取りもあり、同配置図にも砲兵陣地として記され、山砲、迫撃砲、速射砲が配備されている。

上地の南方、ヤーヂ原、ツヌジ原は、字与那覇の皆愛に隣接しており、陸軍西飛行場用地として接収されている。西飛行場については、滑走路の南に来間島、北にミヤホシ（宮星）山を控え、離発着に支障ををきたし、飛行場としての用をなさなかった（下地町誌 1989　体験談による）。

昭和 18（1943）年８月、有事に備えて郷土防衛隊（特設警備隊）が編成され、下地村役場（上地 505 番地）構内にあった、下地村農業会に本部が置かれる。下地村配備の特設警備第 210 中隊の隊長は、宮城清昌中尉である（下地町誌 1989）。

概要でも述べたように、1944 年 10 月 13 日、午後３時 40 分から４時 10 分にかけて、敵機 15 機が来襲。平良の海軍兵舎（現未来創造センター）や、下地村上地の製糖工場などの主要施設が銃爆撃された。この攻撃時、対空砲火によってグラマン機１機が撃墜され、落下傘で脱出して久松海岸に降下した搭乗員は、軍に捕らえられ憲兵隊の取り調べののち台湾へ移送された（みやこの歴史 2012）。

尚、まったく同日のエピソードとして、下地町誌（1989）では、「友軍の地上砲火により、グラマン機１機、与那覇湾に墜落、搭乗員捕虜となる」との記述があるが、搭乗員が捕虜となった事例はひとつしかなく、ラジオドキュメンタリーで「一枚の写真」を所有していた山川さんからの聞き取りによると、墜落地点は上地の海岸であると判明した。

前述の通り、複数機撃墜されていることが考えられることから、今後調査を行う平良方面でも撃墜された敵機の証言が得られるものと期待している（第２章　１．下地地区の沖縄戦時の概況　（３）その他　ｂ．対空戦闘を参照）。

上地の東端、長山（現在の下地農協畜産センター東方）に設置された青年学校（国民学校を卒業し、進学せずに就労する青少年に、社会教育と職業訓練を行う教育機関）では、校舎を軍が接収し、病院として

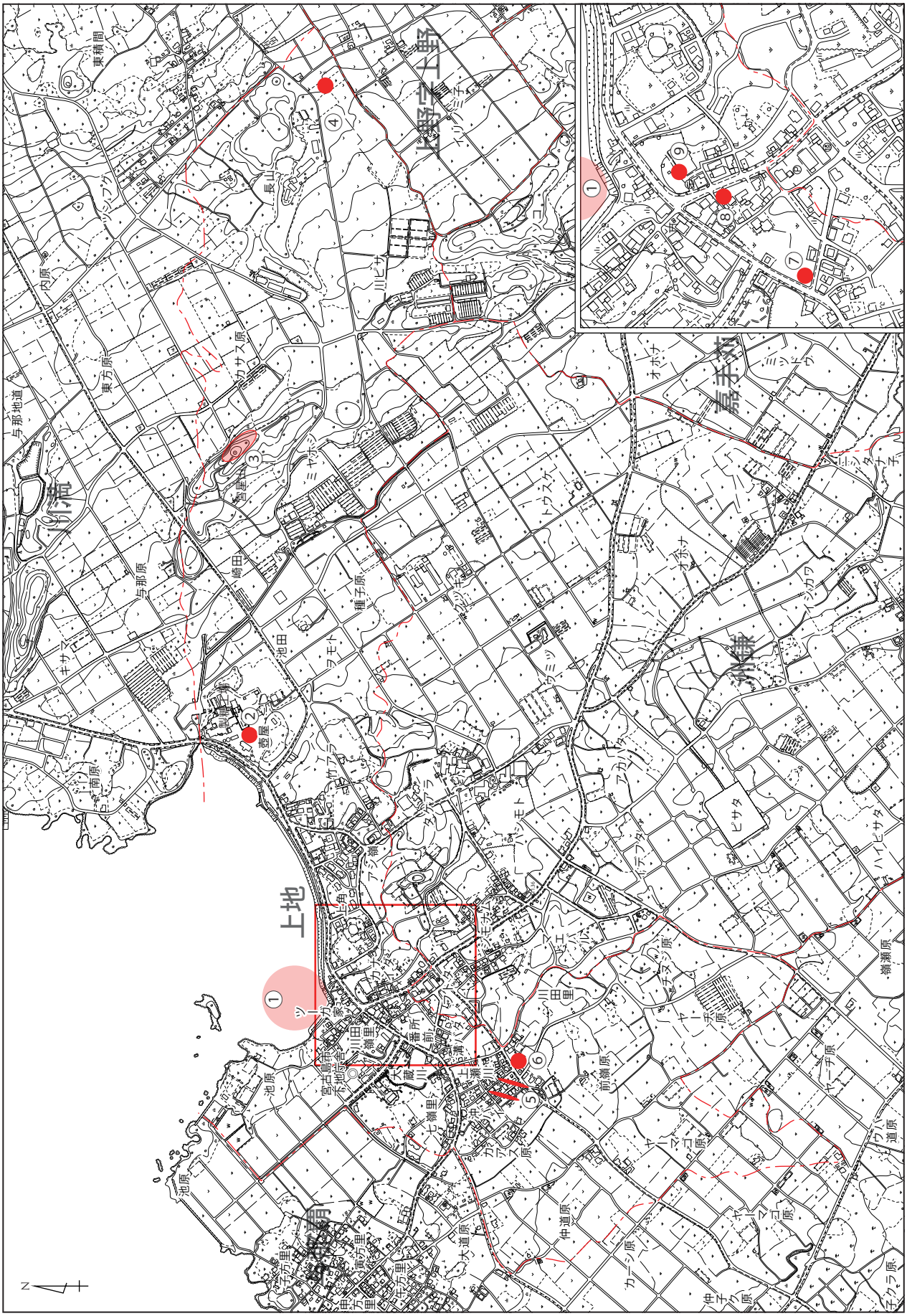
使用。また、男性教師と男子生徒は郷土防衛隊へと召集された。

下地青年学校　沿革の概要

昭和 15 年	
昭和 18 年 4 月 1 日	青年学校専用校舎落成（下地小学校農業実習地）。
	戦争の激しさが増し、戦時体制の強化に伴い、各小学校に併置されていた青年学校
昭和18年 5月12日	を発展的解消させ、通年制の独立青年学校として設置れる。
昭和18年 7月	元青年学校の校庭で開校式を挙行。元下地青年学校校舎を借用して授業を開始する。
昭和18年11月	下地村字上地長山の原野及び畠地を買収して、新たな学校用地とする。
昭和19年 4月	校舎（3教室）を建築す。
昭和19年 5月	男生徒のほとんどは、郷土部隊の設営隊として召集され、女生徒 70 名が入学する。
昭和19年 7月	さらに戦争が激しくなり学校は休業。職員 6 名も郷土部隊に招集される。
昭和19年 9月	校舎は日本軍の病院として借用される。
昭和19年10月10日	学校事務室を、高千穂集落の羽地重良方に移す。
昭和20年 3月	アメリカ軍、初めて宮古を空襲する。
	日本軍が使用する校舎が、空襲のため全焼する。

※青年学校：1935 年「青年学校令」が公布され、従来の実業補修学校と青年訓練所が統合された。就業年数は、普通科 2 年、本科男子 5 年、女子 3 年で、当初は小学校に付属した形で運営された。その後 1938 年（昭和 13 年）の青年学校令の改正により、義務化される。1942 年には校長以下専任教師が任命され、独立校となるが、生徒は動員され、終戦にいたる。（沖縄大百科事典より）

図版 3.　下地青年学校付近空中写真（米軍撮影 1945 年５月１日　沖縄県公文書館収蔵）を加工。



第 7. 図 上地の成果図

３．上地の調査成果一覧

①米軍機墜落場所（ツーガ家）

聞き取りによると、1944（昭和 19）年 10 月 13 日に日本軍によって撃墜された敵機が与那覇湾に墜落。落下傘によって脱出した敵兵を、日本軍は捕虜として捕らえ、車に乗せられていくのを見た（昭和元年生、９年生）。

※対空戦闘によって当該地に不時着した敵戦闘機の搭乗員の顛末については、p7 を参照のこと。

②製糖工場

同工場でサトウキビ運搬用に設置していたトロッコのレールが供出され、鉄を鋳なおして作ったハンマーやノミを使って蛸壺を掘った（沖縄県史第 10 巻各論編９　沖縄戦記録２　1974 年　沖縄県教育委員会）。

また、下地小学校の沿革誌によれば、昭和 19 年６月から仮教室として製糖工場が使用されたとある。他にも、工場は海軍が使用していたとの聞き取りも得られている（昭和元年生）。

③宮星山の陣地壕群

聞き取りを元に調査を行い、新たに発見された壕群である。宮星山は地域や年代により、ンミフス山、ミネホシ山などと呼ばれることがあり、現在、宮古島市上下水道部の宮星配水池が置かれていることから、判り易さも含め、当該地の呼称を「宮星山」と統一した。

また、この地は宮古島防禦配備図によると、“37 高地 ” と呼ばれ、山砲が配備されている。

④青年学校跡

青年学校の沿革誌によると、校舎は戦時中日本軍の病院として使用された。

住所的には下地字上地であるが、地理的には上野字上野に近く、県道 202 号宮国線を越えれば、陸軍中飛行場戦闘指揮所のあるナベヤマが近い。

⑤住居被害の場所（焼夷弾による火災）

聞き取りによると、字上地 112 番地と字上地 108 番地辺りは、敵の焼夷弾で焼失。字上地 111 番地も半焼した（昭和５年生）。

⑥住民被害の場所（爆弾の炸裂）

聞き取りによると、字上地 292 番地の隣辺りでは、屋敷内に造った防空壕を爆弾が直撃し、一人死亡、一人は腕を切断する大けがをした（昭和５年生）。

⑦上地青年会場跡

聞き取りによると、字上地 372 番地辺りには青年会場（旧公民館）があり、この場所には兵隊１個中隊が駐屯。防衛隊はその指揮下にあって、戦闘要員として軍務に服していた（昭和５年生）。

昭和 20 年６月。襲来した敵機の機銃掃射を浴び、青年会場にいた、多数の軍人・軍属が犠牲となった（下地町誌 1989）。

⑧防衛隊本部跡

聞き取りによると、旧下地郵便局（上地 506-1 番地）の向かい、字上地 399 番地の住居は防衛隊の本部のようで、メシあげもそこからやっていた（昭和５年生）。

⑨旧下地村役場跡（現・下地保健福祉センター）

昭和 18（1943）年８月、有事に備えて郷土防衛隊（特設警備隊）が編成され、下地村役場構内にあった下地村農会に本部が置かれる。下地村配置の特設警備 210 中隊の隊長は、宮城清昌中尉（下地町誌 1989）。

同地には 2005（平成 17）年に改築された合同慰霊碑が建立されている。これは 1935（昭和 10）年

３月 10 日に下地神社（ツヌジ御嶽）の境内に建立された碑を、1961（昭和 36）年７月 13 日に下地町役場の敷地内に移設し、合同慰霊碑として改築したものである。尚、新・下地町庁舎（現在の宮古島市下地支所）は 1999（平成 11）年に池原へ移転している。また､ツヌジ御嶽に残されている 1932（昭和７）年に建立された「忠魂碑」とは別のものである（p41）。

写真 38. ①米軍機墜落場所

写真 39. ②製糖工場

写真 40. ③宮星山の陣地豪群（壕２壕口）

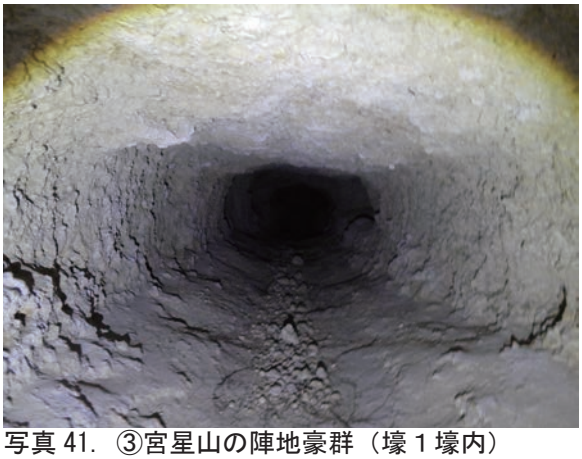


写真 41. ③宮星山の陣地豪群（壕１壕内）

写真 42. ④青年学校跡

写真 43. ⑤住居被害の場所（焼夷弾による火災）

写真 44. ⑥住居被害の場所（爆弾の炸裂）

写真 45. ⑦上地青年会場跡

写真 46. ⑧防衛隊本部跡

写真 47. ⑨旧下地村役場跡

写真 48. ⑨旧下地村役場敷地内の慰霊碑

写真 49. ⑨旧慰霊碑（「下地町誌 1989」より）

4. 上地の戦争遺跡

（１）宮星山の陣地壕群（みやほしやまのじんちごうぐん）

①所在地

宮古島市下地字上地ミヤホシ

②立地・現況

本壕群の位置する丘陵は、与那覇湾の奥にある製糖工場の南東側に位置し、工場脇を流れる崎田川の源流のひとつである。上地と川満の字境をなす丘陵で、標高はおよそ 30 メートルほどあり、嘉手苅のウエノミネ・ウガリミネ方面へと連なっている。低地の多い上地・洲鎌・与那覇を見渡すことの出来る場所で、山の上には現在、宮星配水地（タンク）設置されている。聞き取りなどでは、陸軍西飛行場の滑走路の延長上に位置していることから、宮星山が離発着の邪魔になっていたと言われていた。

③歴史状況

上地地区には歩兵第３聯隊第３大隊第 10 中隊（中隊長：定本二一大尉）が配備されているが、部隊の拠点についてははっきりしていない。しかし、川満での聞き取りの中で、中隊長サダモトの名前が出て来ることから、上地と川満の字境をなす宮星山付近に布陣していたものと考えられる（製糖工場か？）。

また、宮古島地区防禦配置図からも、宮星山は、“37 高地 ” と記されており、山砲が配備されている。宮星山の北側（川満側）は、現在の最終処分場の嶺にかけて、部隊が駐屯していたとの聞き取りもあり、同配置図にも砲兵陣地として、山砲、迫撃砲、速射砲などが配備されている。

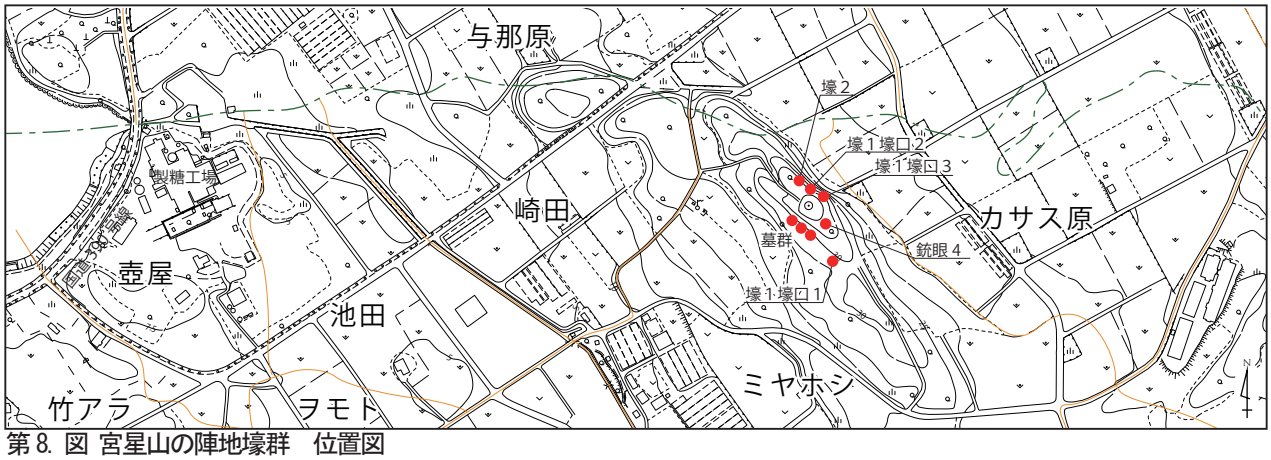
地域や年代により、ンミフス山、ミネホシ山など様々に呼ばれることがあるが、現在、宮古島市上下水道部の宮星配水池が置かれていることから、判り易さも含め、当該地の呼称を「宮星山」と統一した。

④遺構の特徴

宮星山の陣地壕群は、２つの壕と、４つの銃眼から構成される。

２つの壕は、隣接しており、丘陵を貫通する壕を壕１とし、壕１の北側の壕口（壕口２）に隣接する壕を壕２とする。壕１は３つの壕口とひとつの竪穴が連結する総延長 111 メートルにも及ぶ大規模な壕である。

壕１の壕口１は丘陵の南側に位置し、西へ向けて開口する。壕口は自然の岩盤を掘り込んで構築されており、現在は幅が 0.8 メートル、高さ 0.6 メートルと、人がひとり通れるほどに狭い。壕口１から東へ向



第 8. 図 宮星山の陣地壕群　位置図

けて直進すると、竪穴と連結する。竪穴は、丘陵の地表面を 0.6 × 0.6 メートルの方形の平面形で掘り込んでおり、壕の床面までは約 2.5 メートルを測る。竪穴の北西側の壁面には３つ、北東側の壁面には４つの足かけが掘られている。足かけの平面形は略三角形状を呈し、断面形はくの字形を呈する。この竪穴をぬけると、壕の幅、高さとも１メートル未満とひざをついて進まなければならないほど狭い。壕内は複数の枝線に分かれており、その内のひとつはコンクリートを使用して西側に向けて開かれた銃眼１（埋没）が確認できる。わずかではあるが灯り取りの痕が残され、ビール瓶やヤカンなどの残留物も確認することができる。北側の壕口２・３方向に進むと、幅 1.2 メートル、高さ１メートル程の丁重な作りをした略台形状の断面となり、19 メートルの直線の形態をなし丘陵を貫通している。

壕口２の周辺部には、自然の岩壁に開いた略円形の穴が３つある。ひとつは隣接する壕２と繋がった連絡用の窓とみられる。ふたつめは外部から土砂が流入しており、薄かった外壁が破損した穴のようにみられる。３つ目は半球形に作られた小さな脇部屋があり、床面よりやや高くなった台座状の構造に作られた銃眼２とみられる。この３か所の穴とは別に、壕口２の脇にコンクリートを使用した長方形の窓を有した銃眼３が構築されている。

壕２は、壕１の北側に隣接している。壕口は北東に開口し石積が設けられている。石積みは 0.3 ～ 0.4 メートル大の琉球石灰岩で、２～３段に野面積みにされ、高さは 0.4 ～ 0.6 メートルを測る。石積の外側には高さ 0.4 メートルほど、掘削がらとみられる石灰岩が積まれている。壕口部分は広く、両壁面は丸みがあり膨らむように掘られている。壕は南西向きに直線的に６メートルほど掘られ、突き当りの部分に、幅 1.5 メートル、奥行き 1.1 メートル、高さ 1.1 メートルの掘り込みがある。壕はそこで北西方向に約 90 度折れ曲がる。北西方向への通路は、幅約２メートル、高さ約１メートルを測り、奥側部分は、やや下がって楕円状の形態をなしている。

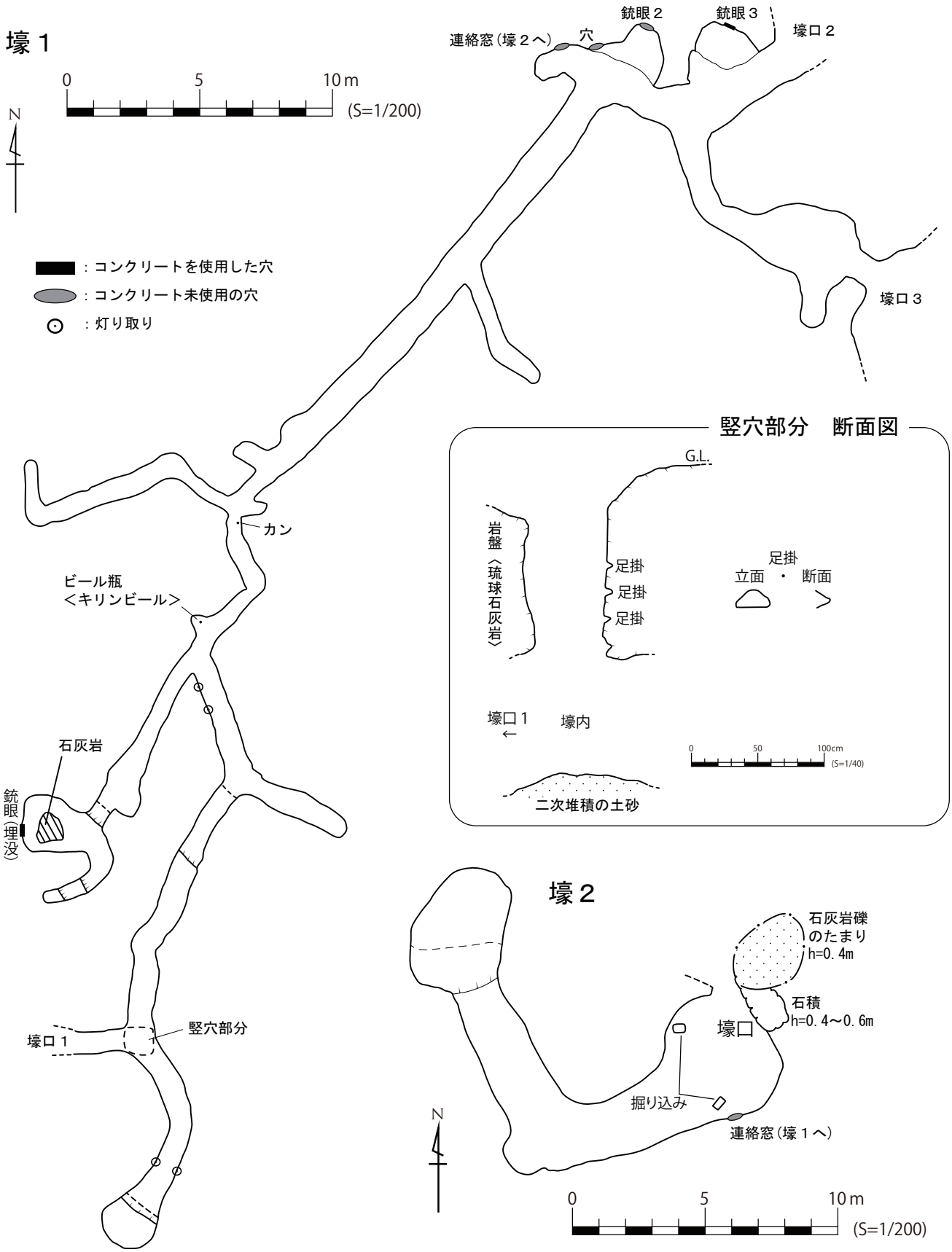
壕口部分の床面はフラットに整地され、方形の浅い掘り込みが２か所確認できた。この掘り込みは重砲を固定する足留の可能性が考えられる。

宮星山の尾根沿いに露頭した石灰岩に南側を向いた銃眼４がある。銃眼はコンクリートで構築され、外形は 0.6 × 0.3 メートル、内形 0.3 × 0.2 メートルの長方形をしている。銃眼の内部には空間が広がり、２か所の出入口のようなものがみられるが、いずれの口も埋没しており、銃眼へ続く壕口を確認することができない。

宮星山南側の斜面にはいくつもの古い墓が並んでいる。この墓群は斜面の琉球石灰岩を掘り込んだものであるが、一部は土砂に埋もれ、単なる窪地と化している場所もある。しかし、いくつかの墓は墓室が開いたままになっており、広めの墓室内を確認することができ、中には遺骨が残る墓もあった。

これらの墓を繋ぐように墓口の前に短いトンネル状の帯道が、連続して掘られている。宮星山周辺に人家はなく、上地集落での聞き取りよると古い無縁墓地との情報が得られたため、当該地に駐屯した部隊が墓を壕として活用したものと推察される。

宮星山には多くの壕が位置し、痕跡はあるものの拠点とした部隊について判然としないが、壕の形態的な特徴や歴史的な状況から山砲を使用した部隊に関連する壕と考えられる。



第 9. 図 宮星山の陣地壕　壕１・壕２　平面図

写真 50.　宮星山全景（北側）

写真 51.　壕１　壕口１

写真 52.　ステップのある竪穴

写真 53.　壕１　銃眼１（埋没）

写真 54.　壕１　壕内

写真 55.　壕１　壕内

写真 56.　壕１　壕口３

写真 57.　壕１　壕口２付近　銃眼２

写真 58.　壕２　壕口（左壁面に壕１との連絡窓）

写真 59.　壕２　壕内から壕口を望む

写真 60.　壕２　壕内

写真 61.　壕２　残留物（鉄製品と銃弾）

写真 62.　西側　墓群

写真 63.　西側の墓群の帯道①

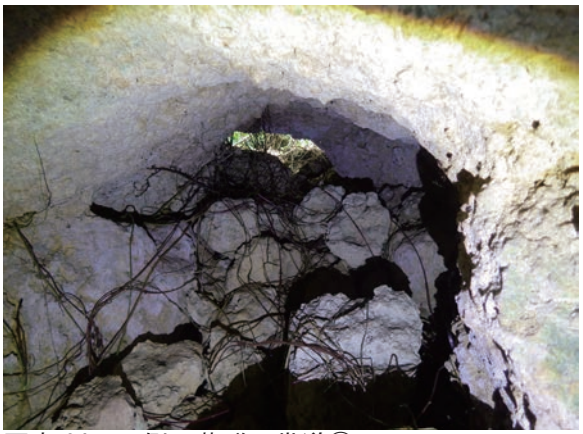


写真 64.　西側の墓群の帯道②

写真 65.　尾根にある銃眼４（出入口未明）

第4節　洲鎌

1．洲鎌の地理的環境

洲鎌は下地地区の中南部に位置し、集落の中心地は与那覇、上地に近い北西部の一角に集中しており、農協の各機関（支所、資材部、スーパー、ガソリンスタンドなど）が集まっている。また、下地小学校（こども園、中学校も隣接）も近く、下地の文教地区の様相がある。字域の北部に国道 390 号が、南部には県道 235 号保良上地線が、それぞれ東西に通っている。中南部域は平坦で畑が広がっており、集落はまばらだが、おおむね棚根集落（ニシタナ子、ハイタナ子、イシカワ、カ子ッサあたり）としてまとまっている。棚根は入江湾西岸にあり、南部は東シナ海に面している。

2．洲鎌の沖縄戦時の概況

霧生藤吉郎氏の資料（防衛区分）によれば、洲鎌には歩兵第３聯隊第３大隊本部（大隊長:芦原忠三少佐）、第９中隊（中隊長：及川時雄大尉）が、棚根地域には歩兵第３聯隊第１大隊第２中隊（中隊長：森幸作大尉）が配備され、この地域のそれぞれの中隊に、第３機関銃中隊（中隊長：本田清太郎大尉）が分散して配属されている。（霧生藤吉郎 1996）

洲鎌西部のハイピサタ、ピサタ、イデフタの一部は、陸軍西飛行場の用地として接収されている。西飛行場の建設に伴い、土地を接収された与那覇皆愛の住民の一部は、棚根集落に移住してきた。

南地区の部隊展開図によれば入江湾付近は、敵の上陸予想地点のひとつとみられ、湾口部に偽陣地を構築している。入江湾西側の棚根集落には、歩兵の１個小隊と他にも中隊規模の部隊、東側の上野字宮国山根の集落には、歩兵の１個小隊と機関銃中隊の一部、歩兵砲中隊を、それぞれ配備している。

宮古島地区防禦配備図を基にした今回の調査で、入江湾口の棚根の海岸には銃眼を備えた複数の壕が構築されている。また、城辺字友利からこの入江湾にかけての南海岸には、敵の上陸に備えた水際作戦として、障害物等を設置し、複数の銃眼を海岸線に設けている。

ツヌジ御嶽（下地神社）の隣にあるツヌジ公園は、1948 年に上野が分村するまで、下地村の運動場であった。今回の調査で戦時中は兵舎が建てられていたとの証言があり、米軍が撮影したの当時の空中写真でも兵舎とみられる建造物を確認する事ができる。

与那覇の集落内に分散して駐留していた部隊が移駐してきたとの聞き取りも得られているが、部隊名までは定かではない。

下地国民学校は 1943 年、第 7095 部隊（特設警備第 210 中隊）の駐留第１陣が、７教室を使用することから始まり、校地内に防空壕を掘削するなど、徐々に学校としての機能は日々削がれてゆく状況にあった。1945 年４月には戦禍によって校舎などほとんどの施設は破壊された（下地小学校沿革誌）。

現在の下地小正門前にある駐車場付近は、当時は深い低地で田圃が広がっていた。その斜面に子供たちが避難する防空壕が掘られていたが、雨が降ると壕口から中に水が入るため、入りたくないと泣く子供もいた。また、隣接する現在の下地こども園の敷地は学校林の松林であった。

今回の聞き取り調査において、現在の下地中学校（当時は小学校の学校農地）のグラウンド付近は松林があり、松林に隣接した深い低地には田圃があった。その高低差のある斜面にグランド付近を横切るよう

にして、トンネル状の通路のようなものを、戦後のグラウンド造成の際に見たとの証言もあり、軍の避難壕の可能性も否定できない。他にも現在の中学校の武道館の東隣には、トーチカが複数個あったともいわれている。

下地小学校沿革誌　抜粋

昭和18年11月15日　7095 部隊７教室借用　訓練をなす。

昭和19年 5月 4日　校地西側校門内側左右北隅に防空壕掘開始。

昭和19年 5月 8日　新校舎、振農塾、講堂側兵舎にあてられる　午後 10 時頃多数入舎す。

昭和19年 5月 9日　本日より第１、第２、第３校舎に於て二部授業を実施す。

昭和19年 6月13日　本日より下記の通り仮教室設置。

川満青年会場　　初５ノ４

与那覇青年会場　初５ノ１、初６ノ１

製糖工場　　初６ノ２、６ノ４

他の学級は本校に於て二部授業を行う。

昭和19年 6月16日　午前４時頃空襲警報発令、職員学校に参集待期す。７時半頃解除。

昭和19年 6月26日　本日より飛行場作業に出勤す（３年以上）。

昭和19年 7月29日　集団児童疎開につき各部落常会へ趣旨徹底のため部落担任出席す。

昭和19年 8月12日　仮校舎本日落成す（校舎の大半は兵舎に充てらしたため仮校舎を造って教室不足を補うため）。仮校舎建築に関しては後援会役員積極的協力し、学校、村、父兄一体となりて実現に努力せしむ結果３日間に 17 間の茅葺校舎完成す。

昭和19年 8月18日　集団疎開児童宮崎向出発す（46 名）引率訓導　川満　一。

昭和19年 9月 9日　本日より月末まで初３以上の学童■■作業へ出勤。

昭和19年10月10日　空襲、本日午前午後２回に亘り敵機の空襲を受けたるも本校に被害なし。敵機宮古島初見参なり。

昭和19年10月12日　野原岳御真影奉遷所造築作業へ男教員１人２日間宛奉仕することとなれるに依り本校より３名、３名、２名と３回派遣す。

昭和19年11月 1日　御真影並勅語謄本、奉護の萬全を期し本日宮古中学校へ奉遷し、更に 11 月２日安全地区たる平良町下里添野原越の奉安殿にお遷し奉る。本日より全郡男教員輪番にて護衛当直す。

昭和19年11月16日　本日より 11 月 28 日まで警戒警報発令のため児童休業。座喜味校長は県外出張の件許可せられる。警報下にて休業なるに拘らず高等科男女は軍部の要請に依り教員引率の下に各所各方の陣地構築作業に従事す。

昭和19年12月 9日　警戒警報発令のため初４以下休業 13 日迄５日間、初５以上は士気昂揚必勝態勢確立講演会へ出席す。講師本田少尉　渡辺大尉、友利教頭。

昭和19年12月10日　本日より３日間５年以上男女 330 名警報下なるに関せず軍への奉仕作業に出勤す。

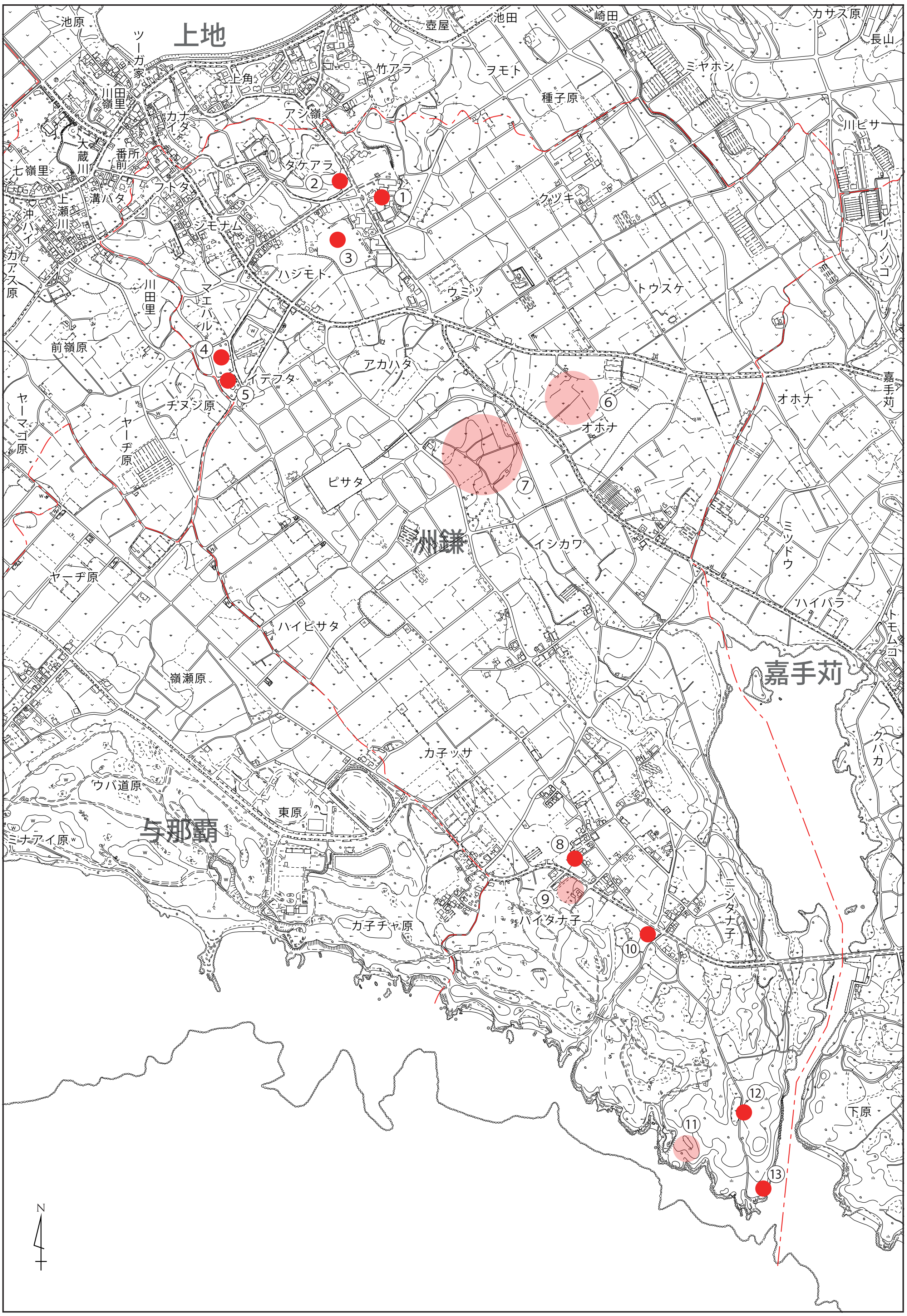
昭和19年12月14日　本日より 23 日迄普通授業実施。

全日本学徒号飛行機献金 68 円也発送す。

昭和19年12月16日　全児童の製作品苫 492 枚軍部へ供出す。ヤラブ種子（採油用）５斗供出す。

学校より疎開児童慰問用として黒糖 40 斤発送。農業収益金より支出し座喜味校長出張につき依頼す。

昭和20年 1月11日　本日迄敵機襲来頻繁のため授業行わず。
昭和20年 1月21日　本日より 23 日迄空襲又は警報発令のため休業。
昭和20年 1月24日　児童 514 名登校、３時間目に退避訓練を施行ず。
昭和20年 1月30日　本日より３月 17 日迄約 45 日間、初５以上男女は国道作業に動員さる。
昭和20年 2月 8日　授業中、突如として敵機敵機来襲ありたるに鑑み、本日より午後３時始業することにす。
昭和20年 3月18日　昨日を以て５年以上の国道作業動員解除され本日より全学年授業を実施す。出席児童 600 人内外、欠席児３00 人以上。
昭和20年 3月22日　１時限目に退避訓練を実施す。本日出席児童 809 名百分比 85.6％。
昭和20年 3月31日　４回に亘り空襲ありたるも、午後６時半より４年以下終了式を挙行す。
昭和20年 4月 1日　敵機来襲頻繁なるため、各部落少年団単位に教育活動を継続せしたることとせり。
昭和20年 4月 5日　校長住宅両側に大型爆弾落下。其他学校敷地内に６個、農場を含む近傍に 20 個落下。第一館を除く校舎の屋根瓦機銃弾にて損害大なり。
昭和20年 4月 7日　職員の学校出勤を停止し、輪番にて晝間警戒に当たらしむ熾烈なる空襲下を潜りつ、校具の疎開を開始す。
昭和20年 4月 8日　残存せる児童用机、腰掛１組宛字与那覇、上地、洲鎌の初３以上学童をして保管せしむ。
昭和20年 4月15日　仮教室（茅葺）４教室並第一館の６教室は焼夷弾に依り火災を起し廃燼に帰す。
昭和20年 4月16日　及川隊の星野少尉指揮の下に下士官兵共３、40 名にて新校舎、郷土館奉安室を破壊し用材を運び去る。上官の命に寄る旨の確答を得たり（及川隊長葦原隊長）。
昭和20年 5月 5日　下地国民学校仮事務所を、字与那覇 165 友利完一宅に設置す。
昭和20年 5月 8日　村役場に於て村会招集され校舎処理問題審議す。友利教頭之に出席す。校舎建築建具一切軍部に献納することを決議す。
昭和20年 6月 1日　男教員５名は本日より向う 10 日間防衛隊に召集さる。
昭和20年 6月30日　空襲低調となりたるため、本日より各部落に於て毎日学校を開く。
職員を３、４名宛各部落に配置す。
昭和20年 7月 6日　男教員５名は向う１ヶ月間防衛隊へ召集さる。
昭和20年 7月 8日　本校職員６ヶ月分俸給全額 414 円也は依命国防献金をなす。
昭和20年 8月16日　大東亜戦争終結。日本降伏せる旨公表せらる。
昭和20年 8月23日　初４以上の全児童を竹新（タケアラ）校庭に召集し終戦に関する詔書奉読式を挙行す。
昭和20年 8月31日　昨年 11 月以来、郡下男教員輪番護衛せし野原越奉遷所内の本校御真影（今上　皇后　大正　仝皇后　明治　仝皇后の６影）並他校奉載の御真影と勅語謄本は、本日永遠の決別式あり。午後７時半より同奉遷所前に於て奉焼。支庁長を始め各町村長官衛長列席。
昭和20年 9月 1日　各部落に開催中の学校を閉鎖す。
昭和20年 9月20日　本日より全児童を竹新校庭に召集し授業を始む。欠席者多く 500 名以上を算す。
昭和20年10月 2日　新入児童入学式を挙行す。


上地
池原
ツーガ家
上角
竹アラ
壺屋
池田
崎田
カサス原
長山
ミヤホシ
ヲモト
種子原
川ピサ
アシ嶺
川田里
川嶺里
カナイダ
大蔵川
番所前
七嶺里
タケアラ
フトタ
溝バタ
上瀬川
沖バイ
カアス原
クツキ
イリノソコ
ジモナム
ハジモト
ウミツ
トウスケ
マエバル
前嶺原
アカハタ
イデフタ
チヌジ原
ヤーマゴ原
ヤーチ原
オホナ
嘉手苅
ピサタ
洲鎌
イシカワ
ミツドウ
ハイバラ
トモムゴ
ヤーヂ原
ハイピサタ
嶺瀬原
クバカ
カ子ッサ
ウバ道原
東原
与那覇
ミナアイ原
カ子チャ原
ハイタナ子
ニシタナ子
下原
N
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13

第 10. 図 洲鎌の成果図

３．洲鎌の調査成果一覧

①下地国民学校

現在の下地小学校。学校沿革誌によると昭和 18 年 11 月に、7095 部隊（特設警備第 210 中隊）に 7 教室を貸し、昭和 19 年 5 月には、新校舎、振農塾、講堂が兵舎にあてられた。昭和 20 年 4 月には、仮教室（茅葺） 4 教室、並びに第一館の 6 教室は、焼夷弾により火災を起こして廃墟に帰した。また、軍は新校舎、郷土館奉安室を破壊し用材を運び去っている。

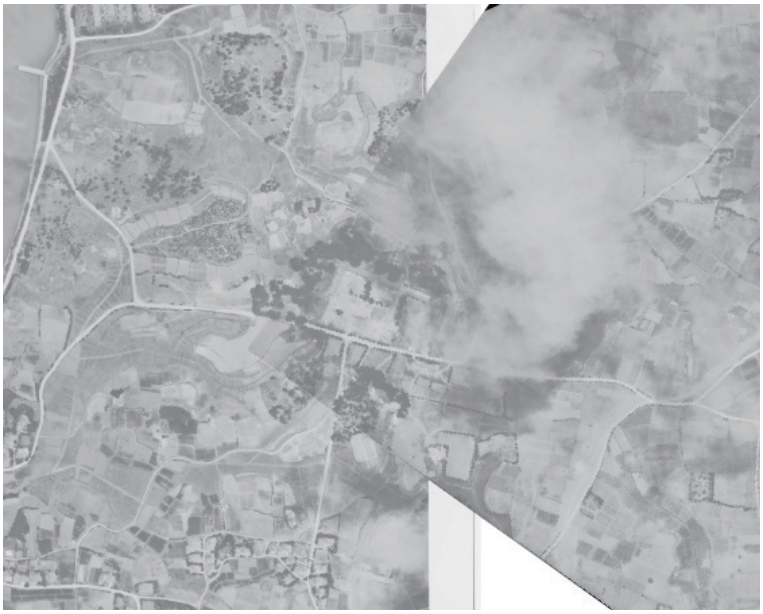


写真 66.　下地国民学校（米軍撮影 1945 年５月１日　沖縄県公文書館収蔵を２枚合成）

②下地小前の住民避難壕跡

現在の下地小学校正門前にある駐車場付近は、当時は深い低地で田圃が広がっていた。その斜面に子供たちが避難する防空壕が掘られていたが、雨が降ると壕口から中に水が入るため、入りたくないと泣く子供もいた（昭和 11 年生）。

③壕跡

聞き取りによると、現在の下地中学校は国民学校の学校農地で、グランド付近は松林があった。松林の先は土地の低い田圃が広がっており、その境目の崖面に壕があった（昭和 11 年生）。

④兵舎跡

聞き取りによると、現在のツヌジ公園は、上野村を分村する頃まで下地村の運動場であった。その場所に兵隊は兵舎を建てていた（昭和５年生）。

写真 67.　ツヌジ御嶽と下地村運動場の兵舎（米軍撮影 1945 年５月１日　２枚合成　沖縄県公文書館収蔵）

【ツヌジ御嶽とツヌジ公園】

画像のほぼ中央にある黒い五角形の森が、ツヌジ御嶽（中央に社殿らしきものも見えている）。

その西隣が旧下地村の運動場（現在のツヌジ公園）であった場所で、画像では長方形の兵舎が４棟、確認することができる。

また、ツヌジ御嶽の東側に白く広がっているのが、陸軍西飛行場と、その誘導路である。画像の左下にへも誘導路が伸び、その先につながる、菱型をした掩体も確認することが出来る。

⑤ツヌジ御嶽の忠魂碑

鈴木壮六陸軍大将による揮毫で、1932 年３月建立された。鈴木は時の帝国在郷軍人会長であった。建碑の序幕式には、下地国民学校の児童らも列席している（下地小学校沿革誌)。

現在、石碑は無残に途中から折られ、打ち捨てられている。

⑥オホナ住民自給自足の借地

聞き取りによると、字上地で飛行場用地として畑を接収された住民の一部は、このオホナの土地を借りて農作物を植え、自給自足の生活をした（昭和５年生)。

⑦イシカワ駐屯地跡

聞き取りによると、このあたりには、兵隊がたくさんいた（昭和６年生)。

米軍の撮影した空中写真でも、イシカワの外れに兵舎と思しき大小５棟ほどの建物を確認できる。現在は圃場整備されており、痕跡は確認できない。

写真 68. イシカワ駐屯地（米軍撮影 1945 年）

⑧避難した岩影（棚根）

聞き取りによると、字洲鎌 971-3 番地の家の前に、大きな岩があり、空襲の時にその影に避難した（昭和 16 年生)。

⑨皆愛集落の移住地跡（ハイタナ子）

聞き取りによると、陸軍西飛行場に用地を接収された、字与那覇皆愛の住民が、棚根集落の西側あたりに移住してきた（昭和３年生)。

⑩ハイタナ子の住民避難壕跡

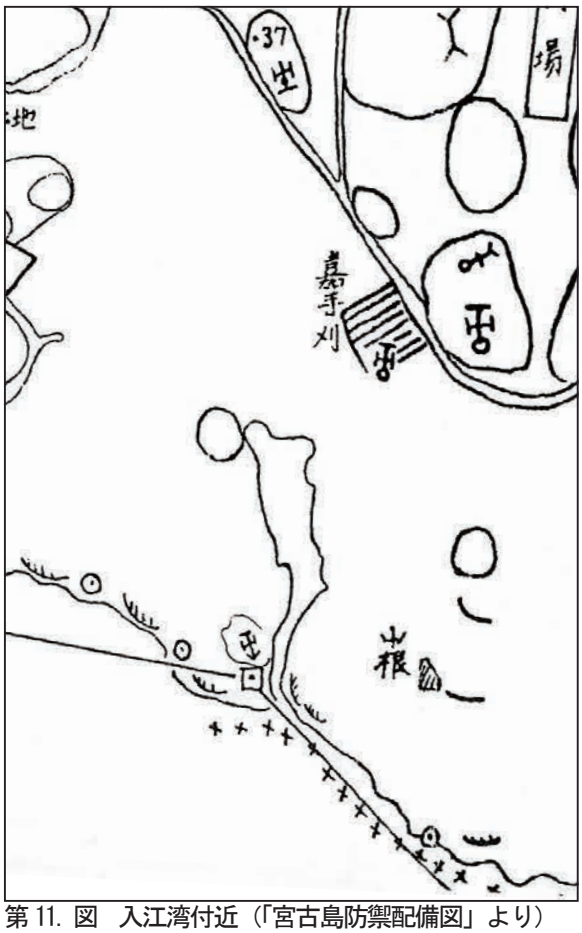
聞き取りによると、字洲鎌 920 番地の前に避難壕があった（昭和 26 年生)。

⑪入江砲台跡（ハイタナ子）

聞き取りによると、ムスルン浜の隣あたり、外崎御嶽側には砲台が２基設置されていた（昭和９年生)。

「宮古島防禦配備図」によると、入江湾口には、砲台が１基と速射砲陣地が１基。また、海岸沿いに敵の上陸を妨害する、水際障害物と水際陣地（図内には５基）と、海軍機関銃陣地壕（図内には３基）が置かれている。

今回の調査で、砲台並びに速射砲陣地と見られる痕跡は見つかっていない。



第 11. 図　入江湾付近（「宮古島防禦配備図」より）

⑫外崎御嶽の壕

外崎御獄の北方、およそ 70 メートルの道路脇に露頭した岩盤にある壕で、自然の岩陰を拡張して構築されたとみられる。

⑬棚根の壕群

今回の調査で、入江湾の洲鎌側の湾口に、銃眼が構築された壕が複数確認できた。

写真 69. ①下地小学校

写真 70. ②下地小前の住民避難壕跡

写真 71. ③壕跡

写真 72. ④兵舎跡

写真 73. ⑤ツヌジ御嶽

写真 74. ⑤ツヌジ御嶽の忠魂碑

写真 75. ⑥オホナ住民自給自足の借地

写真 76. ⑦イシカワ駐屯地跡

写真 77.　⑧避難した岩影（棚根）

写真 78.　⑨皆愛集落の移住地跡（ハイタナ子）

写真 79.　⑩ハイタナ子の住民避難壕跡

写真 80.　⑩ハイタナ子の住民避難壕跡

写真 81.　⑪入江砲台跡（遠景）

写真 82.　⑫外崎御嶽の壕

写真 83.　⑬棚根の壕群　壕１壕口２内部

写真 84.　⑬棚根の壕群　壕１壕口２外観

4. 洲鎌の戦争遺跡

（1）ツヌジ御嶽の忠魂碑（つぬじうたきのちゅうこんひ）

①所在地

宮古島市下地字洲鎌マエバル

②立地・現況

洲鎌集落の南方にあり、鳥居や社殿など神社風の作りで「下地神社」とも呼ばれている御嶽である。伝承によると、与那覇東原にある赤崎御嶽を遥拝した場所とされる。

③歴史状況

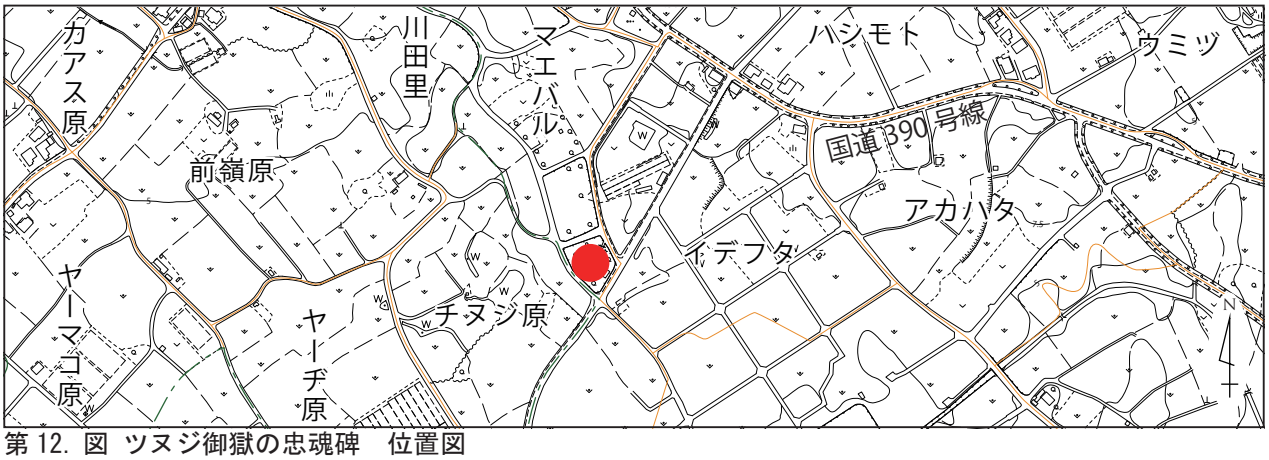
1932（昭和７）年３月に建立された忠魂碑は、当時の帝国在郷軍人会会長であった鈴木壮六（予備役）陸軍大将による揮毫。下地小学校沿革誌によると、建碑の序幕式には、下地国民学校の児童らも列席している。現在、石碑は無残に途中から折られ、打ち捨てられてたまま放置されている。

尚、この碑とは別に 1935（昭和 10）年３月 10 日に境内に合同慰霊碑なる石碑が建立されたが、1961（昭和 36）年７月 13 日に下地町役場（現・下地保健福祉センター）の敷地へ移設。さらに 2005（平成 17）年に現在の慰霊碑へと改装改築されている。

写真 85. ツヌジ御嶽（下地神社） 拝殿

写真 86. ツヌジ御嶽の忠魂碑（全景）

写真 87. ツヌジ御嶽の忠魂碑（折れた碑）



第 12. 図 ツヌジ御嶽の忠魂碑 位置図

（２）棚根の壕群（たなねのごうぐん）

①所在地

宮古島市下地字洲鎌ハイタナ子・ニシタナ子

②立地・現況

洲鎌の南端、棚根地域にあり、入江湾の湾口西岸の岩場に構築されている。陣地壕は切り立った岩場にあり、水際近くまで茂ったアダン林で壕口が覆われた状況にある。一方、銃眼は荒天時には波を被るほど波打ち際に近い位置に構築されている。

③歴史状況

洲鎌の棚根地域には歩兵第３聯隊第１大隊第２中隊（中隊長：森幸作大尉）が配備され、各中隊に第３機関銃中隊（中隊長：本田清太郎大尉）が分散してそれぞれ配属されている。

南地区の部隊展開図によれば入江湾付近は、敵の上陸予想地点のひとつと想定されており、湾口部に偽陣地を構築している。入江湾西岸の棚根集落には、歩兵を１個小隊、東岸の上野字宮国山根の集落にも、歩兵を１個小隊と機関銃中隊の一部、及び歩兵砲中隊を、それぞれ配備している。

④遺構の特徴

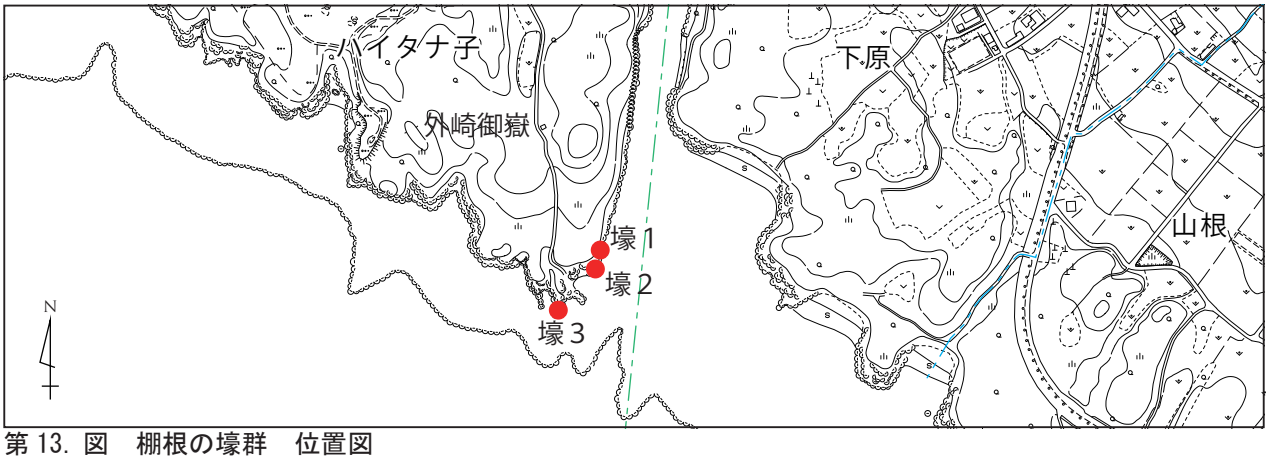
本遺構は入江湾口、外崎に面した海岸に開口した、１基の壕と、２基の銃眼を供えた小型の壕が確認されている。

壕１

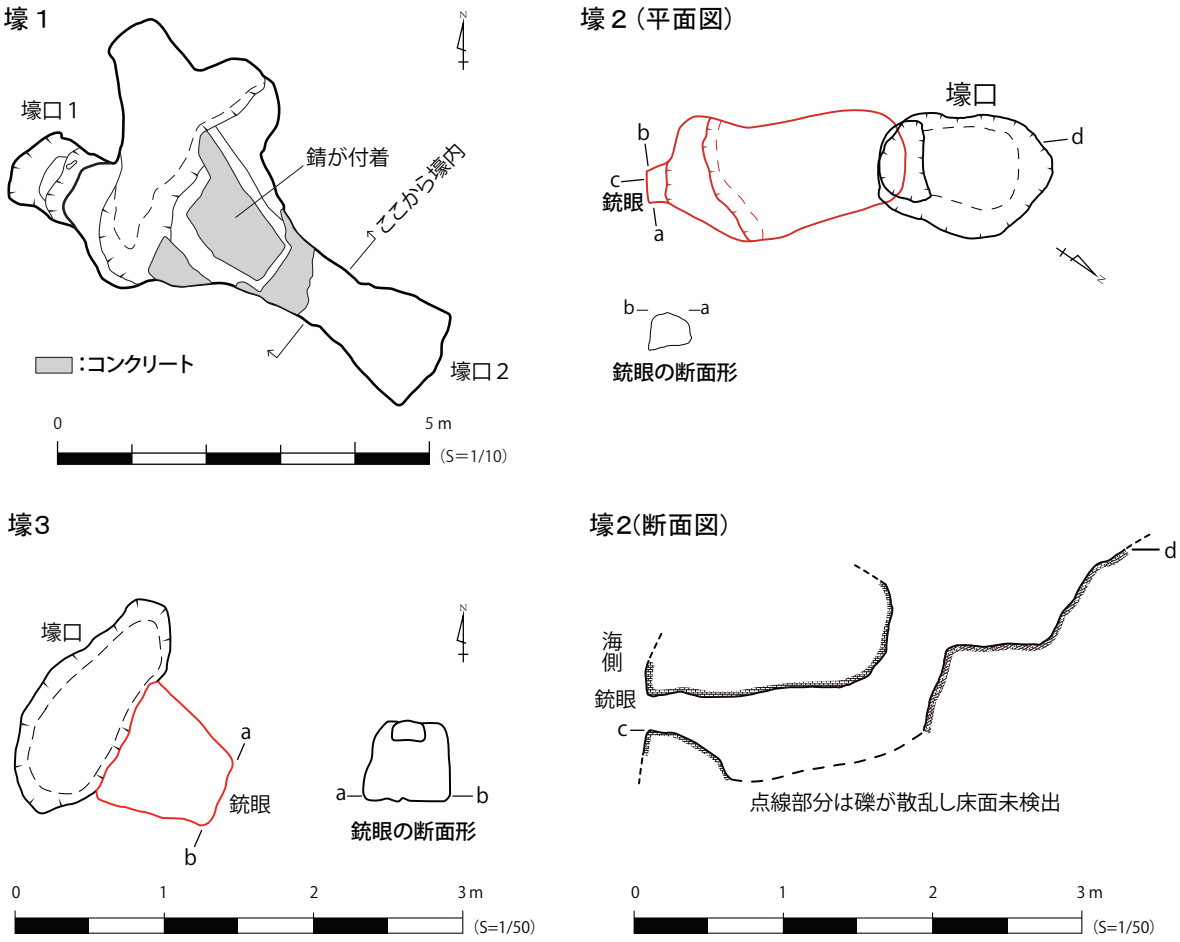
入江湾口の対岸となる字嘉手苅下原側のビーチから、海岸沿いの岩場に壕口が開口しているのがはっきりと視認できたことから、今回の調査で新たに確認された壕となった。

入江湾口の西岸に連なる石灰岩の岩崖に壕１は位置しており、岩崖上面のアダンの林の中に、入壕する竪穴の壕口１がある。竪穴の大きさは１メートルほどの円形で、穴の途中には足をかけるステップが構築されており、２メートルほど下の壕内まで容易に降りることが可能である。

壕内は高さが約 1.6 メートル、東西の最大幅が約５メートル、南北の最大幅が約３メートルの不定形な部屋状に構築されている。南東側の海を向いて、高さ約 0.5 メートル、幅約 0.9 メートルの壕口２が開口している。壕口２の先は崖が落ち込む海に向かって、綺麗に滑めされたテラス状になっている。壕口２の壕内側はコンクリートの加工が施されており、床面から少し高くなった台座が構築され、台形状に溝が刻まれている。コンクリート部分を中心に、鉄のサビが付着してオレンジ色に染まっており、このことから銃器が設置されていた可能性が高いと考えられる。



第 13. 図　棚根の壕群　位置図



第 14. 図　棚根の壕群　平面図・断面図

部屋は壕口間を軸に考えると、壕内は北側に膨らんだ作りになっており、部分的に棚状の加工が施されている箇所もある。また、北側の岩盤は薄いようで、外界と通じた用途不明の小さな穴が開いている。この穴が当時に開けられたものであるか、後年に劣化から開いたものかは定かではない。

尚、岩崖の上部に開いている壕口１の脇に、方形に切り込まれた待機場所のような小さな竪穴状の構築物も確認できた。

壕２

壕１からさほど離れていない海際の岩場に掘り込まれている。岩場の上面に広く開いた自然の窪みを利用した竪穴から壕へ入壕する。0.4 × 0.6 メートルほどの楕円形状の竪穴の壕口を、1 メートル弱下ると、海に向かって南東方向に 1.5 メートルほど、横方向に掘り込まれている。

壕内は土砂が流入しているため、現状、高さはあまりないが、壕幅は平均で 0.8 メートルほどある。海側の壕端は床部分が台座状に高くなっており、0.3 × 0.25 メートルほどの銃眼が開口している。

壕３

外崎の先端に近い岩場に位置しており、長さ 1.5 メートル、幅 0.6 メートル、深さ 1 メートルほどの溝状に掘り込まれた竪穴から、海に面した南東側へ 1 メートルほど掘り込まれ、人がひとり隠れることが出来る空間が構築されている。壕の奥に 0.2 × 0.3 メートルほどの銃眼が開口している。

尚、この外崎の周辺には、聞き取りから砲台があったとの情報が得られており、「宮古島防禦配備図」にも、砲台１基と速射砲陣地１基が配備されていることが確認できたが、現在までに痕跡などの発見には至っていない。また、海岸沿いには敵の上陸を妨害する、水際障害物や水際陣地、海軍機関銃陣地壕などが複数設置されており、本壕群はこうした陣地のひとつをなすものと考えられる。

写真 88.　棚根の壕群　壕１壕口１（外観）

写真 89.　棚根の壕群　壕１壕口１（内部）

写真 90.　棚根の壕群　壕１壕口２（内部）

写真 91.　棚根の壕群　壕１壕口２（外観）

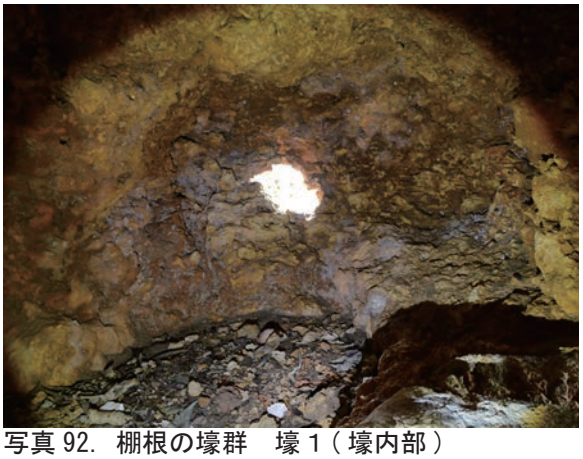


写真 92.　棚根の壕群　壕１（壕内部）

写真 93.　棚根の壕群　壕口脇の加工痕

写真 94.　棚根の壕群　壕２壕口１（外観）

写真 95.　棚根の壕群　壕２壕口１（内部）

写真 96.　棚根の壕群　壕２銃眼１

写真 97.　棚根の壕群　壕３溝状の竪穴

写真 98.　棚根の壕群　壕３　遮蔽部と銃眼

写真 99.　棚根の壕群　壕３　銃眼（外観）

写真 100.　棚根の壕群　遠景（嘉手苅下原より）

写真 101.　棚根の壕群　入江湾棚根港水路

（３）外崎（フカザキ）御嶽の壕（ふかざきうたきのごう）

①所在地

宮古島市下地字洲鎌ハイタナ子

②立地・現況

洲鎌の南、棚根の小集落から外崎御嶽へ向かう道路沿いに構築された壕である。壕は御嶽の北側に位置する低い丘に構築されており、壕口は道路に面しているものの、草木が繁茂している状況にある。

③歴史状況

洲鎌の棚根地域には歩兵第３聯隊第１大隊第２中隊(中隊長：森幸作大尉)が配備され、各中隊に第３機関銃中隊(中隊長：本田清太郎大尉)が分散してそれぞれ配属されている。

南地区の部隊展開によれば、入江湾西岸附近は歩兵を１小隊、東岸の上野字宮国山根集落にも歩兵を１個小隊と機関銃中隊の一部、および歩兵砲中隊をそれぞれ配備している。外崎御嶽の周辺および海岸線は、これらの部隊が防衛していたものと考える。

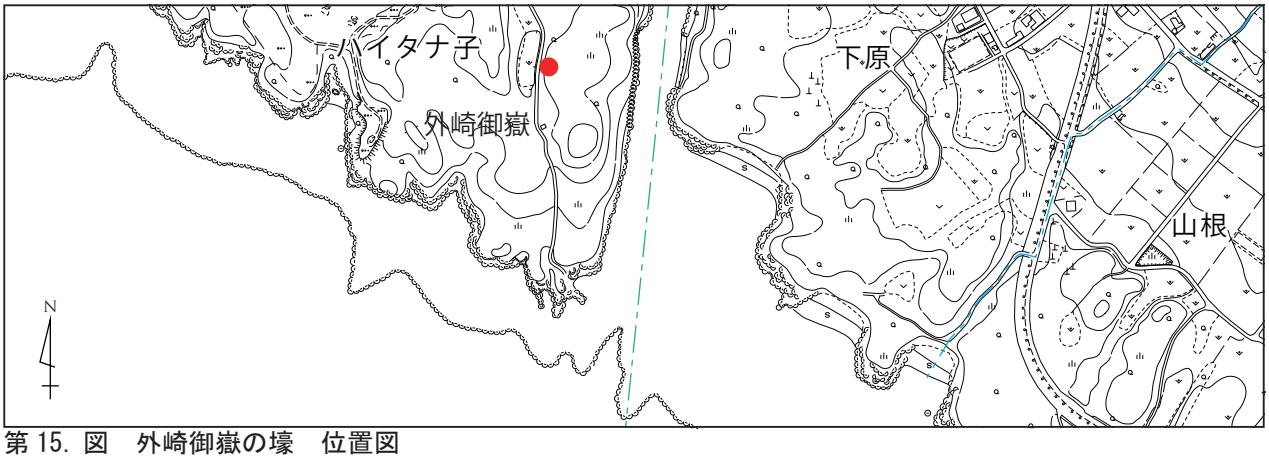
④遺構の特徴

壕は琉球石灰岩を掘り込んで構成されている。壕口部分は自然の状態を残している面も多いことから、岩陰を拡張して壕を掘り込んだものと考えられる。

壕口は西に向かって開口し、壕口の幅は 2.8 メートルである。壕内には多量の土砂が流れ込んでおり、現況では壕の奥へ向かって緩やかに傾斜しているようにみえるが、土砂の堆積に伴うものと考えられ、現在の壕口部分の高さは、約 1.0 メートルである。壕口から 1.7 メートル東進すると、壕の幅が 1.3 メートルに狭くなり、この部分から人為的に壕を掘り込んでいるとみられる。壕の幅が狭くなった部分から約 2.0 メートル東進して行き止まりとなり、壕の平面形態は直線的である。

写真 102.　外崎御嶽の壕　遠景

写真 103.　外崎御嶽の壕　壕内



第 15. 図　外崎御嶽の壕　位置図

第5節　嘉手苅

１．嘉手苅の地理的環境

嘉手苅は下地地区の東方に位置し、戦後、1948（昭和 23）年に上野村の分村に伴って、字域の東部（テガイ、フクミネ、ソバンミなど）が分離し、新しく字上野が設置された。この分離した地域についての概況は、上野地区の字上野の項を参照されたい。

字域の北部は国道 390 号が東西に通り、イリノソコの嶺（ウエノミネ）を背後地とした嘉手苅の集落があり、入江湾に向かって平地が広がっている。字域の西部は入江湾に面し、東部は前述した旧上野村域と接している。字域の南部にある入江地域（スガ子、一地、クバカなど。便宜上、この地域を入江集落と呼称）は、県道 197 号嘉手苅屋原線と県道 235 号保良上地線が接し、交通要所となっている。また、入江集落は隣接する字上野ガーラバル、字宮国山根とも関係が深い。尚、字域の南端はわずかではあるが、東シナ海に面し、洲鎌とともに入江湾の湾口を形成してる。

２．嘉手苅の沖縄戦時の概況

各資料から見た嘉手苅の軍の配備状況としては、南地区に分類され歩兵第３聯隊第１大隊を中心に展開されている。

歩兵第３聯隊第１大隊は４つの中隊と機関銃中隊から構成され、下記のように配備されていた。

第一大隊…嘉手苅・ガーラバル地区

第１中隊（中隊長：杉崎栄吉大尉）…嘉手苅・入江

第２中隊（中隊長：森幸作大尉）…上野字宮国山根地区

第３中隊（中隊長：相馬信一中尉）…ヤーバル森林地区

第４中隊（中隊長：北山悟大尉）…皆愛正面地区

第１機関銃中隊（中隊長：仮屋隆二大尉）…嘉手苅地区（各中隊に分散して配属）

※霧生藤吉郎（元通信隊員）の資料より抜粋。

その他の南地区防衛区分

山砲兵第 28 聯隊第６中隊…南地区隊に配属（昭和 20 年２月以降）

独立速射砲 26 中隊（豊 14799　中隊長：櫻田源吾大尉）…嘉手苅（145 名）

※歩兵第３聯隊に配属、指揮下に入る。

戦車第 27 聯隊第三中隊（球 12102）中隊長：渡辺晃米大尉（124 名）

主力は字下里添のウズラ嶺の集積所。一部は城辺の福里待機位置近傍に集積。射撃位置は主として「嘉手苅―下地正面」に配備。

独立機関銃第 18 大隊（球 5248）は、歩兵第３聯隊の指揮下に入り、独立機関銃第 18 大隊の本部は、字川満マクソコの集落に置かれ、第２中隊（中隊長：高橋良孝大尉）は大隊本部付きの中隊として、字川満マクソコに配備された。さらに、その第２中隊の中の酒井小隊は、歩兵第３聯隊第１中隊に配属され嘉手苅入江に配置されている。（山内洋一手記より…村民の戦時・戦後体験記録　2003 年　上野村教育委員会）

※独立機関銃第 18 大隊の第１中隊と第３中隊は、駒部隊に配属され、城辺に展開している。

山砲兵第 28 聯隊

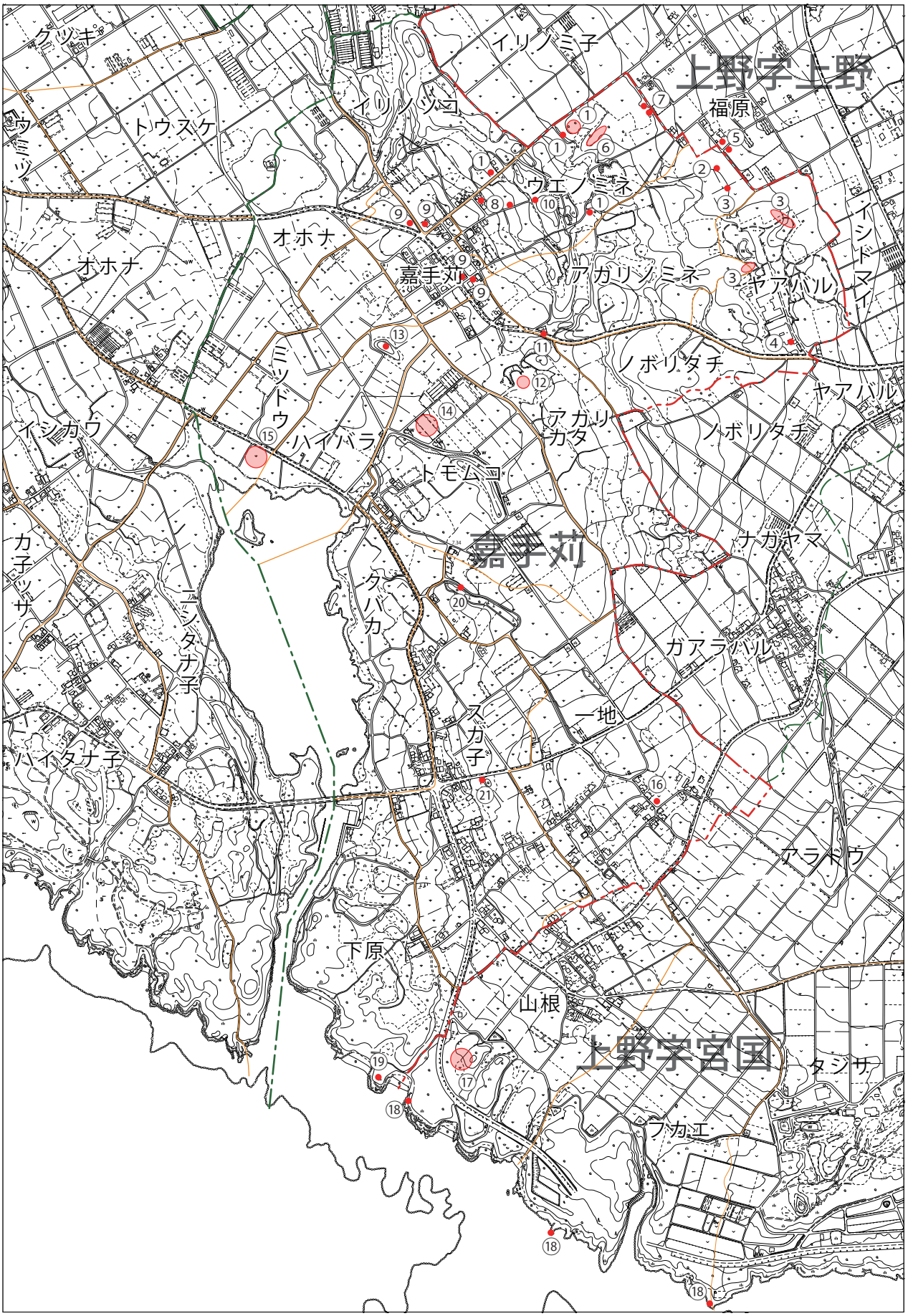
戦史資料（ref.C11110237900）によると、山砲を嘉手苅・26 高地南側に４門、嘉手苅南側４門。迫

撃砲を嘉手苅 26 高地東側 12 門、設置している。

※嘉手苅南側の山砲 4 門については地図上にマーキングなし（ref.C11110237900）。

上野地区の側嶺（ソバンミ）と、嘉手苅のイリノソコ、イリノミネあたりには、26 高地と呼称される小丘陵があり、陸軍中飛行場を防衛するために配置されていた。また、イリノソコにある複数の古墓の墓庭からは、多量の銃弾や銃器類に関連した部品等が磁気探査で発見されている。このことから古墓群が軍に二次使用された可能性を示唆している。

図版 4.　嘉手苅集落南部空中写真（米軍撮影 1945 年　沖縄県公文書館所蔵）を加工。※丸番号は成果一覧の付番



第 16. 図 嘉手苅の成果図

３．嘉手苅の調査成果一覧

①イリノソコ陣地壕群跡（壕Ⅰ・壕Ⅱ）

この一帯では平成26年の圃場整備に伴い、4基の壕と1基の銃眼が発見された。圃場整備の完成に伴い、現在、壕群は消失している。

②高射砲設置跡（イリノソコ陣地壕群跡　壕Ⅲ）

聞き取りによると、畑のそばに自然の洞窟があり、そこには高射砲が設置されていた。また、その洞窟には住民も避難した（昭和９年生）。平成 26 年の圃場整備で、壕１基が確認されたが、現在は壕群は消失している。

③掩体

聞き取りによると、この周辺には松林が広がっていて、戦闘機を格納する掩体があった（昭和９年生）。

※ａ：１機収納、ｂ：２機収納、ｃ：３機収納の掩体がそれぞれ１か所づつあった。

④戦車格納場所

聞き取りによると、このあたりに戦車を格納する壕が１基あった（昭和９年生）。また、砲台があったと聞いたとの聞き取りもある。

⑤本部と病院跡（上野福原）

聞き取りによると、この場所には部隊名不明の本部があり、その隣には病院として使用していた民家があった（昭和９年生）。

※「宮古島市戦争遺跡分布調査報告書（１）」（2018）の上野地区字上野にて報告済。

⑥古墓群跡（イリノソコ陣地壕群跡　壕Ⅱ）

聞き取りによると、このあたりの古墓にも避難した（昭和９年生）。

⑦炊事場跡

聞き取りによると、字上野側嶺（ソバンミ）には東支部の井戸があり、そのあたりには軍の炊事場があった（昭和９年生）。

※ａ：炊事場　ｂ：井戸

⑧軍隊駐屯地

聞き取りによると、字嘉手苅 906-3 番地の東南側あたりに、大きな幕舎を張って兵隊が 20 ～ 30 人ほど泊まっていた。軍に呼ばれて方言を指導に行ったが、兵隊は短期間でどこかへ移動してしまった（昭和２年生）。

⑨爆弾落下地点

聞き取りによると、十・十空襲の時に、国道沿いの集落北西部（a）、その道向かい集落外れ（b）、東側の修理工場裏手（c）、嘉手苅公民館の軒下（d）の４か所に爆弾が落ちた（昭和２年生）

また、空襲前には、小さな部隊が公民館（d）にいたとの聞き取りもある。

※下地町誌にも「昭和 19 年 10 月 10 日、字嘉手苅　平良義雄宅全焼す」の記述あり。

⑩ウイヌンミ御嶽の壕

聞き取りによると、御嶽の中にいくつも竪穴があり、竪穴は底部で横穴によって繋がっていた（昭和２年生）。

⑪アガリノミネの地下壕跡

聞き取りによると、この付近には壕があり、アガリノミネとアガリカタ付近を結ぶ国道の地下を通るトンネルのような地下壕があった（大正 12 年生）。

また、詳細は未明だが国道の道路拡幅工事の際、トンネルではないが、墓もしくは避難壕の痕跡のよう

なものが出たという証言もあった。

⑫アガリカタの住民避難壕跡

聞き取りによると、この場所には嘉手苅の住民が避難壕として使用した壕があった（昭和 16 年生）。

近年まで鉱山として岩盤を削って石粉が取られたため、残土置き場となった現在では、地形が大きく変化してしまったが、隣接した圃場整備区画の集水池の脇に残った残地に、壕のように掘り込まれた痕跡が３か所ほど確認できた。また、旧鉱山の敷地内に残された岩盤にも、掘り込まれたような痕跡が１か所確認できたが、いずれも 2019 年９月に圃場整備の完成により完全に消失した。

⑬嘉手苅ウプ御嶽壕群

聞き取りによると、集落の南方にある小山状のウプ御嶽の敷地には、兵隊の掘った壕が複数ある（昭和 13 年生）。

現地調査によると、待機壕のような小型の壕が南側に７基（埋没を含む）、北側に３基（ひとつは戦後、墓に二次利用されている）確認できた。また、山頂部にも崩れた円形状の監視壕のような部分も確認できた。尚、御嶽には井戸がある。

⑭遺体を火葬した場所（トモムコ）

聞き取りによると、集落の南方にある松木林の木を伐採して、この附近で遺体を火葬していた（昭和 13 年生）。

⑮敵機墜落場所

聞き取りによると、現在県道 197 号嘉手苅屋原線沿いのミツドウかハイバラ付近に敵の飛行機が墜落した（昭和 13 年生）。

⑯将校寄宿地跡（一地）

聞き取りによると、嘉手苅 462 番地の南側の家（嘉手苅 459 番地付近）は、瓦葺きの大きな家で、将校が使用していた。どこかへ出かける時は、騎乗していた。将校の名前はサカイ少佐（昭和 12 年生）。

※サカイ少佐…歩兵第３聯隊第１大隊の大隊長、酒井一郎少佐に比定できるか？。
あるいは独立機関銃第 18 大隊第２中隊の酒井小隊の小隊長か？。
※独立機関銃第 18 大隊第２中隊の酒井小隊は、歩３第１中隊（長杉栄吉大尉）に配属され、嘉手苅の入江の東側に配置されていた。

⑰山根山の住民避難壕跡（上野字宮国山根）

聞き取りによると、入江集落と字宮国山根との間にある、山根山（ヤマニーヤマ）と呼ばれるところには、地下へ降りていく洞穴があり、中には水も湧き、何十人と入れる空間があった。戦争中は入江集落や、宮国山根の住民らが避難した（昭和 14 年生）。

⑱山根海岸の壕群（上野字宮国山根）

スガ子の南方、嘉手苅下原から宮国山根（上野）の海岸線に配備された、水際戦闘部隊の銃眼群と見られる。

⑲下原の電信施設跡

聞き取りによると、入江の海岸沿いの古墓の近隣には、デンポー屋といわれた施設があった。（昭和 14 年生）

歩３通信隊の戦史資料（ref.C11110010900）では、タナニーには監視哨の記述があり、震動式電話機のマークもある。また、1945 年に米軍が作成した地図にも、石垣島へ続く海底ケーブルが表記されている（現在も NTT の海底ケーブル施設が存在している）。

⑳嘉手苅一地の壕

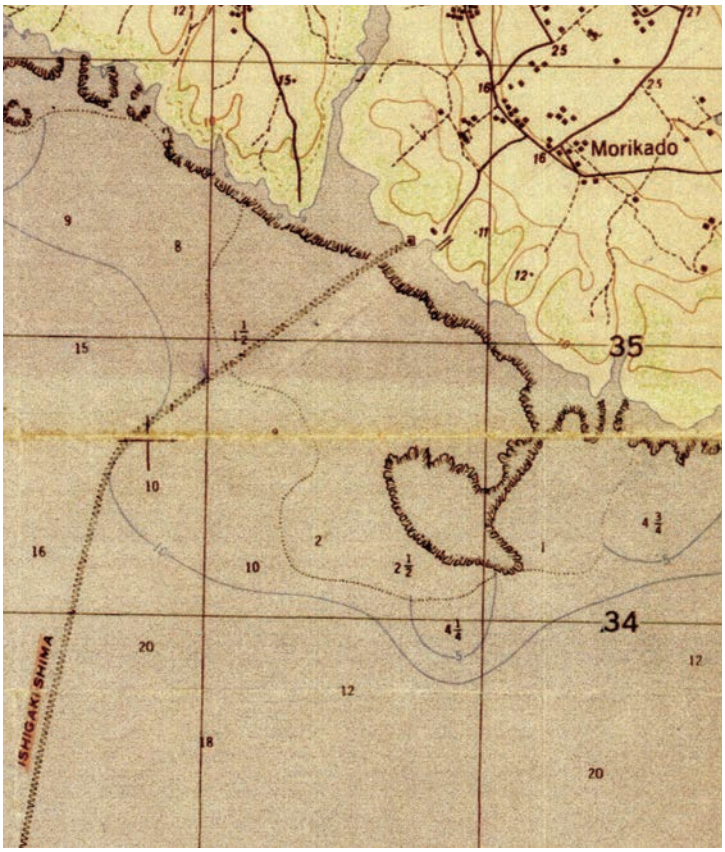
現地調査において今回発見した壕である。２つの壕が連結するように構築されており、壕内にはカマド

の遺構も確認された。

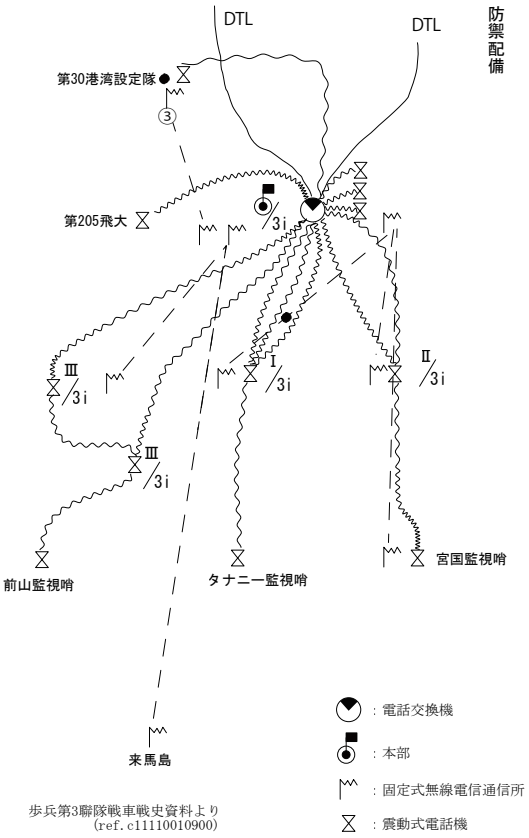
㉑嘉手苅スガ子の壕

現地調査において今回発見した壕である。スガーニ御嶽の入口に位置している。地表部の竪穴から地下へ下るように空間が広がる。

※成果一覧の①～⑧は、平成 26 年度の圃場整備に伴い発見された、イリノソコ陣地壕群跡に関連する聞き取り調査で得られた成果である。
※⑰山根山の住民避難壕跡、⑱山根海岸の壕群はいずれも、上野字宮国の小字、山根・フカエに所在していますが、いずれも嘉手苅の入江地域との境界に近く、地域的にもつながりが強いことから、便宜上より関係性の深い下地の嘉手苅地区へ分類しています。



第 17. 図 下原・山根付近の海岸線（米軍作製地図 1945 年）



図版 5.　歩兵第３聯隊戦史資料より

写真 104. ①イリノソコ陣地壕群跡

写真 105. ②高射砲設置跡（イリノソコ）

写真 106. ③掩体（a）

写真 107. ③掩体（b）

写真 108. ③掩体（c）

写真 109. ④戦車格納場所

写真 110. ⑤本部跡

写真 111. ⑤病院跡

写真 112. ⑥古墓群跡

写真 113. ⑦炊事場跡

写真 114. ⑦側嶺東支所の井戸

写真 115. ⑧軍隊駐屯地

写真 116. ⑨爆弾落下地点（a）

写真 117. ⑨爆弾落下地点　(b)

写真 118. ⑨爆弾落下地点　(c)

写真 119. ⑨爆弾落下地点　(d)

写真 120. ⑩ウイヌンミ御嶽の壕　御嶽全景

写真 121. ⑩ウイヌンミ御嶽の壕　竪穴

写真 122. ⑪アガリノミネの地下壕跡

写真 123. ⑫アガリカタの住民避難壕跡

写真 124. ⑫アガリカタの住民避難壕跡

写真 125. ⑫アガリカタの住民避難壕跡

写真 126. ⑬嘉手苅ウプ御獄の壕　全景

写真 127. ⑬嘉手苅ウプ御獄の壕　壕口１

写真 128. ⑭遺体を火葬した場所

写真 129. ⑭嘉手苅スガ子の壕

写真 130. ⑮敵機墜落場所

写真 131. ⑯将校寄宿地跡（一地）

写真 132. ⑰山根山の住民避難壕跡

写真 133. ⑱山根海岸の壕群（銃眼１　壕口）

写真 134. ⑱山根海岸の壕群（銃眼１　壕内）

写真 135. ⑲下原の電信施設跡

4. 嘉手苅の戦争遺跡

（1）イリノソコの陣地壕群跡（いりのそこのじんちごうぐんあと）

①所在地

宮古島市下地字嘉手苅エウノミネ・イリノソコ

②立地・現況

イリノソコ陣地壕群跡は、嘉手苅集落の東方に位置する小字ウエノミネ、イリノソコで確認された壕群を総称する。壕群の位置する一帯は、とりたて標高の高い丘陵がみられるわけではないが、地形の起伏を利用して、その斜面地に壕を構築している。

これらの壕は、沖縄県宮古農林水産振興センターの実施するイリノソコ地区でのほ場整備工事に伴い2014（平成26）年から2016（平成28）年にかけて発見されたものである。そのため、調査年も複数年度にわたり、壕の位置も点在している状況にある。そこで、イリノソコ陣地壕群については、調査を行った時期や地点に基づき、以下のⅠ～Ⅲ地区に分けて報告を行う。

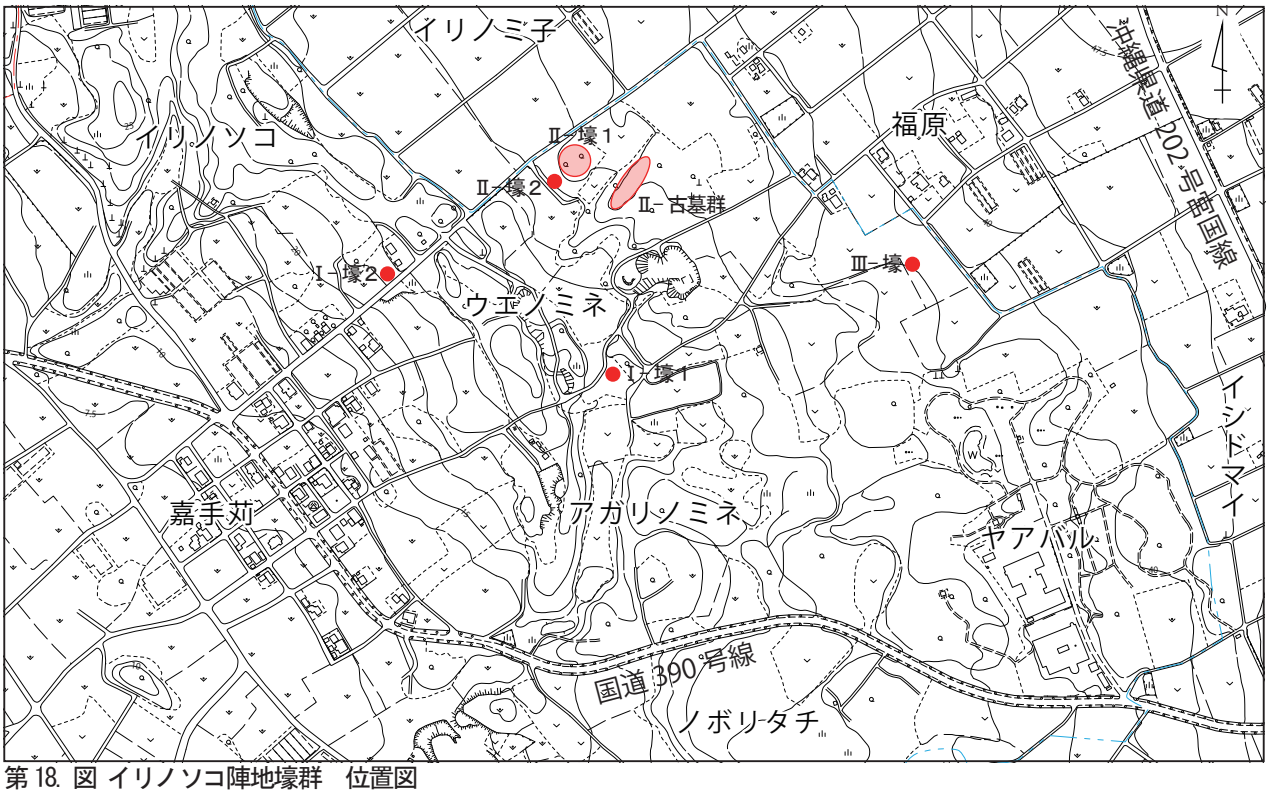
イリノソコ陣地壕群跡Ⅰ：2014（平成26）年度の9月に調査し、2つの壕で構成される。

イリノソコ陣地壕群跡Ⅱ：2014（平成26）年度の2015年2～3月に調査し、古墓を利用した壕群と、山砲に関連すると思われる壕で構成される。

イリノソコ陣地壕群跡Ⅲ：2016（平成28）年度に調査した壕で1基のみ。

③歴史状況

イリノソコ、ウエノミネあたりは嘉手苅26高地と呼ばれ、歩兵第3聯隊第1大隊、山砲兵第28聯隊第6中隊、独立速射砲第26中隊、独立機関銃第18大隊の1小隊などが配備されている。戦史資料（ref. C11110237900）によると、嘉手苅26高地南側に山砲4門、嘉手苅南側に山砲4門、嘉手苅26高地東側には迫撃砲12門が配備されている。また、歩兵第3聯隊歩兵砲大隊第1歩兵砲中隊の1小隊や第2歩



第18. 図 イリノソコ陣地壕群　位置図

兵砲中隊の１分隊も、歩兵第３聯隊第１大隊へ配属され、水際戦闘に参加し、その後主陣地戦闘に従事している。イリノソコ陣地壕群は山砲などの重火器が備えられていたことが壕の形態から推察されている。

聞き取りなどの調査から、嘉手苅26高地の東側には病院跡や、本部跡など施設跡を確認することができ、部隊が駐留していたことを見て取ることができる。また、イリノソコの西側の海岸地域には水際戦闘に関連した数多くの壕が確認され、この地域が陸軍中飛行場の防衛の重要地点であったことを窺い知ることができる。

④遺構の特徴

ｉ．イリノソコ陣地壕群跡Ⅰ

壕１

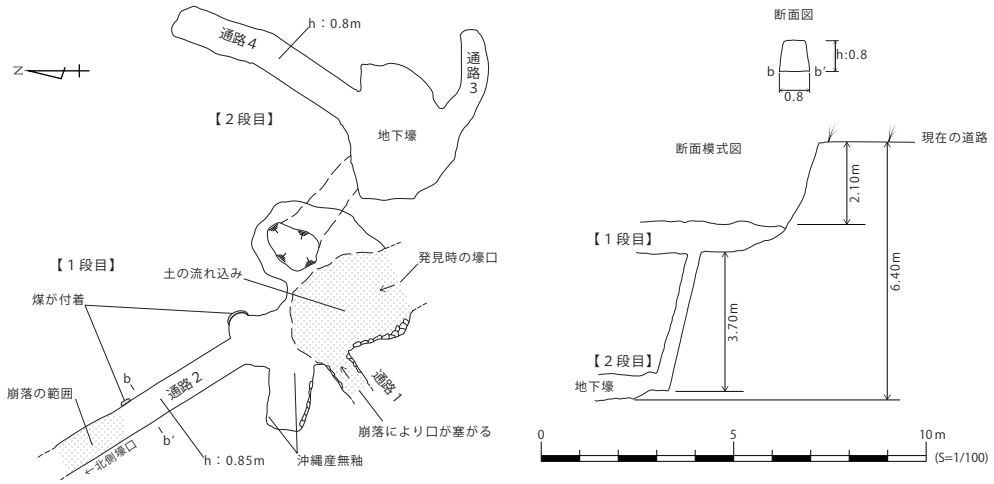
本壕は、圃場整備工事の岩盤掘削時に、壕口が発見されたものである。壕内の保存状態も良くなかったために、宮古農林水産振興センターと協議の上、緊急調査を行うこととなった。そのため、簡易な平面測量と写真撮影のみの記録保存となった。

壕内は、発見時の段階で、現在の道路面から約2.1メートル下に壕口が確認されていた。この壕口は発見時のものであり、本来の壕口は別であった可能性もある。壕内は、２段構造となっており、発見時の壕口から入った段階の空間を１段目とし、そこから地下へもう一段降りた空間を２段目とする。

発見時の壕口から内部に入ると、東側に地下へ潜るための下り口が設けられている。この下り口は、直径１メートルほどの略円形で、約3.7メートル地下へ下る。下る途中の斜面地には、非常に簡易であるが階段状のステップが４段設けられている。

２段目に降りると略方形形の空間が設けられ、その南側と北側に通路が掘られている。南側の通路３は、東側へ円を描くようにカーブし、行き止まりとなる。北側部分の通路４は、やや曲がるものの北北東へ5.3メートルほど直進し、行き止まりとなる。通路３、４ともに床面などは、ある程度整地されているが、側壁の仕上げは粗雑な感を受ける。この地下部分は、全体的に床から天井までの高さが約0.8メートルと低く、しゃがんだ状態での姿勢となる。

１段目の部分は、西側に２つの通路と１つの小部屋が設けられている。通路１は、崩落により入口部分がふさがっている。入口部分には、側面の崩落を防ぐ目的なのか、石積を設けている。本来の通路１はもう少し南西部に伸びる可能性はある。通路２は、高さが0.85メートルと低いものの、通路の断面形が台形状を呈し、比較的丁寧な作りとなっている。部分的に壁面の側面部が黒く変色しており、煤が付着したものであると考える。通路２も北西側の部分が崩落しているが、別途、（岩盤掘削の）反対側から壕口（北



図版6.　イリノソコ陣地壕群Ⅰ　壕１　平面図立面図

西側の壕口)が確認されているため、土砂の崩落は工事の岩盤掘削時によるものと想定され、本来の通路はさらに北西側に伸びていたことが判る。小部屋内は西側部分に約 1.2 メートルほど進んだ位置で止まっており、内部には沖縄産無釉陶器の破片が２点確認される。

１段目は崩落による土砂の流入が激しいものの、床面はフラットに整地されており、通路２は比較的丁寧に台形の断面形をなしていることから、壕の構築途中であった可能性も考えられる。

壕２

壕２も圃場整備工事の岩盤掘削工事時に、壕口が発見されたものである。壕内の保存状態も良くなかったために、宮古農林水産振興センターと協議の上、緊急調査を行うこととなった。そのため、簡易な平面測量と写真撮影のみの記録保存となった。

壕は琉球石灰岩を掘り込んで構築されている。内部には、骨や副葬品などはみられないが、その形態的な特徴から本来は、墓として利用していたことが推察される。墓として利用されていた掘り込み部分の東側を新たに掘り込むことで壕として二次利用している。

掘り込み部分の入口は、高さ、幅とも約 0.8 メートルほどと非常に狭い。また、内部の通路も高さが約 1.2～1.4 メートルでしゃがんでようやく歩ける程度のものである。掘り込み部分から約 1.4 メートルは東進し、北北東に進路を変えて約 3.8 メートル直進したのち、北側に進路を変えて約 2.7 メートル直進して行き止まりとなる。通路内には、１か所黒く壁が変色した部分がみられ、灯り取りの煤が付着したものと推察される。また、１点沖縄産施釉陶器の碗が通路内で確認された。

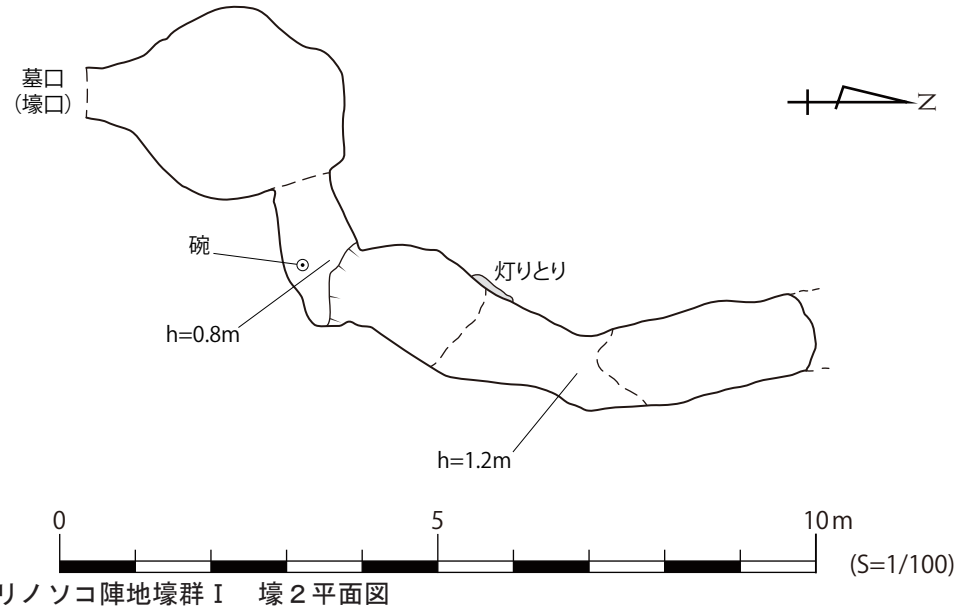
墓跡を二次利用する形態は、軍関与の壕跡でも見られるものである。しかしながら、本壕は、規模も小さく、粗い作りをなしている。周辺地域からは、日本軍に関連する壕跡も複数確認されているが、本壕については、日本軍が関与したものか、住民の避難壕であったのかの判別はつかない。

ii．イリノソコ陣地壕群跡Ⅱ

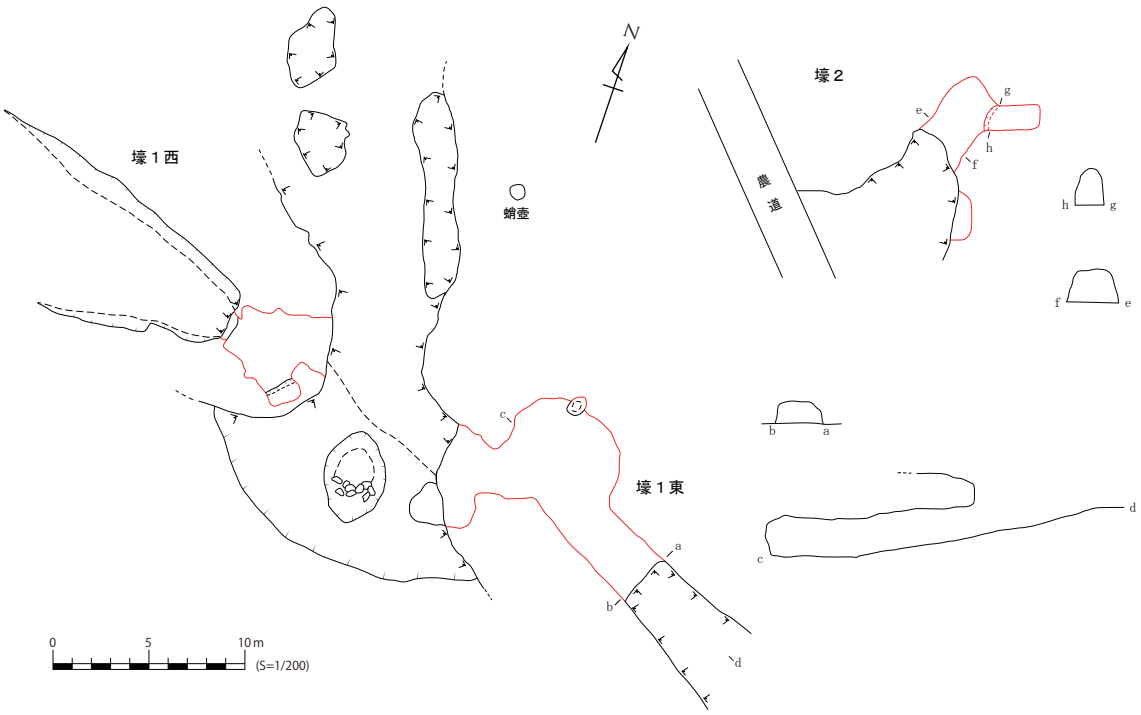
イリノソコ陣地壕群Ⅱは、大きく石灰岩を掘り込んで構築された２つの壕群と、古墓を二次利用した古墓部分に分かれる。

壕１

壕１は琉球石灰岩が露頭する小丘に構築された壕である。２つの近接する石灰岩の岩盤を掘り込んで壕



図版 7.　イリノソコ陣地壕群Ⅰ　壕２平面図



図版 8.　イリノソコ陣地壕群Ⅱ　壕１東・壕１西・壕２　平面図断面図

が構築されており、関連するひとつの壕として捉えられることから、壕 1 西と壕 1 東と称する。

壕 1 西は岩盤を楕円形状の断面形で掘り込んでおり、西側部分は、幅 3～8 メートル、高さ 2.5 メートル、長さ 13 メートルほどの通路が接続する。壕内には、南東方向へやや下るように掘り込まれた箇所もみられる。

この壕 1 西の東方約 13 メートルの位置に、別の岩盤を掘り込んで構築された壕 1 東が位置する。壕 1 東は、ほぼ南東方向に直線的に伸びる形態を呈するが、北側部分に半円状に広がった空間もみられる。壕内の床面は、コンクリートを使用して平坦に仕上げられている。また、銃器の一部と思われる鉄製品や、食料としての缶詰なども壕内から出土している。壕 1 東の東側部分は、壕 1 西と同様の形態を有するが、壕 1 西と異なり、石灰岩の岩盤をほぼ垂直に掘り込んでコの字型の断面形態に仕上げている。幅は約 4 メートル、高さ 2～3 メートル、長さ約 6 メートルである、床面も平坦に仕上げられていることから、何らかの重火器類を格納する目的があったものと考えられる。なお、壕 1 の北側には、人がひとり入れる大きさの蛸壺が 1 基確認されている。

壕 2

壕 2 は、壕 1 の南側に位置しており、琉球石灰岩を掘り込んで構築された壕である。しかし、その規模は比較的小さく、北側へむけて直進したのちに、北東方向へ折れ曲がった形態を呈している。

古墓群

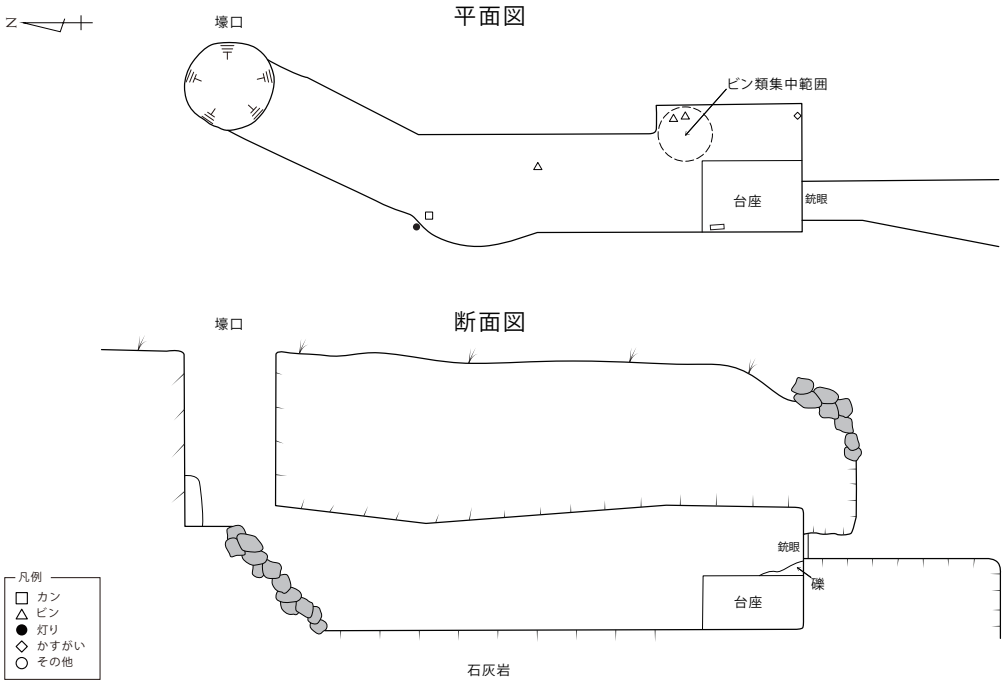
前述した壕群の南東側に古墓群が位置する。それぞれ古墓は、琉球石灰岩の露頭する斜面部を掘り込んで構築されており、総数 11 基の古墓の発掘調査を壕群とあわせて実施した。これらの古墓には、軍が 2 次的に加工を行い、壕として使用していたものが 3 基確認できる。

古墓 11 は、他の墓と同様に斜面下部につくられた掘り込み式の古墓であるが、その斜面地の上部には銃眼が設けられている。この銃眼へは、斜面地上部の地表面から竪穴式の壕口を設け、そこから銃眼の位置する南にむけて掘り込みを行っている。銃眼の手前部分には石灰岩の台座が設けられている。壕内からは、銃器の一部と思われる部品や、銃器の手入れを行うための油入れ、缶詰、プラスチック容器などが確

認された。銃器の一部と思われる遺物の形状は、直径約６センチの円形を呈し、その内部に十字の把手が付けられている（p73　図版 17）。

また、古墓５と古墓９においては、古墓の内部を二次的に掘り込んで壕を構築している。いずれも小規模な形態をしているが、緊急時の避難用として使用されていた可能性が考えられる。そのほか、軍との関連を示す遺物が、古墓内やその周辺部から確認されている。特に、古墓３～５の前面部の地中からは、未使用の多量の銃弾や、銃器類に関連する部品が磁気探査により発見されている。これらの銃弾を使用する銃器としては、九九式軽機関銃などが考えられる。

図版 14 図～ 18 図は、古墓４や古墓８から出土した戦時中のビール瓶や薬瓶などである。これらの古墓の二次利用や出土遺物などから、古墓一帯でも軍が活動していたことがうかがわれる。



図版 9.　イリノソコ陣地壕群跡Ⅱ　墓 11（銃眼）　平面図断面図

ⅲ．イリノソコ陣地壕群跡Ⅲ

壕口部分は、幅は約２メートルであるが、高さは、土砂の流入などもあり約 1.2 メートルほどである。壕口から南西方向に、下りながら約８メートル直進すると東西に脇部屋が掘り込まれている。壕の最奥部は、幅が約３メートルと壕口部分よりも広く、地表面からの高低差は約 3.8 メートルにも達する。この東側の脇部屋は幅が約１メートル、高さ 1.2 メートルほどで、こちらも下るようにして約３メートル東進する。西側の脇部屋は幅が 1.2 メートル、高さ 1.4 メートルほどで、南東方向に約 1.2 メートル直進する。

壕内には、柱の設置を目的としたと考えられる半円型の掘り込みが、東西の壁面にそれぞれ２か所確認できるが、作りが粗く実際に柱を設置したかは定かではない。また、壕内には土砂の流入が多くみられた。

＜参考文献＞

宮古島市教育委員会 2017（平成 29）年度 「長中岩陰墓 イリノソコ岩陰墓 イリノソコ陣地壕 村越岩陰墓－宮古島市内ほ場整備工事における発掘調査報告書－」 宮古島市文化財発掘調査報告書第 10 集

写真 136.　Ⅰ　壕１　発見時の壕口部分

写真 137.　Ⅰ　壕１　壕外から望む北側壕口

写真 138.　Ⅰ　壕１　通路１を北西側の壕口へ

写真 139.　Ⅰ　壕１　２段目への竪穴

写真 140.　Ⅰ　壕１小部屋に散乱する遺物

写真 141.　Ⅰ　壕２　墓口（壕口）

写真 142.　Ⅰ　壕２　墓内に掘られた通路口

写真 143.　Ⅰ　壕２　通路

写真 144.　Ⅱ　壕１西（左）と壕１東（右）

写真 145.　Ⅱ　壕１西　西側より望む

写真 146.　Ⅱ　壕１東　東側の羨道

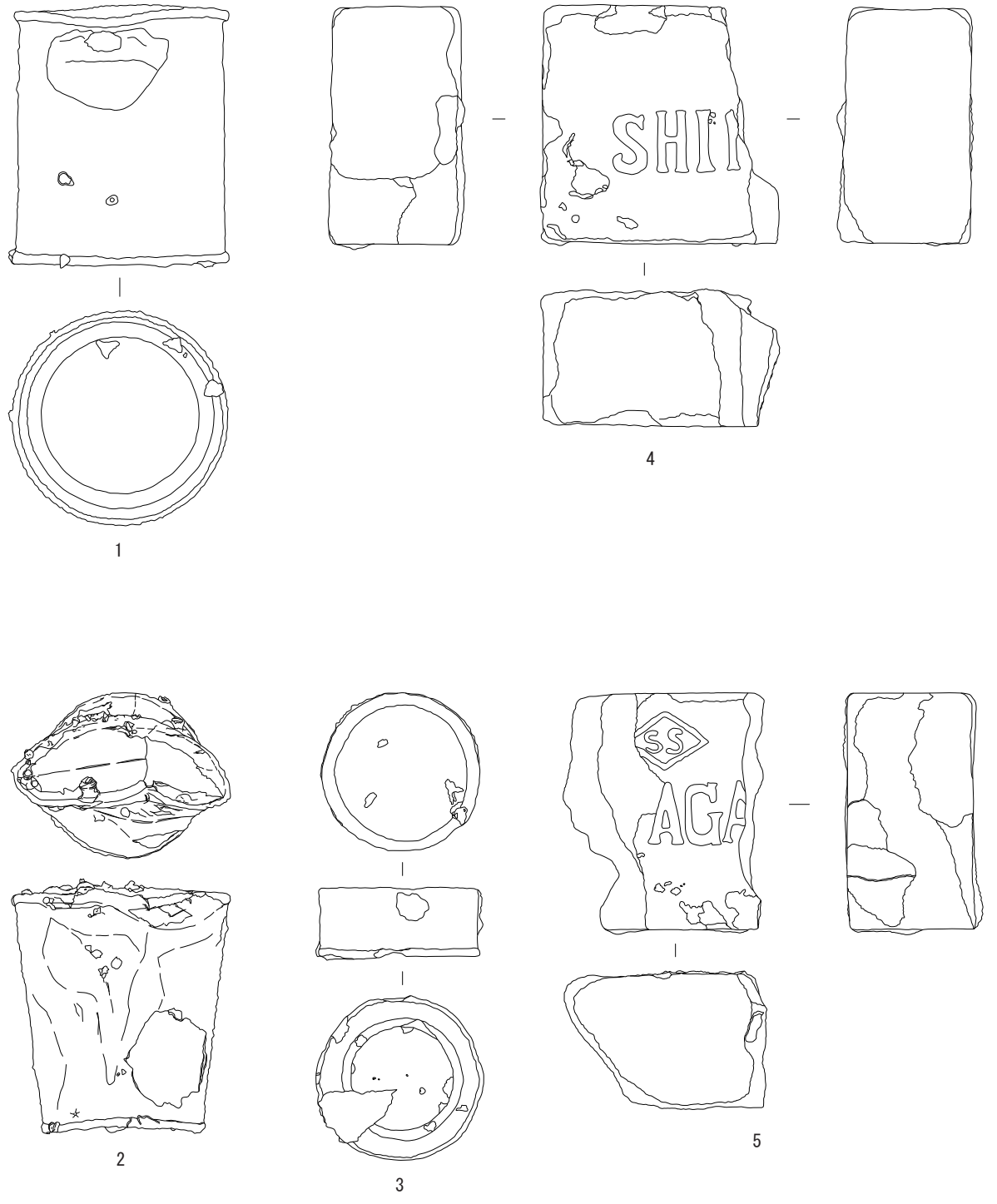
写真 147.　Ⅱ　壕１東　西側壕口

写真 148.　Ⅱ　壕２　壕口（全景）

写真 149.　Ⅱ　壕２　壕口（近景）

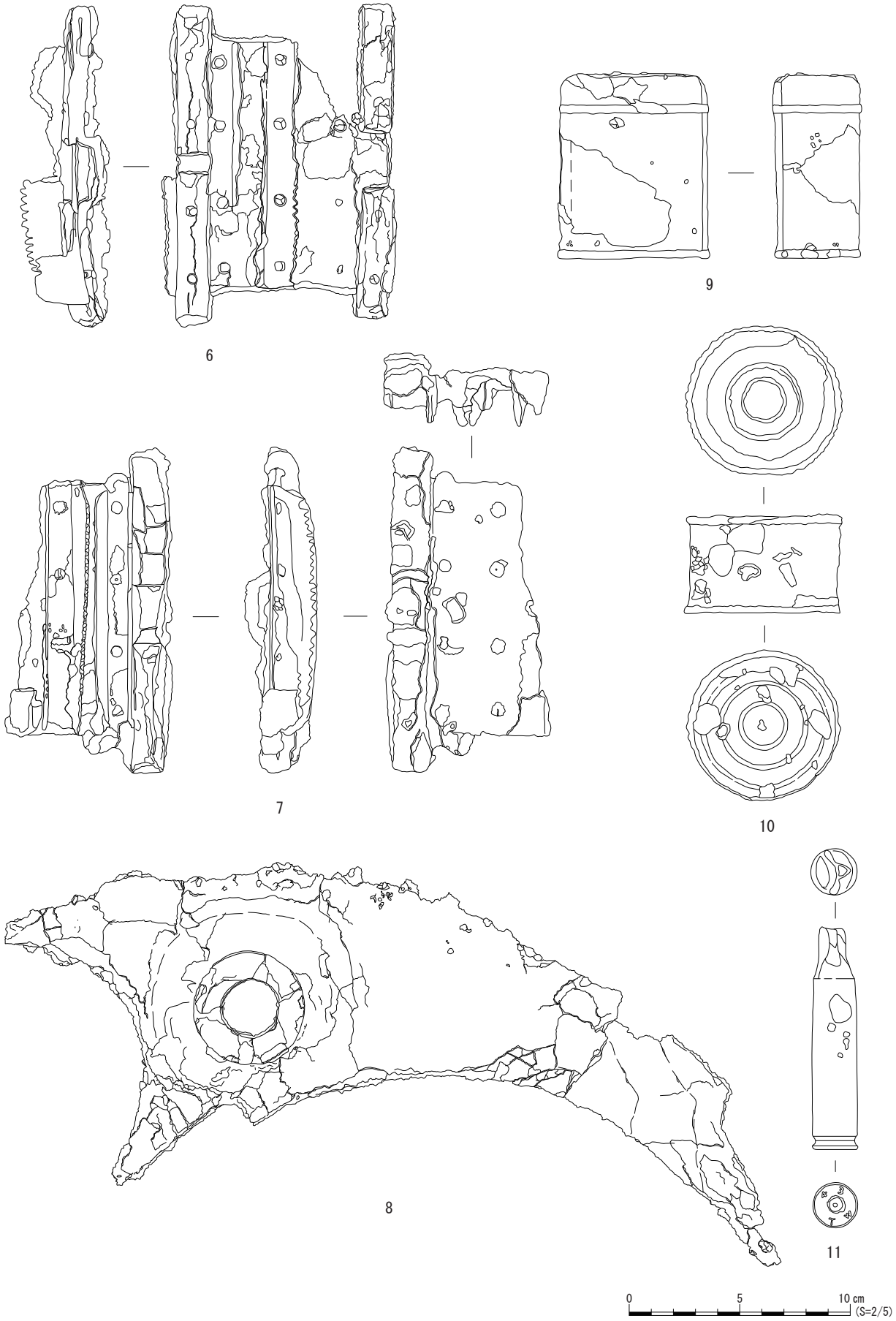
写真 150.　Ⅱ　壕２　壕内（最奥部）

写真 151.　Ⅱ　壕２　壕内から壕口を望む



図版 10.　イリノソコ陣地壕群跡Ⅱ　壕１東（缶・煉瓦）

図版 11.　イリノソコ陣地壕群跡Ⅱ　壕１東（缶・煉瓦）



図版 12.　イリノソコ陣地壕群跡Ⅱ　壕１東（金属製品）

イリノソコ陣地壕群Ⅱ　壕１東

図版 13.　イリノソコ陣地壕群跡Ⅱ　壕１東（金属製品）

写真 152. イリノソコ陣地壕群跡Ⅱ　古墓群（数字は墓番号を示す）

写真 153. 墓４　近景

写真 154. 墓５　近景

写真 155. 墓５の内部に掘り込まれた穴

写真 156. 墓８

写真 157. 墓９　近景

写真 158. 墓９の内部に掘り込まれた穴

写真 159.　Ⅱ　墓 11 の上部に設けられた銃眼

写真 160.　Ⅱ　銃眼への壕口（竪穴）

写真 161.　Ⅱ　壕内部の銃眼と台座

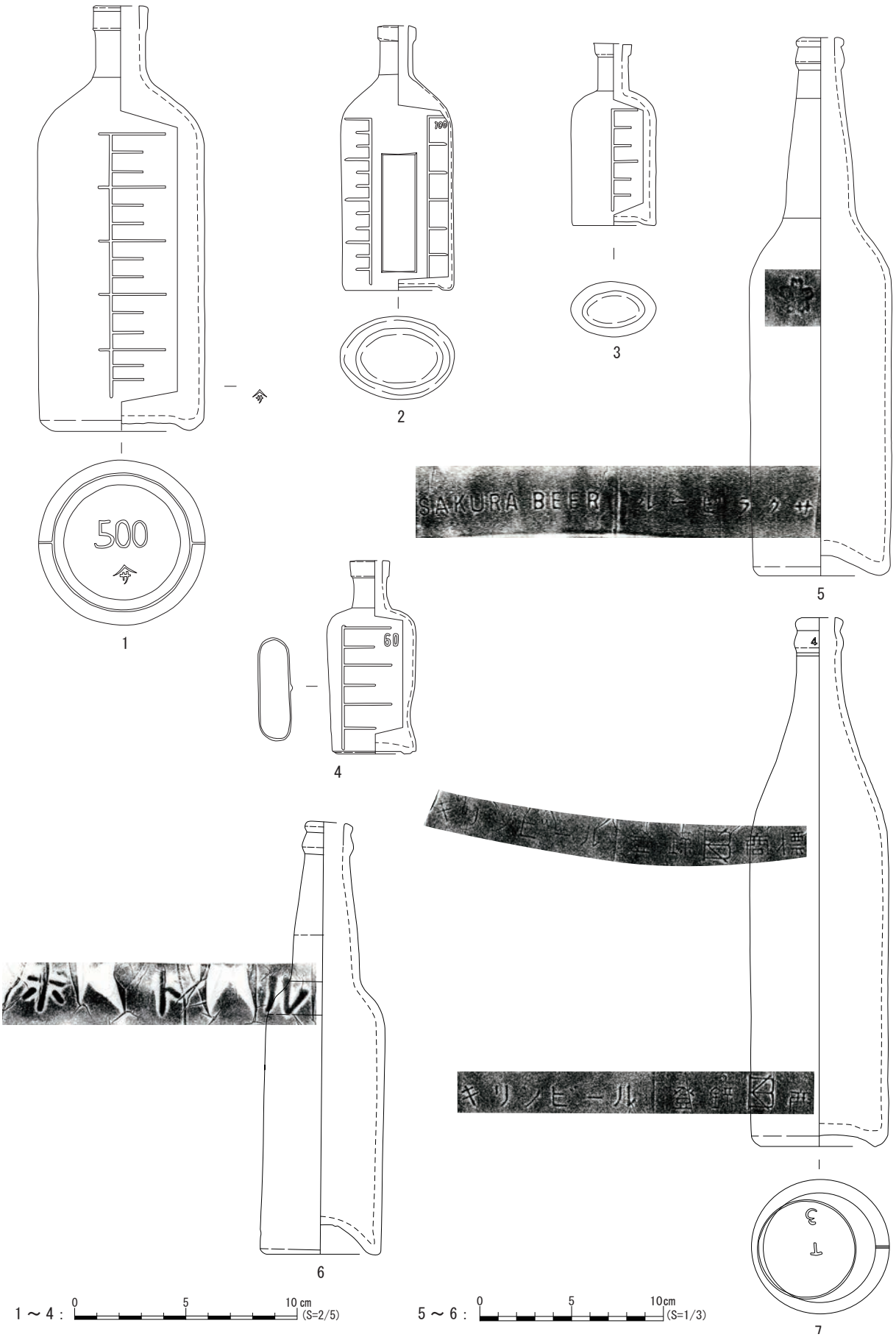
写真 162.　Ⅱ　壕内から検出した瓶類

写真 163.　墓３～５付近の磁気探査で発見された銃弾

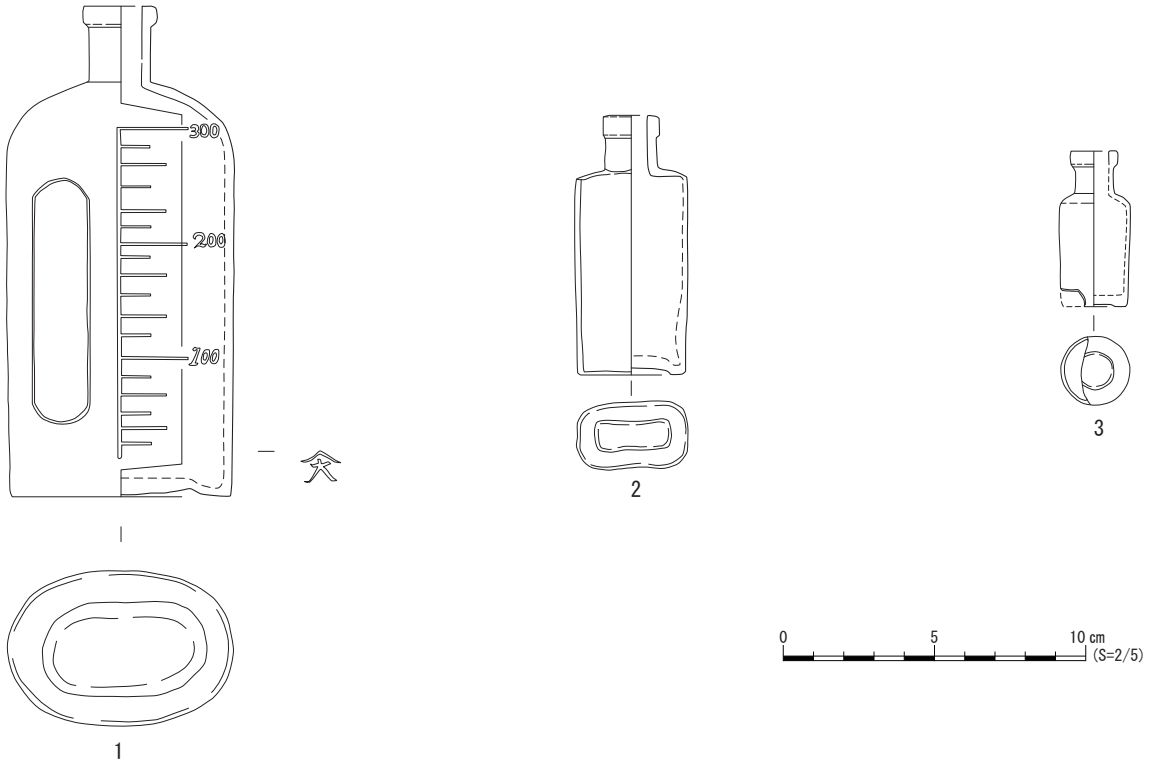
写真 164.　同探査で発見された用途不明の鉄製品①

写真 165.　同探査で発見された用途不明の鉄製品②

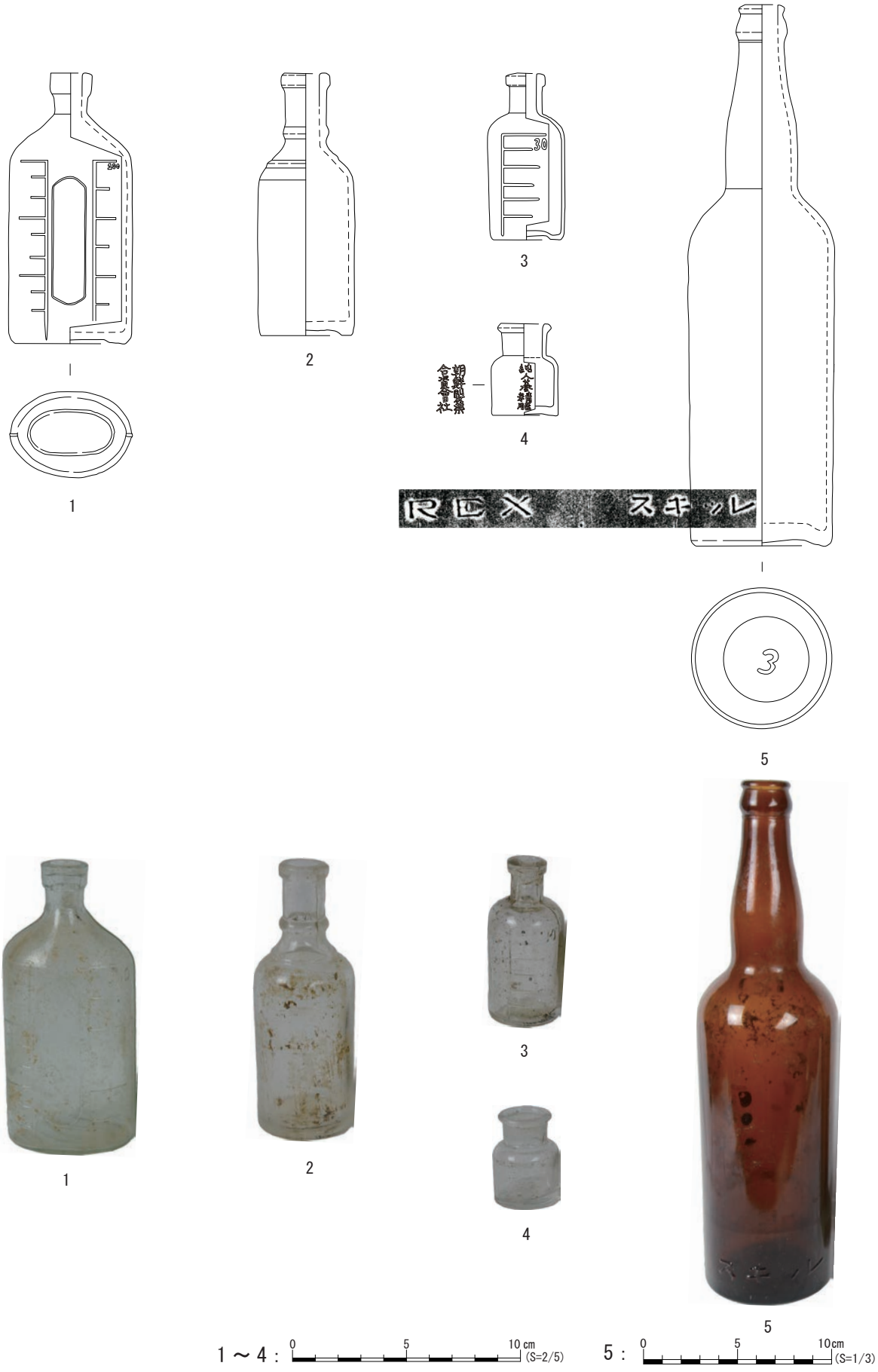
写真 166.　同探査で発見された用途不明の鉄製品③



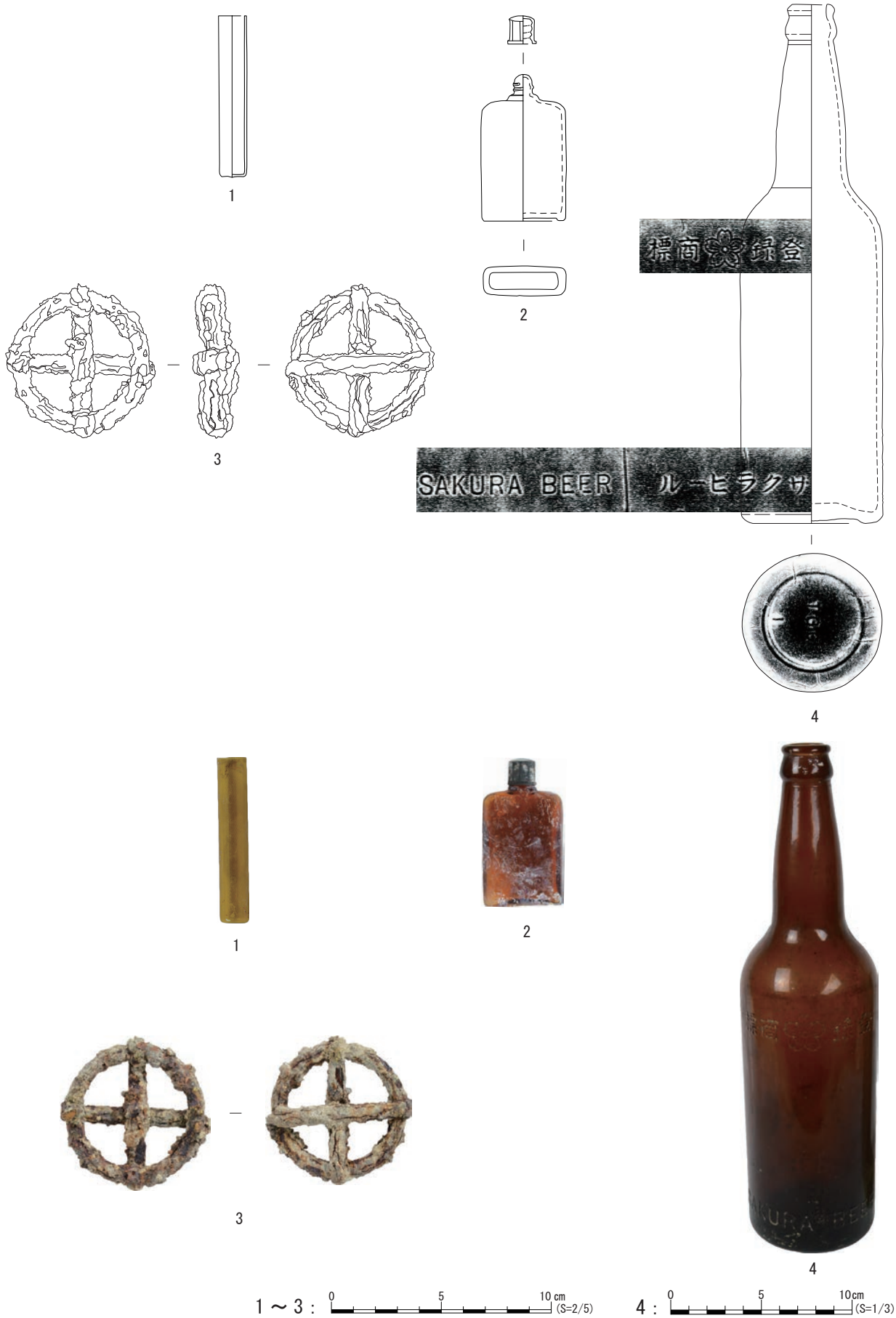
図版 14.　イリノソコ陣地壕群跡Ⅱ　古墓群　墓４より検出（瓶類）



図版 15.　イリノソコ陣地壕群跡Ⅱ　古墓群　墓４より検出（薬瓶類）



図版 16.　イリノソコ陣地壕群跡Ⅱ　古墓群　墓８より検出（瓶類）



図版 17.　イリノソコ陣地壕群跡Ⅱ　古墓群　墓 11 より検出（瓶類・金属製品）

図版 18.　イリノソコ陣地壕群跡Ⅱ　古墓群　墓 11 より検出（瓶類）

写真 167.　Ⅲ　壕口周辺

写真 168.　Ⅲ　壕口

写真 169.　Ⅲ　壕内

写真 170.　Ⅲ　壕内　脇部屋

（２）ウイヌンミ御嶽の壕（ういぬんみうたきのごう）

①所在地

宮古島市下地字嘉手苅ウエノミネ

②立地・現況

嘉手苅集落の背後地にあたる南西の緩斜面の稜線に位置する御嶽である。標高は最高でも 26 メートルと、それほど高くはないが、上地と川満の字境をなす北側の宮星山へ連なる丘陵を形成している。

③歴史状況

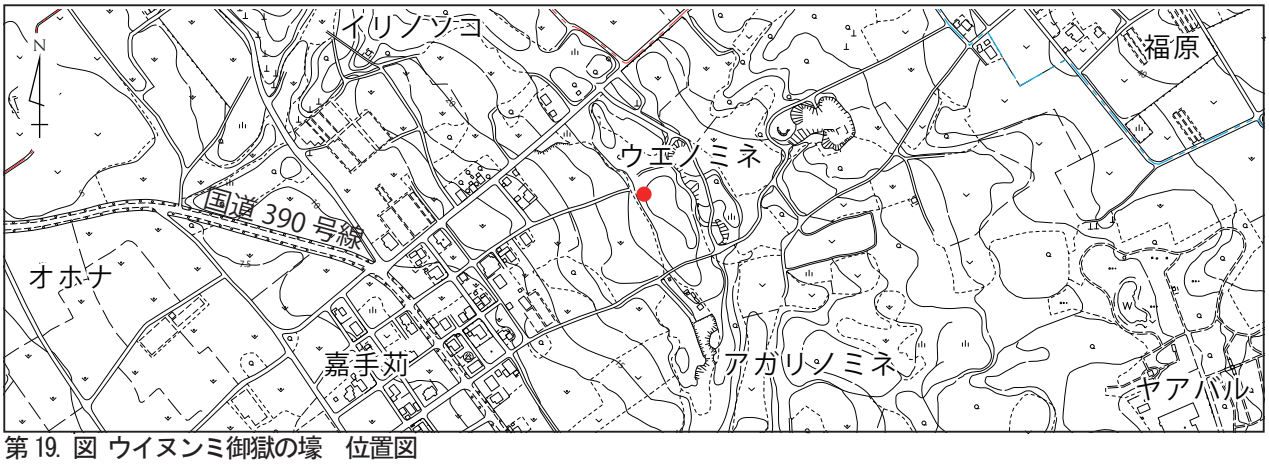
軍の配備区域で南地区に分類される嘉手苅は、歩兵第３聯隊第１大隊を中心に展開され、第１中隊が嘉手苅・入江、第２中隊が上野字宮国山根地区、第３中隊がヤーバル森林地区、第４中隊が皆愛正面地区に展開し、各中隊に第１機関銃中隊を分散して配属している。また、山砲兵第 28 聯隊第６中隊と、独立速射砲 26 中隊が、歩兵第３聯隊の指揮下に入るなど、中・小隊規模の単位での配備も多く、手厚い防禦陣地を構築していたものと考えられる。

尚、戦史資料（ref.C11110237900）では、山砲を嘉手苅・26 高地南側に 4 門、嘉手苅南側に 4 門。迫撃砲を嘉手苅 26 高地東側に 12 門設置している。ウイヌンミの実標高から “26 高地 ” と呼称されていた位置と見られる。

④遺構の特徴

竪穴の壕口は全体で４つある。壕口は、一辺が約 0.8 メートルの方形を呈し、深度は約 4.0 メートルに達する。壕口から降りると、高さ幅とも約１メートル以下で、膝をついて進める程度の狭い通路になる。

通路の先には、台座を有する銃眼が設けられている。このことから、本遺跡は銃眼としての機能性をもった壕であると考えられる。銃眼に至るための竪穴を有する壕は、宮古島市内でも複数確認できるが、本遺跡はこれらの壕に比して非常に規模の大きなものである。



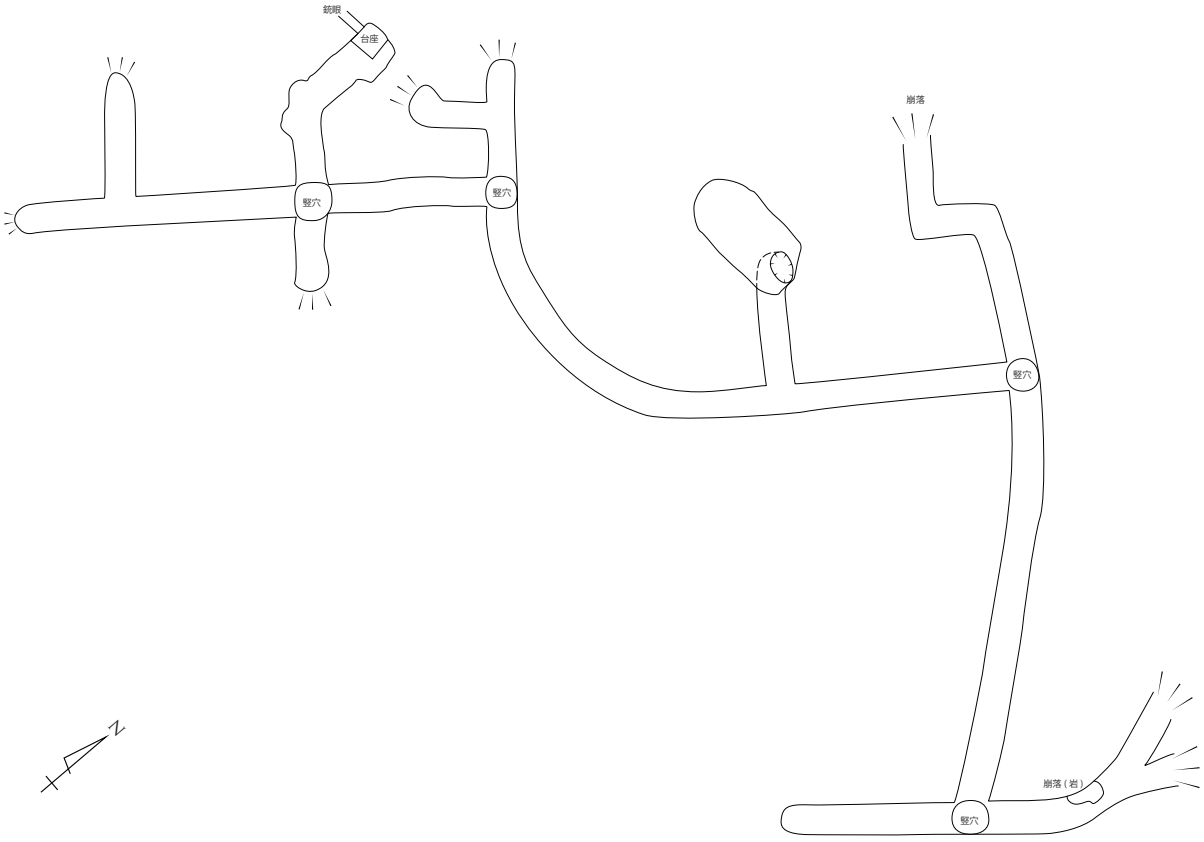
第 19. 図 ウイヌンミ御嶽の壕　位置図

写真 171.　ウイヌンミ御嶽　遠景

写真 172.　ウイヌンミ御嶽の参道

写真 173.　ウイヌンミ御嶽の祠

写真 174.　ウイヌンミ御嶽の壕　壕口



図版 19.　ウイヌンミ御嶽の壕　簡易平面図（縮尺不問）

（３）嘉手苅ウプ御嶽の壕群（かでかりうぷうたきのごうぐん）

①所在地

宮古島市下地字嘉手苅ハイバラ

②立地・現況

嘉手苅集落の南方 300 メートルほどの位置に、標高 10 メートルほどの小さな山があり、その南麓に嘉手苅のウプ御嶽がある。御嶽には拝所、籠り小屋のほかに井戸がある。

③歴史状況

軍の配備区域で南地区に分類される嘉手苅は、歩兵第３聯隊第１大隊を中心に展開され、第１中隊が嘉手苅・入江、第２中隊が上野字宮国山根地区、第３中隊がヤーバル森林地区、第４中隊が皆愛正面地区に展開し、各中隊に第１機関銃中隊を分散して配属している。また、山砲兵第 28 聯隊第６中隊と、独立速射砲 26 中隊が、歩兵第３聯隊の指揮下に入るなど、中・小隊規模の単位での配備も多く、手厚い防禦陣地を構築していたものと考えられる。

尚、戦史資料（ref.C11110237900）では、山砲を嘉手苅 26 高地南側に４門、嘉手苅南側に４門。迫撃砲を嘉手苅 26 高地東側に 12 門設置しており、このうち、嘉手苅南側４門がウプ御嶽に近似しているとみられる。

④遺構の特徴

嘉手苅集落の南方に位置する当該地の小高地は、南側（民俗方位）の麓にウプ御嶽の聖地がある。この御嶽の東側に本壕群でもっとも大きな壕１がある。このほか、当該地には壕だけでも９基（埋没・墓地化されたものを含む）、蛸壺３基などが確認されている。

壕１

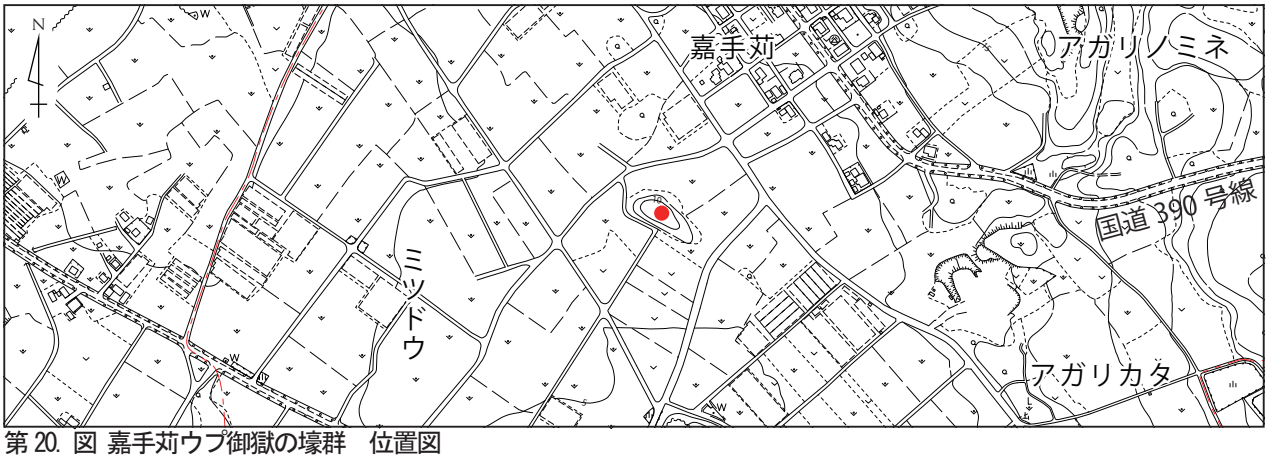
小山の麓に岩盤をくり抜いて構築された簡易的な横穴状の壕である。南を向いた壕口は幅約 1.5 メートル、高さ約 1.5 メートル。壕内は奥行きが約 6.5 メートル、幅が約８メートルあり、床面はほぼ平坦だが作りはやや荒い。また、壕口前には 10 メートル四方の広場が確認できる。

蛸壺１

壕１のすぐ東隣りの岩場にひさしのように飛び出した岩の陰に、円柱状の竪穴が掘られ、身をひそめるように構築された蛸壺がある。また、この蛸壺付近からは小山の上方へと登る踏み跡のような箇所も確認できた。

蛸壺２

蛸壺１から小山づたいに、およそ 10 メートルほど東に進んだ場所にある。岩棚の下側に奥行き約 1.2



第 20. 図 嘉手苅ウプ御嶽の壕群　位置図

メートル、幅約1メートル、現状の深さは1メートルほどで、蛸壺1と対をなしているようにも見える。

蛸壺3

蛸壺2の南、約5メートルほどの位置にある小さな岩塊の下部に、南北に短い溝状に掘り込まれている蛸壺がある。現状は埋没気味のため、深さはあまりないが、岩塊の下まで掘り込まれているようである。

壕2・壕3・壕4・壕5

この4か所の壕は、御嶽のある当該地の南側に接する畑に付帯する作業道路との境界付近にあり、7～10メートルの間隔で南を向いて構築されている。道路部から壕への進入には、農地改良時に構築されたとみられる土砂が0.5メートルほど盛られているが、壕口は路面高より1～2メートルほど下った位置に作られている。壕2の壕内の大きさは奥行き約3.5メートル、幅約5メートル、高さ約1.5メートルあり、埋没している壕もあるが、いずれも似たようなサイズ感があると見られる。

壕6

御嶽の西側に位置し、当該地の岩に壕2群と良く似たタイプの横穴を構築している。壕の脇から山の上方へ登る道筋が作られているようである。更に西側へ畑の際まで岩盤が張り出しているが、農地改良によって地形が変更されているため痕跡も不明瞭である。

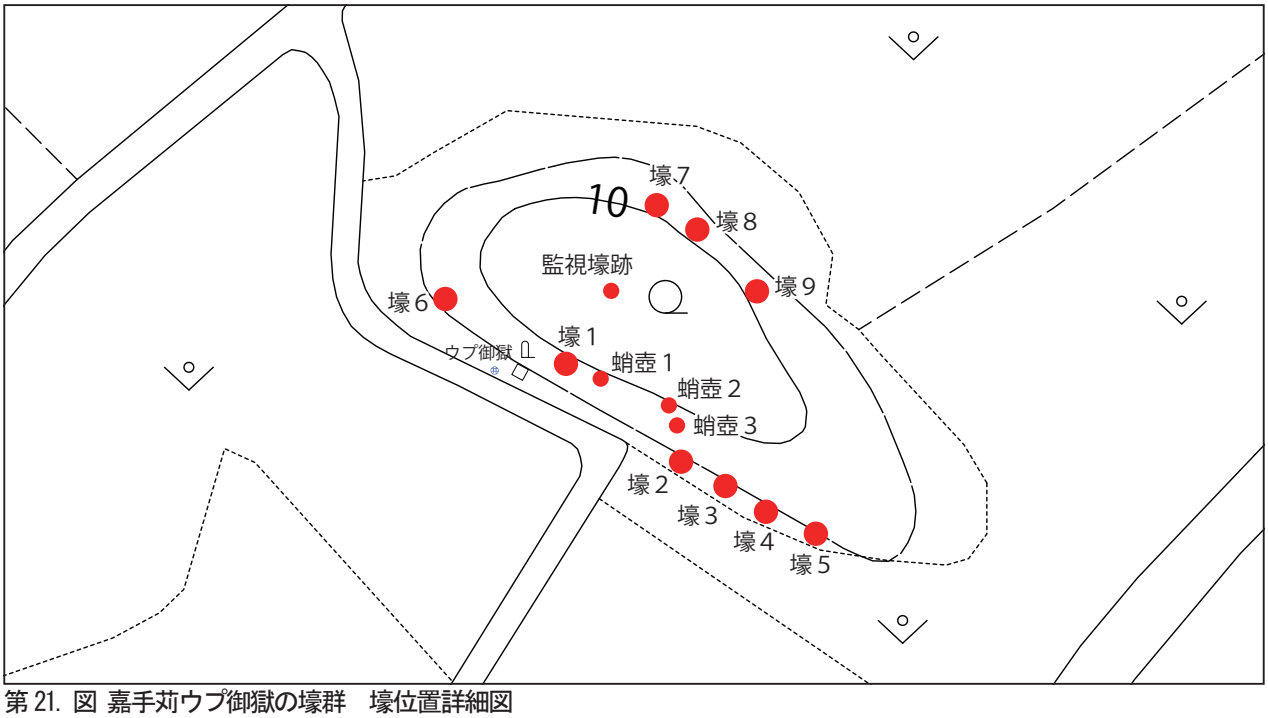
監視壕跡

当該地の山頂部となる標高10メートル付近に、岩を加工したとみられる構造物があり、現状は岩が崩れているが、眺望も利くことから監視壕の跡ではないかと推察する。

地形図を見ても判る通り、当該地は嘉手苅集落から入江湾にかけて広がる平地の中で唯一、わずかに標高のある場所で、敵の上陸が想定される入江湾方面も、同防禦陣地群であるイリノソコの陣地壕方面へも眺望が利くことから、前哨陣地のような位置づけとみられる。

壕7・壕8・壕9

御嶽の山の北側、嘉手苅集落側の裾野にあり、一部は墓として二次利用されているが、いずれも岩盤を掘り抜いた横穴である。中には南側へ抜けるトンネルを構築しようと、先進坑として掘り進んだような形跡もみられる。



第21. 図 嘉手苅ウプ御嶽の壕群　壕位置詳細図

写真 175.　ウプ御嶽の壕群　全景（北側）

写真 176.　ウプ御嶽の壕群　壕１

写真 177.　ウプ御嶽の壕群　蛸壺１

写真 178.　ウプ御嶽の壕群　蛸壺２

写真 179.　ウプ御嶽の壕群　蛸壺３

写真 180.　ウプ御嶽の壕群　壕２

写真 181.　ウプ御嶽の壕群　壕３（埋没）

写真 182.　ウプ御嶽の壕群　壕４

写真 183.　ウプ御嶽の壕群　壕５（埋没）

写真 184.　ウプ御嶽の壕群　壕６

写真 185.　ウプ御嶽の壕群　監視壕跡？

写真 186.　ウプ御嶽の壕群　壕７（墓使用）

写真 187.　ウプ御嶽の壕群　壕８（壕内）

写真 188.　ウプ御嶽の壕群　壕９（石積）

写真 189.　ウプ御嶽

写真 190.　ウプ御嶽からの眺め

（４）嘉手苅一地の壕（かでかりぴとじのごう）

①所在地

宮古島市下地字嘉手苅一地

②立地・現況

入江湾の東方に広がる、低い段丘の北側に位置する急斜面側に、壕は構築されている。周辺には新旧の墓が数基確認できるが、おおむね、周辺は耕作地となっており、一地（地域名入江）の集落からはやや離れている。

③歴史状況

軍の配備区域で南地区に区分される嘉手苅は、歩兵第３聯隊第１大隊を中心に展開され、第１中隊が嘉手苅・入江に、独立速射砲第 26 中隊も嘉手苅に配備されている。

独立速射砲第 26 中隊の戦史資料（ref.C11110032100）によると、終戦後、一地に集結して健康回復、自活態勢の確立に努めている。この記述から、この地は独立速射砲第 26 中隊の本部的な要素であった事が推察される。

独立機関銃第 18 大隊（通称球 5248 部隊）第２中隊の山内洋一氏によれば、山内小隊は歩３本部直轄で中飛行場の２つの滑走路の交差点に配属、酒井小隊は歩３第１中隊（中隊長：長杉栄吉中尉）に配属され、嘉手苅の入江の東側に配属された。その他、歩兵第３聯隊の戦史資料の防禦配備図でも、入江の両岸には水際陣地を構築し、歩兵の１小隊を配備している。宮国・山根から与那覇・前山にかけての海岸線は、水際戦闘部隊の防衛線となっており、この入江附近もその防衛線上にあった。

また、米軍が撮影した 1945 年当時の空中写真からも、集落もないこの地域に人の動きがあったことが確認できる。

④遺構の特徴

一地の壕は、東西２つの壕から構成されているが、地表部も含めると一連の壕として捉えることができ、いずれも琉球石灰岩を掘り込んで構築されている。本項では東側を壕１、西側を壕２として報告する。

壕１の全体の平面形態は「く」の字型を呈し、３つの壕口を有しているが、現在は壕口１からのみ入壕が可能である。また、壕１の壕口１は、壕２の壕口３とつながるものである。

壕内は壕口１からやや蛇行しながら約９メートル南進すると、壕の幅が１メートル未満で、高さが 0.7 メートルほどと非常に狭まっている。これは他の通路部分に比べ、壕の掘削が足りないもので、土砂の２次堆積に伴うものではない。

第 22 図 嘉手苅一地の壕　位置図

この狭小部分を過ぎると６×４メートルの略方形を呈し、高さ 1.9 メートルほどの空間がひろがり、壁面には灯り取が多くみられる。この空間の北東部に、壕口２が接続しているが口は埋没している。

ここで特筆すべき遺構として、0.7 × 0.6 メートルの、深さ 0.6 メートルほどのコンクリートの枡が設けられている。内部には礫が堆積していることから、深さは 0.6 メートル以上になるとみられる。用途は不明であるが、水を溜めるための貯水升であった可能性も考えられる。また、このコンクリート遺構から北西部へ進む堀込が確認できる。この堀込の西側には前述した狭小な通路が位置することから、この堀込は壕口１からの別の経路で連結させる可能性があったことを推察させる。

広い空間を東へ約５メートル進むと天井に竪穴の掘り込みが確認できる。現在は大型の礫が堆積し、口が塞がった状態にあるが、竪穴の壁面部には３段のステップが確認できることから、本来がこの竪穴からも壕内へ進入することが可能であったと考えられる。

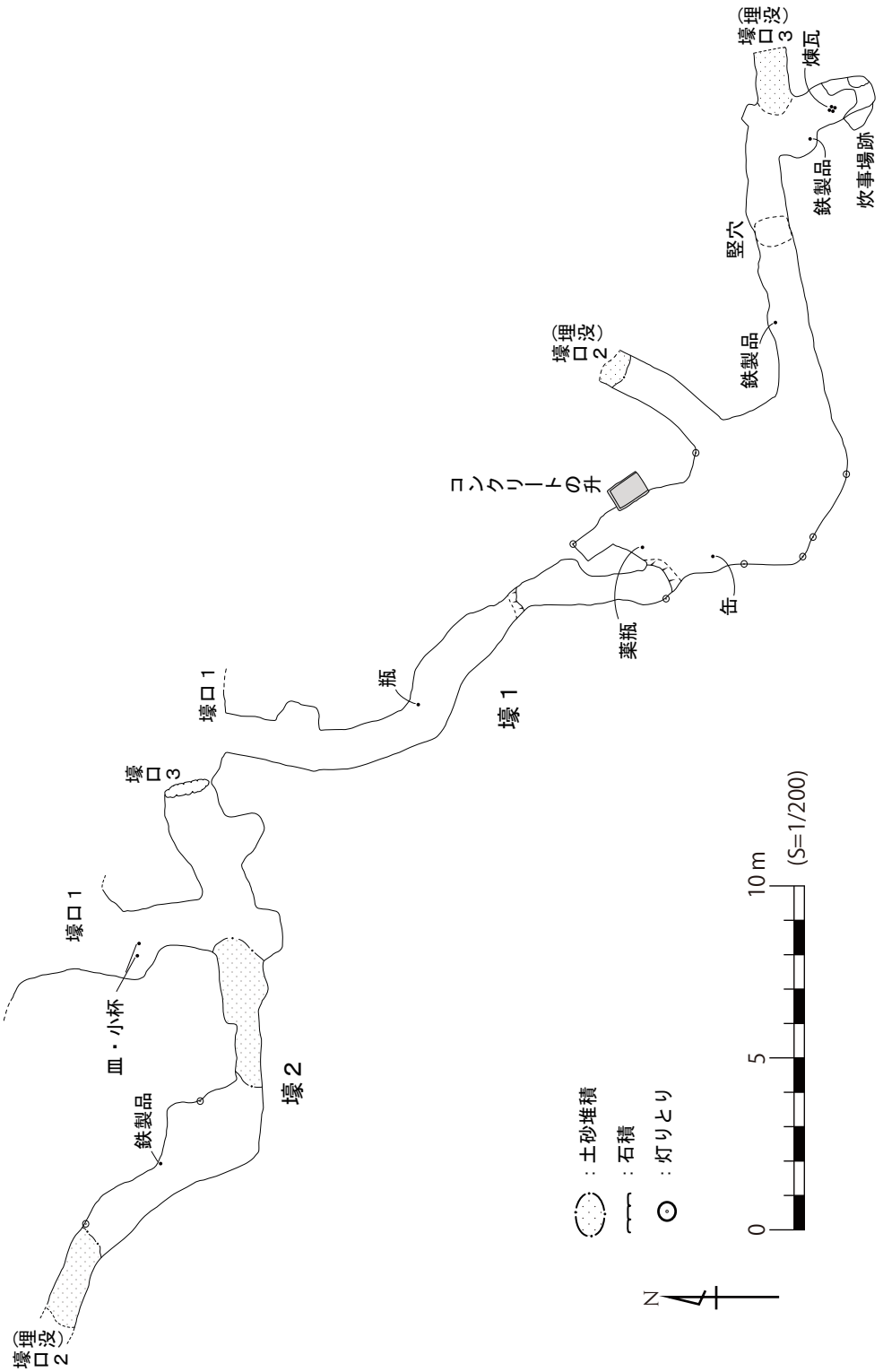
この竪穴の部分からさらに東進すると、埋没した壕口３へと至る。ここでもうひとつ、特筆すべき遺構として炊事場跡が確認されている。炊事場跡は鍋を置き、火を焚くためのカマド部分と、礫を混ぜた土で造られた煙突が残されている。煙突はカマド部分の側面に穴を設けて排煙をしている。尚、カマド部分には若干の炭が残されている。

西側の壕２は３つの壕口を有しているが、現在は壕口１からのみ壕内へ入ることができる。壕口１から南進すると東西への通路が分かれる。

西側へは土砂が入り込んでおり、高さは約 1.2 メートルと低くなり、北西側へ折れて壕口２へ至る。壕口２は土砂が堆積し、現在は壕口が塞がった状態にある。

東側は高さが 1.5 メートルほどと、西側に比してやや高く幅も広いが、壁面や天井は凹凸が激しく、粗い造りといえる。また、壕の延長も短く、すぐに壕口３へと達している。壕口３は部分的に崩れて口が狭くなっているが、前述したように壕１の壕口１とつながる壕口である。

これらの壕の形態から、一地の壕は有事における避難用の棲息壕として構築されたものと考えられる。



第 23. 図　嘉手苅一地の壕　平面図

写真 191. 嘉手苅一地の壕　近景

写真 192. 壕１　壕口１

写真 193. 壕１　壕内（瓶製品あり）

写真 194. 壕１　壕内（狭小部）

写真 195. 壕１　コンクリート升

写真 196. 壕１　壕内　ホール(岩左手に壕口２）

写真 197. 壕１　壕口２（埋没）

写真 198. 壕１　鉄製品

写真 199.　壕１　壕内　カマド

写真 200.　壕１　壕内　煙突

写真 201.　壕１　壕口３（埋没）

写真 202.　壕２　壕口１

写真 203.　壕２　壕内西側

写真 204.　壕２　壕内東側　奥は壕口２

写真 205.　壕２　鉄製品

写真 206.　壕２　壕口２（外観）

（４）嘉手苅スガ子の壕（かでかりすがねのごう）

①所在地

宮古島市下地字嘉手苅スガ子

②立地・現況

本遺跡は、県道 197 号嘉手苅屋原線沿いのスガーニ御嶽の入口に位置する。現在は、周辺の伐採した草木で竪穴の壕口部分が覆いかぶさっている状況にある。

③歴史状況

独立機関銃第 18 大隊の酒井小隊は嘉手苅の入江の東側に配備され、歩兵第３聯隊第１大隊も入江の両岸に夫々１小隊を配備している。当該の壕は、水際作戦遂行の入江湾に近接している点から壕としての用途もあるが、集落の里御嶽の横に構築されており、住民避難壕としての可能性も否定できない。

④遺構の特徴

本遺跡は、竪穴の壕口から下に約３メートルほど下ると、４メートル×３.5 メートルの楕円形型の空間に至る。この地下の空間には、明確な掘削の痕跡は確認されず、自然地形と推察される。その形態から壕としての機能は十分に有しているが、明確な壕としての使用については、今後の聞き取り調査の成果などから詳細な検討を行っていく必要性がある。

写真 207.　壕２　壕口

写真 208.　壕内から壕口を望む

写真 209.　壕２　壕内

第 24. 図 嘉手苅スガ子の壕　位置図

（５）山根海岸の壕群（やまねかいがんのごうぐん）

①所在地

宮古島市上野字宮国山根・フカエ

②立地・現況

入江湾口の東側に位置する、嘉手苅下原から宮国深江にかけての海岸線には、小規模な砂浜を有する弓なりの地形が複数みられる。銃眼１もこうした小規模な砂浜を有する海岸の突端近くに形成されたものである。銃眼部分は海水面から比較的近い位置にあり、銃眼への出入口は海岸の陸地側に設けられている。陸地側の壕口は海岸性の植物に覆われており、目視することが困難であるが、銃眼部分は海岸線部分からアクセスすることが可能である。

③歴史状況

宮古島地区防禦配備図によると、上野字宮国深江付近から与那覇前山に至る海岸線は、敵の上陸が予想されるエリアにあたり、水際戦闘部隊の守備位置となっている。特に宮国深江から洲鎌棚根にかけては、水際障害物が設置され、さらにその後方は、戦闘警戒部隊を配した防禦区域があり、二重三重の厚い防禦陣形を構築している。

歩兵第３聯隊の防禦配備図では、この山根地区には歩兵１小隊、速射砲隊、聯隊砲隊を配備している。歩兵第３聯隊歩兵砲大隊の戦史資料(ref.C11110010900)によると、第１歩兵砲中隊(聯隊砲)の内の１個小隊は第１大隊へ、２個小隊は第２大隊へ分散配属され、当初は水際戦闘に参加し、その後は主陣地戦闘に参加とある。また、訓練の状況としては「水際戦闘参加火砲は主として対舟艇射撃特に煙内射撃を重点とし実施し、又対空射撃も実施す」とあることから、歩兵のみならず歩兵砲部隊の一部も、水際で防衛にあたっていた事が推察される。

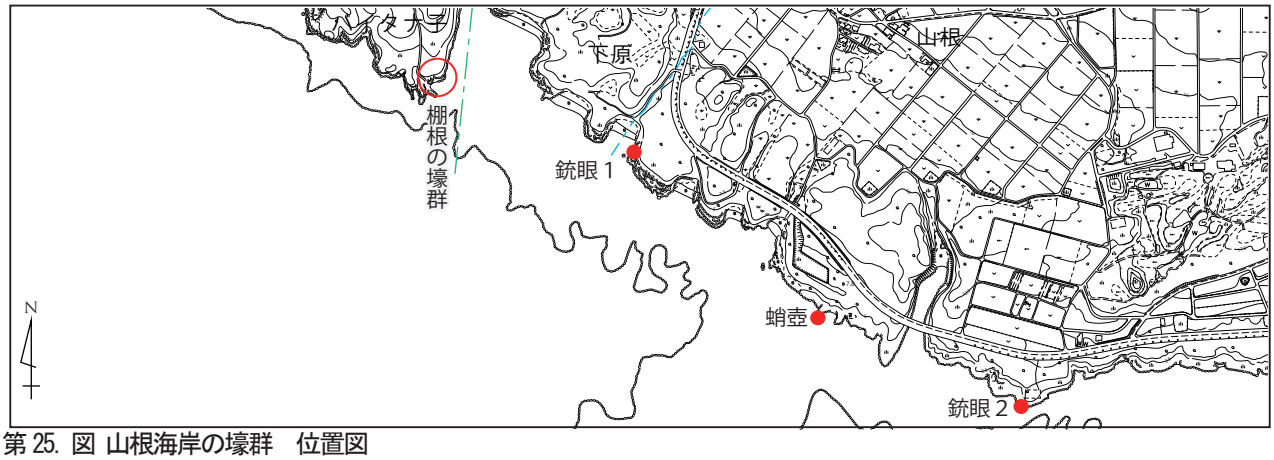
④遺構の特徴

銃眼１は海岸に向けた銃眼部分の外に、陸地側に２つの壕口を設けている。もっとも内陸にある壕口１は、岩盤を幅 1.4 メートル、深さ約 1.5 メートルに掘り込んだ羨道の形態を呈する。

壕口１から西側に向けて傾斜しながら約３メートル西進すると､岩盤を掘り込んだ地下壕の形態をとり、さらに 1.5 メートルほど西進すると竪穴(壕口２)が設けられている。

竪穴は地表面で計測すると、1.4 × 1.2 メートルほどの略台形状の形態をなし、深さは約 1.7 メートルである。

竪穴部分から南西方向に約 2.5 メートルの通路が掘り込まれているが、壁面などは自然面を残し、粗雑な造りである。北西方向には、やや広い空間が設けられ、その壁面の一部に銃眼が設けられている。銃眼



第 25. 図 山根海岸の壕群　位置図

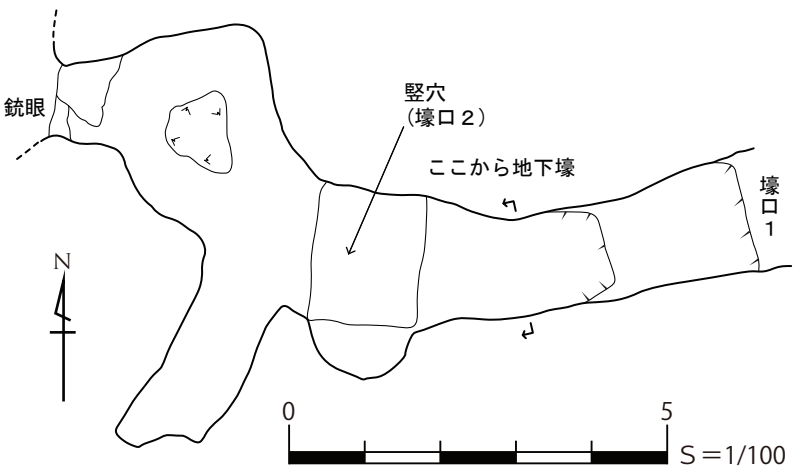
の中心軸は北西(295°)を向き、水際の防衛を意識し、遠くには来間島がはっきりみえる。銃眼の手前側は人為的に平坦に削り込まれている。

この銃眼を有する広い空間の中心部には、1辺が長さ1.2メートルほどの略三角形の落ち込みがあり、その部分には海水が入り込んでいる。また、本遺跡内から壕の構築時に使用したとみられるノミが1点確認された。

本遺跡は、全体的に自然面を良く残しているが、歴史状況でも記されたように、水際作戦に関連した銃眼のひとつといえ、本遺跡以外にも海岸線沿いに同様の銃眼が確認される可能性はある。

また、当該地から東方の海岸線を宮古島最南端(上野字宮国フカエ)まで現地を調査した結果、小さな岬状の岩場の先端付近に掘り込まれた蛸壺が1か所、宮古島の最南端の突端の岩場に構築された銃眼が1か所(銃の向きは西、呼称は銃眼2とする)を確認した。これらを地形図にプロットすると、外崎御嶽の壕群を含め、ほぼ等距離になんらかの施設が配置されていることが判り、敵の迎撃のみならず哨戒任務のために配置されていたとみられる。

※本遺跡の所在は上野地区に位置する戦争遺跡であるが、下地嘉手苅(入江地域)との境界に接しており、住民の聞き取りなどにおいても、上野宮国より入江地域とのつながりが強いことから、本節において掲載することとした。



第26. 図　山根海岸の壕群　銃眼1　平面図

写真210.　山根海岸の銃眼1より出土した金属製品。形状から壕を構築した鑿(タガネ)と見られる。

写真211.　銃眼1　壕口1(羨道部分)

写真212.　銃眼1(壕内)壕口1(奥)と壕口2　(竪穴)

写真 213.　銃眼１　　壕口２（竪穴）

写真 214.　銃眼１　　銃眼部。手前に鍳が落ちている。

写真 215.　銃眼１（銃眼部外側より）

写真 216.　銃眼１　　壕内（落ち込み部）

写真 217.　銃眼１　　近景（湾内）

写真 218.　銃眼１からの西側の眺望（奥は来間島）

写真 219.　蛸壺

写真 220.　銃眼２（向きは西方）

第5節　川満

１．川満の地理的環境

川満は下地地区の北方に位置し、字域の北・東はおおむね平良地区と接している。字域の西側には与那覇湾があり、湾に沿うように国道 390 号が南北に縦貫し、古くから川満集落の中心を形成している（住人のほとんどが、屋敷地に位置している）。

川満集落から字域の東部にかけては、東に向かうほど標高の高い台地（おおむね 50 メートル規模）になっており、大半が農地で耕地整理が進んでいる。東部には北から、カツラ嶺、マクソコ、積間（西積間、東積間、ツンフグ）の小集落が点在し、高千穂と称される地域を形成している。積間の東方は字上野野原と境をなし、陸軍中飛行場に隣接していた。

２．川満の沖縄戦時の概況

川満地域に関連する地名が登場する軍の資料は少なく、詳細についてははっきりしていないが、歩兵第３聯隊の第３大隊を中心とした部隊が駐屯していたものと思われる。

歩兵第３聯隊第３大隊（大隊長：芦原忠三少佐　772 名）、第 12 中隊（中隊長：内田千代志中尉）が川満地域に展開していた（霧生藤吉郎 1996）

山砲兵第 28 連隊の戦史資料（ref.C11110237900）によると、山砲設置地点として、川満東南方 700 メートル閉鎖曲線２門、川満東方 1 粁（キロメートル）点線閉鎖曲線２門、川満北方 47 高地蘭形曲線東側４門、川満北方 47 高地西方１粁２門。迫撃砲は川満東南方 700 メートル閉鎖曲線 12 門、川満東方１粁点線閉鎖曲線 12 門、川満北方 47 高地北側 12 門とある。

尚、閉鎖曲線とは、地図上の等高線が途切れることなく円状（楕円）に描かれた陵頂部で、ここでは標高点のない地点の呼称として使われている。

このほか独立機関銃第 18 大隊（球 5248）は、歩兵第３聯隊の指揮下に入り、マクソコ集落に独立機関銃第 18 大隊の本部が置かれ、第２中隊（中隊長：高橋良孝大尉）は大隊本部付きの中隊として、マクソコに配備される。さらに、その第２中隊の中の酒井小隊は、歩兵第３聯隊第１中隊に配属され字嘉手苅入江に配置されている。（山内洋一手記より…村民の戦時・戦後体験記録　平成 15 年　上野村教育委員会）

※独立機関銃第 18 大隊の第１中隊と第３中隊は、駒部隊に配属され、城辺に展開している。

集落の南東側にあり、小丘陵をなすキサマ御嶽の北側は、石粉の採掘場になっており、中飛行場設営のために琉球石灰岩を掘りだした。聞き取りによると、石粉を運ぶ 10 台くらいのトラックが、集落内にまで連なって待機していた。

キサマ御嶽の東側に隣接する現在の川満最終処分場も、石粉の採掘場であった。聞き取りによると、この附近には兵隊が駐屯しており、部隊の将校が民家に食事を食べに来ることもあった。また、同附近には蛸壺も多数あった。他にも、川満マングローブ公園の近辺には、壕があったという聞き取りがあった。

昭和 20 年３月 23 日、朝から連続して空襲があり、いよいよ敵軍の上陸と予感された。川満屋敷原の住宅地に、敵機が墜落して６軒が炎上し、近隣住民は火消に奔走した状況が、聞き取りや下地町誌 (1989) から確認された。この時の搭乗員は墜落時に死亡、墜落現場近くの路傍に遺体を埋葬し、「American Soldier」と無名の兵士の墓標を建てた。

第 27. 図 川満の成果図

３．川満の成果一覧

①住民被害地（敵機墜落地点）

聞き取りや下地町誌の戦災の記録によると、この附近（小字名・屋敷地）に敵機が墜落し、数軒の家が焼け、搭乗者の肉片があちこちに散っていた（昭和６年生、13 年生）。

②墓標跡

聞き取りによると、川満 251 番地あたりの道路脇に、墜落した敵機のパイロットの遺骸を集めて、地域の青年会が埋葬し、当時の中学生が英語で「American Soldier」と無名の兵士の墓標を建てて弔った（昭和６年生）。

③ヌーズマー御嶽の住民避難壕跡

聞き取りによると、ヌーズマー御嶽の北側は石粉を採った跡があり、近隣の住民がおのおの横穴を掘って避難した（昭和６年生）。

※現地での案内板による御嶽名はヌーズマー御嶽。聞き取りにおける発音はムイマース御嶽。平良市史御嶽編ではウラカニク御嶽と称しているが、別途、壕の発見に伴い、現地案内板の表記名で統一した。

④軍隊駐留地跡（川満与那原）

聞き取りによると、現在の川満最終処分場の南側あたりには軍隊が駐留していた。また、その部隊の将校は集落の民家に来て食事をしたりした（昭和６年生）。

⑤与那原の壕

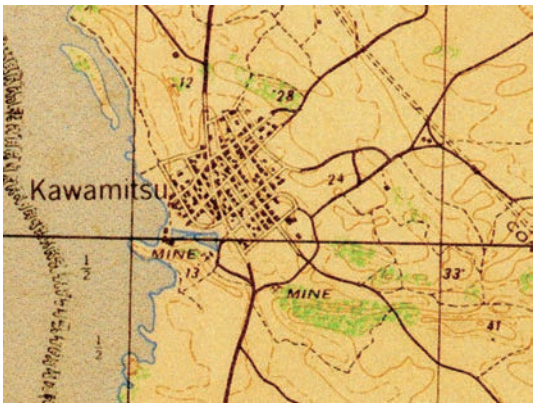
聞き取りによると、現在の川満最終処分場のあたりには蛸壺が多数あり、馬が落ちたこともある（昭和６年生）。

聞き取りから川満最終処分場の周辺を現地調査した結果、東方に、Ｕ字形をした壕を発見した。

⑥壕跡（川満与那地道）

聞き取りによると、現在の川満最終処分場の北側に位置する墓地があるあたりには、陸軍の壕があった（昭和 11 年生）。

尚、一連の川満最終処分場周辺に駐留していた部隊についての詳細は、いずれも不明である。



第 28. 図 川満集落周辺。「MINE」は鉱山を意味する。（米軍作製地図 1945 年）

⑦石粉採集場所（キサマ）

聞き取りによると、キサマ御嶽の北側は、中飛行場の建設のための石粉を採掘した場所で、石粉を運ぶトラックが 10 台くらい連なって集落の道路で待機していた（昭和６年生）。

⑧宮星山の陣地壕群

聞き取りによると、この宮星山（ンミフス山／ミネホシ山）には兵隊がいて、そこで作った石鹸をもらったことがある（昭和６年生）。

※宮星山については第３節　上地を参照のこと。

⑨爆弾被害地（南原）

聞き取りによると、ウプカーの御嶽には爆弾が落ちて、子供たちの遊び場だった大きなガジュマルの木が倒れた（昭和６年生）。

⑩兵隊の来訪地（南原）

聞き取りによると、ウプカー御嶽の東側にシートーヤーがあって、兵隊が天幕をはって水浴びをしたり、

釣った魚などを料理して食べていた。駐屯ではなく、リクレーションのような日帰りであった。サダモトという将校が軍用犬を連れて来ていた（昭和 11 年生）。

※サダモト：歩兵第３聯隊第３大隊第 10 中隊中隊長定本二一大尉と比定。

⑪屋敷地の住民避難壕跡

聞き取りによると、ウプカーの北側の崖沿いに横穴を掘り込んだ避難壕があった（昭和 11 年生）。

⑫兵舎跡（積間）

聞き取りによると、このあたりに兵隊がいた。戦後、兵舎で演芸会をやった（昭和７年生）。

詳細については不明だが、川満東方から高千穂・積間付近には、歩兵第３聯隊第３大隊が駐屯し、本部があったとされている。

米軍撮影の 1945 年当時の空中写真を確認してみると、西積間集落北側にある西積間神社（ツンマー御嶽）周辺に兵舎らしき建物がいくつか並んでいる。現況は当時でも数軒しかなかった民家が消え、西嶺間神社の周辺を除いて耕地整理も進み、痕跡といえるものは残っていないようである。

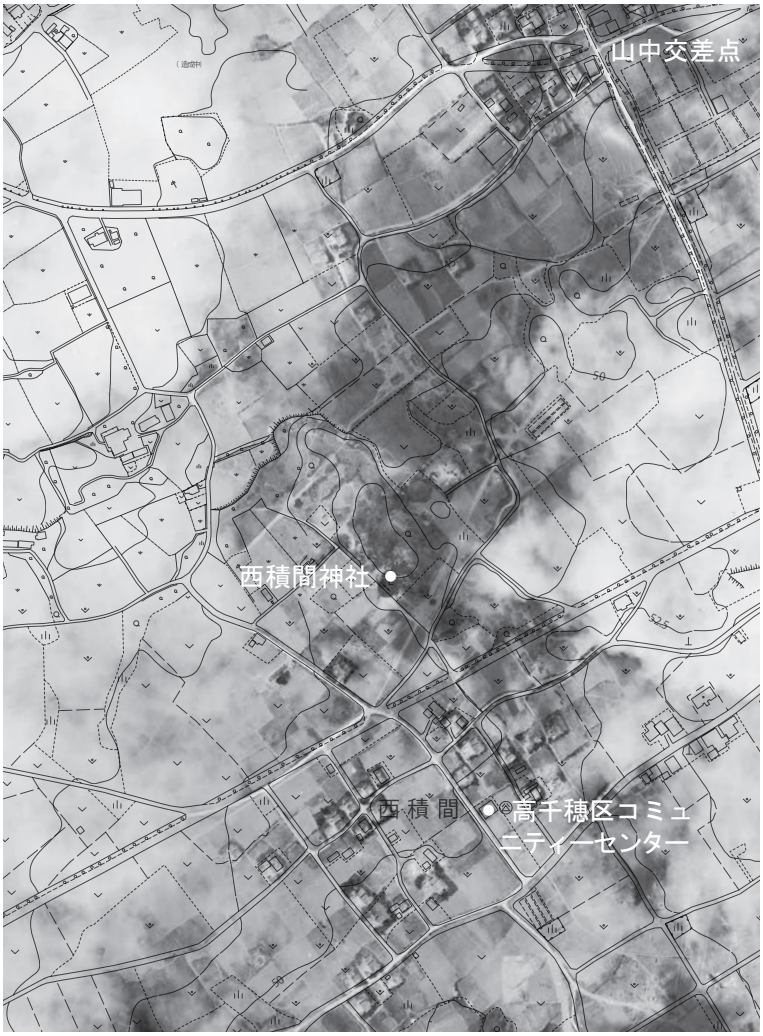
尚、西積間集落南方は、陸軍中飛行場の南北滑走路が位置している。詳しくは「宮古島市内戦争遺跡分府調査報告書（１）」の上野地区第３節野原を参考されたい。

⑬住民避難壕跡（積間）

聞き取りによると、このあたりに自然壕があり、近隣の住民が避難した。現在は耕地整理により埋められてしまった（昭和７年生）。

⑭ヌーズマー御嶽の壕

国道 390 号から御嶽へ通ずるコンクリート敷きの参道脇に掘り込まれた壕。御嶽の西側は古い砕石場の跡で、住民が避難したといわれている。



図版 20.　西積間集落付近の空中写真（米軍撮影 1945 年５月１日 沖縄県公文書館収蔵）に、2010 年代の地形図を重ね加工。

写真 221. ①住民被害地（敵機墜落地点）

写真 222. ②墓標跡

写真 223. ③ヌーズマー御嶽の住民避難壕跡

写真 224. ④軍隊駐留地跡（川満与那原）

写真 225. ⑤与那原の壕

写真 226. ⑥壕跡（川満与那地道）

写真 227. ⑦石粉採集場所（キサマ）

写真 228. ⑨爆弾被害地（南原）

写真 229. ⑩兵隊の来訪地（ウプカー御嶽）

写真 230. ⑪屋敷地の住民避難壕跡

写真 231. ⑫兵舎跡（西積間）

写真 232. ⑫兵舎跡（西積間御嶽）

写真 233. ⑬住民避難壕跡（積間）

写真 234. ⑭ヌーズマー御嶽の壕

4. 川満の戦争遺跡

（1）ヌーズマー御嶽の壕（ぬーずまーうたきのごう）

①所在地

宮古島市下地字川満キサマ

②立地・現況

ヌーズマー御嶽は、川満集落の南東に位置し、喜佐間御嶽の北西約 80 メートルの場所に位置する御嶽である。周囲よりも小高い丘状の地形になっており、頂上部に拝所が設けられている。壕はこの小高い丘の下部(基盤の琉球石灰岩)を掘り込んで構築されている。

ヌーズマー御嶽は国道 390 号線沿いにあり、入口部分には御嶽の説明板が設置されている。また、拝所へ向うための参道や階段も整備されている。壕はこの階段の北側部分からも望むことができるが、御嶽とその周辺部には自然林が残されていることから、壕口部分にも草木が繁茂している状況にある。

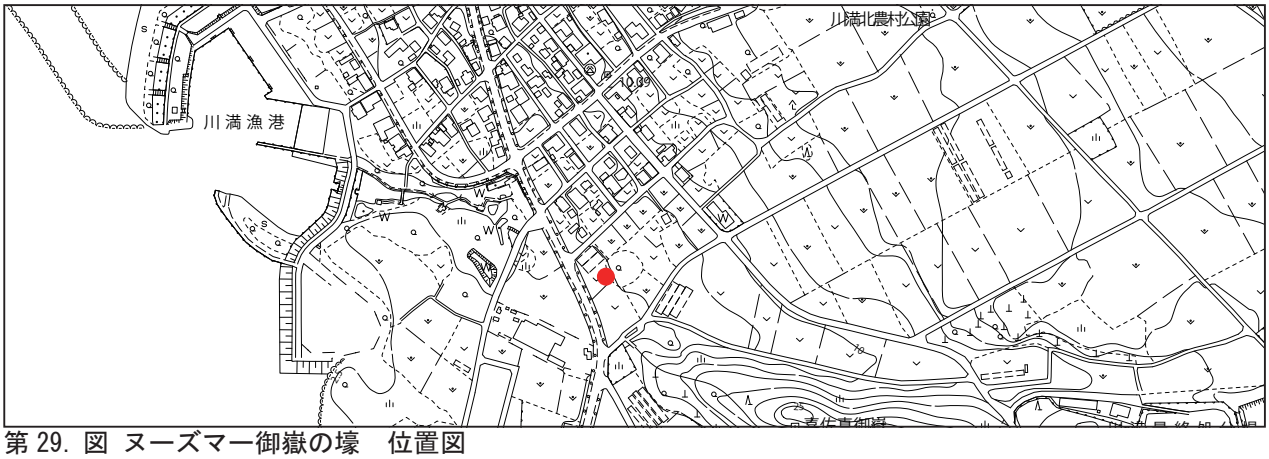
③歴史状況

米軍が作製した地図によると、川満集落周辺には「MAIN（鉱山)」と印された箇所が 2 つある。聞き取りでは、キサマ御嶽の北側から現在の最終処分場にかけての地域は石粉をとる鉱山で、キサマ御嶽の北側では積み込むためのトラックが列をなして止まっていたのを見た。また、平良市の戦争体験の中には、息子が徴用され、川満東のリョジュンコウ山(旅順港？旅順鉱山？)で壕掘りの作業をしたとの記述もあり、この周辺は石粉の採掘場所であったことが判る。ヌーズマー御嶽はこのキサマ御嶽に近接しており、御嶽の西側は石粉を採った古い鉱山の跡地で、数家族がその跡地に穴を掘って避難壕とした、という聞き取りも得られている。本壕は小規模の壕で数家族が避難する壕とも考えられるが、飛行場建設のための石粉の採集地が隣接しているという立地を考えると、鉱山管理のための壕の可能性も否定できない。

④遺構の特徴

小高い丘状の御嶽の基盤部にある琉球石灰岩の岩盤を、明確に掘り込んで構築された壕は 1 基で、壕口も 1 か所のみが確認されている。しかしながら、本来はもうひとつの壕口と連結させるような機能が推察される堀込も、 1 か所確認することができる。

現在、壕口部分には多量の土砂が堆積しており、幅は約 2 メートルに対し高さは約 0.6 メートルと狭い。壕の平面形態は、北東方向に約 3.5 メートル直進し、南東方向にゆるやかに湾曲して止まっている。壕内の幅は約 1.4 メートルで、高さも 1.4 メートルほどである。



第 29. 図 ヌーズマー御嶽の壕　位置図

写真 235. 御嶽の参道（壕は階段左手）

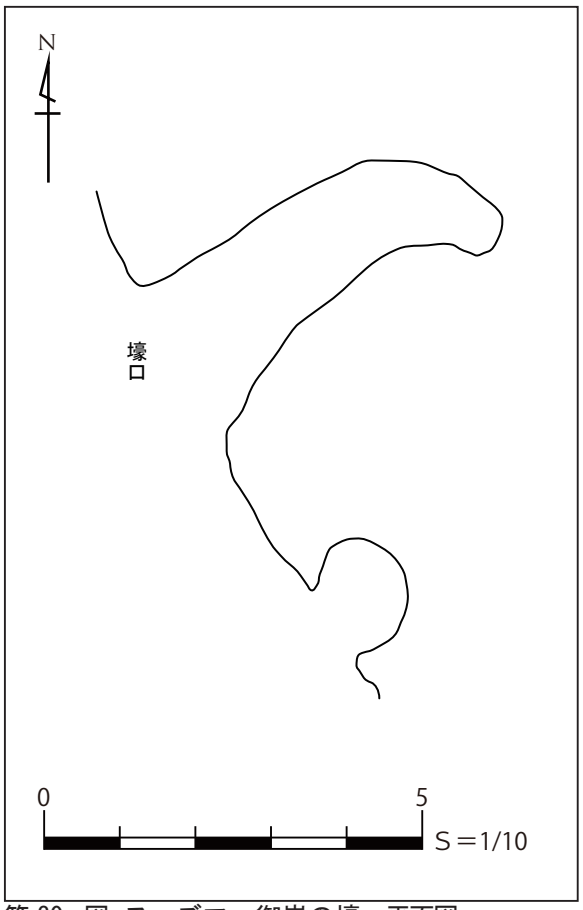
写真 236. 壕口（奥は掘り込み部）

写真 237. 壕内（壕口より）

写真 238. 壕口（壕内から）

写真 239. 壕内（最深部）

写真 240. 掘り込み部



第 30. 図 ヌーズマー御嶽の壕　平面図

（２）川満与那原の壕（かわみつよなばるのごう）

①所在地

宮古島市下地字川満与那原

②立地・現況

与那原の壕は川満集落の南東、宮古島市川満最終処分場の裏手に位置する。周辺は圃場整備が行われ、平坦な耕作地となっているが、壕の位置する一帯は小丘状の地形をなしている。壕はこの小丘の上部にあり、南には宮星山を望む。壕は道路沿いに位置するものの、草木が繁茂しているため、その場所を確認することは困難である。

③歴史状況

歩兵第３聯隊戦史資料(ref.C1111010900 ／本書ｐ２図版１　南地区全域の展開図)によると、陸軍中飛行場南北滑走路の北側は、第３大隊の防衛地域となっており、川満の東側はこの区域の中に含まれる。下地小学校沿革誌にも第３大隊の将校の名前が散見される。また、川満集落における聞き取りでも、同大隊の将校の名前が記憶の中にあった。これらの事から川満集落付近に展開していたのは、歩兵第３聯隊第３大隊であったことがみてとれる。

その他、歩兵第３聯隊歩兵砲大隊の戦史資料では、第２歩兵砲中隊(速射砲)の１分隊は、弾薬手要員を以て小銃小隊編成第３大隊へ配属、戦砲隊は水際戦闘部隊として小銃小隊は戦闘警戒部隊とある。これらの事から、川満地区は第３大隊と歩兵砲中隊の一部が防衛していたと考える。

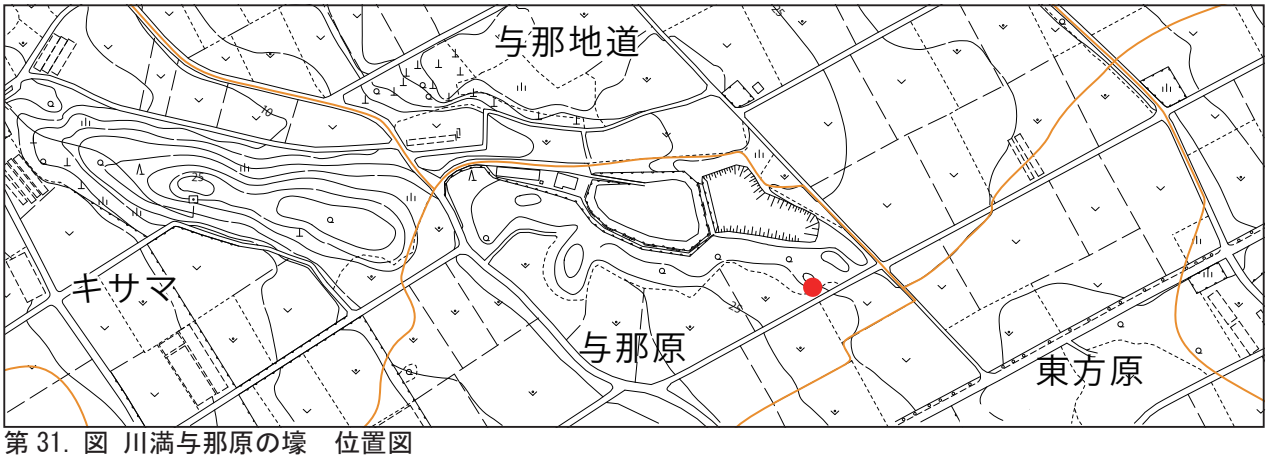
米軍の撮影した 1945 年当時の空中写真では、戦後の圃場整備以前でもあるため、現在の最終処分場以外にも小丘がいくつも残り、そうした丘に人の出入りがあったことが確認できる。

④遺構の特徴

本壕は琉球石灰岩を竪穴状に掘り込んだ、２つの壕口が連結した形態をなしており、全容は「U」字型を呈する。

２つの竪穴は、地表部で約 1.2 メートル離れており、北東側の竪穴は長径 1.0 メートルほど、南西側の竪穴は長径 0.9 メートルほどの略円形をそれぞれ呈する。

壕内部の深度は、現況で 1.5 メートルほどであるが、内部に土砂が堆積しているため、本来の深度はより深いものになると考えられる。しかしながら、竪穴の大きさなどの点から、人がひとりが通れるほど狭い形態の壕であるといえる。



第 31. 図 川満与那原の壕　位置図

写真 241.　川満最終処分場（左下の丘）付近（米軍撮影 1945 年５月１日　沖縄県公文書館収蔵）

写真 242.　与那原の壕　近景

写真 243.　最終処分場側の崖面

写真 244.　南西側の壕口

写真 245.　北東側の壕口

第6節　来間

１．来間の地理的環境

来間は宮古島の南西1.5キロ沖合に浮かぶ、面積2.84平方キロ、周囲９キロの島全域を字域としている。現在は1995年に開通した、全長1,690メートルの来間大橋によって、宮古島字与那覇と結ばれているが、架橋以前は字与那覇の前浜海岸からの渡船によって結ばれた離島の離島であった。

主島である宮古島と同様に、来間島も隆起サンゴ礁の島で、島の北東側ほど標高が高く、切り立った断崖となっている。集落は断崖の中央部（人家はおおむね、来間里に位置している）に集中しており、島の大半は耕地整理の進んだ農地で、南西側の海岸に向かって緩く傾斜している。

２．来間の沖縄戦時の概況

来間への軍の展開は、歩兵第３聯隊第２大隊第６中隊（中隊長：関戸義朗中尉）と、山砲兵第 28 聯隊第６中隊の１個小隊（小隊長：苧坪賢吉中尉）の計 120 名ほどの「来間島守備隊」が配備されている。

守備隊は集落の北東側一帯に陣地を構築し、断崖上部には模擬電波探知機を、断崖の中腹には山砲の砲台２基を構築している。

来間島には山砲隊を中心とした警備隊 120 名が常駐し、それに加えて集落の 17 ～ 40 歳の青壮年 36 名が防衛隊として召集される。また、女子青年は看護隊員として動員され、接収された小学校で応急手当や担架の担ぎ方の訓練を受けたほか、１週間交代でクリマガーの東側にある大きな岩影で、玄米つきの作業に従事させられた。

集落内では陣地妨害という理由で、島民住居地の強制撤去をせまられた他、蛋白資源として家畜類が徴発され、耕作地取り上げが行なわれ、兵隊のために漁労班として、魚獲りもさせられた。

島の北側、断崖上に築いた模擬電波探知機への敵機による攻撃の多くが、流れ弾となって５世帯ほどが焼失した。また、昭和 20 年６月には兵舎となっていた小学校の近くに、ロケット弾が６発ほど撃ち込まれた。

中飛行場あたりで効力を発した現地開発の地対空豊式砲からヒントを得たと思われる、野戦用投射器の試作実験が進められ、その試射が山砲隊員ではなく、防衛隊員の手で行われた。試射は暴発事故となり、防衛隊員２人が死亡する事故となった。

※「沖縄県史」（沖縄県史第 10 巻各論編９　沖縄戦記録２　1974 年　沖縄県教育委員会）より、来間島について抜粋。

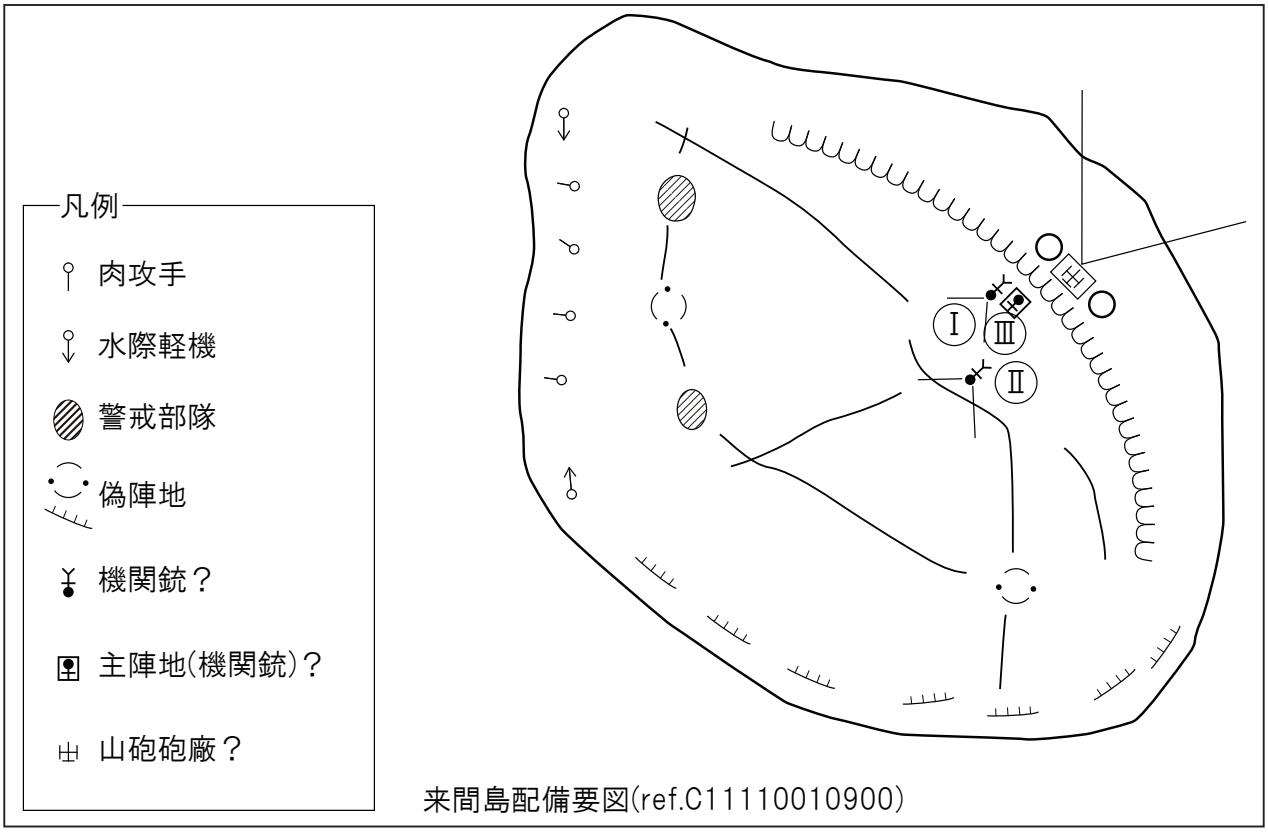
来間国民学校は軍に接収され、100 名ばかりの児童は、仮校舎にあてられた現在の公民館に通うことを余儀なくされた。沿革誌から当時を垣間見ることが出来る。

昭和19年11月２日　教育勅語、戊申詔書、教育者に賜りたる御勅語青少年学徒に賜るたる御勅語を野原越奉遷所へ奉遷。
昭和20年４月２日　入学式挙行。
敵機来襲、機銃掃射により負傷者２名、焼失家屋２軒を出す（部落）。
昭和20年４月５日　機銃掃射により焼失家屋２軒（部落）。
昭和20年５月４日　敵機の艦砲射撃を受く　被害なし。
昭和20年６月７日　学校を中心としてロケット弾６発投下あるも被害軽微。

昭和20年 7 月26日　部落に於て防衛隊演習中（守備隊の指揮による）事故あり投射機の自爆により死亡 2 人をだす。
死亡者＝砂川 芳江、高原 秀雄（以上防衛隊）
病死＝狩俣 実（高二男）

昭和20年 8 月17日　停戦詔書奉読式挙行（守備隊主催）。

昭和20年11月28日　本来間島守備隊隊長以下 120 名引揚、昭和 19 年 10 月 11 日本校兵舎となり教育十分ならざりし所慈に全校児童を一校舎に集めて元通りの教育を進む。



図版 21.　歩兵第三聯隊第二大隊　来間島配備要図（配備要図をトレース加工）

集落内拡大図
N
西原
仲手原
米阿間原
長間浜
長間原
来間
スムリャーミャーカ
青原
入間原
赤字原
宮古田原
東原
多利阿間原
虫払浜
長崎浜
来間里
来間港
来間大橋

第 32. 図 来間の成果図

３．来間の成果一覧

①チフサアブの住民避難壕

昭和の初め、来間島から石灰岩を資材として切り出していた頃（石切り場は島の北部の海岸）、自然壕を改良して火薬の保管場所として利用していたが、戦争の激化から住民の避難壕として使用された。壕内はおよそ 200 人が入れるほどの大きな自然壕である。

※沖埋文 2005 にて報告されている住民避難壕。状況を判りやすくするため、アブ名に住民避難壕と付記した。

②来間の山砲陣地壕群

石灰岩をくりぬいて作られた人口壕である。２つの壕（北西－南東に並んでいる）があり、いずれもコンクリートで補強された銃眼が東側を向いている。

※複数個壕があることから、沖文 2005 の呼称を壕群と改めた。

③東の御嶽の蛸壺とヤマトゥガンの銃座

来間島の東側に位置する東の御嶽の入口にある鳥居の西側に、蛸壺が 1 基残存している。また、この鳥居から北へ 50 メートルほどの場所にあるヤマトゥガン（拝所）の入口に、南西を向いた銃眼が 1 基見られる。

※それぞれの遺構が異なる御嶽・拝所に位置していることから、沖埋文 2005 の「東御嶽のタコ壺と銃座」から、「東の御嶽の蛸壺とヤマトゥガンの銃座」へと呼称を改めた。また、来間島配備要図から銃眼の向きが比定できることより、銃眼の方向の記述を改めた。

④来間国民学校

体験談によると、昭和 19 年 10 月に来間守備隊が兵舎として来間国民学校（現在の来間小学校）校舎を接収し、120 名ほどの兵隊が常駐した。該当する部隊は、山砲兵第 28 聯隊第６中隊の 1 個小隊、歩兵第３聯隊第６中隊とみられる。

その他､昭和20年 6 月 7 日には､学校近隣に６発のロケット弾が撃ち込まれた。女子青年が看護隊員として動員され、接収した校舎で応急手当や担架の担ぎ方の訓練を受けた。など、来間に駐留する軍の中心であったとみられる。

⑤将校宿泊地跡

体験談によると、歩兵第３聯隊第６中隊、中隊長　関戸義朗中尉が宿泊した家の跡。

⑥住民被害地

体験談によると、機銃掃射により茅葺の屋根から火災が発生し、家屋が焼失した。

⑦撤去させられた住宅

体験談によると、「陣地妨害」という理由で住居が強制的に撤去させられた。陣地の構築に障害となることから撤去を命じられたものとみられるが、近隣に陣地とみられる痕跡は見つかっていない。住宅の裏手の高台には水道タンクがあり、戦後に建設されていることから、この地に陣地があったするならば、すでに消失してしまったとも考えられる。

尚､住宅の道向かいに位置するスマヌス（シマ主）御嶽には､「偉い兵隊」がいたとの聞き取りもある（大正 12 年生)。

⑧豊式砲の実射訓練場所

体験談によると、字来間 24 番地の南側にあるナカマカニドゥヌ御嶽前の更地（現在）で、豊式砲の実射訓練を防衛隊隊員にさせたところ、発射に失敗して防衛隊員２名に犠牲者がでた。

⑨玄米つきの作業の場所

体験談によると、女子青年は 1 週間交代で来間井（クリマガー）の東側にある大きな岩影で、玄米つきの作業をさせられていた。

⑩監視所兼通信所跡

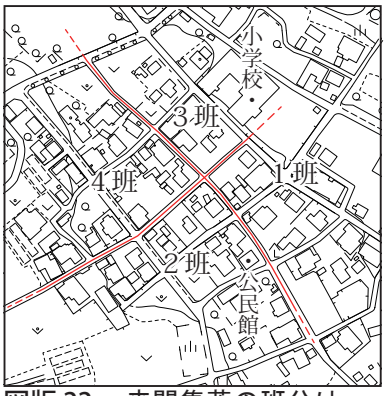
聞き取りによると、遠見台（来間遠見番所）には櫓が建てられ、軍の監視所や通信所として使用されていた（昭和 11 年生）。

また、終戦後の復員前に関戸大尉が遠見台の下あたりに、自身の持っていた日本刀を埋めていったとされている（昭和 15 年生）。

⑪来間里の壕群

聞き取りより得られた情報を元に、現地調査を行ったところ、来間里の集落北側にある遊歩道ぞいに、竪穴の自然壕を流用した壕が２か所確認することができた。

また、聞き取り（昭和 18 年生）からは、竪穴の途中に兵隊は床を作って利用していた。穴は住民も使用していたとあったが、軍民共用とは考えにくく、急な機銃掃射などから身を守るため、咄嗟に飛び込んだのではないかとみられる。



図版 22.　来間集落の班分け

⑫不発弾落下場所

聞き取りによると、集落の祭祀を行う「雨乞い座」付近には、爆弾が落ちたが不発だった（昭和 11 年生）。

⑬兵隊駐屯地跡

現在の煙草乾燥所の近くにはシートーヤー（製糖小屋）があり、そこには兵隊がいた（昭和 15 年生）。

⑭模擬電波塔設置場所

体験談によると、島の北岸に築いた模擬電波探知機への攻撃の多くが、流れ弾となって民家に落ち、５世帯が焼失した（沖縄県史第 10 巻各論編９　沖縄戦記録２　1974 年　沖縄県教育委員会）。

⑮住民避難壕跡（東原）

聞き取りによると、島の東部にある大きな電波塔の近くに、２班の住民が避難する壕があった。その近くには牛や馬を避難させる場所もあった（昭和７年生、10 年生）。

写真 246. ①チフサアブの住民避難壕　洞口

写真 247. ①チフサアブの住民避難壕　洞内

写真 248. ②山砲陣地壕群（壕１　壕口と帯道）

写真 249. ②山砲陣地壕群（壕２　砲口）

写真 250. ③東御嶽のタコ壺

写真 251. ③ヤマトゥガンの銃座

写真 252. ④来間国民学校（現来間小学校）

写真 253. ⑤将校宿泊地跡

写真 254. ⑥住民被害地

写真 255. ⑦撤去させられた住宅

写真 256. ⑦スマヌス御嶽

写真 257. ⑧豊式砲の実射訓練場所

写真 258. ⑨玄米つきの作業の場所

写真 259. ⑩監視所兼通信所跡

写真 260. ⑪来間里の壕群（壕１　壕口）

写真 261. ⑪来間里の壕群（壕２　壕口）

写真 262. ⑫不発弾落下場所

写真 263. ⑬兵隊駐屯地跡

写真 264. ⑭模擬電波塔設置場所

写真 265. ⑮避難壕跡

4. 来間の戦争遺跡

（1）来間の山砲陣地壕群（くりまのさんぽうじんちごうぐん）

①所在地

宮古島市下地字来間来間里

②立地・現況

来間島の北東側に連なる断層崖の下方部にある岩塊を掘り込んで作られた陣地壕群である。

③歴史状況

歩兵第３聯隊第２大隊第６中隊（中隊長:関戸義朗中尉）と、山砲兵第 28 聯隊第６中隊の１個小隊（小隊長：芋坪（うつぼ）賢吉中尉）の計 120 名ほどが「来間島守備隊」として配備されている。

守備隊は集落の北東側一帯に陣地を構築し、断崖上部に模擬電波探知機を、断崖の下に山砲陣地をそれぞれ構築している。

④遺構の特徴

本遺構は「沖埋文 2005」にて報告されている陣地壕である。

沖埋文の報告書によると、「チフサアブから約 100 メートル南東に位置する、石灰岩塊の内部を刳り貫いた人工壕。現在では２か所が確認されており、いずれも東側にコンクリートで固められた銃眼が開いている。現状においては雑木で覆われて視界が悪いが、かつては雑木を刈っていたため、宮古島南西一部を広く見渡すことができたようである。

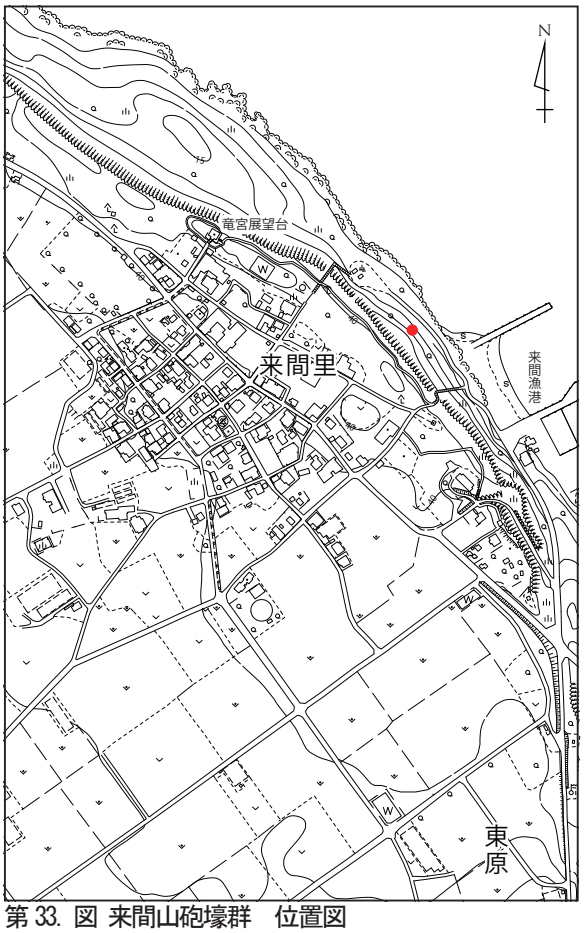
２か所共に内部はおおよそ４メートル四方の広さで、側壁には燭台と思われる棚や、部材を嵌め込んだ痕と思われる溝が走っている。床面には約１メートルの長さで素堀りの溝を見ることができる。入口は西側に開口しており、造りは雑である。入口に至るまでに鍵の手状に右折する造りとなっている。

この壕近くには来間島展望台から下る古道が近くを通っていることから、来間集落との関係が窺える。西側周辺には平坦に造成した広場が展開しており、かつて旧日本軍の施設があったとされている。当時、来間島には 120 名の軍隊が配置されていたとあり、この山砲壕とその周辺は何らかの関わりがあるものと考えられる。因みに来間島展望台の真下に重火機等の武器を隠していたとの聞き取りが得られている。」と報告されている。

※尚、複数個の壕があることから、沖文 2005 の呼称を壕群に改めた。

今回、確認作業のため改めて現地調査を行ったところ、新たに蛸壺２か所と監視壕と思われる小さな壕をひとつ発見した。

来間泉前の広場から断層崖へ向かって雑木林の中を、30 メートルほどに分け入った崖下の岩場の陰に、ひとつ目の蛸壺１がある。



第 33. 図 来間山砲壕群　位置図

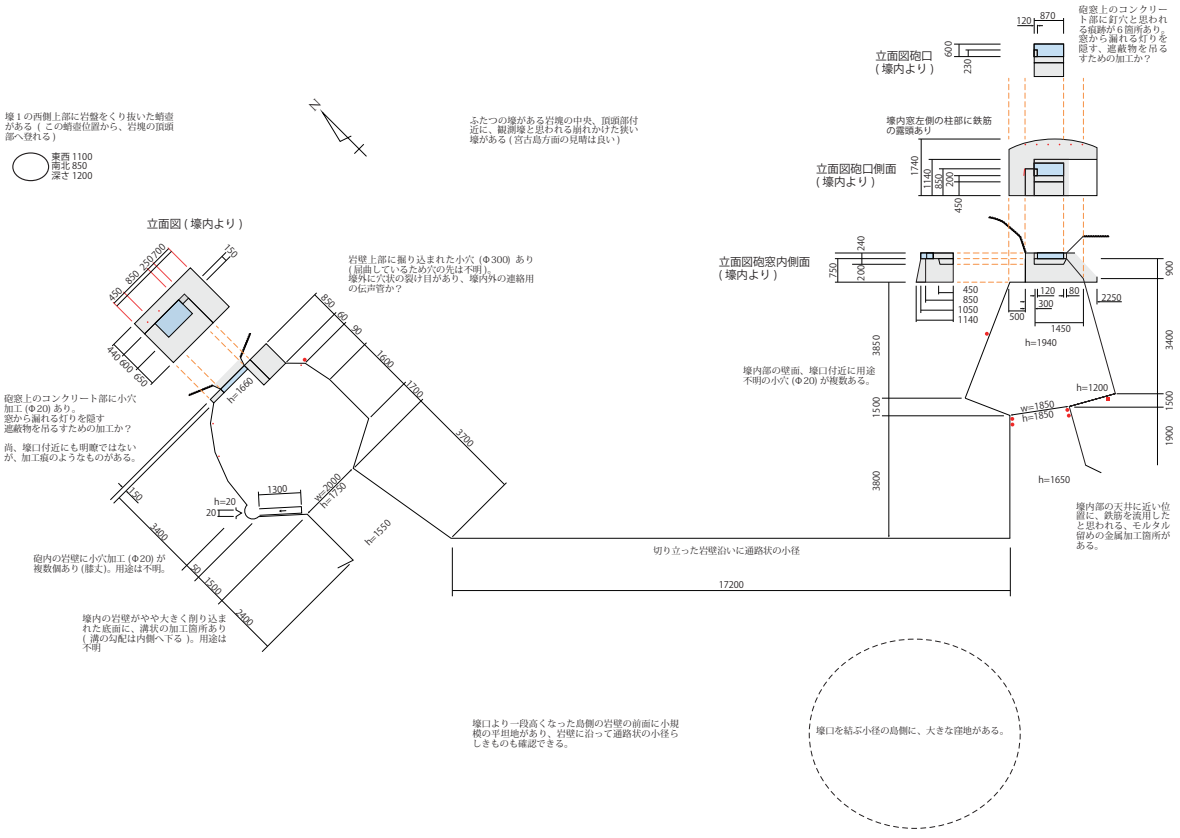
蛸壺の口は東西 0.65 ×南北 0.75 メートルぼとの円形で、深さはおよそ 0.6 メートル掘り込まれている。蛸壺の口の北西側に幅 0.45 メートル、長さ 1 メートルほどの浅いスロープが切られており、南東方向を向いて入壕する。南側（右）は 3 メートルほどの切り立った岩がある。

蛸壺 1 から山砲壕へは、断崖に沿って登ってゆくルートと、岩棚の手前に沿って進むルートが取れるが、手前を進むと山砲壕の砲口側へと出る。

壕の掘り込まれている岩塊を 3 メートルほど直登すると、上部の平場に到達し、そこに蛸壺 2 がある。蛸壺の口は東西 1.1 ×南北 0.85 メートルほどの円形で、深さは 1.2 メートルほどあるが、中は堆積物でやや埋まっている。

この蛸壺 2 のさらに 4 メートルほど上方の岩場に登ったところに、崩れかけた小さな横穴の壕がある。位置的に南東方向（宮古島与那覇前浜方面）の眺望もよく、後述する山砲壕の上方に位置していることから、着弾観測などを目的とした監視壕だったのではないかと推察する。

これら蛸壺 2、監視壕の直下に山砲壕が位置しており、沖埋文の調査時と特に変化は見られなかった。壕口側は断崖に面しており、場所によって平場や凹地、帯道など地形を整形して陣地化している様子が見て取れる。



第 34. 図 来間山砲壕群　簡易計測図

写真 266.　来間泉か山砲陣地へ

写真 267.　蛸壺１（全景）

写真 268.　蛸壺１（正面が南東）

写真 269.　蛸壺１（上方より、左が南東）

写真 270.　蛸壺２（近景）

写真 271.　蛸壺２（上方より）

写真 272.　観測壕

写真 273.　観測壕からの眺め

写真 274.　山砲壕１（壕口）

写真 275.　山砲壕１（砲口）

写真 276.　山砲壕１（壕内の溝）

写真 277.　山砲壕１（壕内の小孔）

写真 278.　山砲壕１（壕内に残る煤痕）

写真 279.　山砲壕１（壕内から壕口を望む）

写真 280.　山砲壕間を結ぶ帯道（壕１→壕２）

写真 281.　山砲壕間を結ぶ帯道（壕２→壕１）

写真 282.　山砲壕２（壕口）

写真 283.　山砲壕２（壕内と砲口）

写真 284.　山砲壕２（砲口の構造）

写真 285.　山砲壕２（砲口外観）

写真 286.　壕口前の窪地

写真 287.　断崖沿いにある石積

（２）東の御嶽の蛸壺とヤマトゥガンの銃座（あがいぬうたきのたこつぼとやまとぅがんのじゅうざ）

①所在地

宮古島市下地字来間阿多利阿間原・来間里

②立地・現況

来間集落の東方、来間島離島振興総合センターの東側の道を挟み、斜向かいにある東の御嶽（小字・阿多利阿間原）と、北側の道向かいにあるヤマトゥガン（小字・来間里）にそれぞれ遺構がある。

③歴史状況

歩兵第３聯隊第２大隊第６中隊（中隊長:関戸義朗中尉）と、山砲兵第 28 聯隊第６中隊の１個小隊（小隊長：苧坪賢吉中尉）の計 120 名ほどの「来間島守備隊」として配備されている。

守備隊は集落の北東側一帯に陣地を構築し、断崖上部に模擬電波探知機を、断崖の下に山砲陣地をそれぞれ構築している。

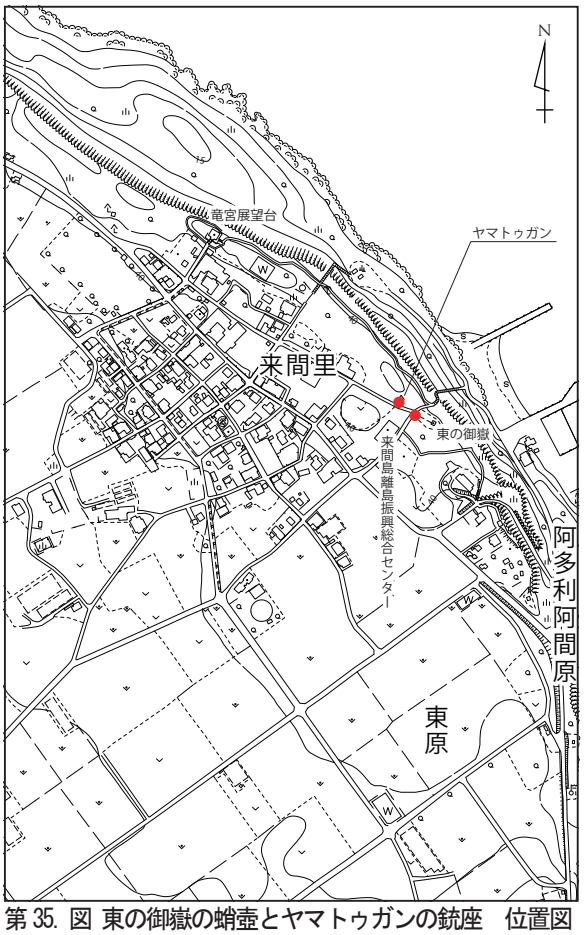
④遺構の特徴

本遺構は「沖埋文 2005」にて報告されている壕である。

沖埋文の報告書によると、「来間集落の東側には東御嶽がある。集落の発祥地として来間島民に崇められており、現在も重要な行事はこの場所で執り行われるが、戦時中には御嶽周辺にタコ壺や銃眼が配置されていた。その場所や配置数は不明であるが、現在は東御嶽入口にある鳥居の西側にタコ壺が１基のみ残っている。雑木等で埋まっているが、とくに崩れは見られない。現状では直径１メートル、深さ 0.5 メートルの竪穴となっている。

この鳥居から北へ 50 メートルの場所にヤマトゥガンと呼ばれる拝所があり、その入口に北西－南東軸の銃眼が１基見られる。一枚岩を真ん中で縦に割って約 0.3 メートルほどの隙間をつくっている。その間から銃口を出し、南西側にある道路方向に発砲することができる。一枚岩は人一人ようやく隠れることができる程度の大きさである。この銃眼から更に北側には石積みの遠見台があり、宮古島西海岸の眺望が利く。そのため、戦時中は住民がこの場所から敵機の襲来に備えて監視したという証言が得られている。また、遠見台脇から住民避難壕のチフサアブへ至る古道があったとされる。」と、報告されている。

※それぞれの遺構の所在が異なる御嶽・拝所に位置していることから、沖文 2005 の「東御嶽のタコ壺と銃座」から、「東の御嶽の蛸壺とヤマトゥガンの銃座」へと呼称を改めた。また、来間島配備要図から銃眼の向きが比定できることにより、軸方向、銃眼の向き、眺望の方向等の方位の記述を改めた。



第 35. 図 東の御嶽の蛸壺とヤマトゥガンの銃座　位置図

写真 288.　東の御嶽の（遠景）

写真 289.　東の御嶽（近景）

写真 290.　東の御嶽の蛸壺

写真 291.　ヤマトゥガンの銃座

写真 292.　ヤマトゥガン全景

（３）チフサアブの住民避難壕（ちふさあぶのじゅうみんひなんごう）

①所在地

宮古島市下地字来間西原

②立地・現況

来間島北東側に連なる断崖の中腹にある自然壕。

③歴史状況

昭和初期に砕石用の火薬庫として改良されたが、戦中は戦禍拡大に伴い、住民避難壕として活用された。

④遺構の特徴

本遺構は「沖埋文 2005」にて報告されている住民避難壕である。

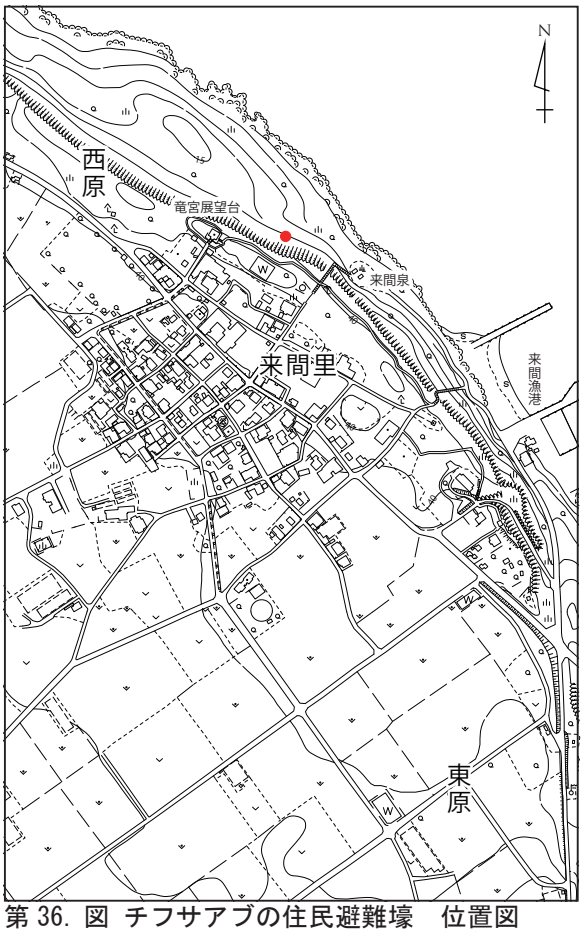
沖埋文の報告書によると、「来間島東側海岸と来間集落との間にある石灰岩崖下に形成された自然壕。来間島山砲陣地壕から北へ約 100 メートルの場所にある。

壕は下方へ落ち込んで行き、入口も下り道の途中に設けられている。入口は東側に向かって開口しており、開口部はコンクリートで造られている。縦 0.9 メートル×横 0.5 メートルの長方形のコンクリートで固められた入口が設けられている。この入口の扉と思われるコンクリートの板が内部の入口近くに放置されている。昭和の初め頃に来間島から石灰岩を用材として切り出していた時期があり、この場所は火薬の保管場所として利用されていた。その時にコンクリートで入口が造られたとある。

内部は広く、おおよそ 200 名は入れる程の大きさである。床は東から西側に向かって傾斜しており、入口からかなりの土砂が流入している。最奥部は横穴がいくつか見られるが、全て自然の鍾乳石から成っている。別名「千人ガマ」と呼称される。

戦時中は、来間島の住民が西側崖上にある遠見台近くを通る古道を下って、この壕まで避難したとある。現在、その道は利用されておらず、下草で覆われており僅かにその痕跡が窺われる程度である。」と、報告されている。

※報告書文中の寸法の表記を、本書の基本単位としてるメートルに換算した。
※沖埋文 2005 の報告では、単に洞窟名の「チフサアブ」と呼称していたが、使用状況から「チフサアブの住民避難壕」と呼称を改めた。



第 36. 図 チフサアブの住民避難壕　位置図

写真 293.　チフサアブへの入口

写真 294.　チフサアブ（洞口）

写真 295.　チフサアブ(加工された洞口)

写真 296.　チフサアブ洞内（入口を望む）

写真 297.　チフサアブ洞内(散乱した部材)

写真 298.　チフサアブ洞内(入口から奥)

写真 299.　チフサアブ洞内(鍾乳石)

（4）来間里の壕群（くりまざとのごうぐん）

①所在地

宮古島市下地字来間来間里

②立地・現況

集落北東側に連なる断崖の頂端部に、東の松の木展望台から西の竜宮展望台まで、観光用の遊歩道が続き、この遊歩道沿いの山側の藪の中に壕は位置している。尚、遊歩道の東端にある、松の木展望台で集落と港を結ぶ古道「パチャ階段」に接し、集落中ほどにある断崖下の来間泉を結ぶ古道「カー階段」と遊歩道は交差している。

③歴史状況

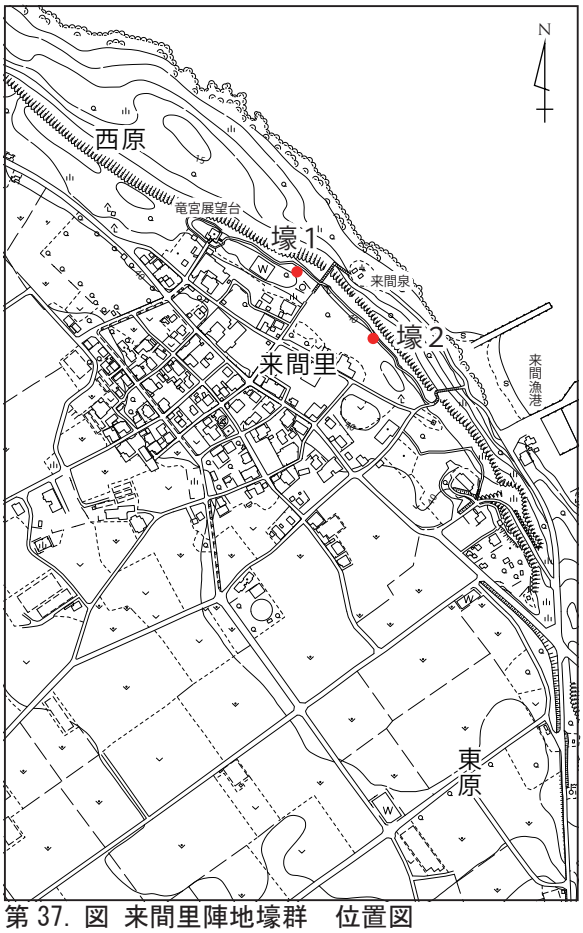
歩兵第３聯隊第２大隊第６中隊（中隊長:関戸義朗中尉）と、山砲兵第 28 聯隊第６中隊の１個小隊（小隊長：荸坪賢吉中尉）の計 120 名ほどが「来間島守備隊」として配備されている。

守備隊は集落の北東側一帯に陣地を構築し、断崖上部に模擬電波探知機を、断崖の下に山砲陣地をそれぞれ構築している。

④遺構の特徴

聞き取り（昭和 18 年生）によると、壕は深めの竪穴で、穴の途中に床を構築して兵隊が利用していた（使用用途は不明）。また、壕には住民も避難したと証言があったが、軍民共用とは考えにくく、急な機銃掃射などから身を守るため、咄嗟に飛び込んだのではないかとみられる。

こうした聞き取りから付近を調査した結果、集落と来間井を結ぶ階段の古道と、来間島断層崖に沿って作られた観光用の遊歩道の交差部の左右（北西－南東軸）にひとつずつ、計２か所（壕１、壕２）の壕を確認した。また、その後の補充調査において、遊歩道の東方に壕３を発見した。より自然の洞穴に近い形状の壕２や壕３は、住民避難壕の可能性も否めない。



第 37. 図 来間里陣地壕群　位置図

壕１

集落から来間井へと降りる古道の西側、水道タンクのほぼ直下に位置しており、壕口は遊歩道に隣接して竪穴が開口している。壕口は幅およそ 2.0 メートル、奥行きおよそ 1.4 メートルの自然の洞口を加工しているようである。

ほぼ開口した壕口の大きさのまま、竪穴がおよそ 4.5 メートルほど落ち込み一段目の底を形成している。尚、壕口の左（東側）、およそ 1.6 メートルの深さの位置に小さな平場があり、遊歩道が建設されるまでは地上（遊歩道付近の標高レベル）まで、斜路のようなものがあったのではないかと推察される。

この平場を利用して壕内へと降下し、一段目の底に到達すると、山側（集落の位置する崖側）に沿ったような形で北西方向へ横穴が開いている。穴の大きさは幅約 0.5 メートル、高さ約 1.5 メートルで、約 2.4 メートルほど傾斜路が続き、岩の裂け目に出る。

裂け目の延長は約 11 メートルあり、最大幅もおよそ 5 メートルある。裂け目であるため、上部は開口しており、地上（遊歩道のある標高レベル）までおよそ 8 メートルの深さがある。尚、遊歩道からおよそ 2 メートルほど藪に入った位置となるため、遊歩道からこの裂け目を目視することは出来ない。

裂け目の奥に幅約 0.6 メートルほどの洞口が下方に向いて開いている。岩質が滑りやすい鍾乳石であることから、降りるために手足をホールドしやすくするための刻みが加工されている。鍾乳化した洞穴は奥行きにして 14 メートルほど下っているが、洞穴のこの先は非常に足元が滑りやすく、非常に危険を伴うため調査はここで断念した。

簡易計測の現状であるが、壕口から裂け目、さらに洞穴の深度を簡単に足してみても、20 メートル近く下っている。地形図から見る地表の標高はおよそ 36 メートルであったことから、崖面をかなり下方まで下っていることになる。崖下にはすでに報告さている山砲陣地があり、仮に崖面に開口部があれば、壕内を通り、集落にある本部と山砲を結ぶ秘匿通路であったことも想定できる。補足として、位置的にこの洞穴の下方と合致はしないが、山砲陣地壕の近くの壁面に、土砂にほぼ埋もれた穴の痕跡にも見える窪みがある。

壕 2

来間井へと降りる西側の古道の石段と遊歩道の交差点を、東に 100 メートルほど進んだ遊歩道沿いに開口している。遊歩道からはやや斜めに取付通路のような地形が形成されており、その先に位置する岩の隙間に開いた洞口には繁茂した木々で狭められている。壕 1 と同様に自然の洞穴を利用した壕と見られるが、洞口周辺にあまり加工痕などは見られない。

尚、付記すると、この壕 2 の断崖直下付近に山砲陣地壕が位置している。

壕 3

東の御嶽から松の木展望台（来間井へ通じる東側の古道の降り口でもある）へ進み、展望台脇から始まる遊歩道を 70 メートルほど西進した山側に開口している。歩道から 1.5 メートルほど下るとクレバス状に開いた洞穴の裂け目がある。狭い洞穴内へは階段状に加工が施されている以外は自然の地形のまま、下方へと続いている。

尚、付記すると、この壕 3 の山側は銃座のあるヤマトゥガンが位置している。

遊歩道沿いに発見されたこれらの壕周辺を注意深く観察すると、断崖そばにある大きな岩影から、宮古島を遠望することが可能な小さな平場や、崖の上方へと続く廃道のような掘割地形が散見された。また、竜宮展望台の基礎部分にもコンクリートと金網で閉鎖された窪みのようなものが見られた。この断崖上に観光用の遊歩道が構築されたことで、戦争時の痕跡が消失している可能性も大きい事に加え、来間島における当時の情報が不足しているため、これらの痕跡のようなものが、どの程度戦争に関連するものかどうかを判断することは出来ない。

写真 300.　壕１　　壕口（遊歩道より）

写真 301.　壕１　　壕口脇のコンクリート？

写真 302.　壕１　　竪穴部分

写真 303.　壕１　　竪穴の底にある平場

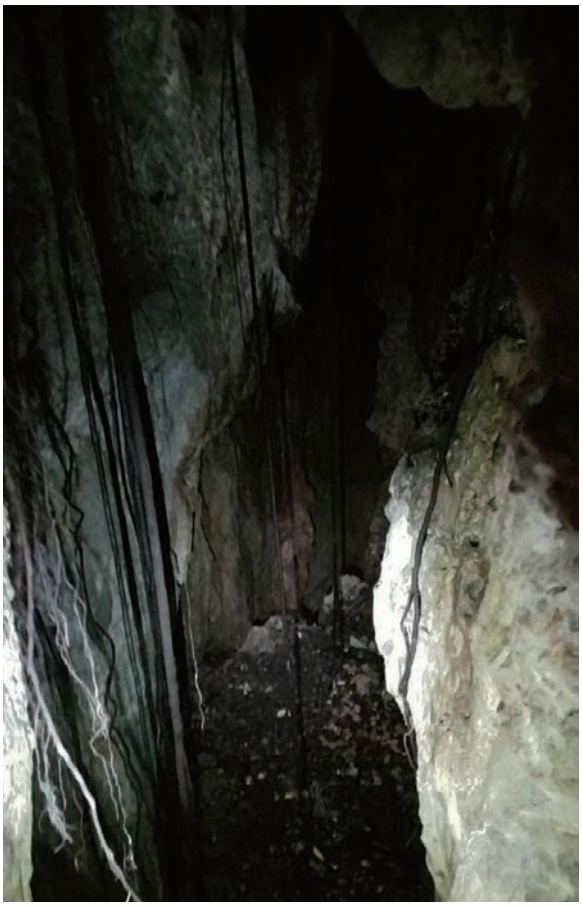


写真 304.　壕１　　平場の奥、岩の裂け目の入口

写真 305.　壕１　　裂け目の途中の平場

写真 306.　壕１　裂け目の上から（入口側）

写真 307.　壕１　裂け目の上部から（洞口手前）

写真 308.　壕１　洞口から最深部を望む

写真 309.　壕２　裂け目の奥にある洞口

写真 310.　壕３　洞口（階段状の加工がある）

写真 311.　遊歩道沿いにある深い窪み

写真 312.　遊歩道からの眺望（対岸は与那覇前浜）

第8節　下地地区の戦争遺跡のまとめ

番号	所在地	名　称	使用主体		形　態		調査状況(報告)			備　考
			軍関係	住民	自然壕	人工物壕	新規追加	未確認	消滅	
1	下地与那覇	与那覇大道原の住民避難壕		○	○		○			
2	下地与那覇	皆愛海岸の壕群					○			
3	下地上地	宮星山の陣地壕群	○			○	○			
4	下地洲鎌	ツヌジ御嶽の忠魂碑				○				※
5	下地洲鎌	棚根の壕群	○			○	○			
6	下地洲鎌	外崎御嶽の壕	○			○	○			
7	下地嘉手苅	イリノソコの陣地壕群跡	○			○	○		○	記録保存(2017)
8	下地嘉手苅	ウインヌンミ御嶽の壕	○			○	○			
9	下地嘉手苅	嘉手苅ウプ御嶽の壕群	○			○	○			
10	下地嘉手苅	嘉手苅一地の壕	○			○	○			
11	下地嘉手苅	嘉手苅スガ子の壕					○			
12	下地嘉手苅	山根海岸の壕群	○			○	○			注1
13	下地川満	ヌーズマー御嶽の壕	○			○	○			
14	下地川満	川満与那原の壕	○			○	○			
15	下地来間	来間の山砲陣地壕群	○			○	◎			※注2
16	下地来間	東の御嶽の蛸壺とヤマトゥガンの銃座	○			○				※注2
17	下地来間	チフサアブの住民避難壕			○					※注2
18	下地来間	来間里の壕群	○	△	○		○			注3
下地地区　小計			（新規 14、追加 1）				15	0	1	

注１　山根海岸の所在地は、厳密には上野字宮国山根に位置している。山根は地理的に嘉手苅入江地区に隣接しており、住民の生活圏もほぼ一体化してることから、関係の深い下地地区にて報告した。

注２　沖埋文2005で報告の「来間の山砲陣地壕」、「東の御嶽の蛸壺と銃座」、「チフサアブ」として報告されているが、実状に即した名称として「来間の山砲陣地壕群」(複数の壕がある)、「東の御嶽の蛸壺とヤマトゥガンの銃座」(異なる呼称の御嶽に位置している)、「チフサアブの住民避難壕」(住民主体の避難壕である)と改題して報告する。

注３　聞き取りによると、軍が使用していた証言と、住民が避難した証言が混在していた。

※　2005年沖縄県立埋蔵文化財センターにて報告済み(沖埋文2005)

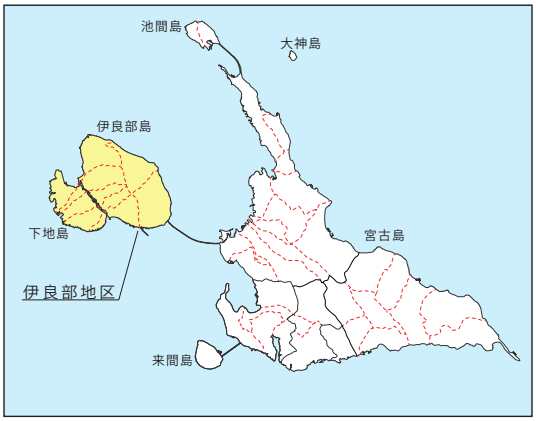
◎　報告済み遺構の新規追加

第４章　伊良部地区の戦争遺跡

第1節　伊良部地区の概要

１．伊良部地区の地理、歴史的環境

伊良部地区は宮古島の北西部に位置する離島で、伊良部島と下地島の隣接したふたつの島からなり、太平洋戦争時は旧宮古郡伊良部村(町制は1982年)として、佐和田、長浜、国仲、仲地、伊良部の南区(通称名：伊良部)と、池間添、前里添の北区(通称：佐良浜)の７字を村域としていた。伊良部島と下地島の間は、細長い海(地元では入江と呼ばれている)で隔てられおり、なかよね橋(佐和田)、たいこ橋(長浜)、国仲橋、仲地橋、伊良部橋、乗瀬橋の６本の橋で結ばれている。



第 36. 図 伊良部地区の位置図

伊良部は宮古島とは海を隔てた離島であるため、平良港－佐良浜港間に定期航路が設置されていたが、2015年に全長3,540メートルの伊良部大橋が開通したため、航路は廃止された。

伊良部地区の人口は5,175人(宮古島市全域54,478人 /2018年9月30日現在)。尚、現在は2005年に宮古地域の５市町村が合併し、伊良部全域が宮古島市となっている。

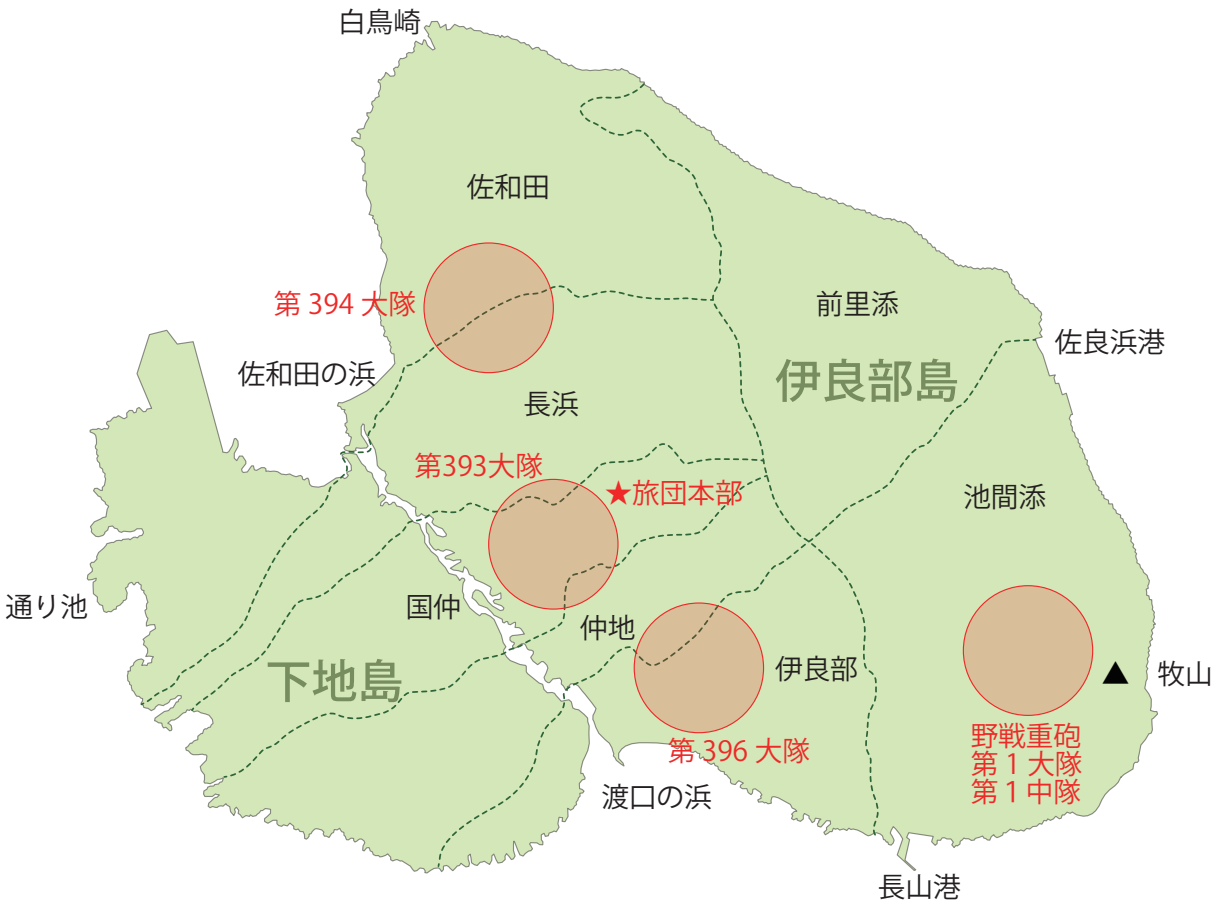
2005年に沖縄県立埋蔵文化財センターの実施した分布調査では、牧山陣地壕、国仲の避難壕、佐良浜の避難壕、カンギダツ壕・カヤッファ壕、伊良部の忠魂碑の５つの戦争遺跡が報告されている(沖埋文2005)。

本調査では伊良部地区を“佐和田・長浜”、“国仲”、“伊良部・仲地”、“池間添・前里添”、“下地島”の５つのエリアに区分して報告する。

※長浜は佐和田から、仲地は伊良部から、それぞれ 1766 年に分村した字であることから。また、池間添・前里添は、ふたつの字をまとめた地域の呼称として、古くから“佐良浜”と呼ばれていることから。互いの字域が隣り合い、密接な関係にあるため、単一の字で括らず、あわせてひとつのエリアとした。

※下地島には佐和田、長浜、国仲、伊良部、仲地の各字域があるが、便宜上の区分として、本調査では独自に下地島をひとつのエリアとして区分して取り上げた。

※伊良部島の人々の体感的な方位 (民俗方位) は、主に白鳥崎から長山港の軸を (下地島空港の滑走路と同じ方向) を東西の軸としていることから、島の東側を占める池間添・前里添の佐良浜を北区、島の西側の佐和田・長浜・国仲・仲地・伊良部の５字を南区と呼ぶ (さらに細かく、佐和田・長浜・国仲を西区、伊良部・仲地を東区と呼ぶこともある)。民俗方位と磁北の東西南北が、おおよそ 90 度ほど傾いている。



図版 23.　伊良部地区の部隊展開図（概念図）

２．伊良部地区の沖縄戦時の概況

多賀哲四郎少将の率いる独立混成第59旅団（碧部隊・以下第59旅団）は昭和19年８月15日満州公主嶺（こうしゅれい）（現・吉林省）で編成され大本営命令によって第32軍に編入された。昭和19年９月14日伊良部島に来駐し、伊良部島の防衛にあたる。同部隊の兵力は約4,000名と言われ、伊良部村民の約半分に匹敵する大兵力であった。

編成された部隊は、独立歩兵第393大隊福永少佐は国仲、第394大隊武田登大尉は佐和田、第396大隊竹内大尉は伊良部、旅団砲兵隊遠藤大尉、工兵隊美馬少佐、通信隊清谷大尉、他に野戦重砲兵1個中隊、山砲兵第28聯隊１個中隊も指揮下に入った（独歩第395大隊は第59旅団の指揮下を離れ、東地区に展開、第60旅団の指揮下に入る）。

通信隊が先発隊として７月２日に来駐し、伊良部国民学校校舎五教室を兵舎に転用した。９月14日に伊良部へ上陸した碧部隊も、伊良部国民学校校舎の17教室を旅団本部と通信隊の兵舎に転用した。また、佐良浜国民学校校舎は、野戦病院に転用されたことから、両校とも校舎を軍に接収され、学校で授業をすることが出来なくなった。この他、移駐した部隊は集落内の森や御嶽周辺などに、兵舎の設営にとりかかった。

第59旅団は、下地島及び伊良部島南岸を敵の上陸予想地点に選定し、同方面に部隊を重点配備すると共に長山高地の牧山（標高88メートル）に野戦重砲15糎榴弾砲３門を秘匿、平良方面に上陸する敵の背後から攻撃する手筈になっていた。しかし、集団（第28師団本部）命令により、主力は６月始め機帆船、舟

艇などによって宮古島平良港に転進、北区の守備に就いた。この海上機動は敵哨戒機の目を避けて夜間を利用して行われ、くり舟まで動員されて、輸送には輜重兵第28聯隊が担当した。主力の転進後は独歩第396大隊長竹内隆大尉の指揮する伊良部支隊(およそ歩兵１個大隊)が残り、同島の守備に任じた。同支隊の伊良部島防衛についての方針は次のようなものであった。

（１）下地島を主体に数多くの偽陣地（偽兵配置）を構築し、敵の主攻撃を同方面に誘致し挺身切り込み等を敢行し敵戦力の消耗を図る。

（２）伊良部東海岸の水際を堅固に占有し敵の上陸を阻止、同地区を死守し宮古島主力の戦闘を有利ならしむ。

※注　本項は独歩第 396 大隊長竹内隆大尉の資料による

参考資料

・先島群島作戦（宮古篇）（1975 年）
・伊良部村史（1978 年）
・沖縄県史（1974 年）

３．国民学校沿革誌について

学校沿革誌とは学校が独自に記録してきた門外不出の史料で､学校で起きた事柄を詳細に記録している。

伊良部島にあった、伊良部国民学校と佐良浜国民学校の学校沿革誌の中から、戦争に関連する事象を抜粋した。

⑴伊良部国民学校沿革誌

当時の伊良部国民学校は、国仲集落にあって伊良部村役場に隣接していたこともあり、独立混成第 59 旅団来駐と同時に、本部として利用された。

明治19年11月27日　伊良部小学校として創立。
昭和19年 ９月14日　軍部、本日より学校に宿泊す(本日より職員室東の教室の外は全部疎開さる)。
昭和19年 ９月16日　各字に民家を借用し教室となす(午後よりその整理)。
昭和19年 ９月18日　学童集団疎開を奨励す。
昭和19年 ９月30日　今村見習士官より　職員に対して衛生講和あり。
昭和19年10月 ２日　軍人援護強調週間に於ける行事の決定。
昭和19年10月 ５日　軍人援護強調週間　戦没軍人家庭へ堆肥を以って慰問す。
昭和19年10月 ７日　戦勝祈願祭。
昭和19年10月10日　午前７時30分空襲警報発令。午前８時、午後１時空襲あり。午後８時警報解除。
昭和19年10月16日　全職員午後３時登校、御真影奉護所の壕を掘る。
昭和19年10月20日　本日より学童草刈(村内の山砲隊へ)。
昭和19年10月30日　各部落に於いて教育に関する勅語奉読式挙行。
昭和19年10月31日　学校御奉載の御真影を宮古郡御真影奉遷所へ奉遷す。
昭和19年11月27日　全校児童は「木の実(クロンギの実)」を採集し軍部に納入す。
昭和19年12月 ８日　各学級で大詔奉載日記念式挙行。軍慰安の学芸会を開く。
昭和19年12月28日　全校児童ヤラブの実を割り軍部に供出す。

昭和20年 1月 1日　遥拝式挙行。
昭和20年 1月12日　故大舛大尉の記念講和をなす。
昭和20年 2月15日　全校児童、校舎擬装をなす。
昭和20年 3月 1日　午前7時、午後4時半頃空襲ありたるも、校舎に異常なし、職員児童異常なし。
昭和20年 3月27日　空襲あり。軍部の一部は当校より移動。
昭和20年 3月28日　本日軍部は当校より全部移動す。
昭和20年 3月31日　野瀬曹長より毒瓦斯に対する吸収罐制作に対する講和あり。
昭和20年 4月 1日　初等科5年以上は各字の部落民と共に海岸防護用の防塁を築く。
空襲警報発令中にして空襲ありたるも被害を受けず、初等科4年以下児童、入学式並びに始業式を挙行なるも空襲甚だしく挙行困難となり無期延期となる。
昭和20年 4月 2日　空襲警報発令中にして終日空襲ありたるも被害なし。初等科4年以下は空襲警報発令中で授業行わず。
昭和20年 4月 3日　終日空襲あり。午前中は機関銃掃射の為、校舎は各教室に凡そ7～8か所の弾痕あり。尚運動場(東と中に)約1メートル置きに1個宛の弾痕あり。午後は爆弾投下され(学校西と北)爆風の為硝子は殆んど全面的に破壊されたり。尚押入れの図書箱、其他の物品消耗品多大の損害あり。
昭和20年 4月 4日　終日空襲ありたるも被害なし。
午後6時全職員登校して小梨中尉より弾の性能に付き講和あり。
※小梨(貞三)中尉…独立混成第59旅団本部副官に比定
昭和20年 4月 5日　終日空襲ありたるも被害なし。
昭和20年 4月 6日　終日空襲ありたるも被害なし。
昭和20年 4月 7日　終日空襲ありたるも被害あり。校舎各教室に約5～6個宛の弾痕あり。運動場には1メートル置き位に弾痕ありたり。
昭和20年 4月 8日　終日空襲ありたるも被害なし。
昭和20年 4月 9日　空襲あり。初等科4年以下は授業行わず。
昭和20年 4月10日　防塁作業は中止し各字民と共に食糧増産をなす。空襲あるも被害なし。
昭和20年 4月11日　防塁作業は中止し各字民と共に食糧増産をなす。空襲あるも被害なし。
昭和20年 4月12日　職員並びに児童初5以上は防塁作業をなし初4以下は授業行わず。空襲警報発令中。野戦病院本日より教室を使用す。
昭和20年 5月 2日　昨日の豪雨の為防空壕に待避しておきし非常用持出箱(重要書類、教科書、半紙)一切に浸水し使用堪えざるものあり。
昭和20年 5月17日　終日空襲ありて(校舎にロケット砲2発落下して教室に多少損害受けたり)。
昭和20年 6月17日　平良町より当村へ疎開民の誘導の為全職員は高等科生を引率して佐良浜へ。午後8時半、佐良浜港へ着、直ちに疎開者の手荷物を運びながら一人で一家族の者に疎開者の住むべき家まで誘導す。終了時刻は午前2時、疎開者は　全員感激涙にいっぱいであった。
昭和20年 6月19日　疎開者誘導の為佐良浜へ。
昭和20年 7月14日　字佐和田の高等科児童は三上隊長山陣地構築作業協力なす。引率者　渡久山知照、吉フミ、與那覇シゲ、渡久山トミ、渡久山アイ子、與那覇セツ、他字の児童及び初3以上は堆肥原料蒐集督動のため教職員出勤す。

※三上隊…野重第１連隊第１大隊第１中隊長三上鎭男大尉に比定

昭和20年　7月15日　仲地高等科児童は長山陣地作業へ。
昭和20年　7月24日　初１より高等科までの全児童はバッタを捕り軍部へ供出す
昭和20年　7月27日　初４以上熟せるアダンの実を採集して軍部へ供出。
昭和20年　8月14日　全児童野草採集し軍部へ供出。
昭和20年　8月30日　御真影奉遷所に於いて勅語・詔書奉焼式を挙行す。
昭和20年　9月　6日　本日より校舎修理を開始す。
昭和20年　9月　9日　午後５時より碧部隊竹内部隊主催の戦没将士の合同慰霊祭を学校記念運動場に於いて挙行す。高等科児童、全職員参列
昭和20年11月　5日　軍部の依頼によりヤラブの実を採集す。軍部が校舎修繕開始す。

⑵佐良浜国民学校沿革誌

佐良浜国民学校は、伊良部尋常小学校の分校として、明治 20 年 7 月 4 日に開校し、明治 27 年 4 月 2 日佐良浜尋常小学校となる。

昭和19年10月31日　御真影及勅語、詔書、謄本を野原の奉遷所に奉遷す。
昭和20年　4月　昭和 20 年度学級編制及教員配置表。編制表は空襲下の編制表にして教室には防空壕を使用せり。
昭和20年　4月～8月　空襲及日本軍兵舎等のため校舎屋根惨酷に破壊さる。
昭和20年　8月14日　大東亜戦争終結大詔下り児童も本校に帰す。ポッダム会議に於て「日本は天皇護持を前提として」枢軸国（日・独・伊）は連合国（米・英・露）に降伏することを宣言さる。
昭和20年10月　野原越に奉遷せる御真影は文部大臣の指示により奉焼却す。

第2節　佐和田・長浜

1．佐和田・長浜の地理的環境

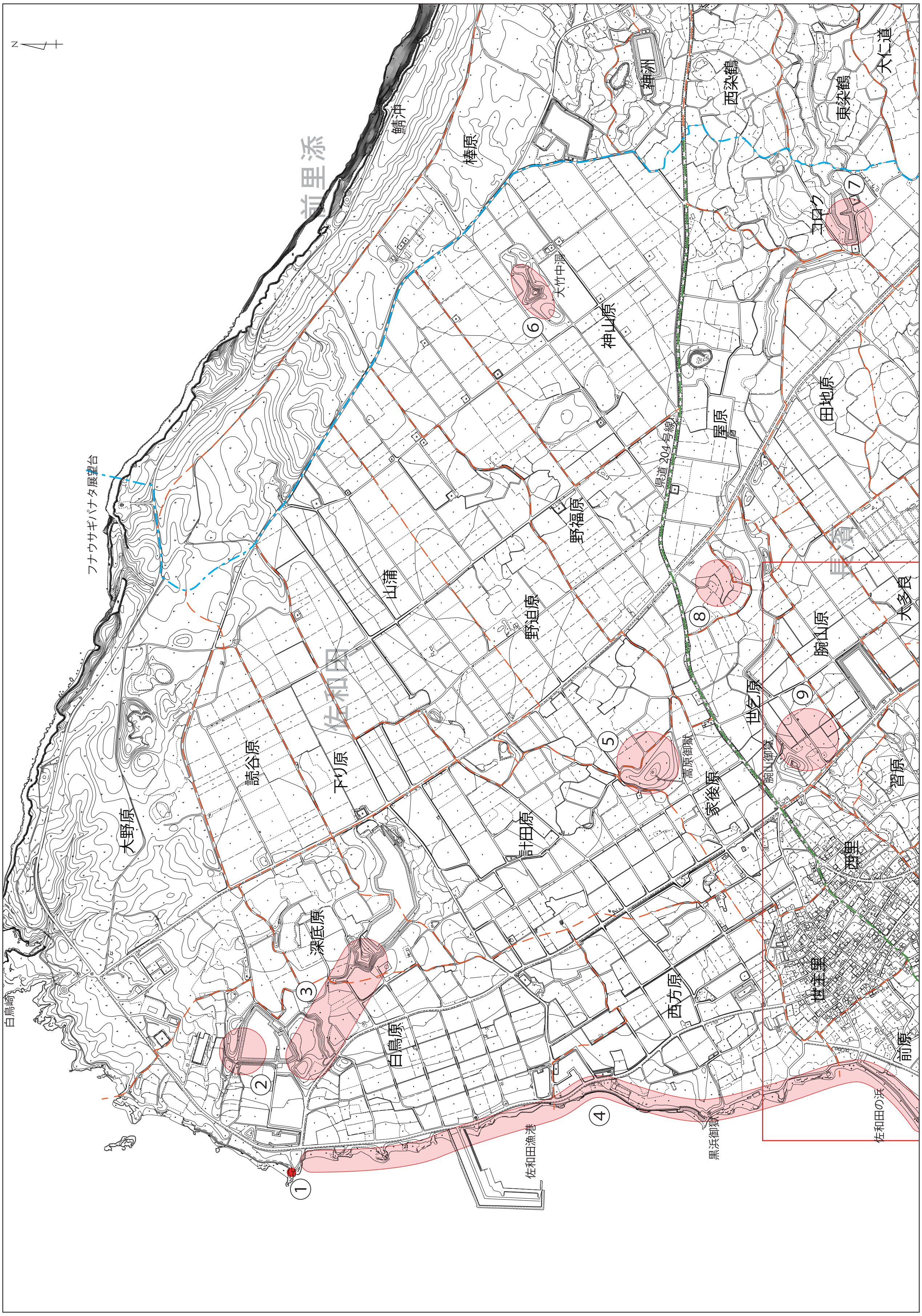
佐和田・長浜は、伊良部島の北西域に位置し、伊良部島の「南区」に区分されている。伊良部島最北端の白鳥崎、神山原のウプタキナカ洞穴、佐和田礁湖、黒浜御嶽などを含む、広大な字域を有しているが、その大半は圃場整備の進んだ耕作地で、人々は伊良部島と下地島を隔てる「入江」に並行した五箇里道（県道 204 号線の一部）沿いに暮らしている。また、佐和田、長浜いずれも集落東側にある小さな丘に、それぞれ嵩原御嶽（佐和田ユークイ）、腕山御嶽（長浜ユークイ）と呼ぶ、集落を代表する御嶽がある。

2．佐和田・長浜の沖縄戦時の概況

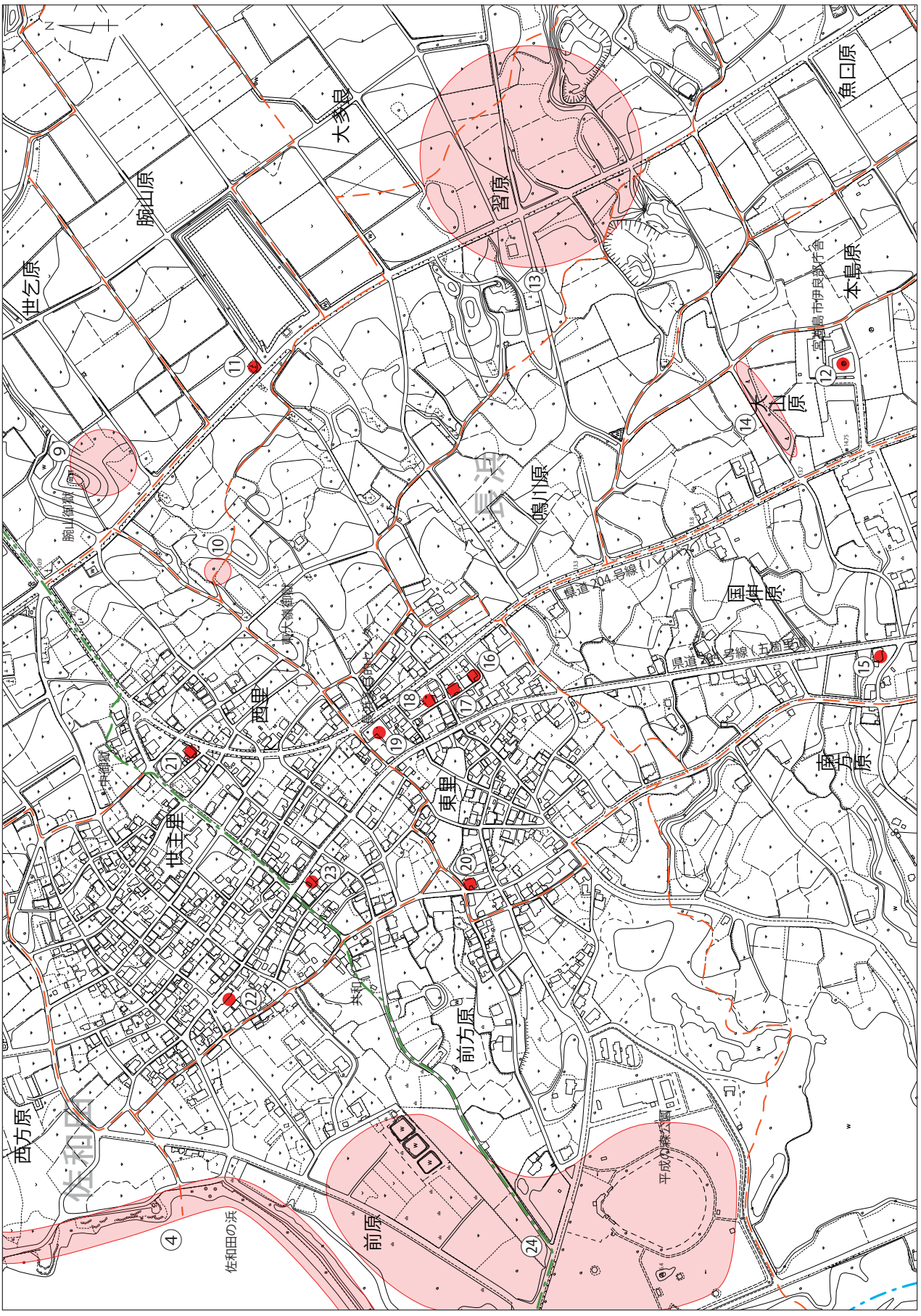
聞き取り調査などから、佐和田・長浜に配備された独歩第 394 大隊は、佐和田や長浜の御嶽を中心に駐屯していた。長浜青年会場（現・長浜多目的センター）は部隊の炊事場として使用され、青年団の女子は、米つきの作業にかり出された。

佐和田・長浜の特徴のひとつには、伊良部島西海岸からの敵の上陸阻止のための防塁構築がある。この防塁はフィリピンが陥落した昭和 20 年３月頃から、敵の来航必至となり、敵戦車の上陸阻止のための防塁の造築が計画された。防塁は地面を掘り下げると構築に時間を要するとのことで、幅２メートル、高さ２メートルに積み上げる石積が計画され、下地島の西海岸からナガピタ周辺（現在の下地島空港の滑走路がある埋立地付近）と、佐和田の浜の西端から白鳥浜（現在の佐和田漁港北方）までを造築することになり、各集落の戸数に按分されて、距離と場所が割り当てられた。防塁の造築は急を要するということで、国民学校の上級生に至るまで動員されている。

大軍が駐留した宮古島では、物資の輸送が困難になり、食料事情が急迫し、調味料である塩の欠乏が目立ってきた。そこで佐和田、長浜の製塩組合員に師団本部の経理部から徴用令状が届き、同時に経理部から将校以下８名くらいの兵隊が派遣され、佐和田集落の民家に常泊し、組合員の指揮監督にあたった。宮古の人口の半数に近い部隊への塩の供給は並大抵ではなく、薪には、村有地や個人所有の山林を、手当たり次第に伐採して使用した。昼夜を分かたぬ突貫作業の製塩作業は、重労働で、奴隷のごとくの使役に組合員と隊員とのトラブルは絶えなかった。また、その他にも漁夫の徴用があり、碧部隊の将校たちの副食物に充てるため、漁業に従事させられている。



第 37. 図　佐和田・長浜の成果図（北部広域）



第 38. 図　佐和田・長浜の成果図（集落中心部）

３．佐和田・長浜の調査成果一覧

①佐和田白鳥原の壕（佐和田）

今回の調査で、白鳥原の一周道路沿いの小さな岬に壕を確認した。

②サケタリ洞跡（佐和田）

聞き取りによると、島の北部にある自然洞窟に、闇酒を隠していたと言われている。戦時中の関わりについては不明（昭和 23 年生）。

※詳細不明。資料によると、近隣にはサンシンガマ、クスマブガマもあった。圃場整備で消失か？（情報は特になし）。

③深底（ふかすく）原部隊駐留地跡（佐和田）

宮古島地区防禦配備図よると、現在、深底集水池や白鳥３号集水池となっているあたりには、部隊が駐留していたと考えられる。

④防塁跡（佐和田）

聞き取りによると、防塁は現在の外周道路から、佐和田の浜付近にかけて構築された。戦後、外周道路の建設に防塁の石積みを資材として利用した（昭和５年生）。

⑤嵩原（たかはら）御嶽の壕（佐和田）

聞き取りによると、嵩原御嶽（佐和田ユークイ）には１個中隊が幕営していた（昭和４年生）。

※独歩第 394 大隊第 1 中隊（隊長：飯島誠大尉）に比定。

⑥ウプタキナカ（佐和田）

聞き取りによると、西区の住民の避難場所だった。（昭和 16 年生）

※伊良部島を北（佐良浜）・東・西の３区分した場合、佐和田・長浜・国仲をまとめて西区、伊良部・仲地を東区と呼ぶ。尚、西区と東区を合わせ、伊良部５字をまとめて呼ぶ場合は南区となる。

⑦コロクの部隊駐留地跡（佐和田）

体験談によると、国仲と佐良浜の中間あたりにあるコロク嶺の部隊に、夜間に水を運んだ。

集落の井戸から汲み上げた水、ドラム缶３本分を馬車に積んで運んだ（沖縄県史より）。

⑧屋原部隊駐留地跡（ 佐和田 ）

聞き取りによると、兵隊が駐留していた（昭和５年生）。

⑨幕舎跡（長浜）

聞き取りによると、腕山御嶽（長浜ユークイ）の近くには兵舎があった（昭和３年生、４年生）。

※複数の聞き取りにより、この場所には独歩第 394 大隊（大隊長：武田豊大尉）が駐留したと考えられる。

⑩長浜古墓群（長浜）

聞き取りによると、林の中にある古墓は、近隣住人の避難壕であった（昭和５年生）。

※詳細な位置は未明。ただし、現地調査により、それらしき古墓群が散見された。

⑪腕山集水地脇の軍人墓（長浜）

小高い丘にある琉球石灰岩を削りだして作られた墓地に、島外で戦死した軍人の名前を記述した墓板がある。

島尻恵忠陸軍伍長、昭和 20 年２月 10 日　比島（フィリピン）呂宋（ルソン）島にて戦死。

⑫ラッパ吹きの訓練所跡

聞き取りによると、現在の伊良部支所のあたりは、ラッパ吹きの訓練場だった（昭和 10 年生）。

※詳細位置不明

⑬大多良・習原壕跡（長浜）

聞き取りによると、大多良には斜面にトンネルのような横穴の壕を軍が構築していた（昭和 10 年生）。

※詳細位置未明

⑭長浜大山原の住民避難壕跡（長浜）

聞き取りによると、長浜集落の隣組で、現在の伊良部支所の西側にユイマールで避難壕を掘った。横穴で 20 ～ 30 メートルくらいはあった（昭和 4 年生）。

⑮長浜国仲原の部隊駐留地跡（長浜）

中央歯科のあたりに部隊が駐留していた（昭和 12 年生）。

⑯製塩隊の宿泊地（長浜）

聞き取りによると、地元の住民で製塩隊や漁労班を組織。長浜 102 番地は製塩隊の班長宅で、製塩隊の兵隊が宿泊していた（昭和 4 年生）。

⑰軍の倉庫（長浜）

聞き取りによると、軍は長浜 100 番地の民家を借りて倉庫としていた（昭和 10 年生）。

⑱ロケット弾落下場所（長浜）

聞き取りによると、長浜 101 番地に爆弾が落ちたが不発だった。その隣の家にもロケット弾が落ち、大きなヤシの木が折れた（長浜 141 番地）。他にも、長浜 200、佐和田 1483、佐和田 1479 などに爆弾が落ちた（昭和 10 年生）。

⑲軍の炊事場（長浜）

聞き取りによると、旧青年会場（現・長浜多目的センター）は軍の炊事場だった（昭和 4 年生、6 年生）。

⑳長浜東里の住民避難壕（長浜）

聞き取りによると、長浜 10 番地の井戸は内部に防空壕を構築し、家族らが避難していた。（昭和 8 年生）

㉑長浜西里の住民避難壕（長浜）

聞き取りによると、長浜 281-1 番地にある井戸は、井戸の内部に避難壕を設置し、その家族が避難した。複数の聞き取りで、他にも井戸に避難壕を設置したとの情報が得られた（昭和 7 年生）。

㉒世主里（ゆぬすざと）の住民避難壕（佐和田）

聞き取りによると、佐和田 1500 番地の井戸は内部に防空壕を構築し、家族らが避難していた（昭和 23 年生）。

㉓衛生兵寄宿場所（長浜）

聞き取りによると、長浜 190 番地あたりには、衛生兵が寄宿。その家に爆弾が落ちた（昭和 9 年生）。

㉔塩田跡（佐和田）

聞き取りによると、佐和田の塩田は軍が関与していた（昭和 9 年生）。

写真 283.　伊良部島の製塩作業（「先島群島作戦」より）

写真 284.　佐和田の塩田（米軍撮影空中写真 1962）

写真 285. ①佐和田白鳥原の壕（全景）

写真 286. ①佐和田白鳥原の壕（壕口）

写真 287. ②サケタリ洞跡？（白鳥第３集水池）

写真 288. ③深底原部隊駐留地跡（西側）

写真 289. ③深底原部隊駐留地跡（東側）

写真 290. ④防塁跡（佐和田の浜付近）

写真 291. ④防塁跡（佐和田漁港付近）

写真 292. ⑤嵩原御嶽の壕（壕１）

写真 293. ⑥ウプタキナカ（大竹中）

写真 294. ⑦コロクの部隊駐留地跡(染鶴集水池)

写真 295. ⑧屋原部隊駐留地跡（岩盤の残地）

写真 296. ⑧屋原部隊駐留地跡（未整理地）

写真 297. ⑨幕舎跡（長浜御獄東側）

写真 298. ⑩長浜古墓群（長浜）

写真 299. ⑩長浜古墓群（長浜）

写真 300. ⑪腕山集水地脇の軍人墓

写真 301. ⑪腕山集水地脇の軍人墓

写真 302. ⑫ラッパ吹きの訓練所跡

写真 303. ⑬大多良・習原壕跡（農道脇）

写真 304. ⑬大多良・習原壕跡（墓）

写真 305. ⑬大多良・習原壕跡（整備中）

写真 306. ⑭長浜大山原の住民避難壕跡

写真 307. ⑮長浜国仲原の部隊駐留地跡

写真 308. ⑯製塩隊の宿泊地（長浜東里）

写真 309. ⑰軍の倉庫（長浜東里）

写真 310. ⑱ロケット弾落下場所（長浜東里）

写真 311. ⑲軍の炊事場（長浜多目的センター）

写真 312. ⑳長浜東里の住民避難壕（井戸口）

写真 313. ㉑長浜西里の住民避難壕（井戸口）

写真 314. ㉒世主里の住民避難壕（井戸口）

写真 315. ㉓衛生兵寄宿場所（長浜西里）

写真 316. ㉔塩田跡（佐和田）

４．佐和田・長浜の戦争遺跡

（１）佐和田白鳥原の壕（さわだしらとりばるのごう）

①所在地

宮古島市伊良部字佐和田白鳥原

②立地・現況

伊良部島の北西部、佐和田漁港と白鳥岬の中間に位置し、佐和田礁湖内の海岸地帯にある、小さな岬状の岩場に構築されている。

③歴史状況

沖縄戦時、伊良部地区においては、独立混成第 59 旅団、野戦重砲兵第 1 連隊第 1 大隊第 1 中隊、山砲兵第 28 連隊第 1 大隊第 3 中隊などの部隊が配備されていたことが確認できる。佐和田・長浜の地域では、主に御嶽周辺を拠点として、独立混成第 59 旅団（通称：碧部隊。以下、第 59 旅団）第 394 大隊が展開していたことが聞き取り調査等で確認されている。

昭和 20 年 3 月に入ると、当該地の伊良部島及び下地島西海岸は、敵の侵攻必至となり、敵戦車上陸を阻止するため、石積による防塁の構築が急ピッチで進められた。

④遺構の特徴

佐和田礁湖に面した、西向きの小さなビーチに接した岬状の岩場に構築された陣地は、南側に向いて開口している。壕口（羨道口）は約 1 .6 メートル程の高さのノッチ上にあり、満潮時にはビーチ部分は海に没するが、羨道が海面に接することはない。

羨道部の全長はおよそ 6.3 メートルで、緩やかに傾斜している。羨道の床面から約 0.5 ～ 0.8 メートルの高さの位置までは、羨道の上部に比べ左右におよそ 0.2 メートルずつ広く構築されており、全幅は約 2 メートルを越す幅があり、奥へ行くに従い狭く、およそ 0.65 メートルほどになっている。羨道の上部は約 0.5 メートルほどの幅で開削されている。

羨道の奥の約 0.3 メートルほど落ち込んだ位置に、約 3 メートル四方の部屋がある。部屋は奥から流入した砂で満たされているため、正確な部屋の落ち込みは不明。部屋の奥に上方へ続く幅約 1 メートルほどのトンネル部があるが、上部から流入する砂でほぼ埋没している。

また、羨道と部屋の接続部、部屋に向かって左側に、簡易な階段が設けられており、羨道の上へ登ることが出来､灌木の斜面を経て岬の上方へ登ることが可能となっている。羨道の階段部から丘を登った所は、西方の海が見晴らせる広場と思しき場所があった。

壕の周辺を調査したところ、岩場の北側は大量に堆積した砂の斜面になっており、壕の奥にあった砂に埋もれたトンネル部の上部付近には、トンネル開口部の疑定地と見られる窪地があった。

本陣地壕は佐和田礁湖から上陸が予想される浜沿いに構築されたとされる、防塁（現在は浜に沿った周遊道路付近に構築された）のほぼ北端と考えられ、上陸する敵の監視と、上陸時に敵を横撃するための陣地壕と想定されるが、比定できる資料がなく推測の域を出ない。

集水池の造成を含む耕地整理が行われる以前は、本壕の東方にサケタリ洞、サンシンガマ、クスマブガマなどの自然壕があったことに加え､「宮古島防禦配備図」によると、この附近には速射砲陣地が配備されていたことから、第 394 大隊の防禦拠点のひとつであったと考えられる。

写真 317. 壕全景（羨道口）

写真 318. 羨道

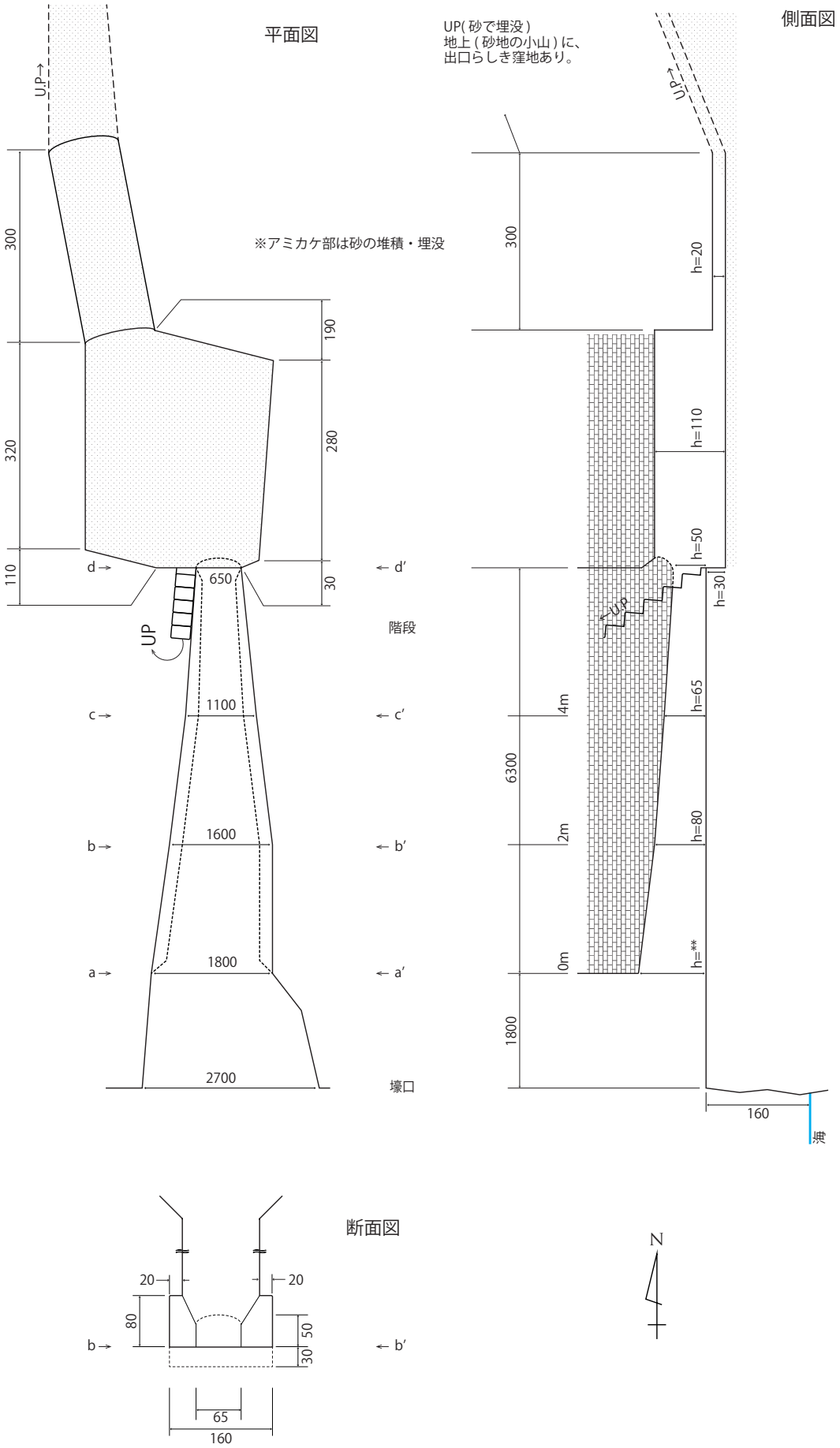
写真 319. 部屋と奥のトンネル部

写真 320. 部屋の入口と階段部

写真 321. トンネル開口部とみられる窪地

写真 322. 岬北側の丘

第 39. 図 佐和田白鳥原の壕　位置図



第 40. 図 佐和田白鳥原の壕　構造図（簡易測量）

（２）嵩原御嶽の壕群（たかはらうたきのごうぐん）

①所在地

宮古島市伊良部字佐和田家後原

②立地・現況

佐和田集落の東方、県道 90 号線の北側に位置し、村建てに通じる伝承を持つ由緒ある御嶽で、「佐和田ユークイ」とも称され、松などの豊かな植生を有する小山となっている。壕群はこの御嶽の北東側斜面を利用して構築されている。

③歴史状況

沖縄戦時、伊良部地区においては、独立混成第 59 旅団、野戦重砲兵第 1 連隊第 1 大隊第 1 中隊、山砲兵第 28 連隊第 1 大隊第 3 中隊などの部隊が配備されていたことが確認できる。佐和田・長浜の地域では、主に御嶽周辺を拠点として、独立混成第 59 旅団（通称：碧部隊）第 394 大隊が展開。とりわけ、タケダ隊、イイジマ隊、ヒラタ隊、ナカムラ隊などの部隊が、御嶽周辺に棲息していたことが聞き取り調査などで確認されている。

④遺構の特徴

今回の調査で、御嶽の北東側の斜面に少なくとも 3 基の壕を確認した。これらの壕は御嶽周辺に兵舎を構築し、同地に駐留した独歩第 394 大隊に関連する壕と考えられる。

最も北側に位置する壕 1 の壕口は、幅が 0.7 メートル、高さは 1.6 メートルほどあり、北東に開口し、全長は 10 メートル強である。壕口から斜め下へと掘られており、壕奥までに 5 メートル近く下っている。壕内は幅が 1 ～ 1.2 メートル、高さが 1.6 ～ 1.8 メートルほどあり、壕口より広い。掘り込みは全体に少し荒く、最深部は高さが 0.78 メートルしかないことから、壕としては未完成と考えられる。

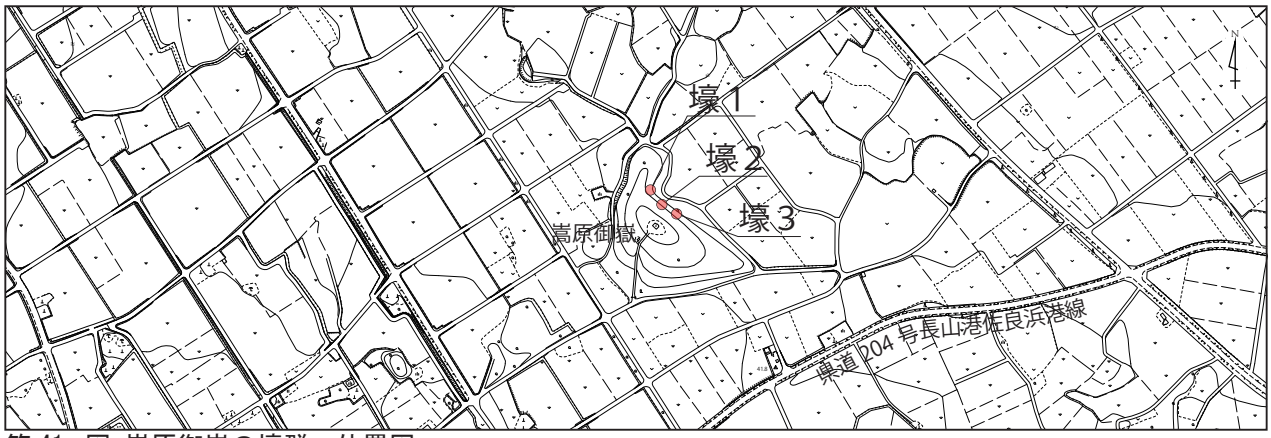
壕 2 は北に向いて開口している。壕口の幅は約 2.5 メートル、高さが約 1.3 メートルと広く、自然の岩の窪みを壕として活用しているようである。壕は南向きにおよそ 4 メートルほど斜坑で、奥ほど狭くなっている。壕口の西（壕に向かって右）には、小ぶりの孔が開いており、奥行きは約 1 メートルほどある。

また、壕の正面には、壕口を隠すように自然の地形を利用した羨道が続いており、およそ 8 メートル先に人が数人しゃがみこめるような窪地がある。

壕 3 は斜面の岩場が少し飛び出した角に、北東を向いた壕口があり、南西方向に向かって斜坑が掘られている。長さ約 5 メートル、深さ約 2 メートルほど下ったところに、幅 2 メートル、長さ 4.3 メートル、高さ 2 メートルの空間がある。壕の作りは岩質もあるようだが、やや粗く若干の崩落はみられるものの、部隊の退避壕としては充分の広さがあるように見て取れる。

壕口には壕への出入りを円滑にするためか、浅い帯道が、北西方向に約 5 メートルほど構築されている。

この他、斜面の岩陰を利用した古墓も、壕周辺に複数点在しており、展開していた部隊の退避壕として利用されていた可能性も考えられる。また、壕 2 と壕 3 の間には、岩場の斜面にある壕間を結ぶ帯道のように、整地されている区間も一部確認できた。



第 41. 図 嵩原御嶽の壕群　位置図

写真 323.　壕 1　 壕口

写真 324.　壕 1　 壕内から壕口を見上げる

写真 325.　壕 1　 最深部

写真 326.　壕２　壕口

写真 327.　壕２　壕内

写真 328.　壕２　壕口前の羨道

写真 329.　壕２　羨道先の窪地

写真 330.　壕間を繋ぐ帯道と見られる。

写真 331.　壕３　壕口

写真 332.　壕３　壕内

写真 333.　壕３　最深部

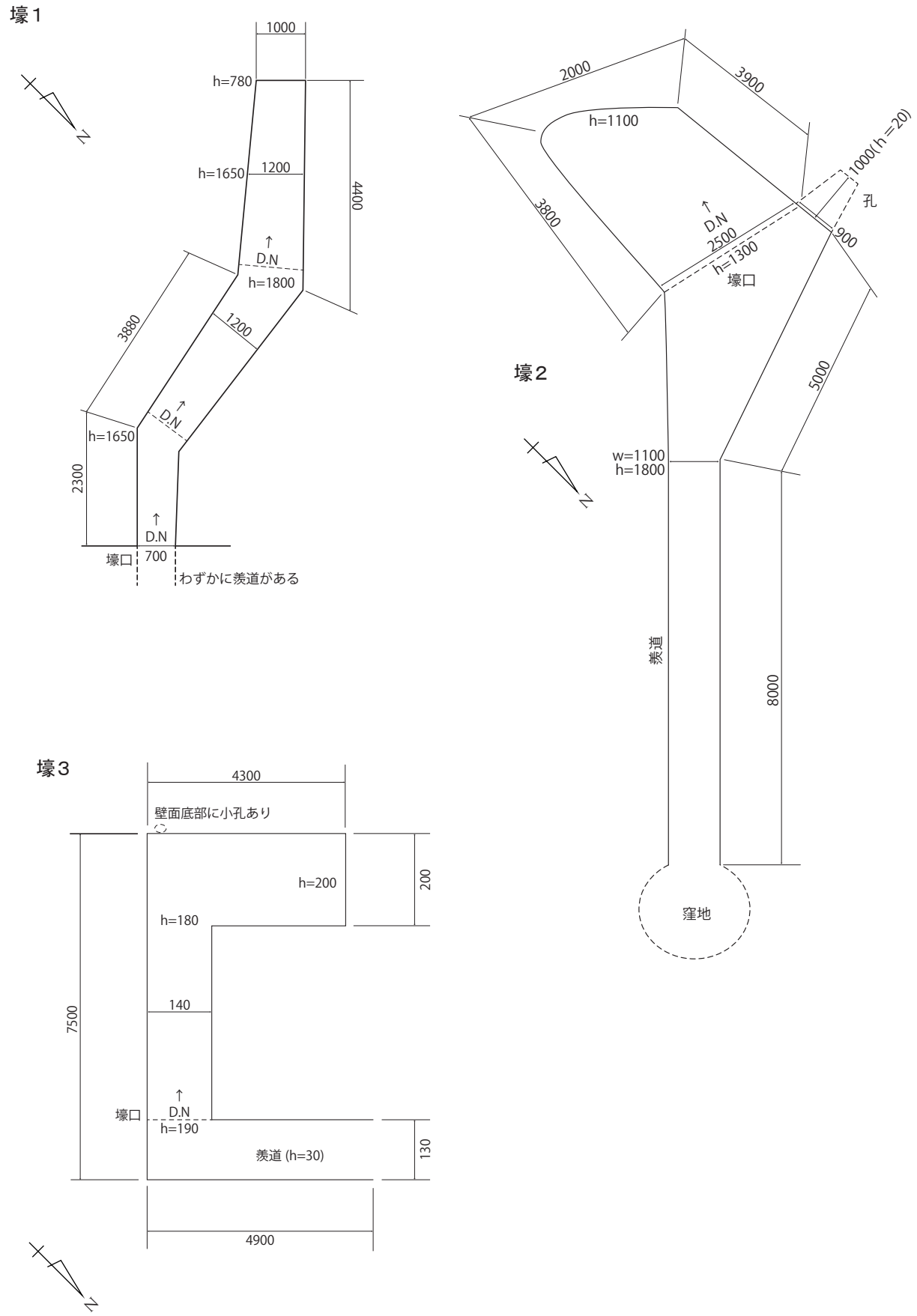
写真 334.　古墓①

写真 335.　古墓②

写真 336.　古墓③

写真 337.　古墓④

写真 338.　嵩原御嶽北東側斜面



第 42. 図　嵩原御嶽の壕群　簡易平面図

（３）伊良部南区の住民避難壕群（いらぶみなみくのじゅうみんひなんごう）

1）長浜東里の住民避難壕（ながはまあずりざとのじゅうみんひなんごう）

2）長浜西里の住民避難壕（ながはまいりざとのじゅうみんひなんごう）

3）佐和田世主里の住民避難壕（さわだゆぬすざとのじゅうみんひなんごう）

4）仲地屋敷の住民避難壕（なかちやしきのじゅうみんひなんごう）

①所在地

宮古島市伊良部字佐和田世主里／長浜東里・西里／仲地屋敷

②立地・現況

西向きの緩斜面に広がる佐和田・長浜集落内には、数多くの井戸（特に個人宅用の掘り抜き井戸）があり、集落近隣の山や崖に避難壕を掘るよりも手近なことから、掘り抜き井戸の壁面に横穴を構築して、家族の避難壕として使用していた。

④遺構の特徴

避難壕として利用している掘り抜きの井戸は、水源までの深さが 5 メートル未満の浅いものから、10 メートル超となる深いものまでさまざまである。これは集落内の標高差に起因し、標高の高い内陸側の井戸ほど水面深度が深いものとなっている。

1) 長浜東里

長浜 10 番地の住宅にある掘り抜き井戸。井戸の直径は 0.7 メートルほどで、水面までの深さはおよそ 8 メートル (水量はあまりない) あり、琉球石灰岩を掘り抜いている。避難壕は井戸底の直前の高さで東向き（家屋の下に向かっている）に掘り込まれている。

2) 長浜西里

長浜 281-1 番地の住宅にある掘り抜き井戸。井戸の直径は 0.7 メートルほどで、水面までの深さはおよそ 12 メートルあり、琉球石灰岩を掘り抜いている。避難壕は井戸口から 3.5 メートルほどの壁面

第 43. 図　佐和田･長浜の住民避難壕　位置図（★は聞き取りから得られた、井戸に掘られた避難壕の位置）

にあり、東向き（家屋の下に向かっている）に掘り込まれている。

壕の形状は、壕口の高さ 0.7 メートル、幅 1 メートルで、壕内は高さ 1 メートル、幅 1 メートル、奥行き 2.15 メートルあり、井戸との境界となる壕口から 0.3 メートル下がって構築され、井戸への転落防止の役目も果たしている。聞き取りによると、井戸への避難には、壕口の高さの位置に井戸の壁面に切り込みを施し、井戸内に板を渡して足場を構築し、老人や子供が安全に避難できるよう配慮されている。また、井戸内は壁面には掘削時に加工された足かけの窪みが残されており、避難の際の足場として活用された。

他にも、近隣の住宅（道路拡張により消失）にあった井戸は、共同の洞泉「アカンタガー」（現在は掘り抜き型に改修され、井戸口はコンクリートで蓋がされている）までつながるトンネルを構築していたとの聞き取りがあった。

3) 佐和田世主里

佐和田 1500 番地の酒造所内にある井戸は、聞き取りによると、敷地東側の庭（現在はコンクリート張の駐車スペース）から井戸の側壁面に向かって斜坑を構築し、井戸の竪穴外壁側に家族が避難できる壕を構築。井戸側にも開口しており、井戸口から開口部が確認できる（水面は開口部より下にある）。

酒造用に現用中の井戸であることから、実際に壕の調査はできなかった。

その他、聞き取りにより得られた井戸内に構築された住民避難壕は、佐和田 218-1 番地（住居改築に伴い、現在は蓋をしてしまった）。仲地 126-1 番地（井戸の脇に壕を構築。井戸に向かって掘り進めたが完成はしなかった）、仲地 201 番地（戦後、子どものころ遊んだ。蓋を設置済み）。

4) 仲地屋敷

調査中に寄せられた情報によると、仲地 201 番地の住宅の庭先にある井戸は、井戸の内壁にトンネルを掘り込み、東側の隣家（仲地 198 番地）にある井戸（現在は物置兼車庫を建てたため、井戸口は封鎖され空気抜きのパイプのみ）まで繋がっているという。水面深度まで 10 メートル弱あり、内壁には足掛もないため現地調査は行えていないが、住民からの聞き取りでは、縄梯子を使って降りていたらしいとの証言を得た。

また、もうひとつ東の住宅（仲地 197 番地）にも井戸内壁に防空壕が構築されていると、情報が得られた。

第 44. 図　仲地の住民避難壕　位置図（★は聞き取りから得られた、井戸に掘られた避難壕の位置）

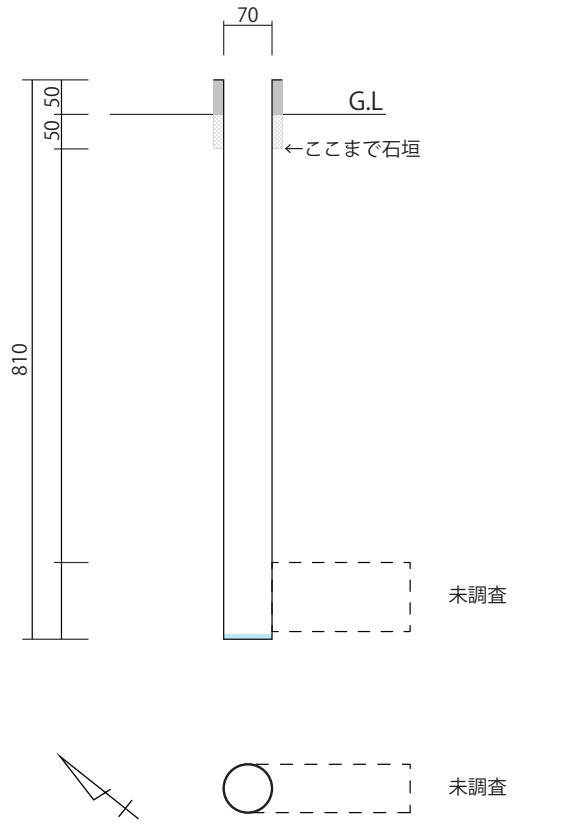
写真 339. 仲地屋敷の住民避難壕（画像右に壕口）

写真 340.　長浜東里の住民避難壕(画像上側に壕口)

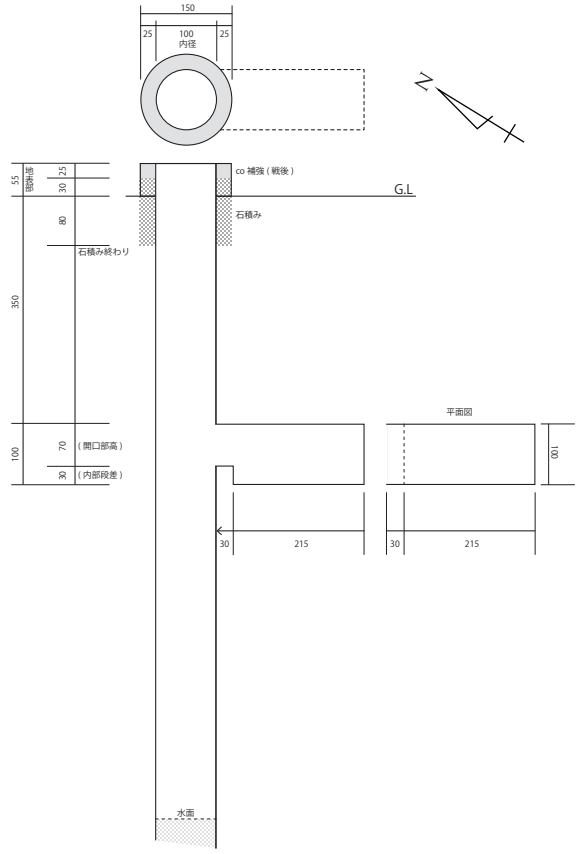
写真 341.　長浜西里の住民避難壕（壕口から井戸を望む）

写真 342.　長浜西里の住民避難壕（壕口から井戸を望む）

写真 343.　世主里の住民避難壕（画像左上に壕口）



第 45. 図　長浜東里の住民避難壕（模式図）



第 46. 図　長浜西里の住民避難壕（模式図）

第3節　国仲

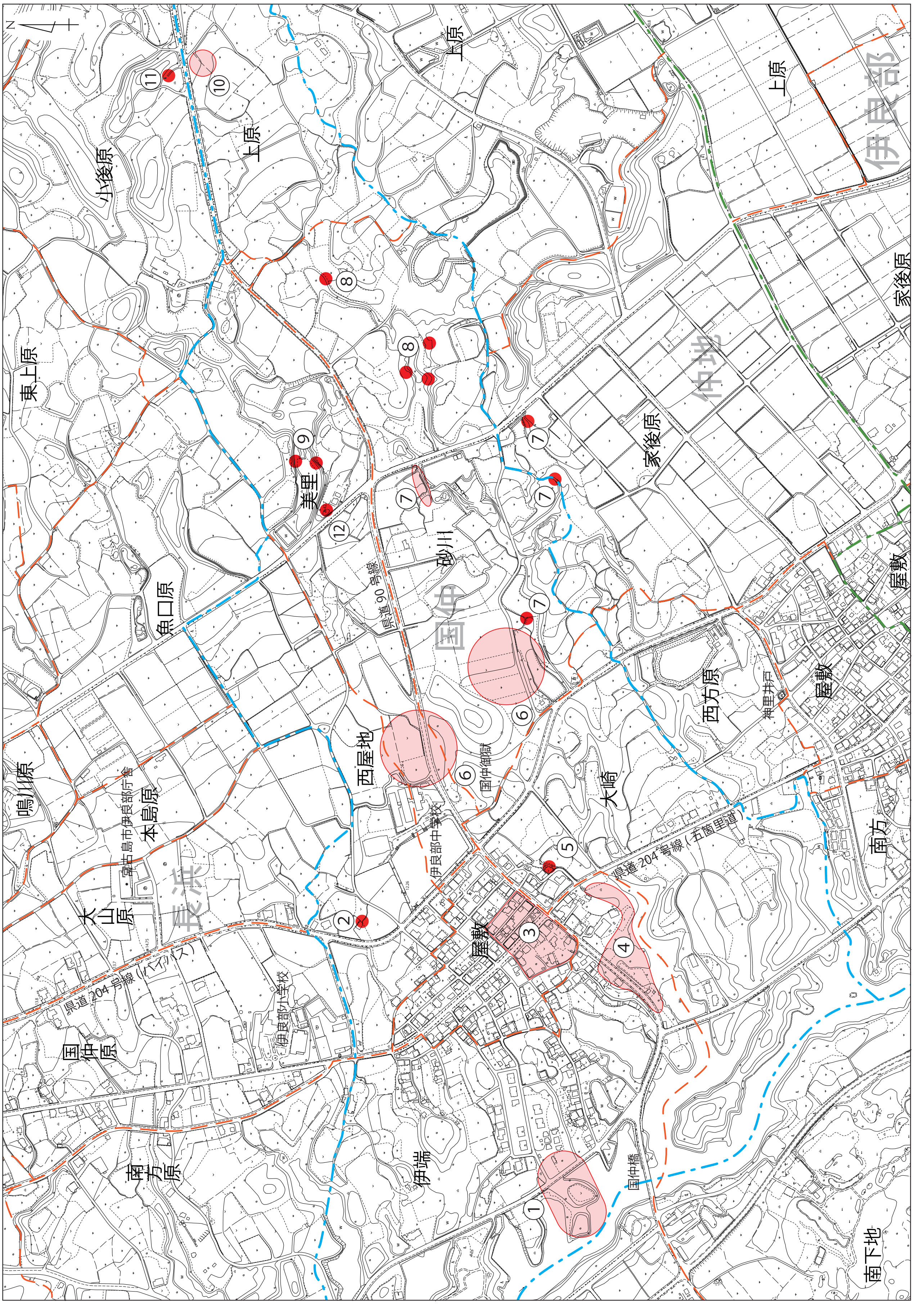
１．国仲の地理的環境

国仲は伊良部島、下地島を村域とした伊良部村のほぼ中央に位置し、古くから村役場 (現在、村役場は町役場を経て、宮古島市伊良部支所となり長浜へ移転) や学校 (伊良部小学校は校地を長浜に移した) が置かれ、島の東部の佐良浜港から下地島空港へ通じる県道 90 号と、伊良部５字を縦貫する五箇里道 (県道 204 号の一部) が交差する交通の要所でもある。

２．国仲の沖縄戦時の概況

国仲集落には伊良部国民学校があり、学校沿革誌によると、「昭和 19 年９月 14 日…軍部、本日より学校に宿泊す（本日より職員室東の教室の外は全部疎開さる。)」とあり、第 59 旅団伊良部島到着と同時に、軍隊が駐留し、司令部として使用された。その他、沿革誌では、「昭和 20 年３月１日…午前７時、午後４時半頃空襲ありたるも、校舎に異常なし、職員児童異常なし。昭和 20 年３月 27 日…空襲あり。軍部の一部は当校より移動。昭和 20 年３月 28 日…本日軍部は当校より全部移動す。」とあり、移動先は、国仲美里の陣地壕と考えられる。隣接する国仲砂川には 15 糎榴弾砲秘匿壕も構築されている。学校の校舎を壊し、御嶽の後ろあたりに兵舎を造っていたとの聞き取りもあり、国仲御嶽の御嶽林を利用して、御嶽の周辺に部隊が駐屯していたことをうかがい知ることができる。

※学校沿革誌については p125 を参照のこと。



伊良部
上原
家後原
仲地
屋敷
西方原
大崎
南方
南下地
国仲橋
県道 204 号線（五箇里道）
神里井戸
国仲御嶽
砂川
県道 90 号線
国仲
美里
西屋地
伊良部中学校
上原
小後原
東上原
魚口原
鳴川原
本島原
宮古島市伊良部庁舎
長浜
大山原
県道 204 号線（バイパス）
伊良部小学校
国仲原
南方原
伊端
屋敷

第 47. 図 国仲の成果図

３．国仲の調査成果一覧

①国仲伊端の部隊駐留地跡

聞き取りによると、旧・国仲橋の北側にある入江に突き出した小さな半島（現在はコテージ型のホテルがある）から、国仲団地の南側付近にかけては山砲兵がいた（昭和 12 年生）。

②国仲西屋地の部隊駐留地跡

聞き取りによると、現在の伊良部中学校の北側あたりに部隊が駐留していた（昭和９年生）。

③伊良部国民学校跡

1954(昭和 29) 年に、現在の校地（字長浜）に移転するまで、県道 90 号下地島空港佐良浜線と五箇里道（県道 204 号長山港佐良浜港線）が交差する、国仲交差点の北側一帯（五箇里道を挟み、東に校舎、西に校庭）にあった伊良部小学校の前身。当時の教室のほとんどは軍に接収された（沿革誌より）。

聞き取りによると、学校の教室のかたわらには、幅１メートル、長さ４メートルほどの溝状に掘られた避難壕があり、雨の日は水がたまった状態の溝へ避難した（昭和 12 年生）。

④国仲伊端の住民避難壕群跡

複数の聞き取りによると、国仲交差点の南側（スロット店裏手）あたりから、県道 90 号国仲橋の手前（宮国組）付近までの入江の斜面に、住民避難壕があった（昭和 11 年生、昭和 16 年生）。

聞き取りを元に現地をを調査したところ、一部、岩盤を掘り込んだ墓が複数見られ、避難壕の二次使用と考えられる。

⑤国仲大崎の壕

聞き取りによると、国仲 24 番地の東側には深くて長い、野戦病院壕があった（昭和 18 年生）。

今回の現地調査により、岩盤に掘り込まれた壕の一部と、農地改良で消失した壕跡を発見した。

⑥国仲御嶽周辺の兵舎跡

聞き取りによると、御嶽の東側と西側に、それぞれ兵隊がいた（昭和 10 年生、11 年生、12 年生）。

⑦国仲砂川の住民避難壕群

沖縄県戦争遺跡分布調査（沖縄県立埋蔵文化財センター　2005）で確認された避難壕と同じ地域内にて、新たな結果が得られたことから、名称を改め、ひとつの避難壕群としてまとめた。

聞き取りによると、手登根採石場の場所には住民避難壕が造られていた（昭和 10 年生）。

聞き取りを元に現地調査をしたところ、採石場の北側に穴を掘り込んだような痕跡が見られた。避難壕である確証を得ることは出来なかったが、採掘場の南方の低丘陵地の麓付近を調査したところ、新たに壕を発見した。

⑧国仲砂川の壕群跡

2016（平成 28）年、国仲地区の圃場整備工事に伴い発見された壕群。全体で４基の壕から構成され、そのうちの３基の壕は重火器を秘匿する目的で構築されたと考えられる。この場所には軍隊の駐屯を裏付ける複数の聞き取り調査の結果も得られている。

⑨国仲美里の壕群跡

本壕群は、2017（平成 29）年の仲地副貯水池の建設に伴い発見され、４基の壕から構成されている。

体験談によると、美里嶺を中心に横穴式の防空壕が掘られてあった（沖縄県史）。

⑩国仲上原の壕跡

本壕は 2012（平成 24）年に宮古島市農地整備課が実施した、東上原地区圃場整備工事（１工区）に伴い、発見された壕である。国仲上原に所在し、忠魂碑（長浜小後原）とは県道 90 号線を挟んだ向かい側に位置する。

⑪伊良部の忠魂碑（長浜小後原）

沖縄県戦争遺跡分布調査（沖縄県立埋蔵文化財センター　2005）で確認されている碑。忠魂碑の建立は 1914（大正３）年で、県内では２番目に古い。

聞き取りによると、忠魂碑のあたりで、竹やりの訓練をした（昭和５年生）。

また、「玉砕地」（いざと云う時の集団自決地）として軍から住民に指示されていた、という聞き取りもあった（昭和６年生）。尚、同地には 1963（昭和 38）年に建立された慰霊碑もある。

尚、忠魂碑は 2019（令和元）年秋の台風により、石碑に巻き付いていたガシュマルの樹と共に倒壊してしまった。

⑫国仲美里の石碑

聞き取りによると、美里原には戦没者を弔う碑があった（昭和５年生）。

その情報から調査を行ったところ、国仲美里壕群跡近くの小丘の上に石碑を確認できたが、碑面が激しく劣化しており石碑からは情報を得られなかった。

写真 344. ①伊端の部隊駐屯地跡（入江半島）

写真 345. ①伊端の部隊駐屯地跡（団地南方）

写真 346. ②西屋地の部隊駐留地跡

写真 347. ③伊良部国民学校跡

写真 348. ④国仲伊端の住民避難壕群跡

写真 349. ⑤国仲大崎の壕

写真 350. ⑥国仲御嶽周辺の兵舎跡（御嶽北側）

写真 351. ⑥国仲御嶽周辺の兵舎跡（御嶽南側）

写真 352. ⑦国仲砂川の住民避難壕群　壕口

写真 353. ⑦国仲砂川の住民避難壕群　溝と掘削殻

写真 354. ⑧国仲砂川の壕群跡　壕１南通路

写真 355. ⑨国仲美里の壕群跡　壕１壕口２付近

写真 356. ⑩国仲上原の壕跡

写真 357. ⑪伊良部の忠魂碑（1914 年建立）

写真 358. ⑪伊良部の慰霊碑（1963 年建立）

写真 359. ⑫国仲美里の石碑

４．国仲の戦争遺跡

（１）伊良部の忠魂碑（いらぶのちゅうこんひ）

①所在地

宮古島市伊良部字長浜小越原

②立地・現況

伊良部島のほぼ中央。佐良浜（池間添・前里添）と国仲集落を経て下地島空港を結ぶ、県道 90 号線の北側に造成された園地に忠魂碑は建立されている。

③歴史状況

忠魂碑は、戊辰戦争（1868 年）以後、各地に建立された招魂社（のち護国神社）ひいては靖国神社に結びつく、天皇のために宣した英霊を祀る記念碑である。1904 ～ 05 年の日露戦争以後、全国各地で建立されるようになったが、宮古には伊良部のほかに、旧平良町（1924 年建立）、旧城辺村（1927 年建立）、旧下地村（1932 年建立）の 4 か所に建立された。いずれも当時の町村当局の音頭で一般に寄付を募り建立されたようである。15 年戦争を通じて陸軍記念日（３月 10 日）、海軍記念日（５月 27 日）、あるいは大詔載日（毎月 8 日）など、各種記念日には在郷軍人や青年団を中心に慰霊祭ならびに戦意高揚の各種催しがなされた。その際、児童生徒も参拝させられている。（「宮古の戦争と平和を歩く」より抜粋。宮古郷土史研究会　1995）

伊良部島の忠魂碑は 1914（大正３）年に建立されており、宮古島市内でもっとも古く、県内においても 1912（大正元）年に建立された旧佐敷村の忠魂碑についで２番目に古い忠魂碑である。碑銘の揮毫者名は明記されていないが、当時の村長（国仲寛徒）であろうとされている。

忠魂碑の隣には、1963（昭和 38）年に伊良部遺族会によって建立された慰霊の塔がある。その周辺は公園となっており、６月 23 日の慰霊の日には慰霊祭が行われている。

尚、忠魂碑は 2019（令和元）年の台風により、石碑に巻き付いていたカジュマルの倒壊によって、根元から折れてしまった。

写真 360. 伊良部の忠魂碑（右）と慰霊の塔（左）

第 48. 図 伊良部の忠魂碑　位置図

（２）国仲砂川の壕群跡（くになかうるかのごうぐんあと）

①所在地

宮古島市伊良部字国仲砂川

②立地・現況

県道 90 号下地島空港佐良浜線と、基幹農道に生まれ変わった「佐和田中道」が交わった北東側に位置する。国仲集落からは、東方の緩斜面地となり、集落並びに下地島方面が広く見渡せる。壕は 2015 年に行われた「南上原地区ほ場整備工事 (H 27-2)」に伴い発見され、現在は事業完成により壕は消失している。

③歴史状況

国仲集落に所在した伊良部国民学校には、独立混成第 59 旅団（通称：碧部隊。以下、第 59 旅団）が昭和 19 年 9 月 14 日、伊良部島上陸と同時に本部として駐屯している（伊良部小学校沿革誌より）。

第 59 旅団は司令本部、第 393 大隊、第 394 大隊、396 大隊、砲兵隊、通信隊、工兵隊で構成され、その他、山砲兵第 28 聯隊第 3 中隊、野戦重砲兵第 1 聯隊第 1 大隊第 1 中隊を指揮下に加え、伊良部地区の防衛にあたる。

国仲砂川の地は、国民学校の東側に位置し、なだらかな丘陵地で南西側海岸を一望できる。当該地では、榴弾砲を設置したと思われる壕などが構築され、伊良部島防衛の要であったと考えられる。

④遺構の特徴

本壕群は 4 基の壕で構成され、壕 2 を除く 3 基の壕は、壕口まわりの形状がハの字状をしている。壕口の幅は 2.7 ～ 3.0 メートルであるが、壕幅が徐々に広くなっており、奥行き 5 メートル程の位置で、最大で 5 メートルほどの幅がある。

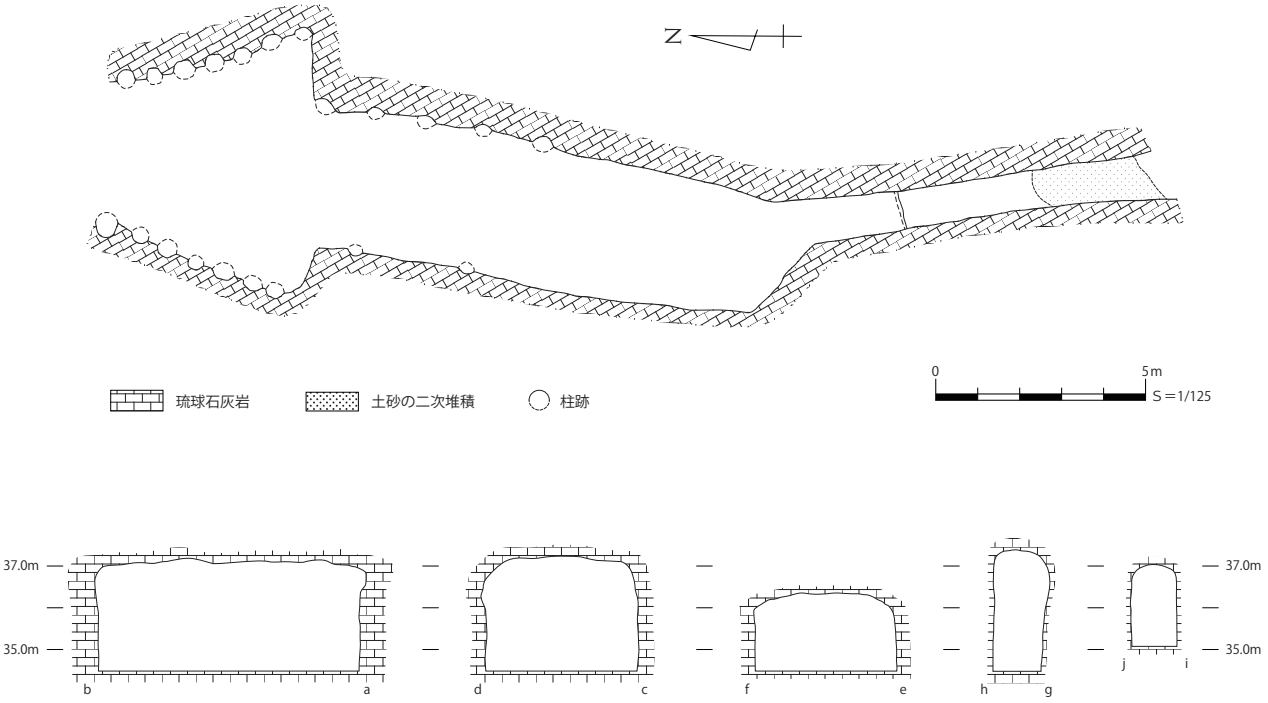
壕幅はその後、およそ 3.2 メートルまで狭まり、直線的に掘り込まれた構造となっている。これらの壕口部分にあるハの字型をなす形状は、96 式 15 糎榴弾砲を展開した際に、砲脚を開いて堅固に固定するためのものと考えられる。

このことから、伊良部島に移駐し、第 59 旅団の指揮下に入った野戦重砲兵第 1 聯隊第 1 大隊第 1 中隊（三上隊）との関連性が高い事が示唆される。また、残る壕 2 については、幅 1 メートル、奥行き 13.9 メートルの直線的な壕であることから、3 基の壕の構築などに従事した人々や、壕を利用した部隊の緊急避難的な壕ではないかと考えられる。

＜参考文献＞

宮古島市教育委員会　2017 「国仲砂川の壕－南上原地区ほ場整備工事（H27-2）における報告書－」宮古島市文化財報告書第 9 集

第 49. 図 国仲砂川の壕群跡　位置図



第 50. 図 国仲砂川の壕群跡　壕１　平面図・断面図

写真 361.　壕１　北側の壕口

写真 362.　壕１　壕内（南側を望む）

写真 363.　壕１　南側の壕口

写真 364.　北側の壕口部分の柱跡

（３）国仲美里の壕群跡（くになかみさとのごうぐんあと）

①所在地

宮古島市伊良部字国仲美里原

②立地・現況

県道 90 号下地島空港佐良浜線と、基幹農道に生まれ変わった「佐和田中道」が交わった南東側に位置する。国仲集落からは、東方の緩斜面地となり、集落並びに下地島方面が広く見渡せる。本壕群は 2016 年度に行われた「仲地副貯水池整備事業」に伴い発見された。現在は壕付近に仲地副貯水池が建設され、壕は消失している（参考文献：宮古島市教育委員会　2018 「国仲元島遺跡 国仲美里の壕」宮古島市文化財調査報告書第 12 集）。

③歴史状況

国仲集落に所在した伊良部国民学校には、独立混成第 59 旅団（通称：碧部隊。以下、第 59 旅団）が昭和 19 年 9 月 14 日、伊良部島上陸と同時に本部として駐屯している（伊良部小学校沿革誌より）。
第 59 旅団は司令本部、第 393 大隊、第 394 大隊、396 大隊、砲兵隊、通信隊、工兵隊で構成され、その他、山砲兵第 28 聯隊第 3 中隊、野戦重砲兵第 1 聯隊第 1 大隊第 1 中隊を指揮下に加え、伊良部地区の防衛にあたる。

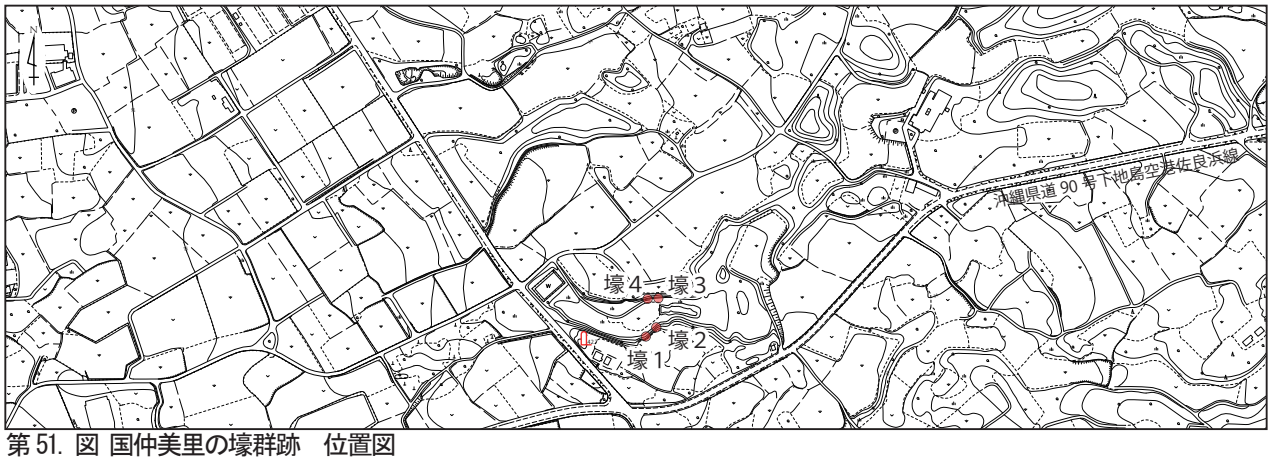
国仲美里の地は、国民学校の東側に位置し、なだらかな丘陵地で南西側海岸を一望できる。第 59 旅団は、隣接する国仲砂川と共に司令本部機能を有する壕を構築し、1945（昭和 20）年 3 月 27 日、学校が大きな被害を受けた後、当地域に移動したと考えられる。

④遺構の特徴

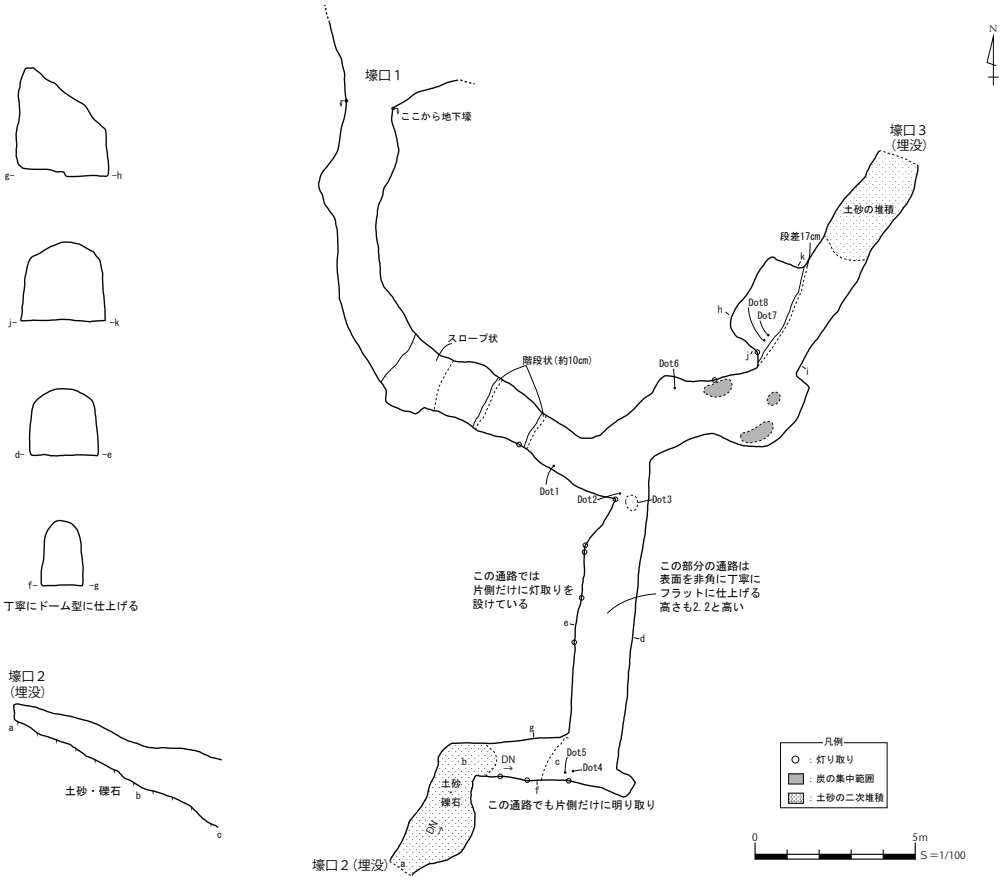
本壕群は 4 基の壕からなる。この中で最も規模の大きい壕 1 は、３つの開口部を有し全体的にはＹ字に近い形態をなし、全長はおよそ 35 メートルに及ぶ。壕内はスロープ状の傾斜面や 0.1 メートルほどの階段状の段差が設けられている。壁には灯りとりのための台座が石灰岩に掘り込んで構築され、煤が天井部分まで帯状に延びていて、幅の広くなった通路の床面には多くの炭化材を確認する事ができる。また、この壕内からは８点の遺物を収集している。５点は缶詰で、灯りとりとして２次使用されたものもある。

関連する近隣の遺跡

聞き取り調査から、これらの壕のある美里の高台には、部隊と関連があると思われる石碑を確認する事ができた。この石碑は美里、砂川、上原を見渡せる高台の頂上附近（42.7 m）に位置し、土台をコンクリートで構築してあるが、石碑の碑文などは劣化によりまったく読み取ることはできない。この石碑は、どの時期に構築されたものかも定かではないが、部隊が駐屯した地であることから、慰霊碑ではないかと推察する。成果一覧「⑫国仲美里の石碑」を参照。



第 51. 図 国仲美里の壕群跡　位置図



第 52. 図 国仲美里の壕群跡　壕１　平面図・断面図

写真 365.　壕１　壕口１

写真 366.　壕１　壕内（e-d 付近）

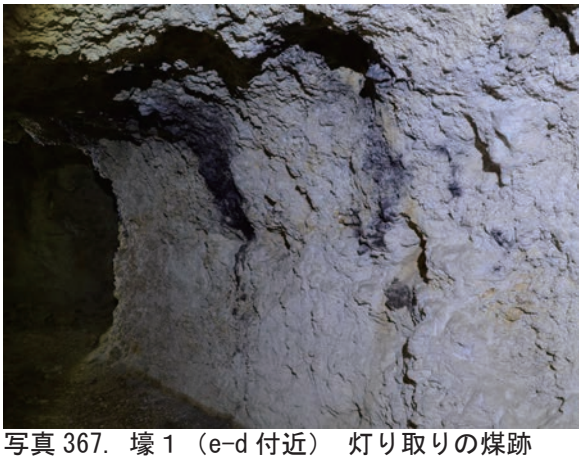


写真 367.　壕１（e-d 付近）　灯り取りの煤跡

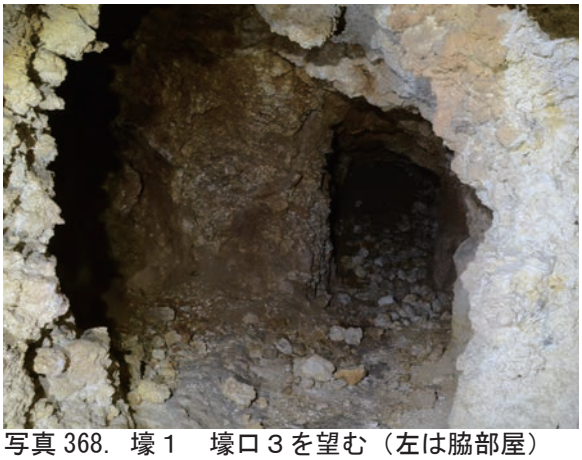


写真 368.　壕１　壕口３を望む（左は脇部屋）

（4）国仲上原の壕跡（くになかうえはらのごうあと）

①所在地

宮古島市伊良部字国仲上原

②立地・現況

国仲美里・砂川の壕群の東方。「伊良部の忠魂碑」から県道 90 号下地島空港佐良浜線を挟んだ南側に位置する。

③歴史状況

国仲集落に所在した伊良部国民学校には、独立混成第 59 旅団（通称：碧部隊。以下、第 59 旅団）が昭和 19 年 9 月 14 日、伊良部島上陸と同時に本部として駐屯している（伊良部小学校沿革誌より）。
第 59 旅団は司令本部、第 393 大隊、第 394 大隊、396 大隊、砲兵隊、通信隊、工兵隊で構成され、その他、山砲兵第 28 聯隊第 3 中隊、野戦重砲兵第 1 聯隊第 1 大隊第 1 中隊を指揮下に加え、伊良部地区の防衛にあたる。

本遺跡は、忠魂碑の道向かいに位置し、周辺の圃場整備工事に伴い、2012 年 10 月に発見された壕である。日本軍によって構築されたものと考えられ、近隣には第 59 旅団が駐屯しており、関連性が深いと考えられる。

④遺構の特徴

壕は、琉球石灰岩を掘り込んで構築されており、壕口は北方向に開口し、南に向いて直線的に掘られている。壕の断面は台形型をなしているが、奥に行くに従い丸味をおびた断面形を呈するようになる。壕内の幅は 3 ～ 4 メートルと広く、高さは 2.5 メートル程である。壕に崩落の危険性が高かったため、写真記録の作業にのみとどめた。現在は圃場整理工事に伴って痕跡は残されていない。

〈参考文献〉

宮古島市教育委員会　2017 「国仲砂川の壕」 宮古島市文化財調査報告書第 9 集

宮古島市教育委員会　2018 「国仲元島遺跡・国仲美里の壕」 宮古島市文化財調査報告書第 12 集

写真 369. 国仲上原の壕跡　壕口

第 53. 図 国仲上原の壕跡　位置図

（５）国仲大崎の壕（くになかおおさきのごう）

①所在地

宮古島市伊良部字国仲大崎

②立地・現況

県道 90 号下地島空港佐良浜線と五箇里道 (県道 204 号長山港佐良浜港線）が交差した、国仲の交差点の南東側、旧伊良部村役場の東側に建つ住宅地にある。

③歴史状況

国仲集落に所在した伊良部国民学校には、独立混成第 59 旅団（通称：碧部隊。以下、第 59 旅団）が昭和 19 年 9 月 14 日、伊良部島上陸と同時に本部として駐屯している（伊良部小学校沿革誌より）。
第 59 旅団は司令本部、第 393 大隊、第 394 大隊、396 大隊、砲兵隊、通信隊、工兵隊で構成され、その他、山砲兵第 28 聯隊第 3 中隊、野戦重砲兵第 1 聯隊第 1 大隊第 1 中隊を指揮下に加え、伊良部地区の防衛にあたる。

国仲大崎の地は、第 59 旅団が本部として使用した伊良部国民学校から県道 90 号下地島空港佐良浜線を挟んで南側に位置する。ここには病院壕があったとの聞き取り調査が得られたが、本壕がそれに比定されるかどうかは不明である。

④遺構の特徴

壕は住宅が建つ岩盤部分に掘られているが、敷地にあわせて南東側が直線状に削り取られており、大きく露頭した面に壕口が開口していることから、周辺の土地改良もしくは宅地造成によって、新たに壕口となったものとみられる。

露頭した岩盤に沿うように道路から一段下に位置した、小さな畑とヤギ小屋へ降りるスロープ部分に、半ば埋没しかけた壕口 1 が開口している。

壕口は直線状に切り取られた、露頭した岩盤部に並行して 2 か所あるが、東側の壕口 2 はゴミや土砂が詰まり埋没している。

壕口 1 の幅は約 0.8 メートル、高さは半ば埋没しているため 0.3 メートル程度しかない。壕口 1 から壕内へ進入すると、足元は流入した土砂で占められているが、すぐに丁字路になっており、幅 1.2 メートル、高さは 0.9 メートルほどの通路が左右（北東－南西）に通っている。通路断面の形状はほぼ方形で、南西側（壕口 1 の左手）の通路はおよそ 3 メートルほどで行き止まりとなっているが、北東側（壕口 1 の右手）の通路は幅を若干狭めながら南東方向にカーブし、カーブの途中で階段を 2 段（0.2 メートル）ほど登って、埋没してる壕口 2 まで続いている。

北東側の通路には途中、2 か所の脇部屋があり、空き缶などの遺物が数点残されている。脇部屋の大きさは、幅 1.3 ～ 1.5 メートル、奥行き 2.3 ～ 3.1 メートル、高さ 1.3 ～ 1.5 メートルほどあり、ひとつ目の部屋がカーブ手前から北西側へ、ふたつ目の部屋がカーブを曲がる途中から北側へ向かって掘られている。この脇部屋の位置や大きさから、壕口 1 はこうした脇部屋のひとつだったものが、土地の改良によって開口したもので、本来の壕のルートは埋没した壕口 2 が、通路として続いていたのではないかと考えられる。

壕口 1 ・ 2 が開口している岩盤は、北東方向へと続いており、ヤギ小屋の裏手には掘削痕が残されている。他にも、壕の南東側に広がる伊良部島特有の谷状地形の底面を、耕作地として整備を行った際、地形に大きく変更を加えたとみられ、谷の対岸にも壕の痕跡と思われる窪みが残されており、このことから聞き取りで得られた通り、大規模な壕があった可能性が考えられる。

写真 370.　壕口１

写真 371.　通路から壕口１を望む

写真 372.　北西方向の脇通路

写真 373.　北方向に延びる脇通路

写真 374.　埋没した壕口２

写真 375.　壕口近景

写真 376.　ヤギ小屋裏の掘削痕

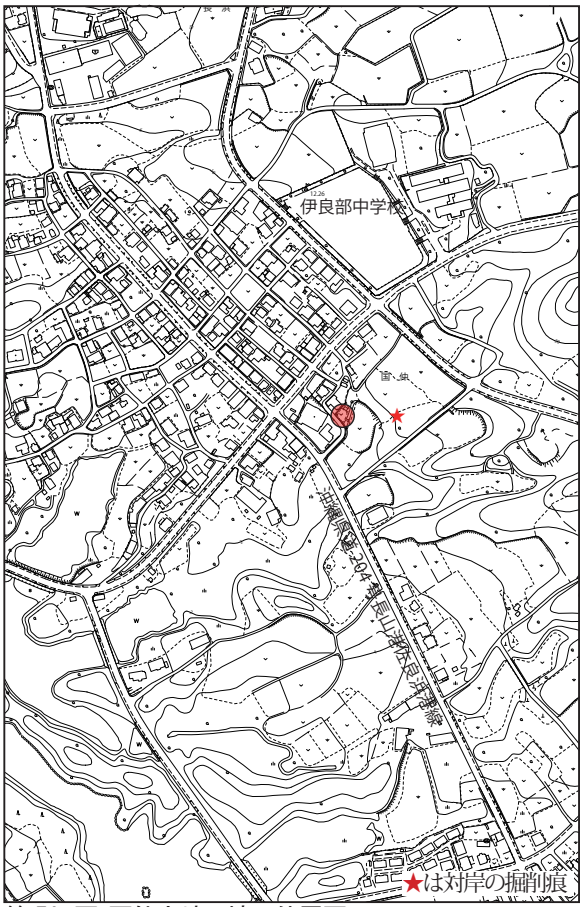
写真 377.　ヤギ小屋裏の掘削痕

写真 378.　壕口 1 脇の掘削痕

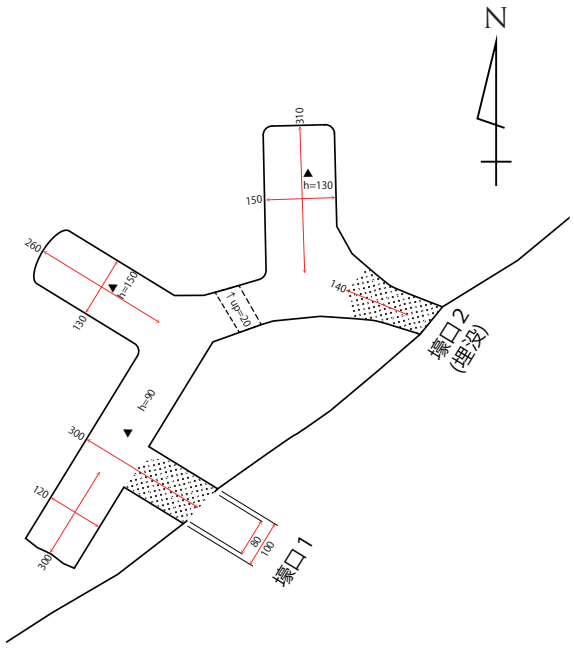
写真 379.　壕の全景

写真 380.　壕の対岸の遠景

写真 381.　壕の対岸掘削痕



第 54. 図 国仲大崎の壕　位置図



第 55. 図 国仲大崎の壕　簡易平面図

（６）国仲砂川の住民避難壕群（くになかうるかのじゅうみんひなんごうぐん）

①所在地

宮古島市伊良部字国仲砂川・仲地家後原

②立地・現況

国仲集落の東方。国仲砂川の壕との間に位置する、伊良部島特有の谷状地形が入り組んだ谷あい。仲地集落との境界部にあたる。

④遺構の特徴

本遺構は「沖埋文 2005」にて報告されている壕のひとつである。

沖埋文の報告書によると、「国仲集落の東側に広がる畑地間にある、低丘陵にかつて国仲集落在住の住民が避難壕を掘ったとされている。近年は周辺が採石場に変貌しつつある。今回の調査において２か所を特定することができたが、実際に確認されたのは１か所のみである。入口は殆ど埋没しており、内部へ進入することはできない。2003 年（平成 15）の台風 14 号によって完全に入口が埋没した。低丘陵の麓、畑地とほぼ同レベルに掘り込まれている。因みにこの避難壕に隣接して古墓が点在している。

また、これとは別に国仲集落の北西側、下地島に面する海岸に、国仲集落の住民が避難のために掘った家族壕が、現在も残存しているとされている。現地は雑木が繁茂し、確認することはできなかった。」と、報告されている。

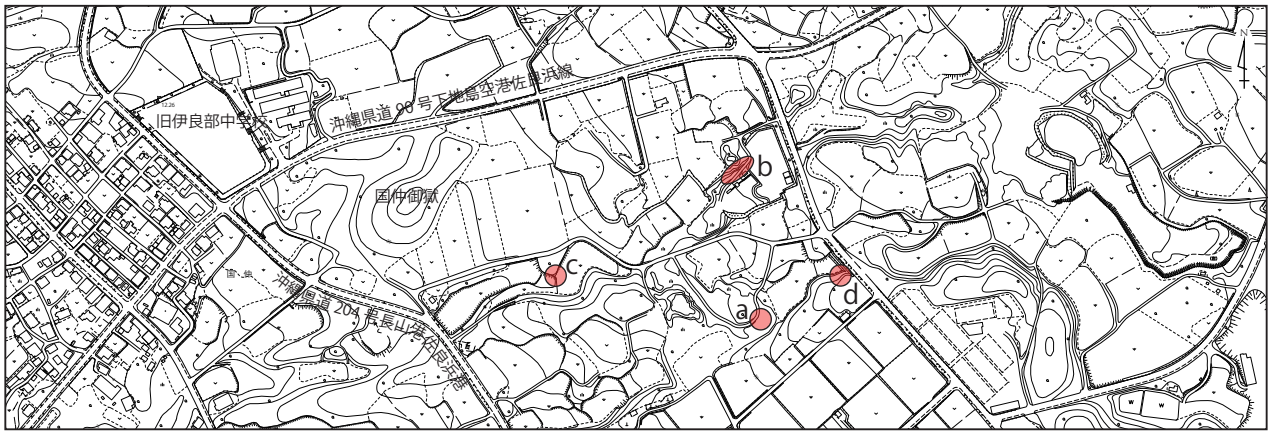
今回、沖埋文で報告のあった壕（位置図：ａ）を確認するため当該地へ現地調査を敢行したが、現況が大きく変化しており、調査資料に示されている壕へ続く道が消失し、すでに現地へたどりつくことすら困難となっていた。

このほか、国仲集落の東方にある手登根採石場付近には、住民避難壕が造られていたと聞き取りが得られたことから、この聞き取りを元に現地調査をおこなったところ、採石場内の北側に穴を掘り込んだような痕跡は見られたが、避難壕である確証を得るまでには至らなかった（位置図：ｂ）。

あわせて現地調査の範囲を周辺域まで拡大したところ、採石場南方の低丘陵地の麓付近に新たに壕を発見した（位置図：ｃ）。ただし、沖埋文の調査の際、「低丘陵の麓、畑地とほぼ同レベルに掘り込まれている。因みにこの避難壕に隣接して古墓が点在している」と報告されている。

現地の確認調査時に状況が酷似した壕を発見したことから、報告書等を確認をしたところ当該の壕とは別であることが判明した。しかし、報告書にある未特定の壕の可能性も考えられることを付記しておく。

この壕は畑の端、雑木の茂る丘の麓に構築されている。北を向いて開口し、壕口の幅は、約 1.5 メートルで、壕内は幅約２メートル、奥行き約３メートルほどの部屋状で、高さは約 1.7 メートルある。



第 56. 図 国仲砂川の避難壕　位置図

また、畑の際耕作面から壕口に向って、ほぼ水平に岩盤が切り込まれ、幅およそ 0.7 メートル、長さ 3.2 メートルほどの帯道のようなものが構築されているが、現在は大半が埋没しているため全体の構造を見ることは出来ない。そのため現状の壕内への出入りは、堆積した土砂の上から降りるような形となっている。

沖埋文の報告書にもあるように、低丘陵地には多くの古墓群があるが、東側の道路寄りの斜面に、幅約 0.9 メートル、奥行き約 2 メートルの溝状の構造物（位置図：d　仲地家後原）を発見した。溝の高さは 1.3 ～ 1.5 メートルほどであり、溝の突当り部分が、わずかに左側に膨らんで掘り込まれている。用途は不明だが、構築途中で放棄されたものではないかと考えられる。

尚、報告書にて言及されている「国仲集落の北西側、下地島に面する海岸に、国仲集落の住民が避難のために掘った家族壕」は、今回の聞き取り調査などからも言質が得られ、現地調査でも成果があがったことから「国仲伊端の住民避難壕群」として別途報告する。

尚、沖埋文 2005 の報告書では、「国仲の避難壕」と呼称されていたが、今回の調査により、新たな壕などを発見したことから、この地域の戦跡をまとめて「国仲砂川の住民避難壕群」と名称を改めるものとする。

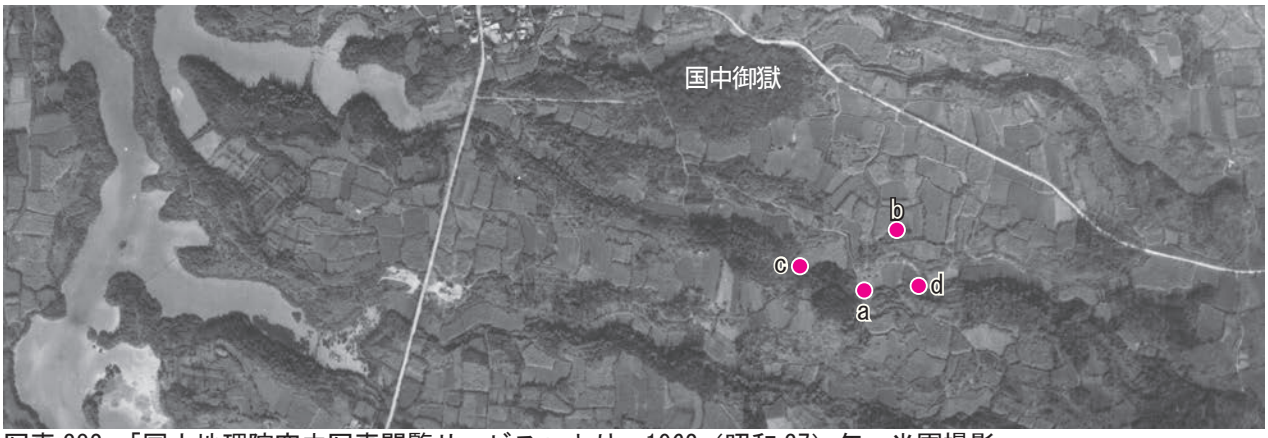


写真 382.「国土地理院空中写真閲覧サービス」より　1962（昭和 37）年　米軍撮影

写真 383.　壕 a に通じていた道

写真 384.　壕 a に続く道は消失していた

写真 385.　砕石場（全景）

写真 386.　掘り込み跡（砕石場）

写真 387.　低丘陵の麓にあるｃ（遠影）

写真 388.　ｃ　壕口

写真 389.　ｃ　壕内

写真 390.　ｄ（低丘陵沿いの遠景）

写真 391.　ｄ　溝状の構造物（上方より）

写真 392.　ｄ　溝の脇に掘削殻（正面より）

（７）国仲伊端の住民避難壕群（くになかいばたのじゅうみんひなんごうぐん）

①所在地

宮古島市伊良部字国仲伊端

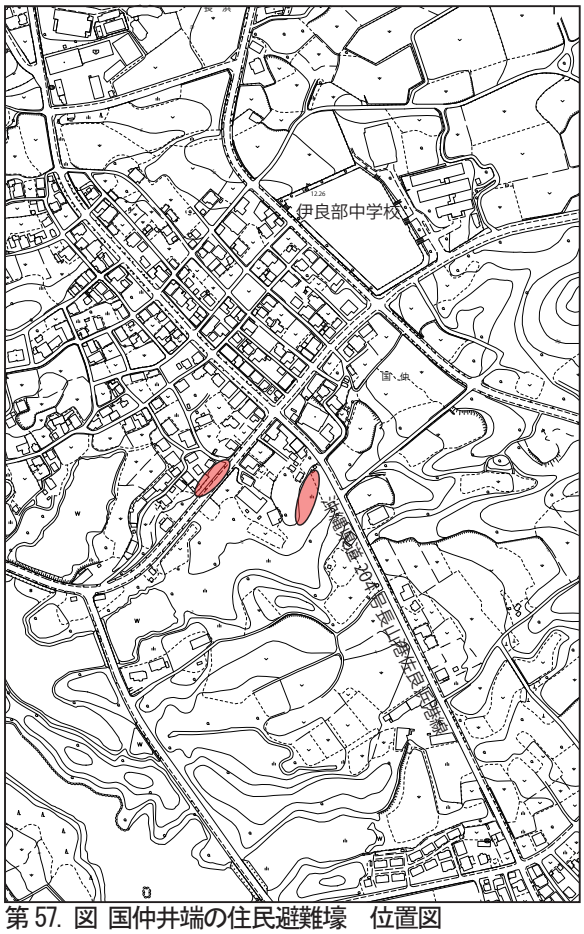
②立地・現況

県道 90 号下地島空港佐良浜線と五箇里道 (県道 204 号長山港佐良浜港線）が交差した、国仲の交差点の南西側。大崎の壕が面する谷状地形の下流に位置し、深く入り込んだ入江の海にも接した住宅地南側の崖面にある。

④遺構の特徴

五箇里道が跨ぐ、入江の海から北東に深く入り込んだ谷（五箇里道以北には、軍の影響がみられるため、国仲大崎の壕として区別）の北側の崖地。谷に沿って２～５メートルほどの高さの崖が続いており、崖面を掘り込んだ簡素な作りの墓が複数点在している。周辺は草木が繁茂しているが、供物などが散見されることから、現在も墓は使用されているとみられる。

聞き取りによると、集落の住民が崖地の穴を掘り、避難したとされていることから、墓については二次使用と考えられる。また、国仲 621 番地付近の崖地にも避難壕を構築したとの聞き取りもあったが、戦後に県道 90 号線（新・国仲橋）が開通したことから、すでに消失しているものとみられる。



第 57. 図 国仲井端の住民避難壕　位置図

写真 393. 繁茂した木々に隠れた避難壕群(墓)

写真 394. 墓として二次使用されている（全影）

写真 395. 墓として二次使用されている（近影）

写真 396. 県道沿いに残る凹地の痕跡

写真 397. 県道沿いに残る崖地の痕跡

第4節　伊良部・仲地

1．伊良部・仲地の地理的環境

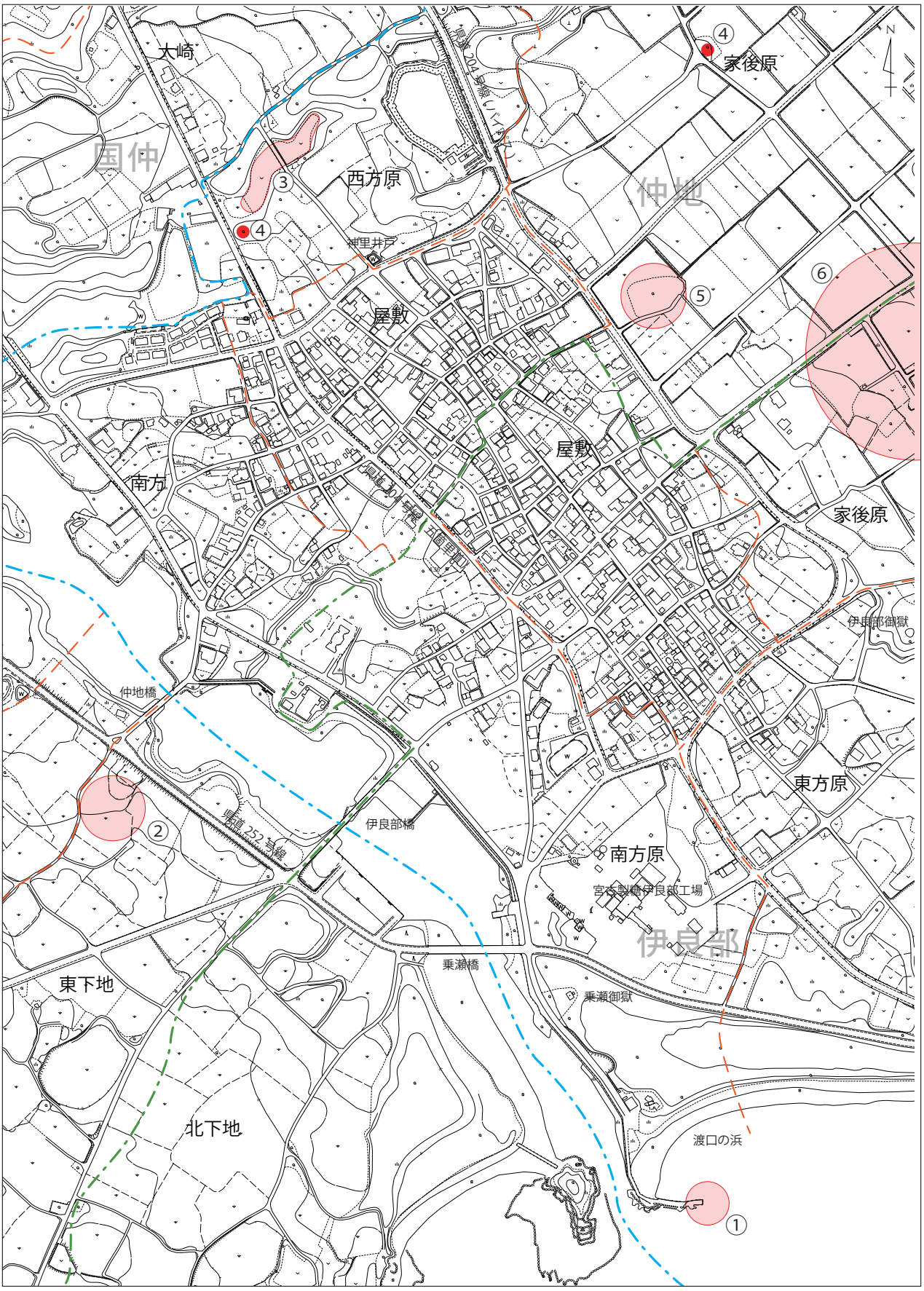
伊良部・仲地は伊良部島の南西部に位置し、南側は海に面している。字域の東側は次第に海岸段丘状となり、伊良部島東部の台地（佐良浜断層崖の上部）へと続いている。一方で伊良部島と下地島が接する入江の海は河口のように広がっており、渡口の浜（伊良部島側）や曲元浜（下地島側）といった砂浜がある。

集落は比較的標高の低い渡口の浜から、五箇里道（県道 204 号の一部）沿いにかけて広がり、周辺部には製糖工場や生コン工場などが接している。2015 年の伊良部大橋の架橋以降、島内の観光開発に拍車がかかり、近年は南側の海岸沿いにホテルやカフェなどの観光施設が数多く建設され、現況が大きく変化しようとしている。

2．伊良部・仲地の沖縄戦時の概況

聞き取り調査などでは、竹内部隊、遠藤部隊などの部隊名が上がり、独歩第 396 大隊（隊長・竹内隆大尉）、旅団砲兵隊（隊長・遠藤修蔵大尉）と比定できるものと考える。その他にも工兵隊の駐屯地の情報も得られ、旅団工兵隊（隊長・美馬敬一少佐）の可能性を示唆している。戦後、駐屯した兵隊の来島で、構築した壕を地元の住民と共に探索したとの聞き取りがあり、今回、独歩第 396 大隊に関連する壕を確認する事ができた。

第 58. 図 伊良部・仲地の成果図（広域）



第 59. 図 伊良部・仲地の成果図（拡大）

３．伊良部・仲地の調査成果一覧

①舟艇の出入口（旧渡口港・伊良部）

聞き取りによると、旧渡口港（渡口の浜の西端の防波堤が旧桟橋）から出る舟艇を狙った、敵の機銃掃射があった（昭和５年生）。

②爆弾落下場所（仲地）

聞き取りによると、仲地橋の下地島側に爆弾が落ちた（昭和９年生）。

③西方原の住民避難壕（仲地）

聞き取りによると、西方原の五箇里道脇にある岩の窪地に、数軒ごとに共同で防空壕を作った（昭和５年生、12 年生）。

現地調査を行ったところ、古墓として二次使用されている掘り込みを複数確認した。

④軍人墓（２基・仲地）

その１

五箇里道沿いにある墓碑（西方原の住民避難壕に隣接）は、憲兵軍曹として昭和 18 年５月４日に戦病死した島尻昌誠氏を祀ってある。2018 年になって、墓碑のあった位置に沖縄式のコンクリート製の破風墓が建立され、台座から外された墓碑も収納されている。

聞き取りによると、国民学校に通う道すがらの児童は、この墓のそばを通る時は敬礼をしてから登校していた（昭和 12 年生）。

その２

神里井から東へ 500 メートルほど登った小さな丘の上（仲地家後原）に、地形を利用した掘り込み式の大きな墓が築かれ、その墓の上に墓碑が建立されている。墓碑には昭和 16 年７月 24 日に戦死した陸軍兵長大城賀上氏が祀られている。

⑤工兵隊の駐屯地跡（ウプ御嶽あたり・仲地）

聞き取りによると、この場所あたりには工兵隊が駐留していた（昭和５年生）。

※工兵隊…独歩第 396 大隊工兵隊（隊長　美馬敬一少佐）と推測

⑥竹内隊の駐屯地跡（伊良部）

聞き取りによると、生コン工場のあたりに竹内隊が駐留していた（昭和５年生、12 年生）。

また、他の聞き取りでは、工場の北側に機関銃が設置され、軍旗と国旗も掲揚されていた（昭和５年生）。

※竹内隊…独歩第 396 大隊大隊長竹内隆大尉に比定

⑦遠藤隊の駐屯地跡（伊良部）

聞き取りによると、伊良部ユークイのあたりには遠藤隊が駐留していた（昭和５年生）。

※遠藤隊…独歩第 396 大隊砲兵隊隊長遠藤修蔵大尉に比定

⑧根原（にばる）御嶽の壕群（家後原）

聞き取りによると、戦後、伊良部に駐留していた元兵隊たちが来島し、当時構築した壕を地元の住民の協力のもと確認した（昭和７年生、12 年生）。

この聞き取りを元に現地を調査した結果、壕を確認した。また、「仲地御嶽の後ろ側（北東側斜面）には兵隊の造った陣地壕があり、御嶽の近くの畑には軍隊の掘った井戸もあった」とのことだが、現在まで井戸は発見できていない。

このほかにも現地周辺の調査を重ねた結果、根原御嶽（仲地ユークイ）の嶺、北東側に陣地壕を１基発見した。周辺の軍の配置状況から、なんらかの部隊が使用していた壕の可能性が高い。また、今回発見した壕のまわりにも、壕口の跡とおぼしき痕跡が３か所ほど並んでいるのを見つけたが、壕口は圃場整

備に伴い埋没しており詳細な状況については不明である。

⑨倒底原（とうそこばる）の戦車壕跡（伊良部）

聞き取りによると、アダンニャ御嶽の南に、200 メートルくらいの長さの堀のような壕があった。（昭和 6 年生）

※詳細位置不確定

⑩部隊の炊事班があった場所（池間添竹中）

聞き取りによると、集落の外れのタケナカ（池間添字竹中）というところに夫が炊事班として徴用されていた。（大正 11 年生）

⑪見張り櫓跡

聞き取りによると、近隣に駐屯する部隊の兵が、櫓を組んで見張りのようなことをしていた。(昭和 12 年生)

⑫東本島の部隊駐屯地跡

聞き取りによると、兵隊が駐屯していた。部隊の詳細については不明 (昭和 12 年生)。

また、屋良部崎 (岬は現在の長山港付近) 周辺には、部隊が展開していたことが防禦図から見て取れる。

⑬長山村有地開墾場所（池間添）

聞き取りによると、長山あたりの村有地を青年団で開墾して軍のための芋を植えた。（昭和 4 年生）

※詳細位置不確定

⑭伊良部島南海岸の壕群

長山港（屋良部崎）の西側の海岸沿いに点在する壕群で、平良港への西側からの出入りを監視できる位置にあり、遠く下地島の南端海域まで遠望することが出来る壕もある。また、宮古島地区防禦配備図によると、倒底原の戦車壕跡、東本島の部隊駐屯地跡、見張り櫓跡などと連携した壕と考えられる。

⑮仲地共同墓の住民避難壕（伊良部西本島）

仲地集落の共同墓に構築された住民の避難壕。壕墓周辺での聴き取りでは軍も使用したのではないかとの情報もあった（昭和 26 年生）。

⑯伊良部倒底原の壕群

アダンニャ御嶽の北西側、倒底原にある陥没ドリーネの北斜面に茂る、ガジュマルの根元近くに、複数の壕が構築されている。

⑰伊良部大長原の壕

県道 204 号沿いにあるカフェの入口に、整地されずに残っている露頭した岩盤に構築された壕。「宮古島防禦配備図」からも、⑯倒底原の壕、⑫東本島の部隊駐屯地跡が隣接しており、伊良部島南海岸の壕群とも連携した壕と考えられ、聞き取りでも屋良部の兵隊と呼ばれた部隊（部隊名などは不明）の壕と見られる。

⑱仲地屋敷の住民避難壕

調査中に寄せられた情報から、仲地 202 番地の井戸の内部に、隣家の井戸までつながったトンネルを構築し、家族らが防空壕として利用していた（内部未調査）。

※井戸に家族用防空壕を構築する複数の証言があり、井戸に残る遺構も広範囲に点在することから、第 2 節佐和田・長浜　3．伊良部南区の住民避難壕にまとめた。(p145)

写真 398. ①舟艇の出入口（旧渡口港桟橋）

写真 399. ②爆弾投下場所（仲地橋下地島詰）

写真 400. ③西方原の住民避難壕

写真 401. ③西方原の住民避難壕

写真 402. ④西方原の軍人墓（改修前）

写真 403. ④西方原の軍人墓（改修後）

写真 404. ④仲地家後原の軍人墓

写真 405. ④仲地家後原の軍人墓（墓碑）

写真 406. ⑤工兵隊の駐屯地跡（仲地家後原・大御嶽）

写真 407. ⑥竹内隊の駐屯地跡（伊良部）

写真 408. ⑦遠藤隊の駐屯地跡（東方原・伊良部ユークイ）

写真 409. ⑧根原御嶽の壕群　壕１壕口

写真 410. ⑧根原御嶽の壕群　壕１内部

写真 411. ⑧根原御嶽の壕群　壕２壕口

写真 412. ⑨倒底原の戦車壕跡（奥はアダンニャ御嶽）

写真 413. ⑩部隊の炊事班があった場所（池間添竹中）

写真 414. ⑪見張り櫓跡（池間添佐和田屋）

写真 415. ⑫東本島の部隊駐屯地跡

写真 416. ⑬長山村有地開墾場所（池間添）

写真 417. ⑭伊良部島南岸・大長原の入江

写真 418. ⑭伊良部島南岸・壕１の壕口付近

写真 419. ⑭伊良部島南岸・壕２の銃眼２

写真 420. ⑮仲地共同墓の住民避難壕（壕口）

写真 421. ⑮仲地共同墓の住民避難壕（壕内）

写真 422. ⑯伊良部倒底原の壕群（壕１）

写真 423. ⑯伊良部倒底原の壕群（壕４）

写真 424. ⑰伊良部大長原の壕　　壕口１

写真 425. ⑰伊良部大長原の壕　壕口２（埋没）

写真 426. ⑱仲地屋敷の住民避難壕

４．伊良部・仲地の戦争遺跡

（１）根原（にばる）御嶽の壕群（にばるうたきのごうぐん）

①所在地

宮古島市伊良部字仲地家後原

②立地・現況

仲地集落の東方に連なる低丘陵。仲地ユークイとも呼ばれている根原御嶽の北東側斜面に位置している。尚、嶺続きとなる北隣には国仲砂川の壕群がある。

③歴史状況

国仲集落に所在した伊良部国民学校には、独立混成第 59 旅団（通称：碧部隊。以下、第 59 旅団）が昭和 19 年 9 月 14 日、伊良部島上陸と同時に本部として駐屯している（伊良部小学校沿革誌より）。

第 59 旅団は司令本部、第 393 大隊、第 394 大隊、396 大隊、砲兵隊、通信隊、工兵隊で構成され、その他、山砲兵第 28 聯隊第 3 中隊、野戦重砲兵第 1 聯隊第 1 大隊第 1 中隊を指揮下に加え、伊良部地区の防衛にあたる。

仲地・伊良部の地域には第 396 大隊、工兵隊、砲兵隊が展開していたことが聞き取り調査で確認されており、戦後、第 396 大隊に所属した元隊員の来島により、当壕の存在が明らかになった経緯も確認された。

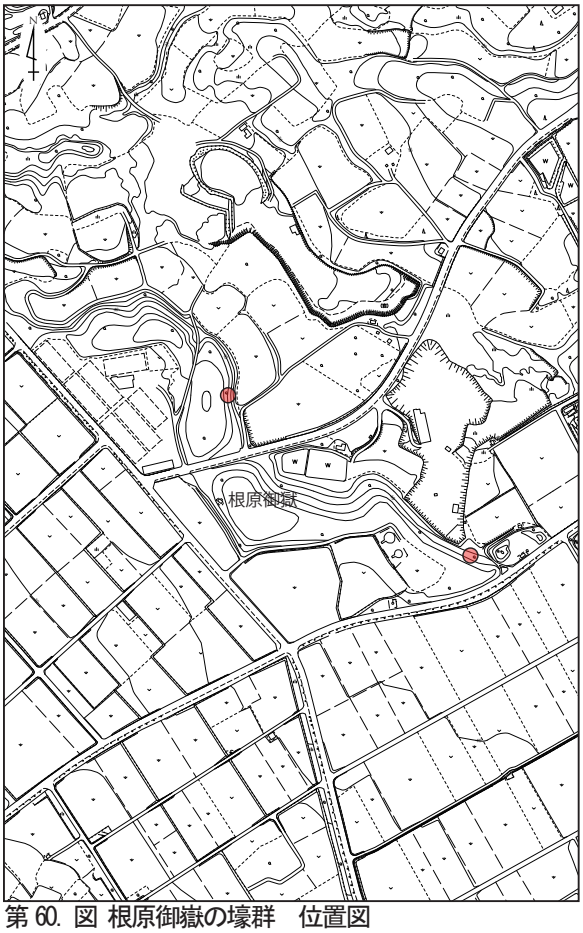
④遺構の特徴

現在までの調査で発見された本壕群は、御嶽の南方に位置する農業用水タンクの崖下（壕１）と、御嶽の道向かいにある小丘陵の東側（壕２）の２か所に分けられる。

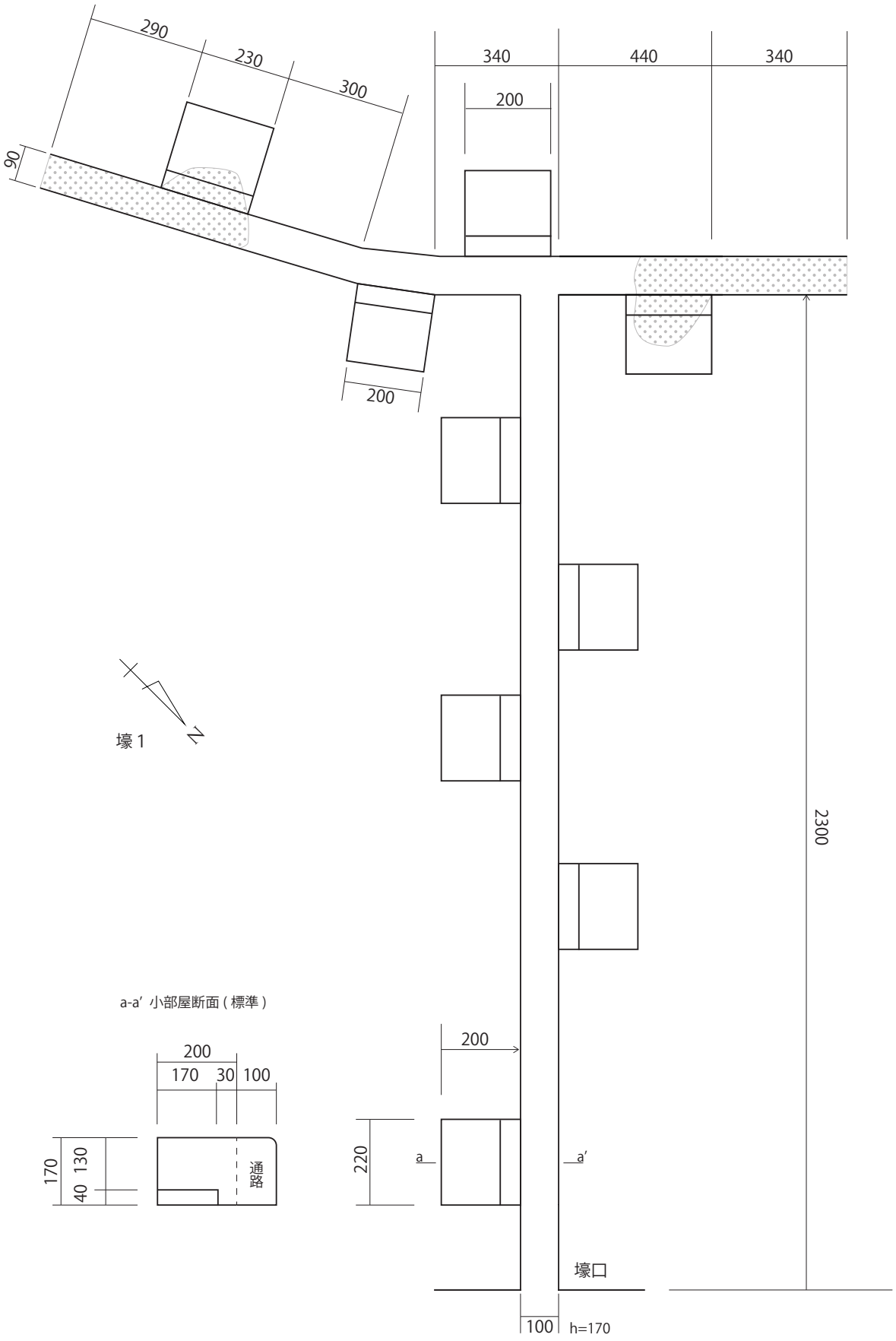
壕 1 は耕作地、採石場、ヤード（土砂置き場）に囲まれた極狭い雑木林の北東斜面に位置し、藪に投げ込まれたゴミも少なからず散乱している。壕口は北東に開口しているが、壕口上部からの土砂の流れ込みにより、７割程度埋没している。

壕は琉球石灰岩の岩盤を南西に向けて約 23 メートル程堀り込み、丁字型に突き当りまで直線的な通路を形成している。丁字の右手の通路は直角に曲り、北西方向へ約 7.8 メートル先で流入した土砂で完全に埋没している（通路はやや上向きに構築されているようである）。丁字の左手も直角に曲がり南東方向（左）に進むが、壕は右（南）へ緩くカーブし、やがて上方に緩く登り、約 8.2 メートルほど続いているが、上方からの土砂で埋没している。壕口の位置からも、壕全体の土被（どかぶり）は、およそ５～８メートルほどとみられ、それほど厚くないことと、流入している土砂の土質から、地上のヤード付近に壕は貫通していたと考えられる。

末端の埋没部分を除き、壕の高さはおおむね 1.7 メートル、幅もほぼ均等で 1 メートルほどある。通路各



第 60. 図 根原御嶽の壕群　位置図



第 61. 図 根原御嶽の壕群　壕 1　簡易平面図

所の壁面には灯りを設置したとみられる切欠き加工が施され、周辺には煤が付着している。

本壕でもっとも特徴的なのは、各通路部分にほぼ等間隔で幅２メートル、奥行き２メートルの脇部屋が９つ設置されていることである。いずれの脇部屋も通路部から 0.3 メートルセットバックした位置から、0.4 メートルほど床がベッド上に高くなっており、部屋部分の高さは通路と変わらないため、高くなった床から約 1.3 メートルと、立つには厳しいが座ることは充分に可能な高さがある。

通路、脇部屋ともに規格が統一された丁寧な作りで、まるで設計図を元にして構築されたような作りである。独歩第 396 大隊元隊員が掘ったとの証言もあり、伊良部支隊として終戦まで伊良部に駐屯した同大隊の本部壕であった可能性が示唆される。

また、近隣には作井隊が掘削した井戸もあったとの聞き取りもあるが、今回の調査で発見することは出来ていない。壕に隣接している、採石場の区域内にあったのではないかとも考えられている。

壕２は根原御嶽の道向かいにある小丘陵北東側の麓にあり、斜面の岩盤を掘り込んで作られている。壕口は、高さ約 1.7 メートル、幅約 1.1 メートルで東に開口している。一部、壕内に岩盤の剥離がみられるものの、西向きに下り勾配で 5.1 メートルほど通路状に掘られ、ほぼ平坦になった壕の底部に至る。底部は北側に向って奥行きが 1.7 メートルほどで台形状の不定型な部屋を形成している。部屋の幅は奥ほど狭く、最深部は１メートルほどしかないが、そこに高さ 0.45 メートル、奥行き 0.4 メートルの台状の掘り込みがある。尚、通路、部屋とも、高さはおおむね 1.7 メートルあり、十分に立ったまま行き来することが可能であるが、全体に作りは粗めである。

周辺は圃場整備の影響で古い地形が変更されているが、壕２のある斜面には、埋没した壕口のような痕跡が３か所ほど連なっている。また､北側には圃場整備に伴って岩盤が大きく露頭している耕作地もあり、すでに取り壊されてしまった可能性も考えられるが、聞き取りで得られた根原御嶽周辺に展開していた軍の存在を裏付けるものと見ることが出来る。

根原御嶽の壕群の位置を俯瞰して考えてみると、嶺続きの北隣は国仲砂川の壕群跡があり、隣接する国仲美里の壕群跡、更には、字長浜の習原・大多良周辺にも壕などの痕跡こそ発見されていないが、軍が駐屯していた証言がある。これに長浜御嶽・嵩原御嶽が続き、佐和田北方の深底集水池や白鳥３号集周辺には深底原跡が位置する（宮古島地区防禦配備図より）。転じて、南（東南）側には、長山台地へ続く、アダンニャ御嶽周辺の倒底原・東本島の陣地から屋良部崎（伊良部島南海岸陣地壕群～大長原）と島を南北に貫き、防衛線を構築していることが見て取れる。

写真 427.　壕１　壕口

写真 428.　壕１　壕内通路

写真 429.　壕１　通路と脇部屋

写真 430.　壕１　脇部屋

写真 431.　壕１　南端の埋没部

写真 432.　壕１　西端の埋没部（手前右は壕口）

写真 433.　壕１　灯り台と付着した煤

写真 434.　壕２　壕口

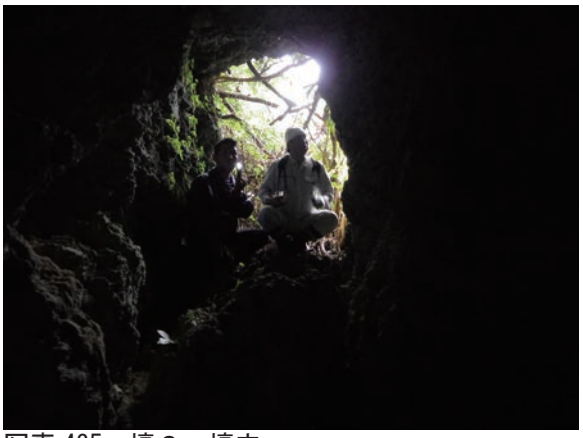


写真 435.　壕２　壕内

写真 436.　壕２　壕奥

（２）伊良部島南海岸の壕群（いらぶしまみなみかいがんのごうぐん）

①所在地

宮古島市伊良部字伊良部大長原、長底原・池間添屋良部崎

②立地・現況

伊良部島の南海岸部で、通称・屋良部崎と呼ばれている地域。長山港の東西の海沿いの岩場に点在している壕群。

③歴史状況

長山港（屋良部崎）の西側の海岸沿いに点在する壕群で、平良港の西側から、遠く下地島の南端海域まで広く遠望することが出来る位置にある。宮古島地区防禦配備図によると、周辺には部隊がいたことが示唆されている。実際に、倒底原の壕群、倒底原の戦車壕跡、東本島の部隊駐屯地跡、見張り櫓跡など、複数の痕跡や聞き取りがあり、こうした部隊と連携した壕と考えられる。

④遺構の特徴

長山港西側

壕１

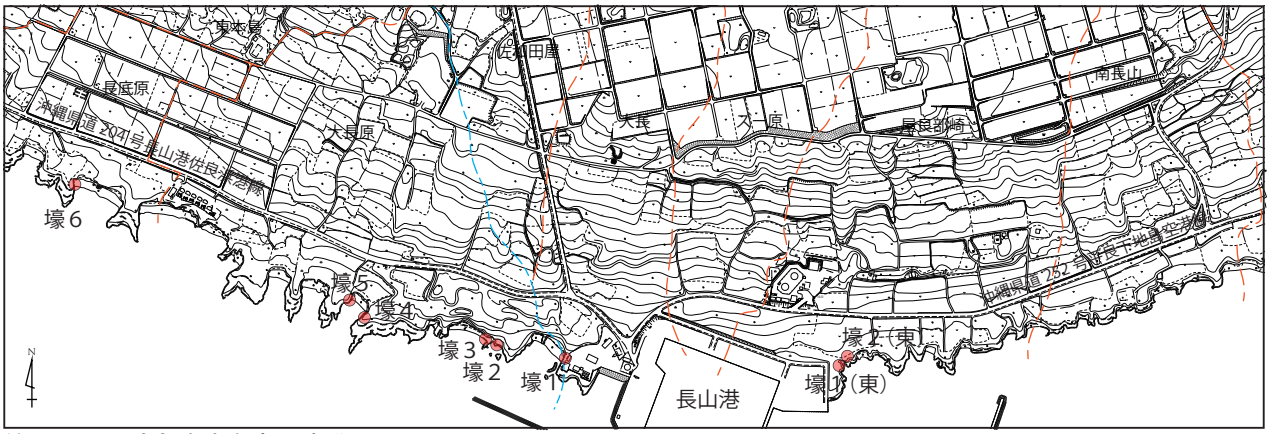
長山港の西隣にある小さな入江の岩場に構築された壕で、壕口は西を向いて開口している。壕口は汀線から１メートルほど高い位置にあり、水没することはないが、満潮時には壕口の直下まで波に洗われるほど海が近い。壕口の大きさは、およそ 1.5 メートル四方の方形をしている。経年により当時の形状からは欠損しているが、壕口の上下に石をモルタルで接着加工した箇所がみられる。

壕内は比較的平坦で、東を向いて琉球石灰岩を掘り込んでいる。入口付近の幅はおよそ 1.5 メートル、高さ 1.2 メートルほどあるが、砂の堆積と海洋ゴミが散乱しており、奥へ進むほど狭くなっているため、最深部の形状ははっきりしないが、３～４メートルほど直進したあと、斜め上に向かって続いているようであるが、上方に向かう部分は埋没している（壕の上、地上には島三産業の社屋が建っている）

壕に入ってすぐ左手におよそ 0.6 メートル四方の小部屋がある。また、壕口から２メートルほど進んだ位置の左右それぞれの壁面に、0.2 メートルほど凹みが見られ、横方向にも壕を構築しようとしていた痕跡とも考えられる。

壕２

壕１から海岸線を西に 200 メートルほどの位置に壕２はある。海蝕台の上方に残る岩場に、ふたつの銃眼と小ぶりの壕口がひとつ構築された壕で、内部は部屋状に繋がっているが、経年により入り込んだ砂

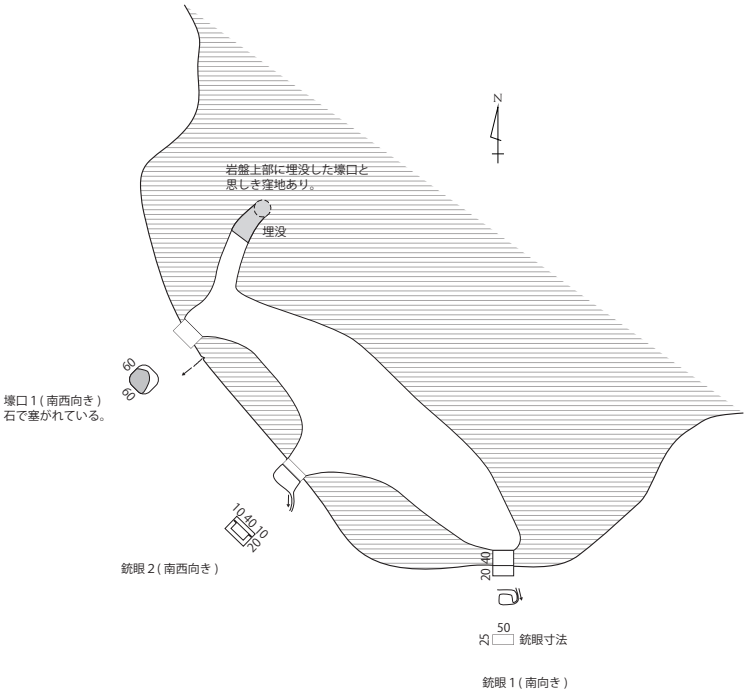


第 62. 図 伊良部島南海岸の壕群　位置図

で半ば埋まっている。

もっとも西側にある小ぶりの壕口は南西方向に開口し、およそ 0.6 メートル四方の大きさがあり、モルタルで石を固めて加工した痕跡が残っている。しかし、壕口は岩で塞がれており、ここから壕内に入ることは出来ない。壕口を塞ぐ岩は、周辺が崩れたり、自然に移動して壕口にはまるような大きさではないことから、おそらく終戦後の引き上げの際に、故意に壕口を塞いで秘匿した可能性も考えられる。

東側の銃眼 1 は南向きに構築されており、平良港の西側の航路を監視できる位置にあるが、現在は長山港の消波ブロックが沖合いにあるため、視界は遮られている。銃眼の開口部の大きさは高さ 0.25 メートル、幅 0.5 メートルでコンクリートで方形に固められている。



第 63. 図 壕 2　簡易平面図

銃眼 2 は南西を向き、幅 0.4 メートル、高さ 0.2 メートルのコンクリート製で、四角い窓の上辺の左右に、用途不明の細長い切り込みがある。

壕内は南東－北西方向に長く、北東－南西方向に短い不定型な形状であるが、十分な広さが確保されている。

また、壕口の奥には、銃眼のある部屋とは異なる通路が北東方向に掘り込まれ、斜め上に向かって続いているが途中で埋没している。 6 メートルほどの高さのある、壕の掘られた岩盤の上部を調査したところ、アダン林の中に上方の壕口の痕跡と思われる窪地を確認できた。

このほか、壕口、銃眼の周辺の岩場には、幾筋か浅い溝状の工作痕と、小さく浅い掘り込みが見受けられた。岩から染み出る水を集めるために加工した痕跡ではないかと思われる。

壕 3

ふたつの銃眼がある壕 2 の向かい側の岩場の裂け目に、自然の地形を利用した壕 3 がある。岩盤から海側に剥離した岩塊の隙間は、波が打ち寄せる足場の悪い海沿いを避けるように、細い通路状になっており、この隙間を通れるようになっていたとみられる。ただ、現在は通路の西側部分は崩落している。

壕はこの隙間の中央部の下方に開いており、 1 メートル四方の空間が設けられ、深さが 1.5 メートルほどあり、下方で海側に開口部が作られている。開口部は南を向いているが、壕内は崩落した岩と海洋ゴミが散乱しているため詳細を確認できる状態にない。

壕 4

県道 204 号ぞいにあるカフェの 100 メートルほど西方にある、入江の東岸の岩場にある海蝕洞を利用した壕である。

地上部分は海側に張り出した岩場を短絡するように、東西方向に低い切通し状の幅2メートルほどの通路が構築され、一段下がった位置に、幅 1.5 メートル×０．６メートルのステップがあり、そこから北方向

に幅 0.6 メートル、深さ 1.5 メートルほどの溝状の通路が、５メートルほど掘り込まれている。通路端はステップが２段あり、0.7 メートルほど下った位置から海蝕洞へと繋がる洞口となっている。
海蝕洞は入江の東岸の岩場に沿って細長く浸蝕され、最も深いところでは５メートルほどの奥行きがあり、洞口に近い部分であれば立つことも可能である。しかし、満潮時に洞内は浸水すると思われ、壕というよりは、入江の奥にあるビーチ方面への通路としての役目を持っているように思われる。尚、最大干潮時であれば、狭い洞内を通らずとも潮の引いた入江を徒歩で通行することが可能である。

壕５

壕４のある入江の西岸に連続して３か所の海蝕洞が開口している、この海蝕洞群のある岩場とビーチとの接点部に壕口が構築されている。壕口から入ると、外側からは３つの海蝕洞に見えるが、洞内の壁面はほぼ浸蝕されて繋がっている（加工され繋がったとも考えられるが、永年の海蝕で滑めされているため加工痕は不明）。その結果、非常に広い洞内空間が得られているが、干潮時でも海水がほぼ浸水している箇所が多いので棲息には不向きである。

しかし、ビーチ寄りの海蝕洞の最深部に、方形に加工されたとみられる小部屋があり、舟艇など連絡移動用の小型船舶を隠してた可能性も考えられる。

壕６

県道 204 号沿いに位置するリゾートホテルの南側に開いた入江の岩場に構築された壕。壕口１は南方向を向いて開口し、汀線から１メートルほど高い位置にある岩棚の壁面に開いている。壕口１の開口部前面は、幅約１メートル、奥行き約２メートルほどの岩棚があり、身を隠して待機することが可能で、浜から壕への通路を兼ねた作りをしている。また、岩陰を巧みに利用して南向きに、縦 0.3 メートル横 0.4 メートルの銃眼も構築されている。

壕は西方向に掘り込まれており、内部にはやや砂が堆積している。壕口の幅は 1.2 メートルあるものの、高さが 1.2 メートルと低く、まだ未完成の状態と見られる。壕は直線的に 5.7 メートルほど掘られた位置に、北（壕口から右手方向）を向いた狭い横穴（幅約１メートル、高さ 0.4 メートル、奥行き１メートル）がある。また、壕の左右の壁面には灯り取り用とみられる小さなくぼみもある。

ここから壕は高さが約 0.45 メートルと更に低くなるが、わずかに南に向きを変えて３メートルほど進み、岩場の地上へ繋がる垂直に構築された壕口２へ到達する。壕口２は幅 1.4 メートル×１メートルの方形で、上方へ 1.3 メートルほどの竪穴となっている。地上は繁茂した雑木で覆われているが、ホテルの敷地に隣接している。

長山港東側

壕１（東）

長山港の東側に隣接した耕作地の海側、海風を防ぐように茂った雑木林の中に壕がある。林の中に開口する壕口１は、およそ 1.7 メートル四方の竪穴で、およそ２メートルほど下方に向かって垂直に掘り込まれているが、周囲の泥などが流入して竪穴は半ば埋没している。竪穴壁面から海へ向かう通路状の横穴が開口しているのがわずかに見て取れる。

海側の壕口２は、４メートルほど海側の崖を下り、満潮時海面から 0.5 メートルほど高くなった崖面に南東方向を向いて開口しているが、海洋性のゴミや堆積物などでほぼ埋没しており、壕口２から壕内を伺うことは出来ない。尚、方角的には平良港を見渡せる場所に構築されているが、現在は長山港の防波堤が

沖合いにあるため見ることはできない。

また、壕口２の上方、崖の上端には高さ 0.5 メートルほどの石積みが築かれていた。

壕２（東）

壕１（東）と同じように、畑の端の雑木林の中に壕がある。地表に開いた壕口１は、１辺が約 1.7 メートルの方形で、海岸沿いの崖面の岩場を垂直に約２メートル掘り込んでいる。Ｌ字に 90 度曲がった壕は、高さ約 0.8 メートル、幅約 1.3 メートルで、海に向かっておよそ 5.8 メートル直線的に掘り込まれ、小さな入江にある海蝕洞を利用した、南に開口した壕口２へと達する。

壕口２は満潮時に壕口付近が幾分、海に浸食されるためか、壕口の右手に床面から 0.4 メートルほどの高さの位置で、幅は約 0.46 メートル、高さ約 0.8 メートル、奥行き 1.6 メートルの小さな穴が、北向きに掘り込まれている。穴の位置が壕本道よりも少し高くなっているため、満潮時でも浸水しない補助待機場所と見られる。

このほか、海蝕洞の壁面を棚状に加工された部分も見て取れるなど、全体に簡素だが、細かな加工が施されている。また、壕口２のある入江には、すぐ右側に壕１（東）の壕口２が開口している。

写真 437. 壕１　壕口

写真 438. 壕１　壕入口付近

写真 439. 壕１　入口付近の脇部屋

写真 440. 壕１　壕内の途中の窪み

写真 441. 壕１　壕奥

写真 442. 壕１　壕口からの眺望

写真 443. 壕１　全景（白い建物の左下）

写真 444. 壕２　全景（中央の岩陰）

写真 445. 壕２　岩で蓋された壕口

写真 446. 壕２　銃眼１（南向き）

写真 447. 壕２　銃眼２（南西向き）

写真 448. 壕２　壕内（銃眼１が左、２が右）

写真 449. 壕２　壕口の奥に続く壕（埋没）

写真 450. 壕３　壕口（通路口）

写真 451. 壕３　壕内の通路部

写真 452. 壕３　海側の壕口

写真 453. 壕４（右手前）・壕５（左奥） 入江の全景

写真 454. 壕４ 切通し通路とステップ

写真 455. 壕４ 洞口へ続く掘割の通路

写真 456. 壕４ ステップ２段（洞口側から）

写真 457. 壕４ 内部から入江

写真 458. 壕４ 海蝕洞内

写真 459. 壕４ 開口した海蝕洞（ビーチ側より）

写真 460. 壕５ 全景（右手に壕口）

写真 461. 壕５　岩陰の壕口

写真 462. 壕５　海蝕洞内（手前）

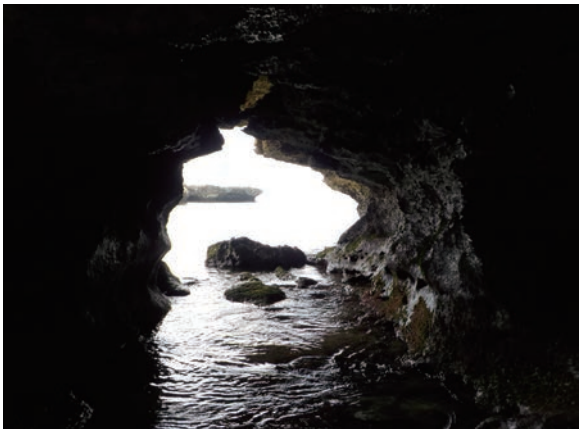


写真 463. 壕５　海蝕洞内（最奥）

写真 464. 壕５　連結した海蝕洞

写真 465. 壕５　海蝕洞奥の方形の加工痕

写真 466. 壕６　壕口からの眺望

写真 467. 壕６　ホテル前の入江と壕口

写真 468. 壕６　壕口の岩棚

写真 469.　壕６　銃眼（壕口側）

写真 470.　壕６　壕内（奥に竪穴がある）

写真 471.　壕６　壕口２（竪穴）

写真 472.　壕１（東）　壕口１（埋没した横穴がある）

写真 473.　壕１（東）　海側の壕口２（埋没）

写真 474.　壕１（東）　壕口２の上部にある石積み

写真 475.　壕２（東）　竪穴の壕口１

写真 476.　壕２（東）　壕内通路（海向き）

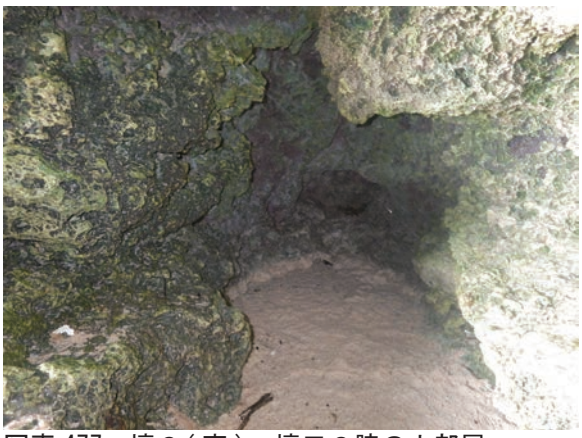


写真 477. 壕２（東） 壕口２脇の小部屋

写真 478. 壕２（東） 前の入江（満潮時）

写真 479. 干潮時の入江 左が壕１、右が壕２

写真 480. 壕１～２（東） 遠景（奥は長浜港）

（３）伊良部倒底原の壕群（いらぶとうそこばるのごうぐん）

①所在地

宮古島市伊良部字伊良部倒底原

②立地・現況

伊良部島の南部。牧山台地（長山台地）の西側に位置し、陥没ドリーネ状の地形の内側斜面に構築されている壕群。

③歴史状況

宮古島地区防禦配備図によれば、伊良部島の中央（国仲美里・国仲砂川付近）から、南海岸にかけて迫撃砲や速射砲の陣地が構築されている。この倒底の地は伊良部島の中でも比較的標高が高く、南方から宮古島への入口となる地域を一望することができる。また、この地域（長山附近）では、深さが人の高さ程、幅は三間余りの戦車壕掘りの作業をしたとの体験談や聞き取りもある。他にも近隣には炊事場があったことや、アブ（自然洞）を倉庫として利用していたという証言もあったが、部隊等の詳細については判っていないものの相応の規模の兵が詰めていたことが窺える。

④遺構の特徴

ドリーネの内側斜面を形成する台地のヘリは、標高が 56.1 メートルあり、南方向の眺望が大きく開けている。この高地の北側斜面（ドリーネの内側斜面）には、およそ等間隔で茂るガジュマルの根元付近に、さまざまなタイプの壕が構築されている。

壕１

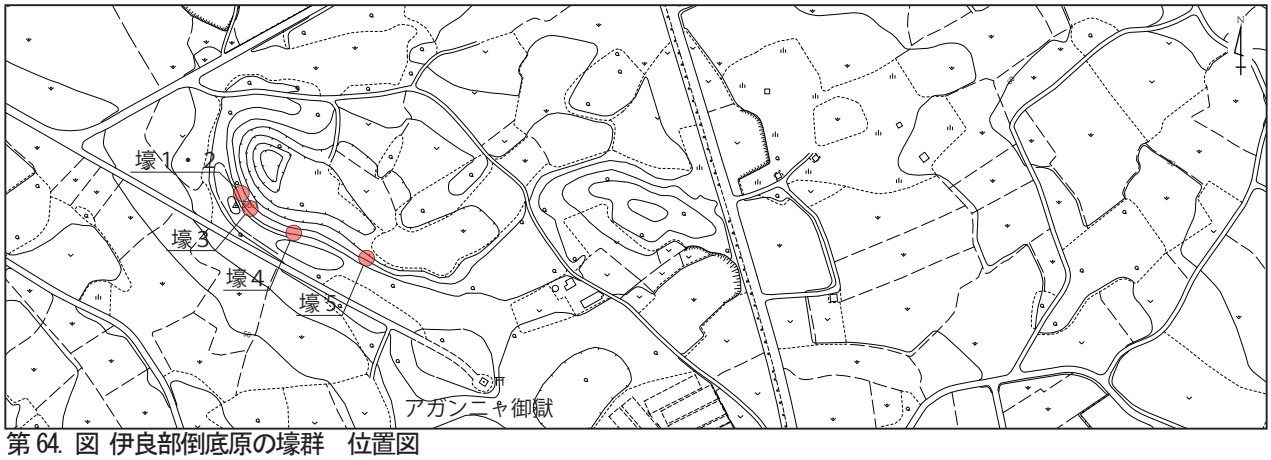
北向きに開いた壕口は、幅約 1.2 メートル、深さ約 1.6 メートルで、下方に傾斜して彫り込まれている。壕内は幅が約５メートル、奥行きが約５メートルの円形に近い部屋状に構築され、高さは壕口と同様に約 1.6 メートルほどである。

壕２

壕１からおよそ３メートルほど斜面を下った、直下にあり、崖面の窪みを活用して構築されて、退避壕のような簡易な作りである。壕の幅は約１メートル、奥行きも約１メートルで、壕口から１メートルほど落ち込んでいる。サイズ的には一人壕（蛸壺）に近いが、穴の方向が横向きであり、壕１と連携したものと考えられる。

壕３

壕２と同様に崖面にある自然の窪みを利用して構築された、簡易的な壕で、退避壕と見られる。壕口の



第 64. 図 伊良部倒底原の壕群　位置図

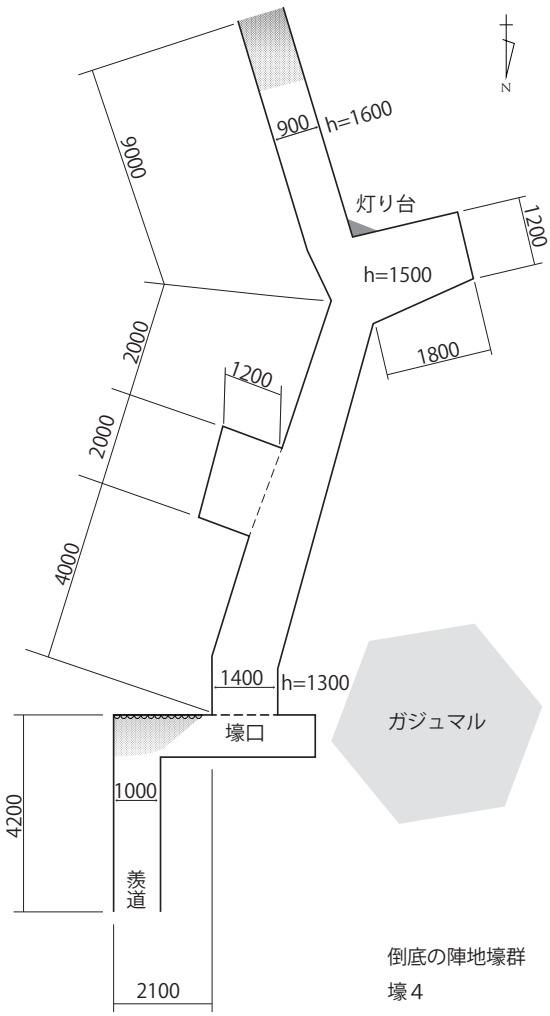
幅は 2.5 メートル。高さは約 1 メートル、奥行きは約 1.5 メートルで下方に傾斜して彫られている。

壕 4

斜面に茂るガジュマルの根元に構築された壕口は、クランク状の羨道を持ち、直接、壕口が正面から見えない構造となっている。掘り込んだ羨道部も斜面上方側は、岩盤の上に石積みを積み足し、土砂の流入を防ぐ作りとなっている（経年によって現在は、羨道部にも土砂が流入している）。

壕口は高さ約 1.3 メートル、幅約 1.4 メートルで、4 メートルほどの直線的な通路を進むと、左側に幅約 2 メートル奥行き約 1.2 メートルの脇部屋がある。脇部屋の天井高は通路とほぼ変わらないが、床面が通路よりも 0.45 メートルほど高くなっている。

脇部屋を過ぎると通路幅が 1 メートルほどに狭くなり、2 メートルほど進むと、右側に部屋口の幅約 2 メートル（部屋奥の幅は 1.2 メートル）、奥行き約 1.8 メートル、高さ約 1.5 メートルの脇部屋がある。こちらの床面は高くはないが、非常に床面がフラットな作りとなっている。また、脇部屋と通路の角に、三角形（0.4 × 0.3 メートル）に削り出された灯り置きと見られる台座が構築されている。



第 65. 図 伊良部倒底の壕群　壕 4　簡易平面図

通路はこの脇部屋の位置で左に曲がり、幅約 0.9 メートル、高さ約 1.6 メートルのサイズで、約 9 メートルほど直線的に、緩く上方へ向かっているが、壕奥は土砂で埋没している。

壕 5

壕群が構築されいるドリーネの内側斜面を形成する嶺は、東側ほど低くなっており、このため斜面中腹にあった壕 1 ～ 4 と比べると低く、耕作地にかなり近くなっている。実際には、ドリーネの底に客土され、耕作地へ改良しているため、壕口付近が改良の影響を受けており、半ば埋没した状態にある。

壕口のサイズは壕 4 とほぼ同様であるが、流入した土砂により埋まっている。壕内は 9 メートルほどの直線的な壕で、壕奥部で右にカーブしている。また、左右に脇部屋がひとつずつあり、壕 4 とよく似た構造を呈している。

＜参考＞　ノドクビアブ（池間添ズー原）

聞き取りによると、軍の倉庫として使用されていたと云われ、雨などで物資が濡れたことから、集落内の民家を倉庫に徴用し物資を移動したとあるが、集落との距離的な観点や部隊展開などの関連から、よく知られている名前のアブでもあり、アブ名に誤認がある可能性も否定できない。（写真は第 5 節　池間添・前里添の調査成果一覧⑰を参照）

写真 481.　倒底の壕群全景（ドリーネの斜面）

写真 482.　倒底の壕群全景（斜面のガジュマル）

写真 483.　ドリーネの底面（大半は農地に改良済）

写真 484.　壕１　壕内から壕口を望む

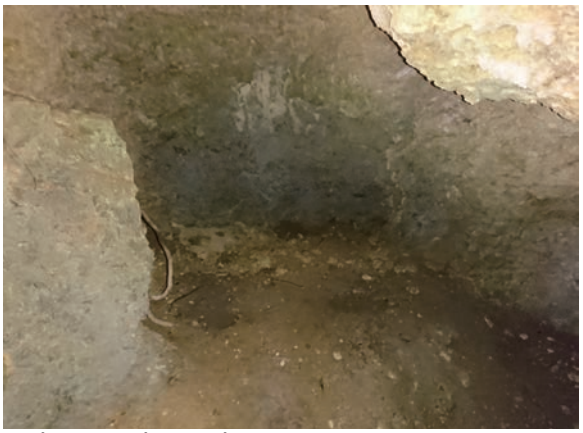


写真 485.　壕１　壕内

写真 486.　壕２

写真 487.　壕３

写真 488.　壕４　壕口と石積み

写真 489. 壕４　壕口

写真 490. 壕４　壕内通路と脇部屋

写真 491. 壕４　最深部

写真 492. 壕４　曲がり角にある灯り台

写真 493. 壕５　壕口

写真 494. 壕５　壕内（右手は脇部屋）

写真 495. 壕５　壕内

写真 496. 壕５　壕奥

４．仲地共同墓の住民避難壕（なかちきょうどうばかのじゅうみんひなんごう）

①所在地

宮古島市伊良部字伊良部西本島

②立地・現況

伊良部集落の東方、南向きの斜面に広がる圃場整備済の耕作地に残された岩造りの墓に構築された壕。

④遺構の特徴

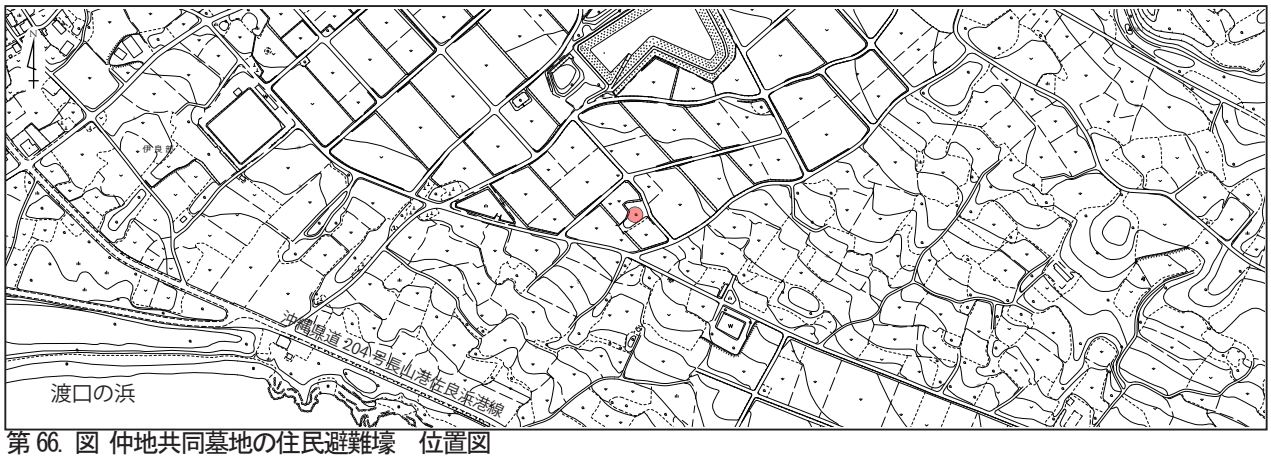
耕作地内に残った岩盤を掘り込んで作られた大きな墓が２基あり、聞き取りによると、仲地集落の共同墓であるという。山側にある墓は、南を向いた墓室の前に広い墓庭を持った掘り抜き墓である。この墓庭の西側（墓室に向かって左）の壁面を掘り込んで壕が構築されている。東に開口した壕口は、やや崩れかけてはいるが、爆風除けのような土盛りの囲いがあり、直接、壕口が墓庭を向いていない。

壕口の大きさは幅約 0.75 メートル、高さ約１メートルで、壕内は奥行き約５メートル、左右方向約４メートルの十字状に掘られている（十字の交点は壕口から約３メートル付近）。壕内の高さは１メートルと低いが、比較的綺麗な造形で構築されている。

海側の墓の墓室は西を向いており、墓の壁面等への加工は見受けられないが、墓へと降りる入口の階段部分からは、眼下に広がる海を一望することが可能である。

こうした立地的に加え、竹内隊や遠藤隊と、倒底付近の陣地との中間地点にあたることから、望楼的な監視陣地であった可能性も考えられる。また、墓周辺での聴き取りでは軍も使用していたのではないかとの情報もあった。

山側、海側いずれの墓も閉じられた口の隙間から墓室内を見るに、壺などが片側に寄せられ、墓室内を広く利用できるように整理されており、墓室も壕として利用した可能性もあるが、周囲に残存する供物等の年代から、現在も墓は利用されているため、整理された時期は定かではなく墓室の利用については想像の域を出ない。



第 66. 図 仲地共同墓地の住民避難壕　位置図

写真 497. 仲地共同墓（全景）

写真 498. 陸側の墓庭

写真 499. 壕口

写真 500. 壕内（正面は暴風除けか？）

写真 501. 壕内（十字部より右側）

写真 502. 海側の墓室前

写真 503. 墓の降り口部分（中央が階段）

写真 504. 陸側の墓前からの眺望（下地島方面）

（５）伊良部大長原の壕（いらぶおおながばるのごう）

①所在地

宮古島市伊良部字伊良部大長原

②立地・現況

伊良部島の南部に広がる台地の麓を通る、県道 204 号線沿いに位置している。近年、カフェやホテルなどの開発が進んだエリアの一角に残る、琉球石灰岩の小山に壕がある。

③歴史状況

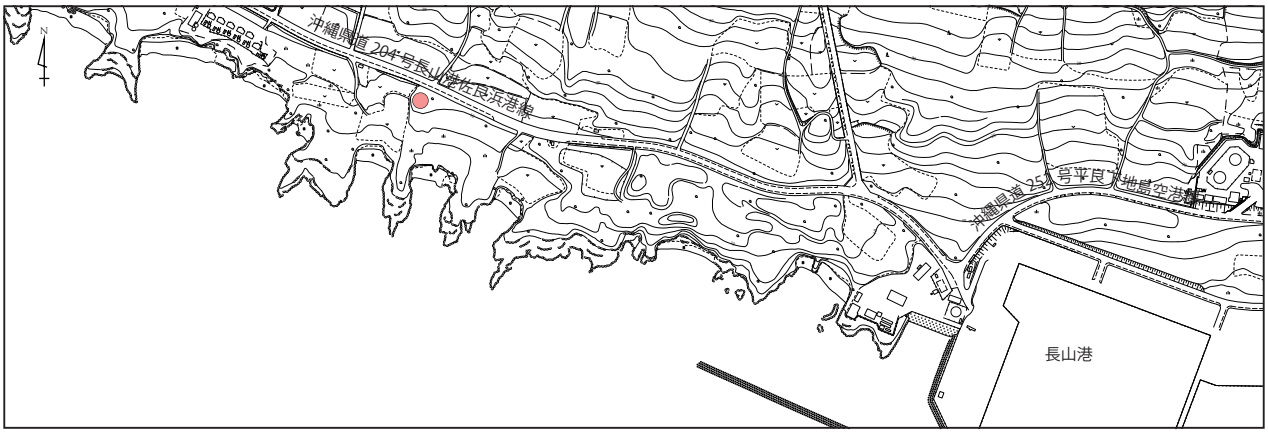
長山港（通称・屋良部崎）の西方にあたり、宮古島地区防禦配備図によると、当該地周辺には部隊がいたことが示唆されている。実際に、倒底原の陣地壕群、倒底原の戦車壕跡、東本島の部隊駐屯地跡、見張り櫓跡など、複数の痕跡や聞き取りもある。今回発見に至った壕は単基ではあるが、規模も大きいことから、伊良部島南海岸に点在する水際陣地と連携した壕と考えられる。

④遺構の特徴

本壕は開発されずに残された小さな岩山で、海沿いにあるカフェへの進入路に面した北西側に開口しているが、壕口は開発によって崩されており、壕内にかなり土砂が入り込んでいる。壕口の幅は 1.1 メートルあり、地上から 2 メートルほど流入した土砂の斜面を下って入壕すると、幅 0.75 メートル、高さ 0.8 メートルほどの通路が続いている。南東に 3 メートルほど進むと、わずかに右（南）方向へカーブし、1 メートルほど続いたところで別の通路と合流するが、東側の埋没した壕口と思われる斜路上部から、大量の土砂が壕内に流入している。流入口の幅は 1.4 メートルほどで、完全に埋没するまで 1.1 メートルの奥行きがあり、上方へおよそ 2.5 メートルほど登っている。入壕時の深度を考えると、地上付近に壕口があったものとみられる。また、埋没した壕口からほぼ直線的に伸びた、西向きの通路（後述）が続いており、こちらの通路へも土砂は流れ込んでいる。

この土砂の流入した合流部分にはもう一本、北東を向いた下方へ続く通路がある。通路の幅は 1 メートル、高さは埋没した状態で約 0.6 メートル、奥行きは 3 メートル、高低差は約 1.2 メートルで、斜路の部分まで土砂が流入している。通路奥は南東にほぼ 90 度曲がっており、高さ 1.1 メートル、奥行き 1.6 メートル、最深部の幅 0.7 メートルの平坦な通路がある。通路幅が先細りしていることから未完成と見られるが、上部の土砂が流入する埋没した壕口の直下に位置しており、複雑で立体的な構造をしている。

埋没した壕口から西へ進む通路は、幅 1.5 メートル、高さ 1.6 メートルで、約 6 メートルほど直線的に構築されている。南側には幅 1.75 メートル、高さ 1.1 メートルの広い場所があり、南向きに銃眼がある。銃眼周辺の内部は崩れかけ、土砂も堆積しているが、高さ 0.2 メートル、幅 0.5 メートルの銃眼がわずか



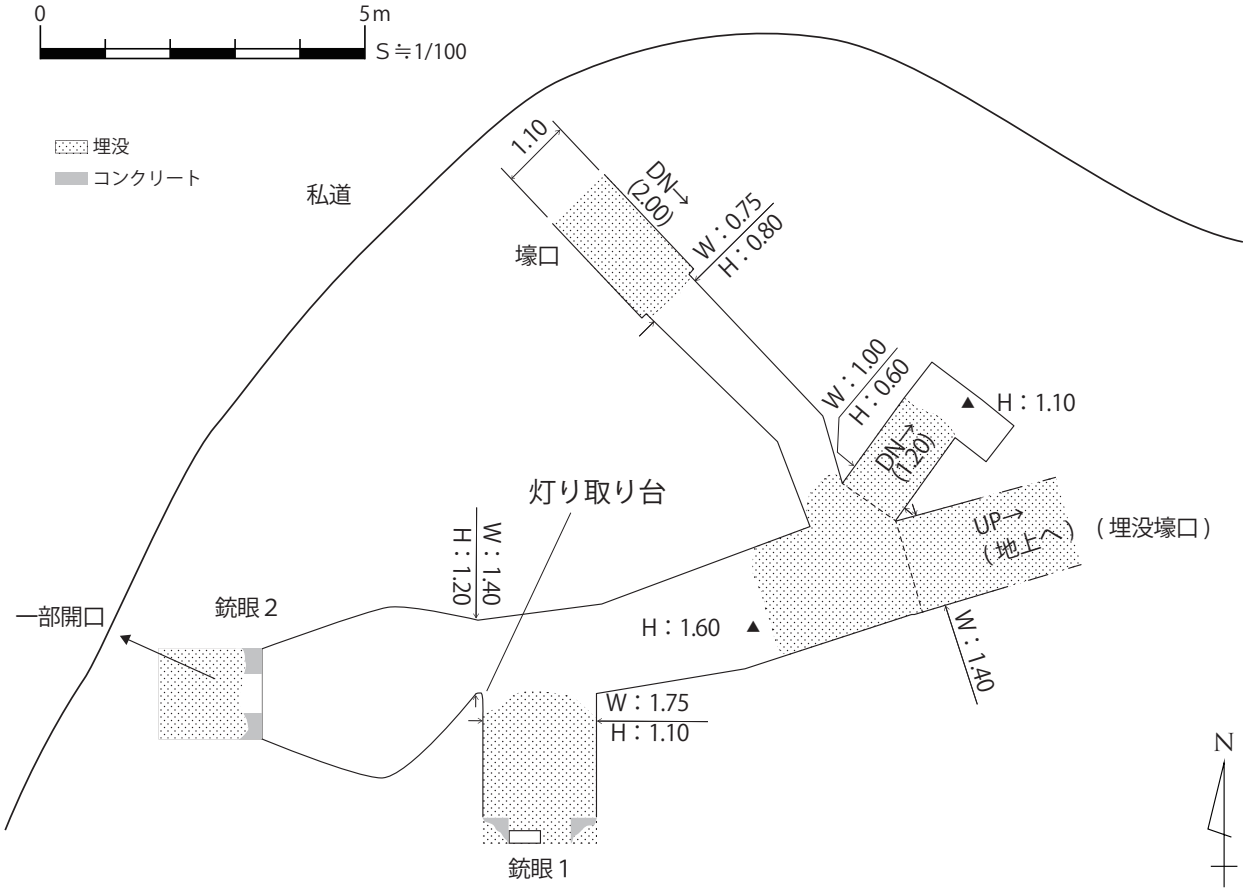
第 67. 図 伊良部大長原の壕　位置図

に開いている。銃眼の左右には高さ 0.3 メートル、幅 0.4 メートル、奥行きは土砂に埋もれているが 1 メートル弱のコンクリート製の構造物が確認できる。この銃眼と西に続く通路との南側の壁面の角には、床面近くに切り込みが作られており、灯りを置くための台座と見られる。

さらに西に続く通路は、高さ 1.2 メートル、奥行き 3.5 メートルあり、わずかに奥へ向かって登り勾配となっている。壕幅は分岐地点では 1.4 メートルだが、最大幅が 2.7 メートルあり、小ぶりの部屋ほどの広さで、西向きに銃眼が構築されている。

銃眼の幅は 1.4 メートルで、左右にコンクリートの構造物がある。左側は幅 0.4 メートル、高さ 0.5 メートル、奥行きは埋没しているが、1.6 メートル以上あるとみられる。右側は幅 0.4 メートル、高さはコンクリート部分は 0.25 メートルで、その上に三段の煉瓦を足し増して全高が 0.45 メートルある。ふたつの構造物間（内寸）は 0.6 メートルで、中央部から銃眼の外に向かって、コンクリート敷きの床面になっているが、銃眼から流入した土砂により、全貌を確認することは出来ない。銃眼の外側のほとんどは土砂で埋没しているが、北西方向にわずかに隙間があり、壕外の明かりが入り込んでいる。

この明かりが入り込む銃眼の外側は、カフェへ続く進入道脇から 0.5 メートルほどの藪の斜面に開いており、コンクリートで作られた銃眼の庇も確認できる。



第 68. 図 大長原の壕　簡易平面図

写真 505.　大長原の壕　近景

写真 506.　壕口

写真 507.　壕内から壕口方向を望む

写真 508.　右上より土砂流入。正面は下方通路

写真 509.　下方通路を上方より望む

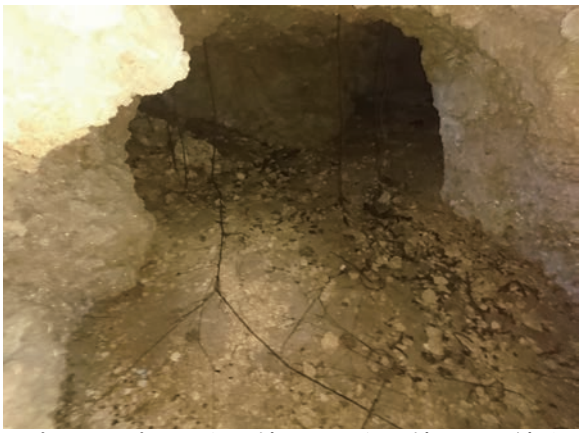


写真 510.　壕内　左、銃眼１。右、銃眼２へ続く

写真 511.　銃眼１

写真 512.　広い通路と銃眼２

写真 513.　銃眼２　　左構造物

写真 514.　銃眼２　　右構造物

写真 515.　銃眼２より銃眼１分岐方向

写真 516.　銃眼２　　外観

写真 517.　銃眼１　　外観

写真 518.　銃眼１　　外部より壕内を望む

第5節　池間添・前里添

１．池間添・前里添の地理的環境

池間添・前里添の字域はおおむね伊良部島の東半分を占めるが、集落の大半は急峻な佐良浜断層崖に貼り付くように密集している。近年では平地が少なく、細い階段の多い徒歩道ばかりの旧集落から、上方の台地部に新興の集落が増えつつある。池間添・前里添を合わせ、この地域を北区と呼びならわす他、通称名として佐良浜とも呼ばれる。佐良浜はカツオ漁を中心とした漁業で栄えた集落であり、2015 年の伊良部大橋開通まで、宮古島の平良港と佐良浜港の間に定期航路が運行され、伊良部島の玄関口となっていた。海岸部は港周辺以外は人を寄せ付けない断崖だが、台地部には耕作地が広がり、伊良部島の最高峰である牧山の南麓に、伊良部大橋が架橋されている。

また、伊良部島の南端に位置する屋良部崎周辺には、工業港の長山港が戦後、築港された。

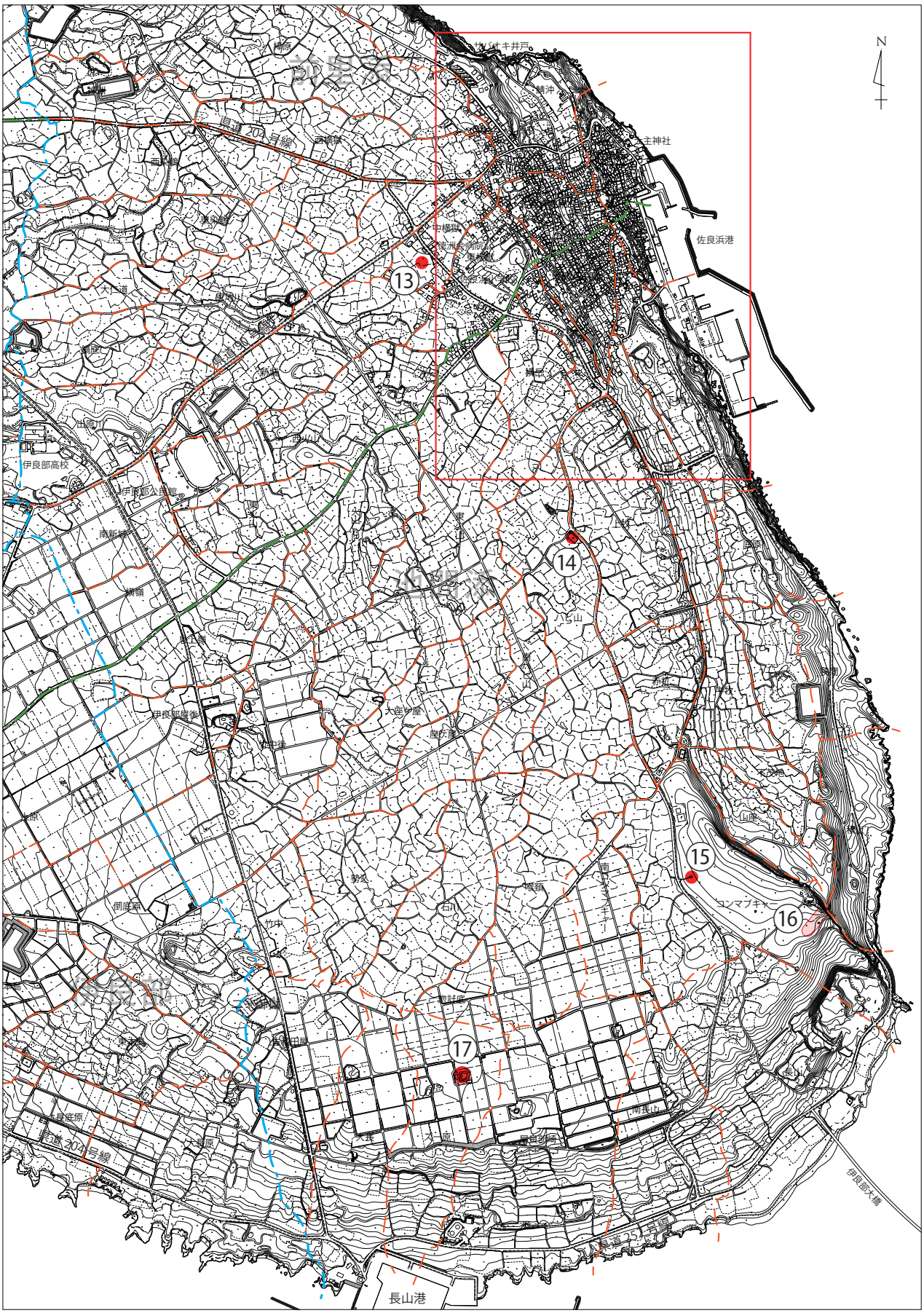
２．池間添・前里添の沖縄戦時の概況

池間添・前里添集落は伊良部島への玄関口となる佐良浜港を有し、島内の部隊の荷揚げの拠点となっていた、集落は急峻な地形にあり、港まで多くの車両が入れないため、港からの荷揚げは崖上の道路までは、人力でおこなわれていた。細い崖面の階段状集落内の生活道（路地）を昇り降りしての荷の運搬は、地元の婦人たちが頭に荷を乗せて運ぶという労力に頼るものであった。

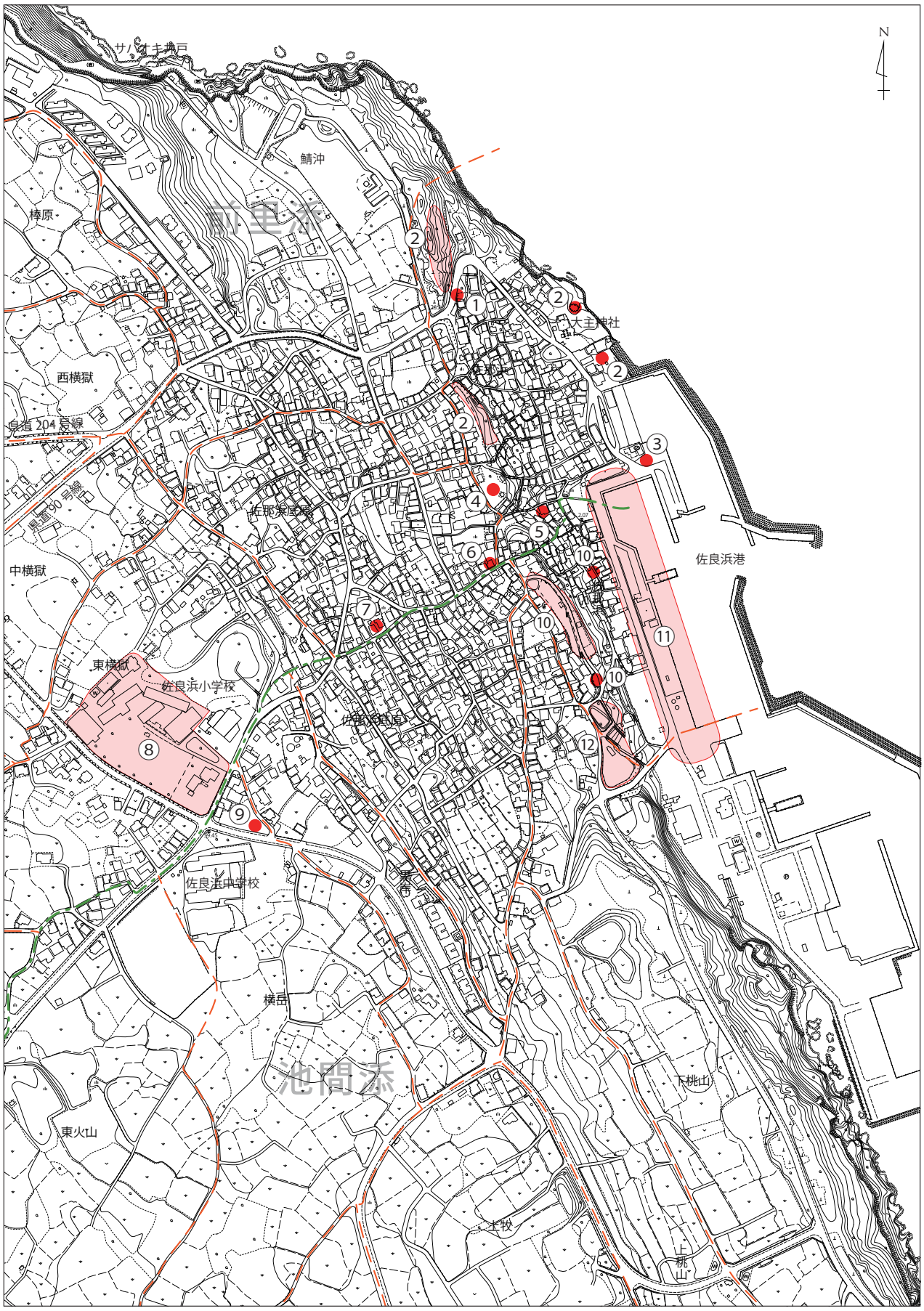
また、今回資料として提供して頂いた当時の軍隊手帳などから、集落の男たちは食糧確保のために組織され、イモ植えなどの食糧増産や漁労班としての作業に従事させられた事がみてとれる。

住民の避難壕は崖面の岩をくり抜いた岩陰を利用し、多くの壕があったというが、現在では、その当時の地形が変容し、往時の状況を垣間見ることができるのはごく狭い地域である。

池間添の南側には切りたった高地が続き、その中の牧山（89.2 メートル）には、15 糎榴弾砲を設置するための壕が構築された。伊良部国民学校沿革誌によれば、高等科児童も構築作業にかり出されている。



第 69. 図 池間添・前里添地区成果図（広域）



第 70. 図 池間添・前里添地区成果図（拡大）

３．池間添・前里添の調査成果一覧

①佐良浜の避難壕（前里添）

沖縄県戦争遺跡分布調査（2005、沖縄県立埋蔵文化財センター）で確認されている避難壕。

②前里添佐那浜の住民避難壕群［Ⅰ～Ⅱ］（前里添）

聞き取りによると、住宅街の中の崖に避難壕跡などが複数ある。

③回光機で通信した場所（前里添）

聞き取りによると、佐良浜の海岸で回光器を使用して平良との間で信号を送りあい、第 59 旅団と第 28 師団の連絡業務を通信した。現在の佐良浜石油のあたりで、漁港整備で埋め立てられる前は海に突き出た岩場であった（昭和５年生）。

※回光機　光の明滅を利用して、モールス信号などを送って通信を行う軍用通信機で、回光通信機とも呼ばれる。

④ンヌツニー御嶽（前里添）

聞き取りによると、軍の配給担当がいた。漁労班の担当はイイダ少尉であった（昭和６年生）。

⑤爆弾が着弾した場所１（前里添）

聞き取りによると、前里添 327 番地には、爆弾が落とされた（昭和９年生）。

⑥倉庫として使われた家（前里添）

聞き取りによると、前里添 350 番地は、部隊の倉庫として使用され、米俵が積んであった（昭和６年生）。

⑦野戦病院医大尉が寄宿した家（前里添）

聞き取りによると、前里添 392-1 には軍医が宿泊していた（昭和９年生）。

※第 28 師団第 2 野戦病院　山崎清春大尉に比定

⑧野戦病院（前里添）

聞き取りによると、佐良浜国民学校（佐良浜小学校）は野戦病院だった（昭和６年生）。その他にも複数の聞き取りが得られている。

⑨爆弾が着弾した場所２（池間添）

聞き取りによると、爆弾が落された。すぐそばにある軍の施設となっていた学校を狙ったものと思われる（昭和6年生）。

⑩池間添佐那浜の住民避難壕群［Ⅰ～Ⅲ］（池間添）

聞き取りによると、住宅街の中の崖に避難壕跡が複数ある。

⑪死体が打ち上げられた佐良浜港（池間添・前里添）

聞き取りによると、漲水港に停泊している徴用船などへの攻撃で、その犠牲者の遺体は佐良浜の海岸に打ち上げられていた（昭和９年生）。

⑫池間添下桃山の壕跡（池間添）

聞き取りによると、下桃山にあるカツオ工場の東側 (ゲートボール場付近) で、兵隊の指示で壕掘りの作業をした（昭和６年生）。

聞き取りを元に現地調査を行ったところ、岩盤を掘り込んだような痕跡が数か所で確認出来た。

⑬爆弾が着弾した場所３（前里添）

聞き取りによると、現在の佐良浜郵便局の隣に爆弾が落ち、近年まで大きなな穴が開いていた（昭和３年生）。

⑭ハビヤマのカーゾク（フラナー池・池間添）

聞き取りによると、牛や馬に水をやる池だった。佐良浜から牧山への作業途中で立ち寄る休息場であり、空襲の際にはその近くに逃げ込む壕（山座アブであろうか？）があった（昭和６年生）。

※山座アブ：牧山展望台の崖地あるといわれている壕（未調査）。

⑮牧山（ピャーズ御嶽・池間添）

聞き取りによると、この付近には三上隊が兵舎を設置していた。（昭和９年生）

⑯牧山陣地壕（池間添）

沖縄県戦争遺跡分布調査（2005、沖縄県立埋蔵文化財センター）で確認されている壕。

⑰ノドクビアブ（池間添）

聞き取りによると、この洞穴は軍の倉庫として使用されていたと云われている。アブの天井が開いているために雨などで物資が濡れたことから、集落内の民家へ物資を移動して倉庫として使用した（昭和８年生）。

長山台地にあるノドクビアブの位置や、集落との距離的な観点。並びに屋良部崎方面（伊良部東本島・倒底・大長原付近）に展開が想定される部隊などの関連から、アブ名に誤認がある可能性も否定できない。ノドクビアブはよく知られている名前のアブであることから、アダンニャ御嶽の北側にある倒底の陥没ドリーネが倉庫に利用された可能性が捨てきれない。

※「倒底の壕群」を参照。

写真 519. ①佐良浜の避難壕（前里添）

写真 520. ②前里添佐那浜の住民避難壕群［ Ⅰ ］

写真 521. ②佐那浜の住民避難壕群［ Ⅲ ］壕内部

写真 522. ③回光器で通信した場所（前里添）

写真 523. ④ンヌツニー御嶽（前里添）

写真 524. ⑤爆弾が着弾した場所１（前里添）

写真 525. ⑥倉庫として使われた家（前里添）

写真 526. ⑦野戦病院医大尉が寄宿した家（前里添）

写真 527. ⑧野戦病院（前里添）

写真 528. ⑨爆弾が着弾した場所２（池間添）

写真 529. ⑩池間添佐那浜の住民避難壕群［ Ⅰ ］

写真 530. ⑩池間添佐那浜の住民避難壕群［ Ⅱ ］

写真 531. ⑪死体が打ち上げられた佐良浜港

写真 532. ⑫池間添下桃山の壕跡

写真 533. ⑫池間添下桃山の壕跡（池間添）

写真 534. ⑬爆弾が着弾した場所３（前里添）

写真 535. ⑭ハビヤマのカーゾク（フラナー池）

写真 536. ⑮牧山（ピャーズ御嶽）

写真 537. ⑯牧山陣地壕

写真 538. ⑰ノドクビアブ

４．池間添・前里添の戦争遺跡

（１）牧山陣地壕（まきやまじんちごう）

①所在地

宮古島市伊良部字池間添コンマブキャー

②立地・現況

伊良部島南東部。伊良部島最高峰である牧山（標高 89.2 メートル）を有する牧山公園内の遊歩道沿いに壕口があり、佐良浜断層崖の崖面に開口している。

③歴史状況

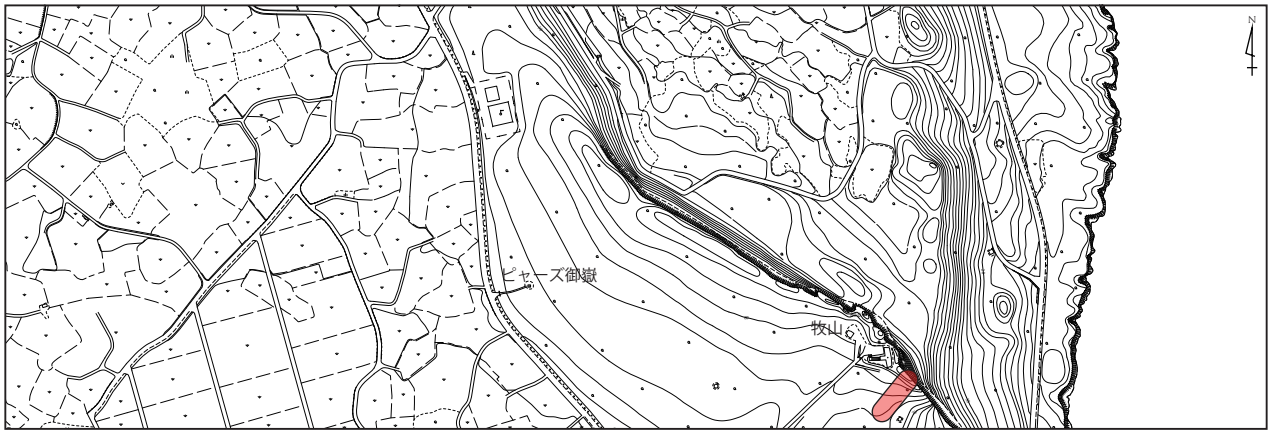
当初は、三上大尉を指揮官とする砲兵隊が当該地点に陣地を構え、伊良部島と宮古島間（平良港）を襲撃する敵に備えるために陣地壕を設置した。しかし、終戦までに壕の構築が完成せず、砲台を据えることはなく、実際に当該地点から砲撃することはなかった。

『先島群島作戦』によると、「伊良部島防衛は 1944 年（昭和 19）９月以降に守備隊が配備された。長山高地（牧山）に野戦重砲 15 センチ榴弾砲三門を秘匿、平良方面に上陸する敵を背後から攻撃する手はずになっていたが、集団令により、主力は 1945 年（昭和 20）６月初め、機帆船、舟艇等によって宮古島平良港に転進、北地区の守備についた」とある。（沖埋文 2005 年より引用）

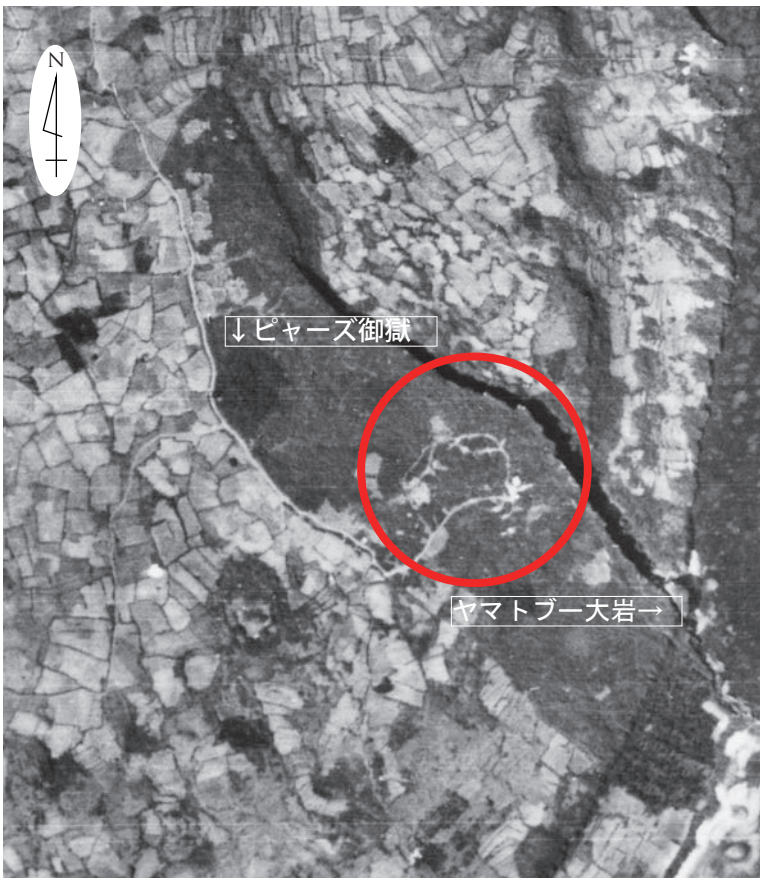
④遺構の特徴

西から東方面に刳（えぐ）り貫いており、全長 72 メートルにも及ぶ。入口の幅は約 2.4 メートル、高さは約 1.7 メートル、反対側の出口は幅 1.1 メートル、高さ 1.2 メートルである。壕内の幅や天井の高さは一定ではなく、床面はほぼ平坦で、壁の成形は出口部分を除いて雑である。部材を嵌め込んだと思われる窪みが壁などに見て取ることが出来る。入口から入って左側部分には縦横 1.5 × 2.2 メートルの小部屋と、そこへ至る幅 0.6 メートルの羨道が設置されている。約 40 メートル進んだ地点では石灰岩の風化が進行しており、天井や壁の崩落が激しい。出口部分の造りは丁寧であることから重火器砲を設置したものと考えられる。出口はそのまま登坂不可能な断崖絶壁となるため、前方を塞ぐ木々等の障害物は無く、宮古島北部の西海岸を一望のもとに見渡すことができる。

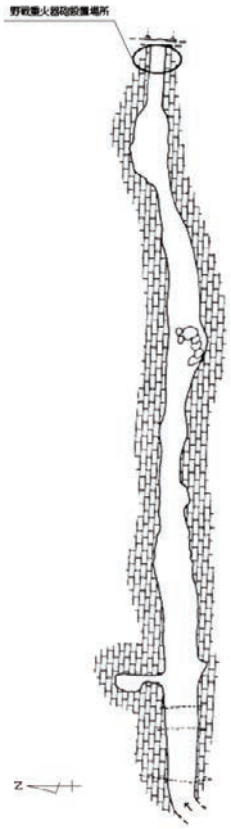
周辺の地形から自然壕を形成する場所ではなく、また壕内部においては再石灰化が進んでいる部分が見られないことから、地下壕でよく見られる自然壕に手を加えたものではなく、一から石灰岩を掘り込んだ壕であると思われる。（沖埋文　2005 より引用）



第 71. 図 牧山陣地壕　位置図



第 72. 図 伊良部島南東部（牧山付近を拡大）1945 年米軍撮影の空中写真より



第 73. 図 牧山陣地壕　平面図（沖埋文 2005）

写真 539.　壕口

写真 540.　壕内（内部から壕口を望む）

写真 541.　砲口

写真 542.　砲口からの眺望（遠景は宮古島）

（２）佐良浜の避難壕（さらはまのひなんごう）

①所在地

宮古島市伊良部字前里添佐那浜

②立地・現況

伊良部島東部、前里添。佐良浜断層崖を登る、県道 90 号線沿いの住宅街に位置している。

④遺構の特徴

本遺構は「沖埋文 2005」にて報告されている壕である。

沖埋文の報告書によると、「現在は佐良浜集落に 1 か所だけ残る。かつては佐良浜漁港に数 10 か所、掘り込んでいたが、戦後漁港拡張工事や護岸工事の際にその殆どが壊された。現在残る壕は民家の裏手の崖面に掘り込まれているが、入口は廃棄物の置き場となっているため内部へ進入することはできない。

外部から観察する限りでは石灰岩を掘り込んでおり、床や壁、天井は丁寧につくられている。更に複雑に折れ曲がりながら奥へ続いていくのが確認できた。当時は石灰岩を掘り込むためにツルハシや石斧、金棒を用いたようで、構築は陣地構築等の壕掘り作業が始まった 1944 年（昭和 19）10 月以降と考えられる。周辺にはこのような壕がかつていくつもあり、戦後は佐良浜の子供達の遊び場となっていた。」と、報告されている。

追記

今回、確認調査の結果、佐良浜断層崖を登坂する、県道 90 号線の海側斜面に壕口があり、県道の地下に壕が位置している。

壕口の大きさは幅約 0.7 メートル、高さ約 0.7 メートルで、南東を向いて開口し、壕内は 0.3 メートルほど壕口より下がっている。壕内の形状は幅約 1.1 メートルの通路を 3 メートル弱進むと、南西－北西方向にＴ字となっている。

第 74. 図 佐良浜の住民避難　位置図

Ｔ字の左手（南西側）は、奥行き約 4 メートルの通路が西に曲りながら続いている。壕奥の幅は約 1 メートル、高さは約 1.2 メートルで、灯り置きがひとつ確認できた。

Ｔ字の右側は 5 メートルほど北西方向に直線的な通路が続き、通路奥の壁面には灯り置きがある。通路途中の左側（北西側）に、幅約 1.2 メートル、奥行き約 1.3 メートル、高さ約 1.1 メートルの横穴がある。壕奥の北西側にも、幅約１．６メートル、奥行き約０．７メートル、高さ約 1 メートルの横穴が並んでいる。また、壕奥の東向き（右斜め）にも、幅約 0.9 メートル、長さ約 1.5 メートル、高さ約 0.7 メートルの３つ目の横穴がある。

壕内はほぼ崩落もなく、床もおおむねフラットに作られており、近年の缶ゴミなどが散乱して、戦後は遊び場となっていたと思われる。

写真 543. 壕口

写真 544. 壕内（南西側　右が壕奥）

写真 545. 壕内（北東側　左２右１か所の横穴）

写真 546. 壕内（北東側　壕奥左右の横穴）

（３）前里添佐那浜の住民避難壕群（まえさとぞえさなはまのじゅうみんひなんごうぐん）

①所在地

宮古島市伊良部字前里添佐那浜

②立地・現況

伊良部島の東海岸、急峻な佐良浜断層崖に沿って形成された、狭窄な街並みの中に点在している家族的な壕。海浜部の岩場にある海蝕洞。急傾斜地に造営された墓地群などがある。

戦後、急傾斜地崩壊防止事業により危険な岩場は撤去されている。特に、崖地に立ち並ぶ住宅の奥、岩盤の崖を掘削して設置していることなどから、人知れず多くの壕がまだ現存していると考えられる。

④遺構の特徴

Ⅰ．前里添 280 番地付近から 288 番地付近にかけての岩崖（里神と呼ばれる岩の拝所がある）。

戦後、崩落の危険から岩を撤去している。

Ⅱ．大主神社社殿裏手の海蝕洞窟。

海浜部で作業をしている時などの避難場所として利用された。この他にも大主神社からサバオキ方面にかけて続く海側の断崖には、いくつか海蝕洞が並んでおり、同様に避難場所であったとみられる。

Ⅲ．奥原カツオ工場横の避難壕。

大きな岩の拝所脇に壕口があり、海蝕洞へと続く隧道部のみ人為的な掘り込みで作られている。

壕の内部は南北 25 メートル、東西 11 メートル、高さ 4 メートル程あるホール状の海蝕洞になっており、北側が海に接しているため満潮時には海水の流入が認められるが、護岸工事と消波ブロックによって海側の開口部は、ほぼ塞がれていることが、今回の調査で確認された。

その他。

佐那浜の北側を通る県道 90 号線沿いに位置する、崖地の墓地群は、住民避難壕の２次使用が想定される疑定地。また、海崖部には海蝕洞が複数あり、こちらも利用された可能性がある。

第 75. 図 前里添佐那浜の住民避難壕　位置図

写真 547.　前里添佐那浜の住民避難壕群［ Ⅰ ］

写真 548.　前里添佐那浜の住民避難壕群［ Ⅱ ］

写真 549.　前里添佐那浜の住民避難壕群［ Ⅲ ］

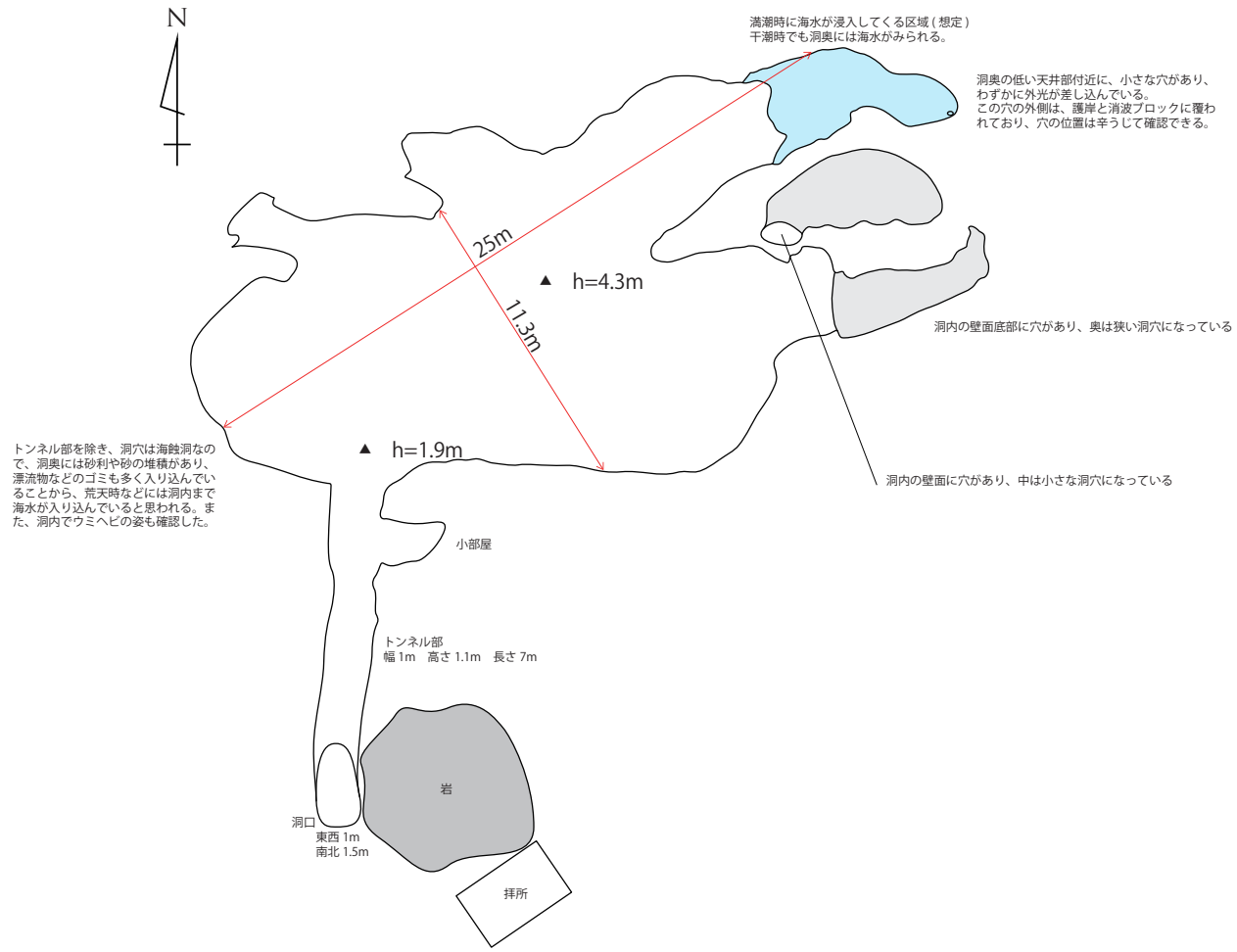
写真 550.　前里添佐那浜の住民避難壕群［ Ⅲ ］隧道部

写真 551.　前里添佐那浜の住民避難壕群［ Ⅲ ］最深部

写真 552.　前里添佐那浜の住民避難壕群（家族壕跡）

写真 553.　前里添佐那浜の住民避難壕群（疑定地）

写真 554.　前里添佐那浜の住民避難壕群（遠景）



第 76. 図 前里添佐那浜住民避難壕［ Ⅲ ］（トンネル部のみ、人為的な掘り込み）

（４）池間添佐那浜の住民避難壕群（いけまぞえさなはまのじゅうみんひなんごうぐん）

①所在地

宮古島市伊良部字池間添佐那浜

②立地・現況

伊良部島の東海岸、急峻な佐良浜断層崖に沿って形成された、狭窄（きょうさく）な街並みの中に点在している家族的な壕。海浜部の岩場にある海蝕洞。急傾斜地に造営された墓地群などがある。

戦後、急傾斜地崩壊防止事業により危険な岩場は撤去されている。特に、崖地に立ち並ぶ住宅の奥、岩盤の崖を掘削して設置していることなどから、人知れず多くの壕がまだ現存していると考えられる。

④遺構の特徴

Ⅰ．戦後の急傾斜地崩壊防止工事によって危険な岩塊などは取り除かれ、周辺家屋も現在は移転してしまっており、一部は公園として整備されている。

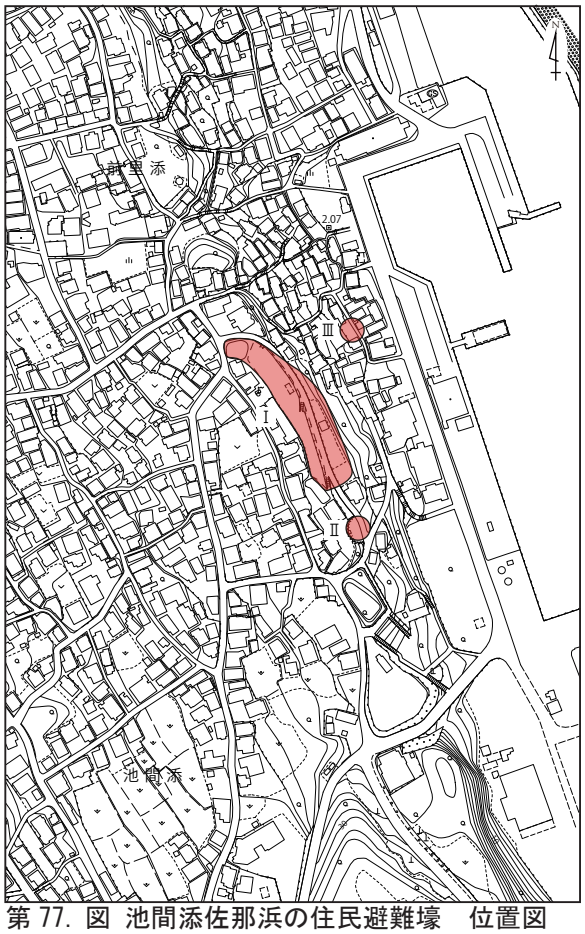
Ⅱ．前述の公園の南方に残る岩盤を掘削して構築された壕や、その痕跡（埋没）が確認できる。

Ⅲ．佐那浜の港側、アラヤーギスと呼ばれる拝所となっている大岩。壕ではなく、大岩の陰に隠れて難を逃れたと聞き取りから得られた情報。

その他。

斜面に集中する集落内には、個人宅の敷地内の崖側に、家族向けの小さな避難壕と見られる痕跡が、多数散見される。

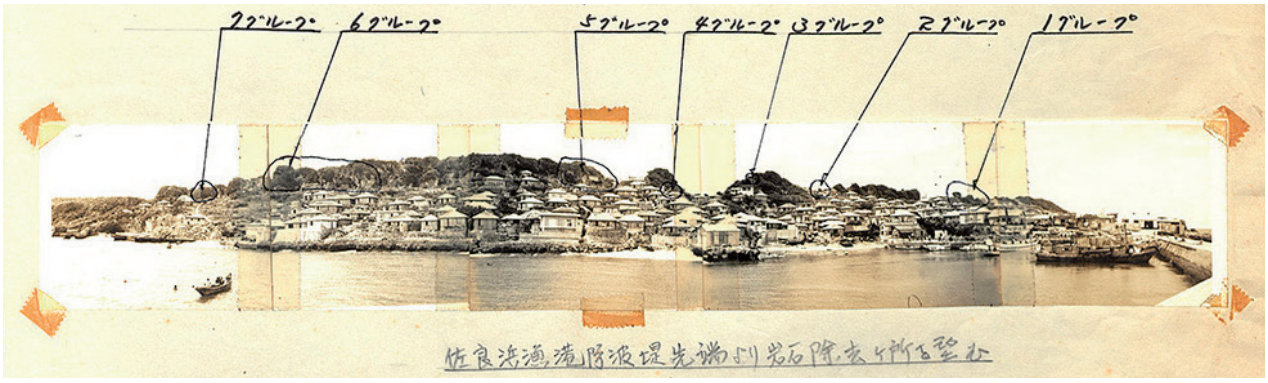
佐良浜（池間添、前里添）の集落は急峻な地形で、崖上には不安定な露岩が数多くあり、その岩々の隙間や窪みを住民が避難壕として活用していたことは、聞き取りでも明らかになっている。



第 77. 図 池間添佐那浜の住民避難壕　位置図

戦後、1958 年３月に発生した地震によって岩石が崩落し、住宅２軒が圧潰。また、1966 年の第二宮古島台風 (コラ台風) の豪雨で一部の地盤が緩み、更なる崩落の危険性が高まっていたことから、これらの岩石を取り除く為の綿密な調査が、USCAR によって 1967 年９月に行われた。

復帰後の 1976(昭和 51) 年から 1981(昭和 56) 年にかけて、「急傾斜地崩壊防止事業」として行われたため、かつての住民避難壕としての痕跡の大半は消失してしまった。



第 78. 図「佐良浜漁港防波堤先端より岩石除去ケ書を望む」（沖縄公文書館所蔵資料　1967 年）

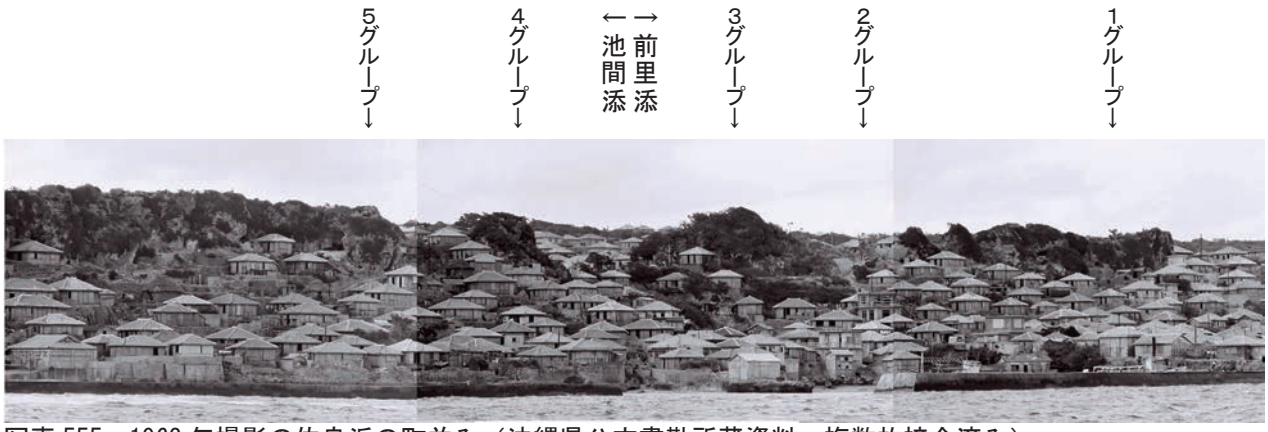


写真 555.　1963 年撮影の佐良浜の町並み（沖縄県公文書勘所蔵資料　複数枚接合済み）

写真 556.　2016 年撮影の佐那浜の町並み（ドローン撮影）

写真 557. 池間添佐那浜の住民避難壕群［ Ⅰ ］

写真 558. 池間添佐那浜の住民避難壕群［ Ⅱ ］

写真 559. 池間添佐那浜の住民避難壕群［ Ⅱ ］

写真 560. 池間添佐那浜の住民避難壕群［ Ⅱ ］

写真 561. 池間添佐那浜の住民避難壕群［ Ⅱ ］

写真 562. 池間添佐那浜の住民避難壕群　個人壕跡

写真 563. 池間添佐那浜の住民避難壕群　個人壕跡

写真 564. 池間添佐那浜の住民避難壕群　全景

（５）池間添下桃山の壕群（いけまぞえしたとうやまのごうぐん）

①所在地

宮古島市伊良部字池間添下桃山

②立地・現況

伊良部島の東海岸、佐良浜港（2015 年まで渡船が運航されていた旅客港側）に面した、急峻な佐良浜断層崖の岩場に形成されている。池間添佐那浜の住民避難壕群にも隣接していることから、戦後の急傾斜地崩壊防止事業により、危険な岩場として壕の大半は撤去され、現在は公園として整備されている。

③歴史状況

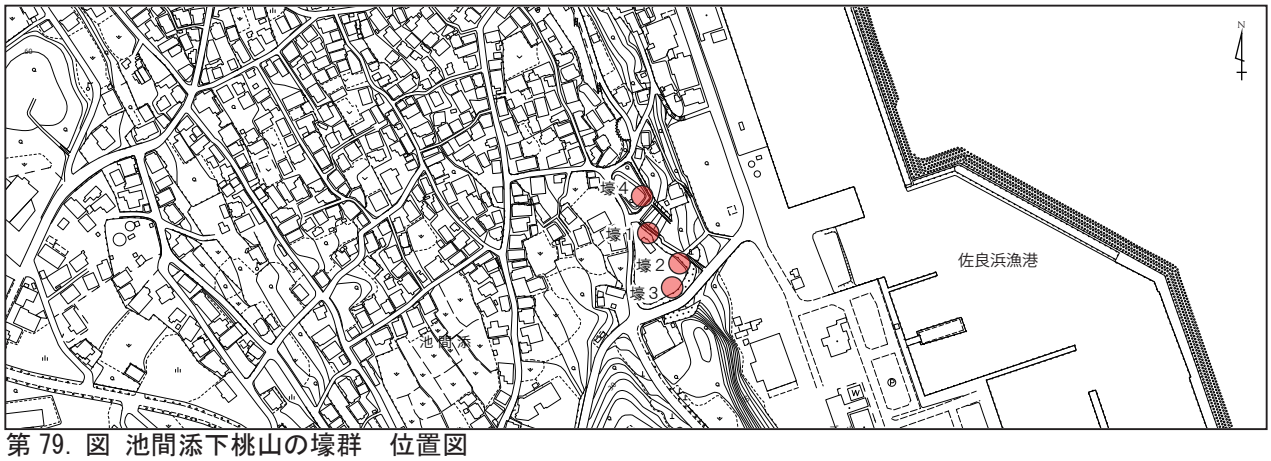
第 59 旅団は 1944 年（昭和 19）年 9 月 14 日伊良部島上陸と共に伊良部島の防衛にあたる。佐良浜港はその荷揚げ港として活用された。港から崖上の道路までの坂道での荷揚げ作業等は地元の婦人の労力に頼らざるを得なかった。当地域では漁猟班なども組織され、食糧供給の重要な場所となっている。港の近くで仕分けする配給班がいたとの聞き取りもあり、関連する壕の可能性は否定できない。

④遺構の特徴

下桃山の壕群は、佐那浜の住民避難壕群と同様に戦後の「急傾斜地崩壊防止事業」によって、戦時中とは現状が大きく変更されており、完全な壕としての形態を残しているものは発見されていない。

港側の急傾斜地は大きく削り取られ、公園として整備されており、残存している岩盤のやや高い位置に、掘り込まれた壕の一部が露出している。目視でも壕の大きさは幅２メートル、高さ１メートル近くあるように思われる。この壁面の下部は間地（けんち）が積まれており、内側に埋没した壕の痕跡を数か所見ることが出来る。また、道路側（港から集落へ登る急坂）の岩盤は、拡幅時に削りとられたとみられる岩が多く、繁茂した草木の中に、穴状に残っている部分も見受けられる。

公園上部の露頭した岩盤にも掘り込まれた痕跡が見受けられ、港が見下ろせる立地から、なんらかの施設（物見）などがあったとも考えられるが、不明瞭な痕跡に周辺情報の不足もあり想像の域を出ることはない。尚、岩盤の港側の一番下にはイツバンガーと呼ばれる岩を掘り込んだ井戸が残されている。



第 79. 図 池間添下桃山の壕群　位置図

写真 565.　池間添下桃山の壕群１（公園側）

写真 566.　池間添下桃山の壕群２（埋没）

写真 567.　池間添下桃山の壕群３（道路側）

写真 568.　池間添下桃山の壕群４（公園上部）

写真 569.　壕１の下方にある壕の痕跡か？

第6節　下地島

１．下地島の地理的環境

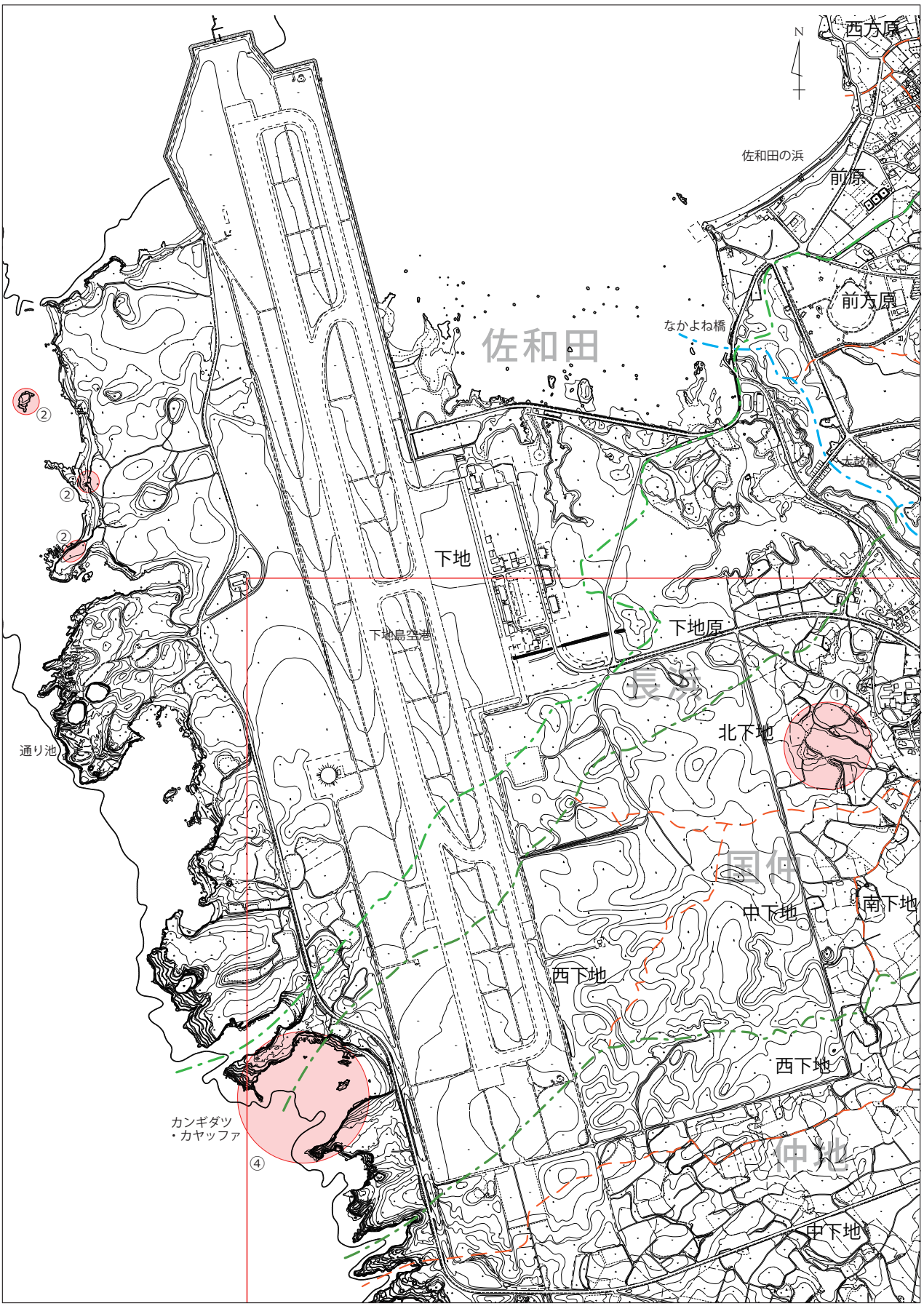
下地島は伊良部地区の最西部にあり、伊良部島とは南北に細長い“入江”と呼ばれる海で隔てられ、６本の橋によって結ばれている。下地島内は本来、南区の５字の字域に分割されているが、島内の大半が1979年に開港した「下地島空港」と、各字の耕作地で占められており、居住する住人がほとんどいないことから、本調査では島域をまとめて下地島と呼称し、成果報告をまとめることとした。

２．下地島の沖縄戦時の概況

伊良部島の各字での聞き取りにおいても、常駐している軍隊はいなかったという証言がほとんどであった。また、史料などからも、具体的に下地島へ部隊が配備されていたとする記録も、確認することが出来なかった。

海岸部の現地踏査で、いくつか軍が施工したものと思われる、監視壕、蛸壺などが散見されたが詳細については一切明らかになっていない。

島の地理的な観点から、島の北側に位置する佐和田礁湖付近は、敵の上陸予想地点とされていたことから、防塁壕の起点になっていた。また、宮古諸島の西部となる島の南部海岸は、平良港への西側の入口に位置するため、海岸部には多くの銃座や監視壕などが確認出来る。



第 80. 図 下地島地区成果図（北西部）

第 81. 図 下地島地区成果図（南東部）

３．下地島地区の調査成果一覧

①火葬場跡（国仲）

聞き取りによると、さしばの里の南側は松林で火葬場だった。（昭和 18 年生）

②下地島西海岸の壕群（佐和田）

今回、宮古島防禦配備図を元に現地を調査したところ、新たに下地島西海岸に位置する小さな岩礁と、その対岸などに銃眼や壕が確認されている。

③下地島南海岸の壕群（伊良部・仲地）

今回、宮古島防禦配備図を元に現地を調査したところ、新たに下地島南海岸沿いの岩場に銃眼などが複数か所確認されている。

④カンギダツ壕・カヤッファ壕（長浜・国仲）

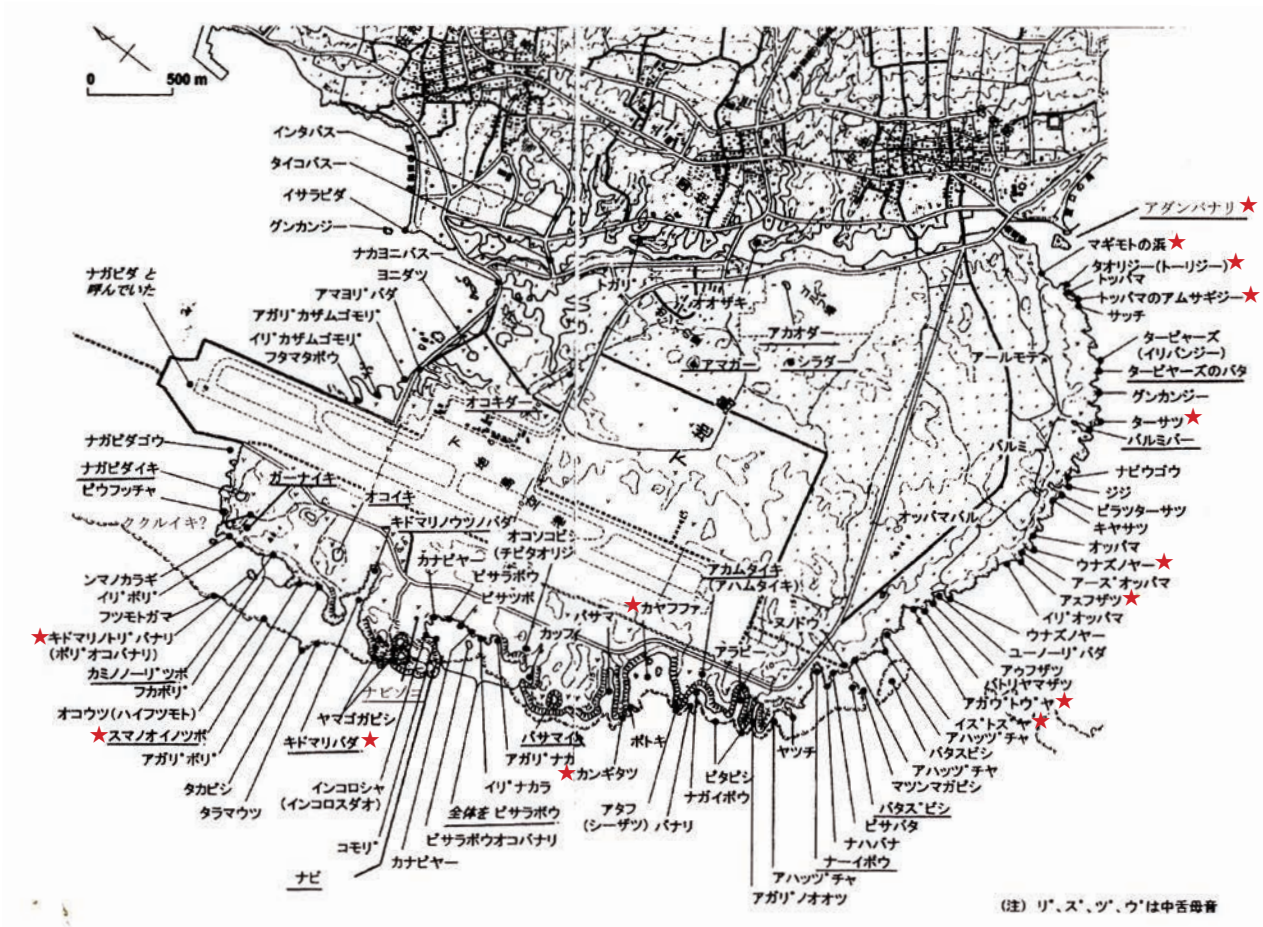
海蝕による自然壕。沖縄県立埋蔵文化財センターの分布調査では、水上特攻艇秘匿壕として報告されている。しかしながら、付随する部隊の確証が得られず、人為的な痕跡も確認できていないことから、秘匿壕としての確証は未だ得られていない。

写真 570.　①火葬場跡（国仲）

写真 571.　②下地島西海岸の壕群

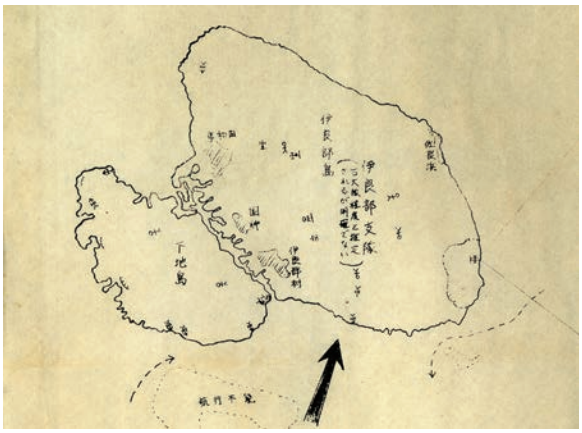
写真 572.　③下地島南海岸の壕群

写真 573.　④カンギダツ壕・カヤッファ壕



第 82. 図 沖縄県下地島の石灰岩段丘地形について（安谷屋 昭　2014 年　宮古島市博物館紀要第 18 号より）

★印は本報告書に登場する地元読みの地名



第 83. 図「宮古島建築兵始末記」野口退蔵(1972年)より

４．下地島の戦争遺跡

（１）下地島西海岸の壕群（しもじじまにしかいがんのごうぐん）

①所在地

宮古島市伊良部字佐和田下地

②立地・現況

下地島西部の海岸地帯に位置している。

③歴史状況

昭和 19 年９月中旬から伊良部島の防衛を担っていた第 59 旅団は、集団命令により昭和 20 年６月、主力を宮古島平良港に転進、北地区の守備についた。伊良部島の防禦は伊良部支隊として残留した独歩第 396 大隊が担任する。同大隊の大隊長竹内隆大尉の資料によると、伊良部島防衛の方針は次のようなものである。

１．下地島を主体に数多くの偽陣地を構築し、敵の攻撃を同方面に誘致し挺身斬り込み等を敢行し敵戦力の消耗を図る。

２．伊良部東海岸の水際を堅固に占領し敵の上陸を阻止、同地区を死守し宮古島主力の戦闘を有利ならしむ。

このような方針のもとに、下地島の海岸線には複数の銃座を設置したものと考えられる。宮古島地区防禦配備図では、下地島海岸には多くの速射砲が配備されている。

④遺構の特徴

本壕群は、海岸から 150 メートルほど離れた海に露頭する岩にある壕と、海岸部の岩場に構築された壕とで構成されている。

壕１

海上の露岩は、干潮時には容易に渡海することが可能な岩塊で、地元ではキドマリノトリ゜パナリと呼ばれている。岩塊はおよそ 1500 平米の大きさがあり、北東側のやや高い位置に岩をくり抜いて構築された銃眼を有する壕１がある。

壕１の壕口は２か所あり、壕口１は北西側の自然の段差を伝い登った位置に、岩の窪みを利用して掘られている。壕口の作りは粗く狭めで、低いステップを数段下がると、すぐに左手に 90 度近く曲がっており、その曲がった先が銃眼のある部屋になっている。

壕口２は東側のノッチ上部に位置しており、そのままの昇降にはやや難があるが、短めの梯子等を設置すれば容易に出入りが可能である。壕口２の高さは約 1.6 メートル、幅が約 0.8 メートルほどで、壕口を入ってすぐ右側から、銃眼のある部屋へとつながっている。

部屋はおよそ 1.5 メートル四方の大きさがあり、高さはおよそ 1.6 メートルである。海上の岩塊であるためか、天井を含む壁面が緑青色のカビに覆われている。また、岩塊の岩質はもろく、壕の作りは全体に粗めだが、特に大きな崩落などはない。

銃眼は幅約 0.3 メートル、高さ約 0.15 メートルの大きさで、一部がコンクリートで補強されている。銃眼は北に向いて設置されており、おそらく岩塊の北方に位置し、敵の上陸侵攻が予想される、佐和田礁湖方面への監視が目的と推察できる。

壕２・壕３・銃眼・蛸壺

海岸部の陣地は、岩塊の対岸、やや南方に位置する、少し複雑に入り組んだ琉球石灰岩の岩場スマノオイノツボ付近に、壕が２か所と、銃眼と蛸壺がそれぞれひとつずつ構築されている。

西の海に向かって、C字状に開いた岩場の北側岩盤の下部に、岩塊（キドマリノトリ゜パナリ）に向けて、銃眼としてはやや大きなサイズの窓が構築されている。

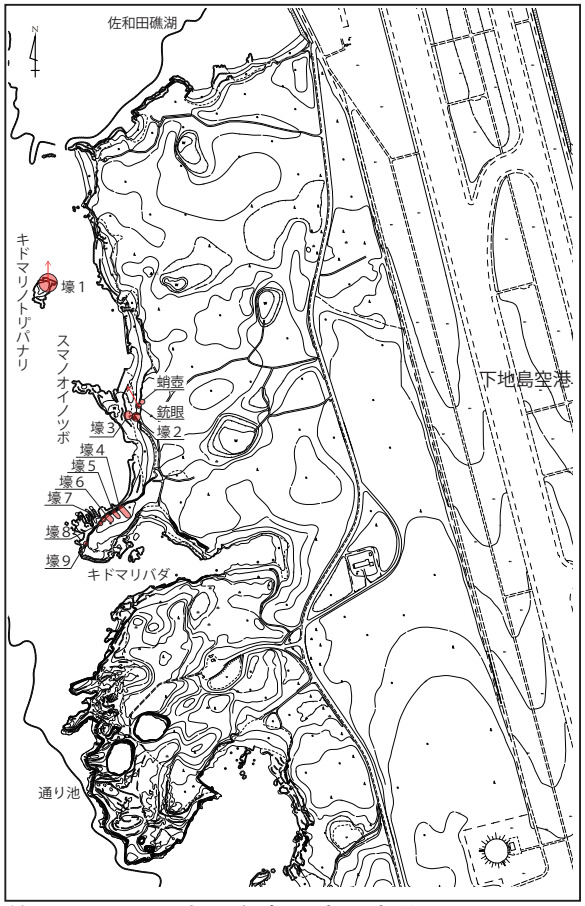
銃眼のサイズは、高さ0.5メートル、幅0.7メートルの長方形で、地盤高とほぼ同じ高さに構築され、周囲をコンクリートで補強されている。

この銃眼が構築されている岩場は、高さが5メートルほどあり、その上端（うわば）は一様に平たくなった独特の地形をしている。銃眼のやや北寄りの岩盤の上端に、およそ0.75 × 1.1メートルの大きさの蛸壺が構築されている。深さは約1.5メートルあり、内側には昇降用のステップも作られている。また、蛸壺底面の山側には、奥行き約0.65メートル、幅0.8メートル、高さ約0.45メートルの窪みも作られている。蛸壺内にほとんが堆積物がないことから、往時のままの姿を残していると考えられる。

銃眼の背後地（C字状の内側）の広場を抜け、幅0.8メートル、高さ1.1メートルのアーチを潜ると、南北に通じた、幅1.5メートルほどの岩の裂け目のような小さな空間がある。この東側の岩盤に壕2が海側（西）を向いて開口しているが、壕口の前にも岩があるため開口部は海からは隠蔽されている。

壕2の壕口1は、地盤から約0.6メートル高くなっており、自然の段差を登って入壕する。壕は右（南）に向かってカーブをしながら掘られており、壕長はおよそ3メートル強、高さは平均で1.7メートルほど、幅も約1.5メートルある。南を向いた壕2は、床面から約0.7メートル高くなった位置に開口している。壕口2は出入口というよりは窓のようなイメージである。開口部の大きさは高さ約1.1メートル、幅約1.4メートルとかなり大きく、後述するさらに南方に位置する陣地との連携が、容易に取れる作りになっていると見られる。

壕2を隠すように位置する岩の海側（西）に、およそ5メートル四方、高さ3メートルほどの岩塊があり、これを“かまくら”のようにくり抜いて構築された壕3がある。壕内は直径3メートルほどの円形状の部屋になっており、珊瑚砂が部屋全体に堆積している。壕口はふたつあり、東西方向にひとつずつ開口している。東向きの壕口1は幅約1メートル、高さ約0.6メートルで、やや狭いが立地条件から入口とみられる。西側（海方向）の壕口2は、幅約1.3メートル、高さ約1メートルの大きさで、斜め上方に向かって大きく開口している。壕口2は床面からも0.5メールほど高い位置にあり、壕口の右端にはコンクリートで形成された、用途不明の台座のようなものが設置されている。台座は途中で途切れていたが、壕口2の手前側に横長のテーブル状に構築されていたように見える。尚、この壕口2からは沖の岩塊はもちろん、正面の海況も充分に見て取ることができる。



第84. 図 下地島西海岸の陣地壕群　位置図

壕4～壕9

スマノオイノツボ付近の壕群を抜け、浜辺をさらに南下した位置に、海蝕洞が連なった高さ10メートル弱の琉球石灰岩の岬（キドマリバダ北岸）が、南西向きに突き出している。この岬の北西面に開いた海蝕洞を利用して、複数の壕が構築されている。

ひとつ目は岬の比較的付け根側にあり、満潮時には波の洗う岩場の上部、およそ２メートルの高さに壕４の壕口１が北に開口している。壕口は高さ約１.2 メートル、幅約 1.2 メートルの方形状で、壁の厚みは約１メートルあり、正面にキドマリノトリ゜パナリの岩塊を望むことが出来る。

壕内は南向きに掘りこまれ、幅約４メートル、奥行き約 4.4 メートルの略方形の部屋になっている。床には大小さまざまな岩礫が散乱し、高さは約 1.6 メートルとやや低い。部屋の南側の壁面に沿って、東西にそれぞれ通路がある。

東側は幅約１メートル、高さ約１メートルの大きさで、１メートルほど掘り進んだ位置から、北に向かってカーブをしながら、幅３メートルほど掘り込まれている。幅約１メートル、高さは約 0.7 メートルと狭く、掘削柄も多いことから構築の途中であったとみられる。

西側の通路は幅約 0.9 メートル、高さ約 1.3 メートルで、1.1 メートルほどの位置から、高さが約 0.6 メートルと低くなる。こちらも北に向かってカーブを描きながら５メートルほど掘り込まれているが、途中で埋没してる。北側（壕口１側）崖面にこの通路の延長の位置と見られる壕口があるが、こちらも埋没しているため詳細は確認することはできない。

この部屋の南側（壕口１から奥）には高さ約 1.6 メートル、幅約 0.8 メートルの斜路が、東にカーブしながら上方へ続いている。部屋を出て 0.8 メートルほど登ると、通路の高さは最大で２メートルまで高くなり、幅も約 1.4 メートルと広く、およそ３メートルほどで壕口２に達する。壕口２からは南に向かって直線的に５メートルほどのスロープ状の羨道が、丁寧な掘削が施され地上部まで構築されている（スロープの両サイドには掘削殻が積まれて遮蔽物となっている）。おそらくこちらが本来の壕口とみられ、北方向を向いた壕口１は、敵上陸部隊を横撃するための砲口と考えられる。

壕５は自然壕（海蝕洞）を利用して構築された壕とみられ、北を向いた壕口の幅は約３メートル、高さは４メートルほどある。この壕口の波打ち際の岩場には、用途は不明だが、船揚げ場のような２本のレール状をした溝のようなものがある。また、壕内は直線的で幅 1.5 メートル、高さ 1.7 メートル、奥行き３メートルほどある。

壕６と壕７は、幅約 5.6 メートル、高さ約４メートルの広い海蝕洞の中に構築されている。壕６は海蝕洞の東側の壁面に沿って 3.4 メートルほど岩棚を登り、幅１メートル、高さ約 1.6 メートルの壕口１から５メートルほど斜路を進むと通路は竪穴へ変化する。1.4 メートルほどの竪穴には岩盤を削りだして構築されたステップがあり、これを登って地上（岬の上端）の壕口２へと至る。壕口２は 1.0 × 1.5 メートルの楕円形で、アダン林の中にある。

壕７は壕６と同じ海蝕洞の西側にあり、自然の洞穴を利用して構築されている。壕口は幅約３メートル、高さ約３メートルで奥行きは５メートルほどで、壕内は入口脇と最深部に、方形に切り取ったような窪みが２か所ある。

壕８は壕６・７の海蝕洞から４メートルほど西側にあり、壕口は幅約１メートル、高さ約 1.4 メートル、奥行きは直線的で 3.6 メートルほどある。この壕８の壕口のすぐ脇（西側）には、人がひとり身を隠せるサイズの窪みが、岩肌に掘削されている。

壕９は岬のほぼ先端にあり、西を向いた自然壕を利用して構築されていると見られる。内部は岩が多数詰まっているため、詳細を確認することは出来ないが、壕口付近の床面が均一に平たくなっている。

写真 574.　キドマリノトリ゜パナリ（壕１）

写真 575.　壕１　近景（壕口２）

写真 576.　壕１　壕口１

写真 577.　壕１　銃眼１

写真 578.　壕１　銃眼１からの眺望

写真 579.　壕１　銃眼１のある部屋

写真 580.　壕１　壕口２から部屋を見る

写真 581.　壕１　壕のある岩から南方を望む

写真 582.　壕２全景

写真 583.　銃眼２（外観）

写真 584.　銃眼２（内側）

写真 585.　銃眼 2（内側全景）と蛸壺外観

写真 586.　蛸壺

写真 587.　壕２　近影（銃眼２より）

写真 588.　壕２　壕内

写真 589.　銃眼２（海向き）

写真 590. 壕２　壕口２（外側）

写真 591. 壕３　壕口２より壕口１を見る

写真 592. 壕３　壕口２（壕口からの眺望）

写真 593. 壕４・壕５全景

写真 594. 壕４　壕口１からの眺望

写真 595. 壕４（壕口１から壕口２方向）

写真 596. 壕４　部屋から東側通路方向を見る

写真 597. 壕４　部屋から西側通路方向を見る

写真 598. 壕４　壕口３（埋没）

写真 599. 壕４　地上部に開いた壕口２

写真 600. 壕４　壕口２（スロープ）

写真 601. 壕５　レール状の溝と壕口からの眺望

写真 602. 壕５　直線的な壕内

写真 603. 壕６・壕７のある海蝕洞

写真 604. 壕６　壕口１から壕内を登って地上へ

写真 605. 壕６　壕口２のステップと竪穴

写真 606.　壕６　アダン林の中の壕口２

写真 607.　壕７　左が壕６上方へ、右が壕７の壕口

写真 608.　壕７　壕口から内部を望む

写真 609.　壕８　壕口

写真 610.　壕８　壕内を望む

写真 611.　壕８　壕口脇の窪み（壕口は左）

写真 612.　壕９　壕口（底面が平たい）

写真 613.　壕９　岩の詰まった壕内

（２）下地島南海岸の壕群（しもじじまみなみかいがんのごうぐん）

①所在地

宮古島市伊良部字伊良部北下地／南下地・仲地東下地／中下地

②立地・現況

下地島南部の海岸地帯に広範囲にわたり複数位置している。

③歴史状況

昭和 19 年 9 月中旬から伊良部島の防衛を担っていた第 59 旅団は、集団命令により昭和 20 年 6 月、主力を宮古島平良港に転進、北地区の守備についた。伊良部島の防禦は伊良部支隊として残留した独歩第 396 大隊が担任する。同大隊の大隊長竹内隆大尉の資料によると、伊良部島防衛の方針は次のようなものである。

１．下地島を主体に数多くの偽陣地を構築し、敵の攻撃を同方面に誘致し挺身斬り込み等を敢行し敵戦力の消耗を図る。

２．伊良部東海岸の水際を堅固に占領し敵の上陸を阻止、同地区を死守し宮古島主力の戦闘を有利ならしむ。

このような方針のもとに、下地島の海岸線には複数の銃座を設置したものと考えられる。宮古島地区防禦配備図では、下地島海岸には多くの速射砲が配備されている。

④遺構の特徴

下地島の南の海岸部にある、岩場、岩塊、岩裂、凹穴、入江などの自然の地形に合わせ、様々な工夫が施された、壕、銃眼、蛸壺などが複数構築されている。

以下、西側から順に紹介してゆく。

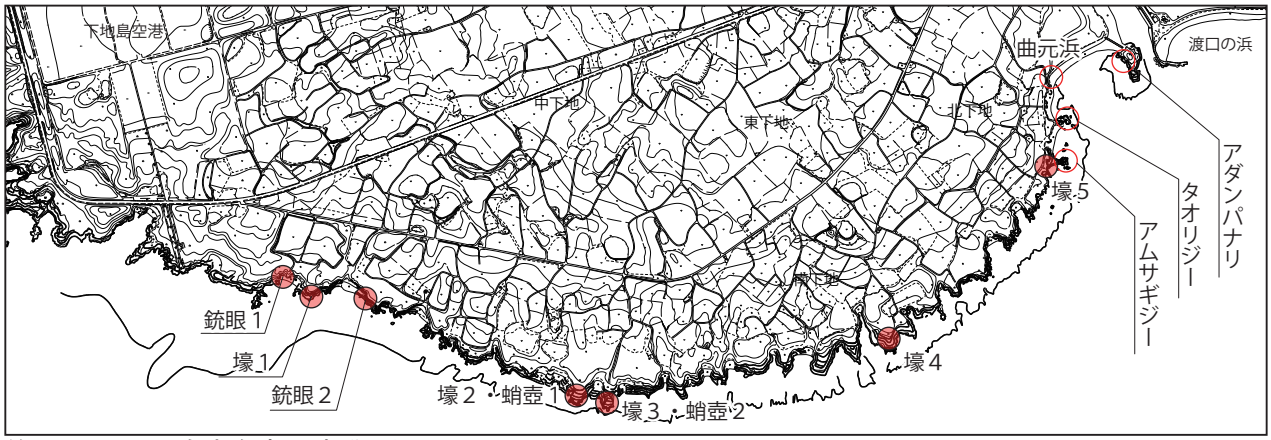
銃眼 1

地元名でイズトズヤと呼ばれる下地島南海岸の礫浜の奥に、岩壁の自然の窪みを利用して、モルタルで仕上げた石積みの加工が施された銃眼がある。銃眼の内部は、石積みの横から内部へ入る構造になっているが、入口は礫で埋没し、繁茂したアダンで内部を伺うことは出来ない。銃眼は浜の奥まった位置にあり、見通しはあまり良くないが、南を向いている。

イズトズヤの浜から東側に続く小さな岬を回りこむ岩場には、一定の幅をもって歩き易く、人為的に加工されており、帯道ではないかと推察する。

壕 1

銃眼 1 から小さな岬を越えた東隣の浜（アガウトウヤ）の岩崖に、南東に開口する海蝕洞がある。自



第 85. 図 下地島南海岸の壕群　位置図

然洞であるため不定形だが、高さは優に２メートルを越え、洞口の幅は 1.5 メートルで、洞内の広い場所では幅が 3.5 メートルほどある。床面には砂が入っているが、ほぼ平坦で奥行きは９メートルほどある。洞口から３メートルほど入った左手に、幅約 0.8 メートル、長さ約４メートル、高さ 1.2 メートルの南を向いた亀裂を利用した通路が開口している。大きすぎる洞口から夜間に灯りが漏れることを嫌い、草木等で洞口を隠匿した際に利用する、出入口用の通路ではないかと考えられる。

洞内を奥まで進んでゆくと、南に向かって曲り、幅 1.6 メートル、高さ 1.5 メートル、奥行き 3.6 メートル（奥へ行くほど狭く低くなっている）の自然の洞穴が開いている。

洞奥の正面に、高さ 0.5 メートルほどの段差の上に、幅約１.5 メートル、高さ約 1.3 メートルの斜路が、北を向いて７メートルほど掘り込まれ、岩崖の上端へと貫通している。斜路はとても丁寧な作りで、途中には２か所の脇部屋が構築されている。脇部屋は幅約 1.2 メートル、高さ約 1.2 メートル、奥行き 0.3 メートルととても小さい。この脇部屋の床面は斜路の途中にあるが、水平が取られており、物資を置く棚のようにも見える。

斜路を登り切った崖上は、現在はアダンに覆われており、これ以上進むことが難しいが、斜路の延長線にはスロープ状の掘りの浅い羨道が、４メートルほど北に向かって続いている。

尚、この洞口のある岩壁の北側（湾奥）に、露頭した岩盤が崖上までスロープをなして続いており、その上端付近には壕を開鑿した際に出る、礫殻が山積みとなっている。洞奥の斜路の出口からはやや離れているため、周囲に壕などの構築物があるものと推測されるが、現状では発見には至っていない。

銃眼２

壕１が面する南向きに緩く弧を描いた浜（地元名はアガウ゜トウ゜）の東側の崖面に、コンクリート加工された銃眼２がある。大きさは幅 0.4 メートル、高さ 0.5 メートルで西方を向き、周辺の地盤面とほぼ同じ高さの位置に設置されている。

銃眼２の内部は岩壁に開いた自然の窪みを利用して構築されており、銃眼の遮蔽部へは岩壁にある高さ 1.4 メートル、幅 1.5 メートル、奥行き 1.7 メートルの窪みの横(崖に向かって右)から入る。銃眼の内部は、高さ約 1.4 メートル、幅約 1.5 メートル（銃眼のある面の幅）、奥行き約 1.3 メートル（銃眼の後方の幅）の空間が設けられている。現在、この空間には岩が入り込み、詳細を確認することが難しい。

壕２・蛸壺１

地元名でアスフザツと称される海蝕台の西端に、自然の凹穴を利用して構築された壕２がある。海蝕台の天面を加工した壕口は 0.8 × 1.6 メートルの略方形で、壕口の深度は 1.6 メートルほどあり、壕口直下の床面は平たく加工がされている。壕内の高さはおよそ１メートルほどで、自然地形を利用しているため形状は不定形だが、西向きに幅 0.8 メートル×高さ 0.4 メートルの銃眼３が構築されている。また、壕の東側は自然洞の開口部となっているが、現在は岩が入り込み、出入りすることが難しい。

壕２のある海蝕台の東方端には蛸壺１がある。岩盤を円形に掘り込んだ竪穴の直径はおよそ 0.8 メートル、深さは底面に砂や貝などが堆積しており、現況では約 0.5 メートルと浅くなっている。この蛸壺１は浜を隔てて後述する壕３・蛸壺２と対峙している。

壕３・蛸壺２

下地島の最南端に位置する地元名ウナズノヤー（小さな岬）の岩場に埋没した壕３がある。南西方向を向いた銃眼は低い位置にあり、内部は砂が堆積している。銃眼の後方（北東側）の岩場上部には土砂が詰

まり、樹木が茂った壕口１とみられる竪穴がある。また、岩場の東側にも自然の窪みを利用した壕口２とみられる開口部があるが、こちらも砂で埋没しており、壕内部を確認することができない。

この壕３のある岩場の南端（岬状に海に飛びだした位置）には、岩盤を円形に掘り込んだ蛸壺２も確認できた。

壕４

地元名でターサツと呼ばれる海岸部に大きく張り出した海蝕台に壕がひとつある。岩盤に掘り込まれた壕で、壕口１は北に開口して斜路を形成し壕内へと続き、幅 1.2 メートル、高さ 1.2 メートルほどの方形で南に向いて掘り込まれている。壕口１からおよそ 2.1 メートル進んだところに、右（西）にやや不定形の脇部屋が設えてある。幅はおよそ１メートル、奥行きは 1.2 メートル、高さは壕とほぼ変わらず 1.2 メートルある。

壕はさらに 2.3 メートルほど直線的に掘られたところで、西に 90 度曲がっている。斜路を下り切った床面はここまでほぼフラットであるが、曲がったあたりから岩質の違いもあり、凹凸が増え不規則な登り傾斜がつき、２メートルほど掘り込まれたところに、壕口２が構築されている。壕口２は西を向いており、下地島の南岸を遠くまで見通すことが出来る。

壕５

この付近の海岸部は、切り立った断崖から剥離した巨大な転石が散らばり、深く狭い小さな入江が形成された、独特な海岸地形が広がっている。その断崖に位置する海食洞を利用して、南向きに開口した壕５がある。

壕へは満潮時でも濡れずに入壕が出来る形状にあり、壕内は砂が堆積しているが、数名は十分に待機できる広さがある。また、一部、天井部が崩落しており、崖の上部へ抜けられる穴がある。現状、崖上部はアダンが密生しており、抜けることが出来ないが、この壕５から西側へは崖が切り立ち、水深もやや深く、海伝いに移動することが困難な地形となっていることから、通路としても利用されていたと考えられる。

壕５の東方、海に突き出すように岩塊が折り重なって、地元名でアムサギジーと呼ばれている場所には、岩塊の下に身を隠すことの出来る空間があり、海水が入り込む場所もあるが、石積みのようなものも残っている。

アムサギジーから北に 120 メートルほどの位置（曲元浜の西端）にある、高さ約５メートル、幅 15 メートルと幅 25 メートルほどのふたつの岩塊が海上に突き出すように並んでおり、地元ではタオリジーと呼ばれている。この岩塊の隙間から岩の上へ登ることが可能で、平坦な岩上には緩やかな窪地があり、身を隠して渡口の港や、伊良部島の南海岸から宮古島方向を見通すことが可能である。監視用の陣地と見られる（干潮時にはマギモト側からも岩を伝って登れる道状の溝のようなものがある）。

下地島の東端にある砂浜（曲元浜）の西端には、岩壁に開いた比較的大きな海蝕洞が複数個ある。一部はミルク御願を行う拝所でもあるが、洞穴の高さ、幅、奥行きとも兵が棲息するには充分な広さがあり、「宮古島防禦配備図」によると、マギモト（曲元）と後述するアダンパナリには速射砲陣地のマークが描かれている。

地元名をアダンパナリと呼ばれ、伊良部島と下地島の間に位置する小島は、通称を岩の形状から亀島や亀岩と呼ばれている。現在は入江の浚渫工事に伴い地形が変更され、下地島側の曲元浜と陸続きとなっている。

情報によるとアダンパナリに掘られた、ヒーマギガーと通称される壕があると云われているが、当該地を捜索するも、壕を確認することはできなかった。尚、島の西側に石碑の台座のようにも見える、コンクリート製の構造物が残されている。

写真 614. 銃眼 1 （全景）

写真 615. 銃眼 1 （銃眼）

写真 616. 銃眼 1 からの眺望

写真 617. イスﾞトスﾞヤ（岬）に開かれた帯道

写真 618. 壕 1 （洞口）

写真 619. 壕 1 （洞口と通路口）

写真 620. 壕１（通路口外観）

写真 621. 壕１（洞口から内部を見る）

写真 622. 壕１（最深部）

写真 623. 壕１（斜路と脇部屋　下方より）

写真 624. 壕１（斜路と脇部屋　上方より）

写真 625. 壕１近傍の掘削ガラの山

写真 626. 銃眼２（左側が壕口）

写真 627. 銃眼２（内部）

写真 628.　銃眼２（内部　岩の右下に銃眼）

写真 629.　銃眼２の眺望（対岸は壕１）

写真 630.　壕２（全景　奥が壕口）

写真 631.　壕２（壕口）

写真 632.　壕２（銃眼３）

写真 633.　壕２（壕口直下の加工痕）

写真 634.　壕２（壕内部　奥は銃眼３）

写真 635.　壕２（銃眼３の外観）

写真 636.　蛸壺１

写真 637.　蛸壺１からの遠景

写真 638.　壕３（銃眼４）

写真 639.　壕３（壕口１　埋没）

写真 640.　壕３　（壕口２　埋没）

写真 641.　蛸壺２

写真 642.　壕４　（壕口１）

写真 643.　壕４（壕内　脇部屋）

写真 644. 壕４　壕内から壕口１を望む

写真 645. 壕４　（壕口２）

写真 646. 壕５（壕内）

写真 647. 壕５（壕口から来間島を遠望する）

写真 648. アムサギジー（全景）

写真 649. アムサギジー（岩陰）

写真 650. タオリジー（全景）

写真 651. タオリジー（上方からの眺望）

写真 652. 曲元浜の海食洞群

写真 653. 曲元浜の海食洞（内部）

写真 654. アダンパナリ（全景）

写真 655. アダンパナリのコンクリート製の遺物

（３）カンギダツ壕・カヤッファ壕（かんぎだつごう・かやっふぁごう）

①所在地

宮古島市伊良部字長浜下地原・国仲西下地

②立地・現況

下地島の南西部の岩礁地帯に位置する、岬（カンギダツ）と湾（カヤッファ）の断崖部に複数開口した海蝕洞穴。名称は地元で呼ばれている地名。

④遺構の特徴

本遺構は「沖埋文 2005」にて報告されている壕である。

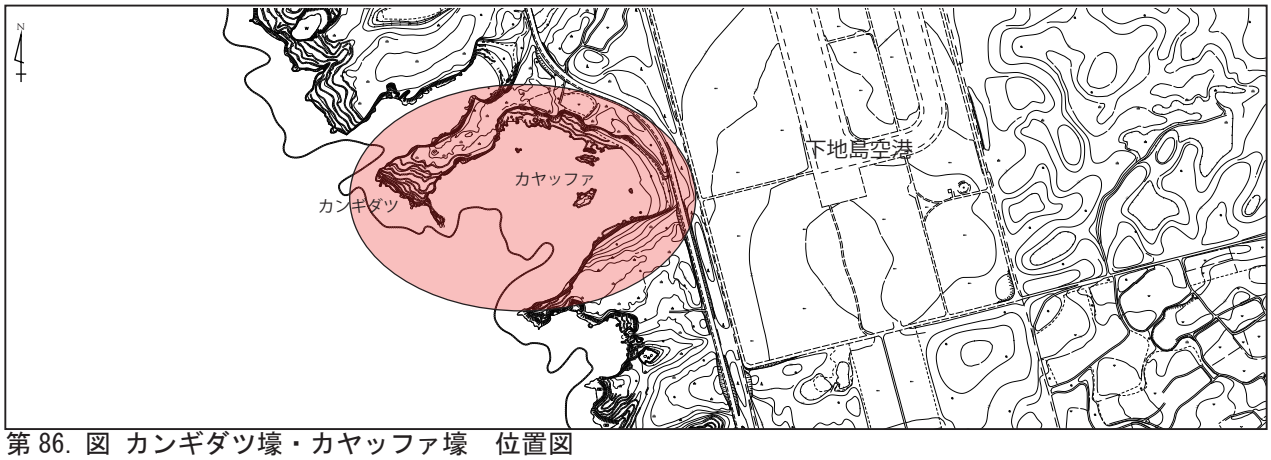
沖埋文の報告書によると、「下地島の西側の海岸、石灰岩の急崖が形成される一帯に計 12 基の横穴が見られる。下地島の外側を一周する村道から一望することができ、隣接する 2 か所、入り江の南側崖にそれらを見ることができる。何れも海蝕によって形成された自然壕である。

かつて独立混成第 59 旅団（碧部隊）が伊良部島に駐屯し、米軍の上陸地点を下地島並びに伊良部島南岸周辺に想定した。それに伴って、下地島の当該地点に水上特攻艇を秘匿したとの聞き取りが得られている（宮古郷土史 研究会 1995）。

規模は大小、様々であり、壁や天井など人の手を加えた痕跡は見出すことはできない。奥行は深いもので 20 メートル内外、天井も高いもので 7 メートルあるものも見られた。何れも奥から手 前に向かって緩やかに傾斜する。壕の入口には大小の石灰岩塊が散乱しており、また満潮時において壕の床面まで海水が達する壕は僅かであることから、全ての自然壕が特攻艇秘匿壕として利用されたのではなく、海蝕洞のいくつかを利用したものと考えられる。現状においてはどの壕が秘匿壕として利用されたか、その判別は付かない。また周辺の踏査を行ったが下地島西、南部において石灰岩の急崖が連続して見られるのは当該地点のみであり、このように海食洞が連続してみられる部分も当該地点のみである。下地島南側海岸においては散漫であるが、水上特攻艇を秘匿するのに適する海蝕洞が分布しているのを確認した。」と、報告されている。

下地島の西部は切り立った断崖になっており、その崖面は海蝕による自然壕が数多くあるが、陸上から確認することは難しい。沖縄県立埋蔵文化財センターの分布調査では、水上特攻艇秘匿壕として報告されている。しかしながら、付随する部隊の確証が得られず、人為的な痕跡も確認できていないことから、秘匿壕としての確証は未だ得られていない。

※沖埋文の報告書では「カンギィダツ壕」「カヤフフヤ壕」とありますが、より地元の発音に近づけた「カンギダツ壕」「カヤッファ壕」に呼称を改めました。



第 86. 図 カンギダツ壕・カヤッファ壕　位置図

写真 656. カンギダツの壕群（崩落部分）

写真 657. カヤッファ湾からの望む

写真 658. 湾内にある壕とされる洞穴

写真 659. 湾内にある壕とされる洞穴

写真 660. カンギダツ側からの遠望（南方向）

第7節　伊良部地区の戦争遺跡のまとめ

番号	所在地	名　称	使用主体		形　態		調査状況（報告）			備　考
			軍関係	住民	自然壕	人工建造物壕	新規追加	未確認	消滅	
1	伊良部佐和田	佐和田白鳥原の壕	○			○	○			
2	伊良部佐和田	嵩原御嶽の壕群	○			○	○			
3	伊良部佐和田	伊良部南区の住民避難壕群注1		○		○	○			他に長浜と仲地
4	伊良部長浜	伊良部の忠魂碑								※記念碑
5	伊良部国仲	国仲砂川の壕群跡	○			○	○		○	記録保存（2017）
6	伊良部国仲	国仲美里の壕群跡	○			○	○		○	記録保存（2018）
7	伊良部国仲	国仲上原の壕跡	○			○	○		○	記録保存(2017-8)
8	伊良部国仲	国仲大崎の壕	○			○	○			
9	伊良部国仲	国仲砂川の住民避難壕群		○	○		◎	○		※注2
10	伊良部国仲	国仲伊端の住民避難壕		○			○			
11	伊良部仲地	根原御嶽の壕群	○			○	○			
12	伊良部伊良部	伊良部島南海岸の壕群	○			○	○			
13	伊良部伊良部	伊良部倒底原の壕群	○			○	○			
14	伊良部伊良部	仲地共同墓の住民避難壕		○		○	○			
15	伊良部伊良部	伊良部大長原の壕	○			○	○			
16	伊良部前里添	佐良浜の避難壕		○		○				※
17	伊良部前里添	前里添佐那浜の住民避難壕群		○		○	○			
18	伊良部池間添	池間添佐那浜の住民避難壕群		○		○	○			
19	伊良部池間添	池間添下桃山の壕群	○			○	○			
20	伊良部池間添	牧山陣地壕	○			○				※
21	伊良部下地島	下地島西海岸の壕群	○			○	○			
22	伊良部下地島	下地島南海岸の壕群	○			○	○			
23	伊良部下地島	カンギダツ壕・カヤッファ壕	○		○					※注3
伊良部地区　小計			（新規 18、追加 1）				19	1	3	

注１　「伊良部南区の住民避難壕」の所在地は、伊良部佐和田、伊良部長浜、伊良部仲地の広範囲に点在している。
注２　沖埋文2005で報告の「国仲の避難壕」、は周辺に新たな壕等を発見したことから、実状にあわせ、「国仲砂川の住民避難壕」と改題して報告する。
注３　沖埋文2005で報告の「カンギィダツ壕・カヤフフヤ壕」は、地域の呼称にあわせて「カンギダツ壕・カヤッファ壕」と改題して報告する。
※　2005年沖縄県立埋蔵文化財センターにて報告済み（沖埋文2005）
◎　報告済み遺構の新規追加

宮古島市文化財調査報告書第 23 集

宮古島市内戦争遺跡分布調査報告書（2）
―下地地区・伊良部地区―

発　行　日：令和元年（2019）年 12 月 27 日
編集発行：宮古島市教育委員会
〒 906-0103
宮古島市城辺福里 600 番地 1
TEL 0980-77-4947
FAX 0980-77-4957
印　　刷：シモジ印刷